





ISBN978-4-04-870547-9 C0193 ¥590E

WORKS アスキー・メディアワークス 日消費税が別に加算されます





■円金アスター・メディアワークス

ろんな意味で心穏やかではいられない。 時を同じくして、魔王が動めるファー ストフード店の向かいに、競合他社が推 出してくる。売り上げで負けたら減給だ と言われた際王は総便1。 広長代親の職

務を全うするため海出することになる。 謎の能人とライバル店の登場で、魔王 域は大混乱!? フリーター魔王さまが操

り広げる庶民派ファンタジー、第17回電 整小组大省(銀管) 受賞作第2項!



b-6-2



1920193005905

ISBN978-4-04-870547-9 C0193 ¥590F

● アスキー・メディアワークス

※回動物が別に対策されます





## 「和々質の部庁物理を紹大える紀様」

an Feralty Cent **他は創作の大海原に飛び出すんだ!!** 相「白分の料理で仕事しなさい」

> [電學文學作品] はたらく魔王さま! はたらく魔王さま! 2

## イラスト:029

関連存在、何名のアルバカの娘いぐるみがついに20体にお りほくほくしている。最近ほうじ茶ラテの美味しさに気づき カフェでしばしば低んでいるとか・・





















## CONTENTS

三、近所付き合いで家計を助けられる PODI

**調告、勘違いの連鎖の果でに借りを作る** P128

<u>『○三と』間、職責の全うに命を</u>賭ける P289







職火が燃え上がり、灼熱となって切り刻まれた肉を焦がす。 彼は、そんな光景を舌なめずりをしながら眺めていた。顔に浮かぶ笑みは、ただただ欲望に 端から肉と骨が炭化していく焦げた臭いと、断末魔すら包み込む煙が辺りに充満する. ※数の肉片から適る血と脂が、一層炎の気勢を強めさらにその身を苛んだ。

突き動かされる魔獣のようだ。 「くっくっく、どうだ、手も足も出ずに地獄の炎で焼かれる気分は」 暗い抑えた声だが、炎の中で断末魔の悲鳴を上げる『肉』に対しての残 虐 性までは隠し切

ることはできない。

魔王様……」 う。安心して遊くがいい、くっくっく」 「貴様らの肉、ハラワタ、骨に至るまで、この俺が喰らい尽くし、我が野望の種としてくれよ

いえ、あの、ですから魔王様」 \*まあ待て、焦るな。最期の最後まで徹底的に炎で炙ってやらねば、俺の気が済まんのでな」 困惑したような声が、炎と煙の向こうからかかった。しかし彼は動じない。

って、恐ろしいのか?」 さあ宴の始まりだ! まずはハラワタから喰ってやろう! どうした! そのように縮こま

ながらの赤みを帯びたビリ辛のタレに漬け込み、そして彼の口へと無慈悲に運ぶ。 「もう逃げ場は無い! 俺に捧げられる贄の第一号は……貴様だ!」 二本の伝統武器の先端は、寸分遣わず網の上のよく焼けた肉を捕らえ、それを血の池地獄さ そう叫ぶと、彼は右手の箸を鋭く繰り出した。

「くっくっく、いい味だ」 彼は邪悪な笑みを満面に浮かべて、それを頻振った。

----魔王様 「なんだよ声屋 手狭なテーブルを挟んで向かい側にいる声服と呼ばれた上背のある男は、煙の隙間から困っ お食事は、もう少しお静かになさってください。周りのお客さんに迷惑です」 彼は急に表情が素に戻り、先ほどから声を投げかけてくる正面の人物に顔を向けた。

たように眉を下げた顔を覗かせた。 一ん? そうか、そういえばちょっとテンション上がりすぎて声がでかかったかな」

魔王、と呼ばれた、どこにでもいそうな風貌の若者は、周囲を見回す。

食べていないみたいじゃありませんか」 「別にそういうつもりじゃないが、いっつも粗食かジャンクフードしか食ってないんだから、 「それに、ホルモン焼肉くらいでそんなにはしゃがないでください。まるで普段ロクなものを

たまにこうやっていいもの食えば、そりやテンション上がるわ」 まっていた。幸いにして魔王のテンションを迷惑がられる気配はなかったが、芦屋は今までそ の歯ごたえはなんとも言えねぇ! これがハチノスか? 形は変だが悪くない!」 ホルモンって本当美味いな。このリードヴォーはとろっとろでコクがあるし、ガツやナンコツ と真典貞夫が、強硬に外食を主張したのだ。 はドリンク一杯サービス、ほとんどの肉が一皿三九〇円均一だというので、"魔王サタン" こ 通り商店街』に、地域で人気のホルモン焼肉屋があった。 ィラ・ローザ笹塚。の二〇一号室に入居する"魔王城"。その魔王城から歩いて十分の『百号 んなに魔王に粗食を強いてきたのだろうかと、心の片隅で少しだけ反省する。 と取り皿に移してゆく。 "声屋』は複雑な面持ちで頷き、魔王のテンションを鎮めることを誇めた。 「……よろしゅうございました」 「いやー、俺今まで、ハラワタが美味いっていう悪魔達の気持ちが分からなかったんだけど、 そう言いながら『魔王』は、網の上でいい具合に焼き上がった肉やホルモンや野菜を、次々 オープン十周年サービスと銘打たれ、金曜と祝前日以外のディナータイムの早い時間帯なら 東京都渋谷区笹塚の、京王線笹塚駅から徒歩五分の場所にある築六十年の木造アパート"ヴ 週末の夕方。そこかしこのテーブルで肉を焼く煙が上がっている店内の席は、八割ほどが埋

とになり、魔王城の家計簿を管理する、"悪魔大元帥アルシエル。こと芦屋四郎も了承した。 サービスドリンクのウーロン茶をすすりながら、芦屋は脇にあるサラダボウルを手元に寄せ

給料日直後で懐が温かかったのと、ある事情から一応『お祝い』をすべきだろう、というこ

思うと、三九〇円ではとても済みませんので」 「キャベツが一玉で三百五十円など狂気の沙汰です」 「あー、なんか野菜が高いんだってな」 「肉ばかりでなく野菜も召し上がってください。最近では家庭でこれだけの野菜を食べようと そう言いながらかいがいしく真奥の皿に野菜を取り分ける。

「栄養パランスが偏ります。せめて魚など焼ければよいのですが、魔王城のコンロに魚グリル 一俺は肉好きだから野菜とか別にいいんだけどな」

ちらもカルビ弁当が六百円となかなかのお手ごろ価格だ はありませんし、何よりあの換気扇の力では、煙や臭いを外に排出しきれません」 「そう言えばさ、漆原の晩飯、質ってった方がいいんじゃね? 焼肉弁当とかあるっぽいぜ?」 真奥かふと手に取ったメニューの一番端のところに、持ち帰り用焼肉弁当の表記がある。こ いじましい生活の話題を、ウーロン茶とともに呑み下す二人の大悪魔

だが、声屋は渋い顔をすると首を横に振り、残っていたサラダを全部より分けると店員を呼

んで皿を下げてもらった。

「必要ありません。帰りに杉家で豚丼の並でも買えば十分です」

王様のカードを使って、家計を無駄に使い込みすぎているのです。一つ一つの買い物はそう高 「最近、漆原はネットショッピングなるものを覚えたらしく、働きもしないくせに勝手に魔 思いのほか冷徹な発言に驚くと、声屋はサラダを頻振りながら憤然と言う。

額ではありませんが、甘やかすとつけあがります」 「え? あいつそんなことしてんの?」

で真奥が買い与えたものである。 思ってたけど……」 「外に出られないってストレスでまたぞろ裏切られちゃかなわんから、多少のことは大目に見 『……あー、なんか、確かに最近、俺が買った時よりもノートパソコンかごてごてしてるとは しが数多くあったと記載されていました。我々が無駄遣いしたのでなければ、奴の仕業です」 「先月のカード引き落とし明細に、魔王様が購入されたパソコンとネット回線以外の引き落ト 魔王城初の最先端文明機器と言っても過言ではないノートパソコンは、漆原の能力を見込ん

「是非そうしてください。裁きの鉄槌をお願いいたします」 ようとは思ってたが、あんま度が過ぎるようならピシっと言ってやらんとなり

上カルビ!」 「じゃさ、その分ちょっとだけ贅沢していい?」 |渋||面を作りつつも真奥の頼もしい言葉に少し雰囲気が和らぐ声屋だったが、 漆原の分考えてたから自重してたんだけどさ、そういうことなら一旦だけ上カルビいかね? 突然媚びるような声を出してメニューを開く真臭を見て箸が止まる。 上カルビ、上ミノ、上ハラミだけはサービス価格でも四九〇円の値がついていた。

芦屋はがっくりとうな垂れて答える。

気持ちで胸が一杯になった。 だ。芦屋は上カルビごときでほくほく顔になってしまう主の顔を見て、微笑ましくも情けない 「……仕方ありませんね、今日だけですよ。その注文でおしまいですからね」 っしゃ!! 真臭はガッツボーズをしながら店員を呼び、しっかりと上カルビを注文してから会計を頼ん 9歳しい思いを否み下そうと手に取ったグラスの中は、既に氷だけになっていた。

魔主サタン。それは闇の生き物が糞く魔界を統べる、恐怖と残酷を代名詞とする存在である。を揺く五つの大陸に、覇を唱えんとした悪魔の王は今、日本の東京の渋谷の笹塚にいた。 腹心の四天王である四人の悪魔大元帥とともに、サタンはエンテ・イスラの人間勢力を駆逐 神々が見守る地とされている、聖十 字大陸エンテ・イスラ。大海イグノラに浮かび、十字

し、あと一歩で世界を征服できたはずだった。 だが魔王の野望を打ち砕き、エンテ・イスラを守った英雄がいた。その名は、エミリア・ユ

エンテ・イスラからの逃亡を図る。 スティーナ。勇者エミリアとの最終決戦に敗れた魔王は、異世界への門。ゲート、に飛び込み、 傷つき消耗した体で、。ゲート。に流されたどり着いた異世界の名は。地球。と言った。そ

こはエンテ・イスラよりも広大で、文明が進化した、人間の支配する世界だった。

異世界である地球の"日本"という国に漂着したサタンとアルシエルは、高等悪魔の姿を保

てなくなってしまう。日本には、自然に湯出する"魔力』が一切存在しないことがその原因だ 力を取り戻してエンテ・イスラに帰還するために、二人の大悪魔は聖も魔も存在しないこの

日本。という国で、人間に紛れて暮らし、安全に魔力を回復する方策を探すことにした。 そして、地球の時間で一年が過ぎた。そこには、立派なプリーターとして自立した二人の大

悪魔大元帥アルシエルは、そんな真臭の生活を支える主夫、芦屋四郎として。 魔王サタンは、大手ファーストフードチェーンマグロナルド幡ヶ谷駅前店のA級アルバイト

至に仮の魔王城を設置して、毎日を元気に、遵 法精神旺盛に過ごしていた。 世界征服を目指した悪魔としては明らかに間違った生活が、新たな日常になって久しいある 4京都渋谷区笹塚にある簗年敷殿堂入りの賃貸木造アパート、ヴィラ・ローザ笹塚二〇一号

荷敵同士が再び邂逅したにも関わらず、力を自由に行使できないがために、日本社会の一員立ち、日本人遊佐惠美として、日々をアルバイトで過ごしていることを知る。 雨の日のこと。真奥貞夫は出勤途中に雨宿りをする女性に気まぐれで傘を貸す。 突然の勇者出現に慌てふためく真臭だったが、エミリアもまた、孤立無援のまま日本に降り その女性こそ、魔王サタン追討のために世界を渡った勇者エミリア・ユスティーナだった。

る」という目的を持つ敵からの襲撃を受ける。 法神 教 会の大神官オルバ・メイヤーだった。 使ルシフェル。そして勇者エミリアの仲間の一人でありエンテ・イスラに絶大な権力を誇る大 として大人しく生活せざるを得ず、睨み合いが続く。 その正体は、かつての魔王配下の悪魔大元帥にして、勇者エミリアに撃破されたはずの歴天 そんな最中、二人は『エンテ・イスラよりの刺客』を名乗り、『魔王と勇者をともに採殺す

存していた型法気を開放したおかげで、形勢を逆転して二人の刺客の撃退に成功する。 しかし真奥が土壇場で魔王サタンとしての覚醒を果たし、勇者も帰還のための保険として温 非道な手段で迫るルシフエルとオルバに、真臭と恵美は一方的な戦いを強いられ、何度も躺っ

意。聖と魔の膠着は、日本の東京の渋谷の餐塚で、そのまま維持されることになったのだった。 エミリアは、帰るチャンスをふいにした魔王を監視するという名目で、日本に残ることを決 往ぎ込む。そのため力が払底して、再び真奥貞夫の姿に戻ってしまった。 がつくかと思われた。 しかしサタンが、戦いで破壊された市街の復旧と現場の人々の記憶消去に取り戻した魔力を

魔王サタンが復活し、勇者にもエンテ・イスラから仲間が教援に現れたため、聖と魔の決着

つつある。加えて梅雨時ということもあり、毎日不快指数の針は全力で振り切れているのだ。 ないのに、肺に水が入り込むような錯覚に陥り、咽せそうになる。 初夏から本格的な夏に移ろうとする時期で、陽は長くなり、朝晩の気温も下がりにくくなり ホルモン焼肉屋から出た二人の肺を、蒸した空気が一気に満たした。霧が出ているわけでも

「あんなにじゃんじゃん火を焚いてる焼肉屋の中の方が涼しいってどういうことだよ!」 「エアコンは偉大ですね」

途中の牛丼ファーストフード杉家で一番安い原丼をテイタアウトした真果と声屈は、その流りのサラリーマンの群れが、笹塚駅のある甲/州/街道の方から大勢歩いてくる。 早い時間に店に入ったこともあって、商店街は未だ活気を失っていない時間だった。動め帰

れに逆らうように笹塚駅の方向に向かっていた。

「すっげぇよなあ、よくこのクソ暑いのに、あんなにスーツ着込むよな」

一魔王様、南大陸の砂漠の王国を攻めた時のことをお忘れてすか」 「それくらいは知ってるけどさ、そもそも真夏に長袖着たくねぇじゃん」 ようなリーズナブルな店でも売られるようになったとか」 「ああ見えて風を通しやすい素材だそうですよ? 最近は『洋服の赤山』や『AKAKI』の

严圧の顔が急に険しくなる。

街の街灯が夏独特の光彩を街に落としている。 時間は午後七時になろうとしていたが、日の長い夏のこと、空は未だ薄暮の色を保ち、商店

ほどの灼 熱の土地ではありませんが、地球とエンテ・イスラではそもそも事情が違います」 「強い日光は肌を焼くのです。砂漠の民は皆厚い布で体を覆っていたでしょう? 商店街の出口、甲州街道と交わる交差点で二人は赤信号にひっかかった。

「い、いきなりなんだよ」 突然熱っぽく語りだす声屋

22

「日焼けは長期的には皮膚がんの原因となります。オゾン層が薄くなったことで、日本の都市

部に降り注ぐ紫外線の量は年々増え続けていることをご存知ですか?」

「ンなこと知らねぇよ、それがどうしたんだよ」

のです。皮膚ガンや白内障などの原因であり、南極のオゾンホールが近いオーストラリアなど 「このような夕方や曇りの日など、あまり陽が差していない時でも、紫外線は降り注いでいる 芦屋は空を指差した。

では、学校に通う子供達にサングラスの着用を義務付けている州すらあるほどです」 秘論を申しますと、日本においても夏場に半被でいることは、必ずしも推奨されることでは 熱弁を振るう芦屋だが、手に持った豚丼が人に当たらないように、気を違うことは忘れない。

サングラスなどを常用していただけると、私としても安心なのですが」 なくなっているということです。なので魔王様の健康のためにも、できれば七分袖のシャツに 一七分袖はともかく、サングラスとか勘弁しろよ」

一おい青になった。豚丼冷めないうちに帰ろうぜ」 芦屋がどこまで本気なのかは分からないが、真奥は雑談にとどめておきたいので、

と、素早く証の離を折った。

「と、とにかく、初めて行った時は……って言っても今日で二回目なんだけど……木崎さんに 「そんなことくらいで怒ったりはしませんよ」 「魔王様の通勤経路にある店ではなかったので、どうしてあそこだったのかなと」 「ところで魔王様、あのホルモン焼肉屋のこと、ご存知だったのですか?」 -を強いられるに決まっている。その胡散くさい笑顔の裏に何を隠した! 恐る恐る見上げた芦屋の顔は、穏やかな笑顔。 い、昔っとくけど、人におごってもらったんだからな、家計には手をつけてないからな!」 真臭はそう言ってから慌てて付け加える ああ……実は前に行ったことがあるんだ」 絶対嘘だ。自分で金出して行ったとか言ったら、今夜一晩説教の末、また激烈な節約メニュ 横断歩道を渡りきったところで芦屋が歩きながら尋ねてきた。 ||坂駅前の大きな横断歩道で、多くの日本人に紛れて、雑談しながら歩く大悪魔二人。 5断歩道の此方と彼方に溜まった人波が一斉に動きはじめて、芦屋も紫直に腰を折られる。

連れてってもらったんだよ」

木崎真弓。真臭の動務先にして魔王城の家計の要、マグロナルド幡ヶ谷駅前店の店長である。

前に、魔王様が夕食は不要だとおっしゃって出ていった日がございましたね」 「なるほど、得心しました。従業員同士の打ち上げか何かですか。そう言えば八ヶ月と十七日 一そんな細かい日付がパッと出てくるお前が怖いわ」

真奥は顔をしかめる。

びる古くからの住宅地に差しかかったのだ。 「木崎さんが俺の歓迎会だっつって連れてってくれてさ。なんか知り合いのお店なんだって。 **笹椒駅前のガードを通り過ぎると、急に人通りがまばらになった。網の目のように路地が伸** 

その日は俺と木崎さんと、他に何人かいたけど全部木崎さんが払ってくれたんだ」 「前に行ったときはおごりだってんで恐縮して、恥ずかしながら何食ったか覚えてなくてな」 「噂に違わぬ豪儀な店長ですね。でも、それならホルモンは初めてではないのでは?」

「それだけ魔王様を信用してくださっているということです。入社して一年も経たないのに、

しかし……今回ばかりは素直に木崎さんのことヨイショできねえわ」

何故か憂鬱そうな表情を作る真典。

魔王として極めつけに情けない告白をしながら、

それこそ異例の出世、と言うべきではありませんか」 芦屋は逆にどこか嬉しそうに言うが、真奥は力無く首を横に振った。

一ンなこと言ったって、パイトであることには変わらないしな」

てなければ、 「日本語としては間違ってないが……お前、本気で言ってる?」 りませんか」

時間帯限定で僅かな人数とは言え、魔王様が人間を支配できるのです。喜ばしいことではあ

今日は外食などしていません。魔王様の出世祝いの外食ですからね」

帰りしなの真実を呼び止めた店長の木崎は、突然真臭に、午後の時間帯責任者を任せたいと 不崎の口からそんな言葉が飛び出てきたのは、閉店作業を終えて着替えた直後のことだった。

『実は今度、忌々しいことに管轄事業所の店長研修に出ることになってな。来週末から一週間 「それってつまり……」 言い出したのだ 指定された時間、まーくんは店長代理になる。もちろん職責に応じて時給も上がる」 店長代理。なんという、素晴らしい響きだろう。真臭は驚きを隠しきれない。

ほど、レイトタイムから店を留守にしなければならないんだ」 一まーくんは入社してから一年と経たないが、その力は本物だと私は思ってるんだ。代理社員 この売り上げの鬼に対して一体どんな研修が必要なのか、真臭は心の中で首を傾げた。

の派遣も検討したが、ただ社員だというだけのボンクラより、私が手塩にかけて育てた君の方 が、半日店を任せるに足る人材だと思っている。どうだ、やってくれないか?」 魔界を制した魔王に対して過小評価も甚だしいが、当の真臭は、木崎の真摯な表情と言葉に

い上がりそうになっていた。

時間帯責任者という業務を完遂すれば、その道を一歩前進することになるのは確実だ。 すると木崎は、穏やかな笑顔を浮かべて満足そうに頷き、そして突然話題を変えた。 真奥は勢い込んだ。ここで木崎の信頼に応えられなければ、男が廃るし魔王も廃る! やります! やらせてください!」

真典の世界征服の野望は、本人が豪語する通り正社員の肩書きを手に入れることから始まる。

オープンするのは知っているね?」 「ところでまーくん、向かいの書店の隣に、センタッキーフライドチキンの載けた新規店舗が 突然話題を変えられて、真奥は目を瞬かせる。

ざマグロナルドの郵便受けにまで、ポスティングのチラシとクーポン券を放り込んで、熱心に 地域開発している 場所に近日中にオープンする。店舗改装中のテナントの壁に大々的に広告看板を出し、わざわ 競合他社の『センタッキーフライドチキン』の店舗が、向かいの書店の隣、歩いて十五秒の

木崎は先ほどの穏やかな微笑みとはうって変わった、含みのある笑顔を浮かべた。言うなれ

ば、既にはまったケモノを見る狩人の目だ。 「私の研修が始まるその日からオープンする。全く忌々しいことだ」 吐き拾てるように言う木崎。言葉の蠼々に隠すつもりのないトゲがあるが、センタッキーフ

は、木崎がハンディシュレッダーにかけて捨てたはずだ。 ライドチキンに何か恨みでもあるのだろうか。そういえばあのポスティングチラシとクーポン そんなことを思い出しながら相槌を打っていた真臭は、続いて飛び込んできた木崎の言葉を

すぐには理解できなかった。 人数かける十円、時給を引く」 「そこでまーくん、もし、私が研修に出る一週間、夜間の合計集姿数でセンタに負けたら……

「十人負けたら百円! 百人負けたら千円、時給からマイナスだ!」

「黙れ! 時間帯責任者たるもの、それくらいの覚悟で営業に当たらないでどうする!」 「ちょ、え、ちょっと待ってくださいよ!」 真奥はうろたえるが、木崎の勇者もかくやという鋭い睨みに姿勢を正してしまう。

れに法律で定められた最低賃金とか、労働基本法とか……」 一にしたって! 俺の時給千円ですよ? 千円引かれたら夕ダ働きになっちゃいますよ! そ

「この店では、私が憲法だ!!」 法律ではなく、憲法。真臭は眩暈がしてきた。

「タダ働きならいい方だ。私の同期にはライバルとの競合に敗れた末、トリニダード・トバゴ

に飛ばされた者もいる。英語は通じるから元気にやっているようだがな」

「とにかくっ! 私は君を時間帯責任者として任命した! 一週間、命を賭けて店を守り、セ 「そういう問題じゃない気がするんですけど……」

双眸は、まるで魔界の王のそれように残酷な光を放っていた。 木崎がヒールのある靴を履いているせいで、本来以上の高みから真臭を見下ろしてくる。その ンタの忌々しい新規店舗を打ち負かせ! 敗北は死を意味するぞ!」 『それとも何か?』まーくんは君を見込んだ私の信頼を無碍にすると、そう言いたいのかい?」 そ、そんなっ 尚も抗おうとする真臭だが、木崎は腕を組んで真臭の目の前に歩み寄る。ただでさえ長身の

全て後の祭りた。 真典はようやくハメられたことを自覚する。しかし、言質を取られてしまった今となっては

もし勝利して私の信頼に応えてくれたら、きちんと褒美を出そうじゃないか」 「私は上司として君に鞭を振るわねばならない。だが、恰を渡すのもまた上に立つ者の仕事だ。 反応に窮していると、木崎は気迫を突然柔らげ、再び元の穏やかな笑顔に戻る。

「やります! 必ず、木崎さんの期待に応えて見せます!!」 |代理として経験を積めば、社員に推薦することだってできる| 日商や集客敷の状況次第では、また時給アップを考えてもいい。恒久的に時間帯責任者、店 その瞬間、真臭は完全に木崎の衞 中にハマっていたと言っていい。

その言葉を聞いた木崎の表情は、満足げだった。

やったことあるだろ。道路の交通量調査でカウンターかちかちやるやつ」 「ちゃんと会社が、人数調査員を派遣するんだって。ほら、日本に来てすぐの頃、短期派遣で 「しかし敵対店舗の合計集客数など、どうやって調べるのでしょうね」 真奥が語る木崎の話を思い出しながら声屋が尋ねる。

それで来週末から、時給を賭けた勝負が始まるんだ。正直不安すぎる」 いうのは肉体的にも精神的にも辛い作業でした。飲み物や日除けは持ち出しでしたし」 一週間で日商簿の付け方とか店のパソコンの売り上げ入力の仕方とか勤怠管理とか教わって、 一なるほど、あれも夏の盛りでしたね。真夏の炎天下に延々と遺行く人の数を数えるだけ、と エンテ・イスラで人間相手に大戦争をやらかした悪魔の言葉とはとても思えない。

急に胸に手を当てて昔を懐かしむような顔になる芦屋。慌てた真臭は不自然に大きな声で芦です。私もかつて、東大陸攻略軍司令官に任命されたときの誇らしさと言ったら……!」 た。面倒な話を終えることができて真奥はホッとするが、 くださいとホームシックを起こすのだ。 屋の話を造った。 は、はあ、かしこまりました」 務時間は変わらないから、引き続きよろしく頼むわ」 「魔王様ともあろう方が今からそんな弱腰でどうするのです。大役を任されるのは名誉なこと 「ま、まあ、アレだ! 確かにやらなきゃいけなくなったことにかわりはないからな。 でも勁 エンテ・イスラの話をしだすと、芦屋はすぐに侵略しに帰りたい魔王様もっとしっかりして 灯りが、二つ灯っている。 やがて被方に魔王城の、いや、木造賃貸アパート"ヴィラ・ローザ笹塚』の灯りが見えてき 一つは二階の角部屋。ここは真奥達が住む魔王城でもある二〇一号室だ。 真奥と芦屋は揃って声を上げた。

もう一つは魔王被の隣室、二〇二号室だった。ヴィラ・ローず笹塚に入居しているのは真楽

達だけのはずだ。時間帯から言っても工事や整備の業者が入っているということはないだろう。 まさか大家の志波美輝が帰ってきたのだろうか。 ヴィラ・ローザ笹塚の大家である志波美輝は、二ヶ月前のルシフェルとの戦いの直前、真卑

たちの正体を知っているかのような態度をほのめかした後、姿を消していた。 告知を信じるなら海外にいるそうだが、唐子を二ヶ月も放っておいて海外旅行もないだろう。

のに二週に一度くらいのペースで手紙が来るのだ。 かと言って、完全に行方を眩ましているのかと思えば決してそんなことはなく、必要もない

バカンスを楽しんでいる、という腹の足しにもならない自慢が書かれた手紙。 そこから出てきたのは、達者な筆致と流・麗な文章で、現在ハワイのプライベートビーチで 結婚式の招待状のような豪奢な封飾が最初に届いた時は、無用心に封を切ってしまった。

ートビキニを纏う、ハワイの夏を満喫していることを感じさせる、虹色のタコ糸で〆られたチ 物じみた酒樽サイズの肢体と肌を惜しげもなく晒してポーズを取って、虹色のパレオ付セパレそして、ビーチパラソルの下でトロピカルカクテルを片手にデッキチェアに寝そべり、化け

ヤーシューの如く、コンガリと日焼けした大家の写真が同封されていた。

と直接面識のない漆 原など、卒倒した拳句に三日間も寝込んでしまったほどだ。 それを見た瞬間、真奥は視界が真っ白になり、芦屋は口を押さえて便所に駆け込み、大家 日本は核兵器よりも、志波美輝を国内に持ち込ませない方が良いのではないかとすら思えた

その事件以降、不測の郵便物が届いた時には、魔王城にえもいわれぬ緊張が走る。

真奥と声屋は顔を見合わせた。 の傍らを、キリンのマークをコンテナにつけたトラックが走り去っていった。 「そうですね。新しい住人が騒音を立てたりゴミの日を守らなかったりするような、モラルの 「だな。なんか面倒くさいな。他の部屋が空室ってのは今にして思えば気楽だったな」 「新しい入居者のようですね」 テレビを持たない魔王城の住人でも知っているほど有名な引っ越し業者のトラックを見て、 その忌まわしき『大家の水着グラビア事件』の記憶がふと脳裏を掠めた真鬼だが、丁度二人

低い人でなければいいのですが」 悪魔のクセに他人のモラルを気にするのも何かが間違っているだろう。

「あー、いや、俺そういうこと心配してるんじゃないんだ」 しかし真臭は首を横に振る。

"まあ単なる身許不確かならいいけどな。でも考えてみろよ。アレが大家なんだぞ?」 芦屋の懸念を、真奥は首を横に振って否定する。 の私達からして、身許不確かな怪しい人物でしたよ?」

「そうですか? 敷金礼金も無く、家貧も格安となればどんな人が来るか……。大体入居当時

真奥の「アレ」で、芦屋の脳裏には忌まわしき写真の記憶がフラッシュパックする。

早く帰ろうぜ。漆原にブーブー言われたくねぇし」 るかもしれませんね」 「ま、まあ、あの大家さんに管理されている物件と思えば、恐ろしくて生活態度は真面目にな いや、そういう意味でもないんだが……。まあいいや、とにかくなるようにしかならんさ。

**南段は、最近さらに傾きと磨耗が酷くなってきた気がする。** 言いながら真美はアパートの敷地に入る。かつて勇者に色々な意味で致命傷を負わせた共用

階段の一段目に足をかけた真典はふと、上階から影が差しているのに気づき顔を上げた。

だがそれは上にいる人物も同じだったようで、一瞬 戸惑うような仕草をする。そして *b* 二階の共用麾下に取りつけられた傲光灯の光を背に受けて、人影がこちらを見下ろしている。 いきなり遭遇するとは思っていなかった真臭は、その人物を見上げたまま間まってしまう。 逆光と下から見上げる形のせいで判然としないが、小柄で線の細い姿は女性なのだろうか。

あっ!

最初は階段の上にいた人物。次が真奥、最後が声壓。それぞれが思わず声を上げた。 おおいし

ウソだろっ!! 真奥は思わず手を差し出した。 意を決して降りてこようとした二階の人物が、最初の一段目で足を滑らせたのである。 体が、宙を一瞬舞って、

どんな飛び出し方をしたものか、手足をバタつかせながら落ちてきた人物は、一直線に階段

下にいた真英目がけて突撃してくる形になってしまった。 一っと、あぶねえ」 一魔王様っ!」 あわや撤突というシーンで芦屋は思わず叫ぶ。

一瞬の混乱の後、真奥の息を吞む声。

真奥に受け止められた今の瞬間も、驚いているのか目を見開いたまま固まっている。 そして一体どういうつもりなのか、この暑い最中に着ている服は割烹着に和服で三角巾。贖 見たことのない小柄な女性が、真奥の腕に抱えられていた。転落の間、悲鳴の一つも上げず、

らいしかしないような姿である。 物が脱げたらしい足は靴下でなく足袋履きだ。今日び、国民的海産物アニメの主人公の母親く ······あ あの······」 真奏は、腕の中の、無表情で虚空を見上げている女性……というよりほとんど少女に、恐る

恐る声をかけた。すると、 いやまあ、確かにそうだが、問題はそこじゃねぇだろ」 油断、大敵……っ!』 と、言ったきり突然目を閉じてがっくりと脱力してしまう。

「それは俺がか? それとも、この子がか?」 階段の上から女の子が降ってきたら、受け止めた男は一体どうすりゃいいんだ?」 大丈夫……ですか?」 当惑しながら声をかけてくる芦屋に、真異はそれに負けないほどの困惑顔でそう答えた。 転落の最中に脱げ落ちてしまったのだろうか、女性物の下駄を拾った芦屋が駆け寄ってくる。 気絶した少女に、抱えたまま突っ込みを入れる真典。

「そら、ルシフェル。土産だ」 遅い! 狭い土間で、真奥と芦屋は窮屈な思いをしながら靴を脱ぐ。 これでも早く出てきたんだぞ。『お帰りなさいませご主人様』くらい言ったらどうだ」 |王城の家主たる真奥が玄関のドアを開けると、そんな文句が室内から投げかけられた。 お腹減った!」

ら紫色の双眸が覗く。 た。身長は真巣より頭一つ低い。無途作、と言うには少々だらしないほどに伸ばした髪の間か 芦屋は持っていた弁当の袋を部屋の中に差し出す。部屋から出てきたのは、小柄な青年だっき。

「あー、すまん漆/原。家計のことはあちらにどうぞ」「あー、すまん漆/原。家計のことはあちらにどうぞ」

「だからってこの格差は酷くない? まったくもう……」 「自分の胸に聞いてみるんだな。最近の貴様の無駄遣いぶりは目に余る」 つっけんどんに言って睨みつける声屋。 芦屋にルシフェルと呼ばれ、真奥に漆原と呼ばれた青年は、真奥が指し示した芦屋を見る。 言われるだけの覚えがあるのか、ぶつくさ言いながらもあっさり引き下がった青年は、ビニ

一それといい加減、パソコン周りを片付けたらどうだ。お菓子の袋とかジュースの空き缶とか、 「ルシフェル!」ゴミを部屋に散らかすな、ちゃんと片付けろ!」 それを見た芦屋が、ピニール袋から飛び出した紙おしぼりなどを憤慨しながら拾い上げた。

ール袋と持ち帰り豚丼の蓋をはがして適当な所に放り出す。

旧式のノートパソコンが載った座卓があり、その後ろで旧式の扇風機が唸りを上げていた。 夏場は虫が寄ってくるだろう!」 外は薄暮から、ようやく夕間になりつつあった。蛍光灯の灯りに照らされた室内の一角には

が畳の上をふわふわと転がり、芦屋の顔を引きつらせた。 い謎の機械やコードが放置されている。扇風機の風が当たる度、残ったカスや小さなビニール 「僕お腹減ってんの。説教なら食べた後にして」 『年は芦屋の叱責にも涼しい顔で、レンジの中を見つめたまま振り返りもせず、

そしてその間りには、お菓子の空き箱や空き袋、ジュースの空き缶のほか、用途の分からな

る鉄刀法達反だが、数ケ月前に都内を騒がせた、連続強盗犯であることが判明するのも時間の 先の戦いの末、オルバは警察に逮捕されている。逮捕事由は彼が拳銃を持っていたことによ の末に魔力を失ったルシフェルは、日本人、漆原半蔵として真奥の単門に再び下った。 でするためにエンテ・イスラより使わされた刺客でもあった。

年の名は漆原半蔵。その正体は"悪魔大元師ルシフェル。であり、二ヶ月前に真奥と勇者

まるで反省の様子が無い。

しないだろうが、ルシフェルを共犯者として告発することは十分あり得る. 世題たろう また『ルシフェル』と『漆原半蔵』の外見には、真奏達はどの悪魔型と人間型の差異がない。 戦闘で消 耗し、勇者が日本に健在であるこの状況で、オルバもこれ以上経はずみな真似は

そのためオルバのことが片付くまでは、漆原は基本的に表に出られないのだ。 だが、彼はインドア派だからこそ生きる技術を持っていた。二ヶ月前: インターネットカフ

自分達をサポートさせるべく、漆 原にネット回線とノートパソコンを買い与えた。 エから勇者の職場にハッキングを行った腕を見込んだ真果は、表に出られないなら家の中から そして地球に存在する魔力文明に関する情報を、IT方面から収集することを命じたのだが

一そう簡単に実のある情報が手に入るわけないだろ」 一て、今日は何かめばしい情報はあったか」 豚丼を抱えてパソコンデスクに戻り、こちらも見ずにがっつきはじめる漆原。流石に真美も 芦屋と漆原のやり取りを複雑な表情で眺めていた真奥は背を向ける漆原に問うが、

少々イラっとくる。

めていた。図書館で文献を手当たり次第に調べ、有名博物館の特別展をしらみつぶしに見学し、 また文献を当たっては別の博物館に行くという作業を繰り返していたが、これからはインター 「仕方ないだろ。そう都合よく魔力に関する情報なんかにプチあたるワケないじゃんか」 一お前この二ヶ月そればっかりじゃねぇか!」 魔王城にパソコンもインターネットも無かった時代、魔力回復の情報は芦屋が足を使って集 苦言を呈するが、漆原は堪えない。

ネットがあるから楽勝! とばかりに思っていた真奥

まさか真奥さあ

て、今も芦屋と進一で喧嘩が勃発している。 人間型になるとメンタリティも変化するのか、真奥のことを呼び捨てにする。そのことについ 「今時パソコンとネットがあれば、なんでもできるとか思ってるクチ?」 漆原は、"ルシフェル。である時には敵対しながらも真臭を"様付け。で呼んでいたのだが、

知らない? 迂闊なことやらかしてこれ以上警察の世話になりたくないだろ?」 まわざとらしい窒息をついた。 「やれやれ、ネットは万能じゃないんだよ? それに最近じゃ法規制が厳しくなりつつあるの、 真奥は呻く。まさしくそう思ってるクチだったのだ。その反応を見た漆原は、肉を咥えたま さすがにこれには言い返さざるを得ない。

一真奥こそそれでも魔王?」 「お前、それでも悪魔か」 芦屋は最早仲裁する気力すらないのか一言も発しない。仏 頂 面のまま、漆原が散らかした

コミを黙々と片付けている。 「例えば仮に首尾よくそれっぽい文物が収蔵される特別展とかがあったとしてもね、ハリウッ

一その例えはよく分からんが……例えば監視カメラの映像操作したりとか、倉庫の電子ロック ド映画みたいに簡単に展示品を盗めるとか思ってないよね」

の暗証番号を解読できたりとかしねぇの?」 「確かにハッキングっていうのはアクセスしたコンピューターのデータを参照したりいじれた 「なんでこの部屋にはテレビがないのにテレビ見すぎの子どもみたいな発言するかな」 漆原は容赦がない。

トPCでできることなんかたかがしれてる」 りするよ。でも博物館をまるまる管理してるシステムに介入するのに、こんな時代遅れのノー

ば在庫処分品を擴まされたに等しいらしい。 ある。真奥にとっては清水の舞台から飛び降りる気持ちで購入したものだが、漆原に言わせれ 漆原にこき下ろされたパソコンは、真奥が初めてクレジットカードを使って購入した代物で

|表示されていた。意図が分からずしばらく見ていると、コマ送りのようなカットで車が通り 漆原が真奥を呼んでパソコンの画面を見せる。液晶画面の端に、モノクロで映る何かの映像 「ちょっとこれ見てよ」

過ぎ、ちょうどその瞬間、外を乗用車が通過するエンジン音が聞こえた。 ……おい、なんだこれは」

「ウェブカメラをちょっと応用して監視カメラにしてみた。ほらあれ」

漆原が窓の外を指差す。そこには、塗料がはげた棚に設置された、小さなボールのようなも

り巡らせてるんだ。それをこんなHDDが百ギガも無くてCPUがペンデュラムⅢでUSBス 「とにかく、相手はスパコン並のサーバーを何機も抱えて、あらゆるセキュリティネットを張 てことは雨風に当たっても大丈夫なのか?」 だけで、どうしようもないの分かるでしょ?」 のがあった。明るい色のプラスチック外装の機械からパソコンまでコードが延びている。 一……本当にどうしようもねぇな」 一ううん、古いし防水加工されてないから、雨の日は取り込んでる」 「さも当然のように言われても困るが、珍しく役に立つ機械じゃないか。外に設置してあるっ 「不審者発見とかに役立つかなって思って買ったんだけど、モノクロなのに処理落ちするって 真奥はけんなりしてデスクから離れるが、その背に漆原が追い討ちをかける。

ロットが一本しかなくて、常駐プログラムも走らせられないようなパソコンでどう攻略しろっ

て言うんだよ 立て板に水の漆原の文句に対する真典の回答はたった一言。

お前日本語で喋れよ」

識が無いので、何をどう罵られているのかさっぱり分からない。 パソコンの性能をこき下ろしていると思われる漆原だが、生憎真臭はまったく電子機器の知

漆原は真奥の、魔王としてもネットユーザーとしても間違っている反応にご 瞬 脱力しかけ

るが、やがて力なくパソコンの本体を指先で突く。 はホームセンターで購入した簾で日差しを防ぐことで何とか耐えているのである。 とわずかに風が通るので、その流れを扇風機でささやかに促進しているだけだ。 い物にならなくなる。しばらくはどうにもならないよ」 「いずれにしろ、こんな古い機種をこの暑さの中で長時間稼動させたら、中身が焼けついて使 精密機器が熱に弱い、というのは真臭にも理解できたので、仕方なく口をつぐむ。 その扇風機も百号通り商店街のリサイクルショップから千円で買ってきたセコハンだ。あと 魔王娍の室内環境は、エアコンなどという文明の利器とは無縁である。全部の窓を開け放つ

てきて、真奥と芦屋は顔を見合わせる。 「お前、ずっと部屋にいて気づかなかったのか」 街頭で配布していたパチンコ屋の広告ウチワで顔を扇ぎながら、ふとルシフェルがそう尋ね

「そういえばさっき、外でガタガタやってたのはなんなの」

一はあ? 何それ、このポロいアパートに、誰か引っ越してきたの?」 漆原は紅しょうがをかじりながら、真臭が指した側の壁を見た。 隣に新しい入居者が引っ越してきた」 真臭は、隣室がある側の壁を指差す。

監視カメラとそれを運用する当人が、役立たずであると自己申告した瞬間である。

を開け放していたんだから、外を業者や入居者の人が往復するのに気づかなかったのか」 | 隣から何かの音はしただろう。引っ越し屋のトラックも来ていたみたいだし、大体廊下側の 芦屋の言葉に首を横に振る漆原。

また動画サイトばっか見て、音楽でも聞いてたんじゃねぇだろうな」 いや、気づかなかったけど」

真奥は苦りきって言う。だが漆原は豚丼を頻張りながら尚も首を横に振る。

カメラなんぞ捨ててしまえ!」 「口に物を入れたまま喋るな!」ご飯粒を飛ばすんじゃない!」 あとそんな役に立たない監視 ないって、本当に気づかなかったんだよ」 自堕落な生活を送る漆原に芦屋がマナーを注意するのも、この夏の魔王城の日常風景である。

その衝撃の価格に、芦屋が手を滑らせて口を結ぼうとしていたゴミ袋の口が破れ、真奥は額

「やだよ! ソフトとセットで五千円したんだから!」

に手を当てて俯いた。 一て、二人は引っ越してきた奴に会ったの?」

役立たず漆原の間いかけに真爽は肩をすくめた。

まぎ会ったというが、なんというか」

先ほど階段から転がり落ちてきた少女は、その場では声をかけても揺すっても、頬を叩いて

も目を覚まさなかった。 仕方ないので抱えたまま、引っ越してきたと思われる二階に上がると、隣室の二〇二号室の

扉が、ドアストッパーで開きっぱなしになっている。

ール箱の他に、値の張りそうな桐の衣装簞笥や、この季節に火鉢らしきものまで置いてあった。 格好だけでなく、ライフスタイルまで和風を貰いている人なのだろうか。 灯りに照らされた、魔王城と寸分違わぬ構造の六畳間には、所狭しと真新しい無地のダンボ

て、部屋の真ん中に少女を下ろして横たえた。 真奥と芦屋は一瞬 顔を見合わせて、風変わりな一人暮らしの女性の部屋に侵入する。そしまま、きを、ここだ

気絶しっぱなしなら救急車を呼ばう、と決めて部屋を辞した 「若い女の引っ越しってのは荷物多いのな。部屋中ダンボールだらけだったぜ」 用心のためにドアストッパーは外したが、当然外から施錠はできなかった。 目を覚ます気配は無いが息はしているので、真実と芦屋はしばらくしたら様子を見に来て、

「隣だから見つかるなとは言わないが、用心のためにも必要以上に関わるなよ」 若い女かあ。こんなとこに引っ越してくるなんて、物好きだね」 戸屋に強烈な拳骨をお見舞いされて派目になりながらも豚丼だけは食べ終わった漆 原は、

だからそういうものを捨てるときは一度きちんと水で渡して洗えと言ってるだろう! 収集 食べ終わった紙容器を、ゴミの袋に放り込もうとして

日まで汚れたまま置いておくと臭うと何度言えば分かる!」 また芦屋に怒られた。

ゴミと燃えないゴミを分別せずにいっしょくたにしてまた声屋が怒るのだが、今度は漆原は剛 **りるさそうな顔をしながらも渋々従って弁当箱を洗う漆原。結局捨てる段になって、燃える** 

いていない。それどころか、 マイベースにそんなことを言い出す。

「ああもう、そんなことよりさ、お風呂行こうよお風呂! もう表暗くなってるし!」

\*ヴィラ・ローザ笹塚。には風呂が無い。それ故の格安家賃でもあるのだが、高温多湿の日本 「まったく……ちょっと待て、歯を磨いてから行くから。あと、回数券出しておいてくれ」 芦屋が呆れながら、漆原にそう指示して自分の歯ブラシを取ろうとする。と、 外出禁止の漆原も、夜に帽子と長い髪で顔を隠して、真奥と声歴と常に一緒に行動するとい

う条件で近所の銭湯にだけは出かけているのだ の夏に入浴できないのは、清潔とか不潔とか以前に、健康問題に関わってくる。

二人の悪魔は顔を見合わせた。

噂をすれば影が差すというやつだろうか。とりあえず気絶からは回復したのだと安心すると 4性の声だ。全員揃って玄関のドアを見る。すると今度は、キンコンと一回呼び鈴が鳴った。

同時に、近所付き合いをしたことがない真奥は思わず緊張してしまう。 ど、どうする? うろたえる真奥。だが部下二人は冷酷だった。

家主は魔王様ですから」

表札は真奥の名前だろ。さっさと出ろよ」

「は、はーい、ただいま」 よく分からない緊張とともに、真奥はドアを開いた。そこには、 真奥は二人の配下を睨みつけると、息を整えて外の訪問者に返事する。 温かい励ましてある

夜分失礼する。私は、今日隣の部屋に越してきた、鎌月鈴乃と言う』 と、丁寧に挨拶をする、大きなダンポール箱が立っていた。

。うどん【業務用】。 と書いてあった

えっと

出会いしなに失礼をした上、お手数をかけたようでかたじけない」 先ほどは 冉ぴうどんのダンボール箱が口を開いた。

真奥も仕方なく、業務用のうどんに向かって一礼。 か、かたじけ? あ、いや、大したことじゃ……改めて初めまして。真臭貞夫といいます」

鎌月鈴乃と名乗ったうどんのダンポール箱は、美しい角度で真臭に一礼する。

一えっと……これは」 「ご丁寧に。こちらは引っ越しの挟拶とお礼代わりに、つまらないものだが」 と、ダンポール箱が一歩前に出てきた。いや、差し出された。

「引っ越しの挨拶には、難類が最適と聞き及んだ」

内容的にも量的にも質的にも最適なところはどこにも見当たらないが、これが全てうどんな

のだとしたら、魔王城はかつてない食糧飽和状態になるだろう。 「あ、ああ、これはわざわざどうも」

具奏は戸惑い声で礼を述べてから箱を受け取ったが、

者と顔を合わせる ているのだ。その重量は何十キロにもなっているはずだ。 驚きながらもなんとかこらえた真奏は、ダンボールをそろそろと足下に置くと、改めて訪問 よく考えれば、魔王城の玄関の間ロ一杯に広がるサイズのダンボール一杯にうどんが詰まっ その重量に、危うく箱を取り落としそうになった。

けることもあるかもしれないが、よしなに近所付き合いを願いたい」 味ながら上等な生地を使ったと思われる浴衣姿の下駄履きでそこに立っていた。 「辺鄙な田舎の旧家から出てきたばかり故に、慣れない都会暮らしで先ほどのように迷惑をか 「口にあえば幸いだ。どうか、お納め願いたい」 真典の腕の中目がけてダイナミックなダイブを敢行した小柄な少女が、先ほどとは違い、地\*\*\*

曖昧な返事をして合わせるように頭を下げる真典。 あ、はい、その、こちらこそ」 なんともちぐはぐな印象を受ける少女だ。 深く頭を垂れて美しい角度のお辞儀をする、鎌月鈴乃と名乗る小柄な少女。

ている。無理な力を入れずに背筋はすっと伸び、なかなかに隙の無い立ち姿だ。 すっと通った鼻梁に大きな瞳。白い肌と長い艶やかな髪が紺色の浴衣と山吹色の帯と調和し 凛とした、強い意志を感じさせる表情も、その立ち姿にある種の威廉を添えている。

てこうして言葉を交わすとその印象は強くなる。

階段から落ちた後のあの一声で、変わった人物なのだろうということは想像できたが、改め

単純な外見だけなら中学生でも余裕で通用するが、あまりにも和装の着こなしと立ち居振る

たのではないかと疑いたくなる。 いが堂に入りすぎており、言葉遣いと相まって、故郷から態塚までタイムマシンに乗ってき



た、朱色の簪が上品に光っていた。 一礼した髪には、詳しくない真臭にも上等な拵えと分かる、四枚の花弁を持つ花をあしらっ

ほんの数秒だが、真奏はたじろいだ。 顔を上げると、鈴乃はその、刃すら思わせる意志の強い瞳で真臭の顔をじっと見上げてくる。かに一線を画す、『和服を常用している女性』の姿がそこにあった。 「あなたが……真奏貞夫」 夏も本番に入って街中に華やかでお洒落な浴衣姿の女性が増えてきているが、それとは明ら

え? あ、そ、そうだけど」 

の方に寄ってくる。 「初めまして、鎌月という。あなた方の話は何っている」 「あの、私が芦屋です。真奥とはその、古い友人で、ルームシェアをしているのですが……」 真臭は思わず部屋の中を振り返った。すると、中にいた芦屋も驚いたような顔をして、玄関

強化させた なんの話を、誰に聞いた。厳を見合わせる真奥と芦屋を見て、鈴乃は初めて表情をかすかに

き方の手紙に、唯一の入居名である真奥貞夫殿は、ご友人と同居していると書かれていた」 「私はこちらの大家と直接会ったことがない。だが、私に不動産屋を介して届いた大家と思し わずかに層間に皺が寄り、困惑しているようだ。

豚すれば力になってもらえると」 一こちらに住まっている方は、とても良い人だと書いてあった。何か困ったことがあれば、相 意味で「懐」から物を取り出す人を初めて見た。 それに真奥はヴィラ・ローザ笹塚の管理人業務を請け負ったつもりはないし、大体新しい入 魔王や悪魔に対する評価としては甚だ遺憾である。 鈴乃はそう言うと懐から、真奥達にも見覚えのある豪奢な封筒を取り出す。真奥は、本当の

居者にそんなことを言い出す志波は、大家としての自覚に欠けているのではないだろうか。

当にその写真に写っている存在が人間かどうか疑わしいと思ったら、それは大家だ!」 「ああ、それに、写真が同封されていたのだが、この人が本当に大家……」 何をそんなに慌てている? 沈みかけの浮き輪に色つきの眼鏡をかけた水着姿の……」 いや、いいから! 出さないでいいから! 見なくても分かる! それは大家だ! 君が本 解説しなくて結構です! 真臭は思わず全力で止めに入る。鈴乃は真臭の慌てぶりに少しだけ目を見開いた 突然思い出したように封備から何かを取り出そうとする鈴乃を、

5あるが、それを解決したところで誰も得はしないので、真奥は、記憶の奥底から浮かび上が 衝撃が和らいだりするのだろうか。いや、そもそもあの大家が本当に女性なのか、という疑問 芦屋など、思わず部屋の中に逃げ帰ってしまう始末だ。 鈴乃が渋々と言った様子で懐に封筒を戻すのを見て、一息つく真奥。同じ女性だと、やはります。

る『大家の水着グラビア事件』を、心のXファイルに厳重に封印した。

つが大抵家にいるから」 俺この近くのマグロナルドで働いてて日中いないこと多いけど、何か困ったことあったらこい 「あー、まあその、とにかく、さっきは怪我がなくてよかったな。それとうどんありがとう。 一瞬のパニックから引き戻された真奥は、早くも鈴乃に大して口調が砕けはじめる。

一あ、ああ……いずれ、その時はよろしく頼む」 「男所幣でむさくるしい場所ではありますが、ご不便なことがあればお聞きください」 すると何故か、表情が硬いので読み取りにくいが、真奥の目には鈴乃は少し驚いたような顔 **芦屋、部屋の奥から紳士的に一礼** 

「あー、でもま、こいつ変に気を回しすぎるとこあるから、大きなお世話だった時には突っぱ 女性の隣人に最初から踏み込みすぎたかと、自己防衛も兼ねた意味でフォローを入れる真奥。

をしてから扉を下げたように見えた。

と思われた。 漆 原は人の言うことを聞かないし、下手に探られるよりはこちらから手札を見せた方がいい なら言葉遣いかという気もしてくる真奥 雨をよろしく難いたい」 一まだどなたか?」 「あ、いや、思いがけない言葉だったが、頼れる隣人というのは心強い。何卒、長屋生活の指 ああいや…… 真奥と芦屋は顔を見合わせる。隣人に同居人を隠し立てしても逆に怪しまれるだろう。特に いや、サイズ違いの靴がもう一つあるので、もし来客中だったのなら、申し訳ない」 ż? だがそんなこちらの思いに関わらず、また一礼した鈴乃は、真奥達の足下を見て小さく息を 何が思いがけなかったのかは知らないが、とうとう『長屋』ときたものだ。最初に指南する 昨今、男が半端に親切心を出そうとすると、ロクなことにならないのだ。

好きで引き篭ってんじゃないっつーの! 漆原でーす、よろしくー」 「その、最近もう一人同居人が増えたんだ。でも極度の引き篭りだから、気にしないで」 中から叫ぶ漆原。人前には出ない方がいい、という自分の状況を本当に分かっているのか。

階段から盛大に飛び出したときでさえ、表情を乱さなかったのに、たった一人のニートの存 「なるほど……よろしく」 鈴乃の目が、今度こそ動揺したように泳いだ。

54

「それでは、あまり長く居座っても失礼かと思うので、今日はこれにて。今後ともよしなに」 在が一体なんだというのだろう。 屏の閉まるのを確認してから、芦屋が腕を組んで首を傾げる。 そう言うと鈴乃は謎を返し、下駄の音をカラコロと立てながら隣の部屋に戻っていった。 だがそれも一瞬で、姿の見えない漆原に小さくお辞儀をする。 男三人で一部屋に住んでいるということがそんなにおかしいだろうか。

飛び込んできた」 調子のいいことを言って足下に置いたうどんの箱を腰溜めに持ち上げる真奥。

| 変人って意味では人のこと言えるかって。でも、近所付き合いっていいな。いきなり食糧が

「何やら、変わった方ですね」

持ち上げて、小さく呟いたのだった。

とりあえず部屋の角に寄せた三つの巨大なダンボール。間取りや家具の配置の都合上そこし そのダンポールは、部屋の一角を占領し、生活エリアをかなりの存在感で圧迫していた。

**産送物は「食品」とあった。** りついた前髪を払いながら、受け取り荷伝票を見る。 ってきてこの有様である。 っ先にシャワーを浴びるつもりでいたのだが、狙い済ましたようなタイミングで佐助急便がや ルのスタイルのまま、遊佐恵美は額に手を当てて悩みながら唸っていた。本当は帰宅したら直 か置く場所が無いのだが、おかげでクローゼットの扉が片偏しか開かなくなってしまった。 送り主の欄には、ミミズが這い回ったような字で『エメラダ』とカタカナで書かれており、 とりあえず辟易するような暑さをなんとかするためにエアコンをつけて、恵美は汗で額に張 週明け、うだるような湿った暑さが街を獲った月曜日。仕事から帰宅したオフィスカジュア テーブルの前で途方に暮れつつ、彼女は意を決して電話を手に取り番号を呼び出す。

·····・はいり、こちらエメラダ・エトゥーヴァですり 七回のコールの後、緊張した様子で出た相手は、普段よりは硬い口調で返事を寄越した。

一あなたの名前で荷物が届いてるんだけど……なんなのこれ」 慣れろという方が無理なのだ。何せ電話の相手であるエメラダ・エトゥーヴァと名乗った女性 『はい〜、やっぱ何回やっても緊張しますね〜』 「分かってるわよ。私、恵美……じゃない、エミリアよ」 三つのダンボールは一つ一つが異常に重く、佐助怠便の配達員が恵美の細腕に気を遣って、 恵美は苦笑して言った。勿論本気ではない。どだい電話の向こうの相手に、。電信通話。に 「もうそろそろ慣れてもいい頃じゃない?」 「私は日本に長く暮らしてるわけじゃありませんから~」 恵美は目の前のダンボールタワーを見上げた。 日本にはいないのだ。いや、もっと言えば、地球にもいないのだ。

部屋の奥に運び込んでくれたのだ。 |届け先伝票には食品って書いてあったけど……| 『ああ〜、届きましたか〜、凄いですね〜、遠いですね〜! 出したの昨日なのに〜』 せいは……えて」 恵美はテープルをがたっと鳴らして立ち上がる。 それは〜、日本で保存しても違和感の無い形に加工整形した聖法気です〜』 驚異的な速度で処理される日本の流通インフラは、初めて接する人間には驚きだろう。

なってるものにしました~。日本でも~それを飲むと力が沸いてくるって有名らしくて~』 『オコメ……? ああ、日本の主食穀物ですね~。違います~。管理しやすくて~、小分けに 「で、でも食品ってどういうこと? 物凄く重いみたいだけど、お米か何かなの?」

飲むと力が?」

和の中身は 50a..... 首を傾げながら一番上のダンボールの封を破る。ガムテープを適当に脇に放り出して開いた

が十本一セットで詰まっていた。 桐されている。その中の一つを開けてみると、果たして子想通り、金属キャップの茶色の小紙 『違いますよ〜、BじゃなくてAです〜。賦作品ですから〜、Aタイプってことで〜』 ……どうでもいいけど……これはつまり、飲めば聖法気が補充できるってことなのね」 ホーリーピタンBって・・・・・」 ポール紙の小さな箱が大量に詰め込まれており、箱の表面には、日本の製薬会社の名前が印

「そういうことですね」。ところでエミリアー」 電話の相手は、わざと探りをいれるように恵美に尋ねた。

「最近、魔王とはどんな感じなんですか~?」

.....

恵美は少し考えて言う。

「今までと変わらないわ。顔合わせれば基本的にケンカするし、お互い仕事が忙しくて、なか

なかプライベートまでは気が回らなくて」

『エミリア〜、自分が何言ってるか分かってますか〜?』 わずかに、エメラダが透光する気配

「それって〜、仕事が忙しくてすれ違いの多い恋人同士のグチですよ〜**」** まったく自然に尋ね返す恵美。エメラダは言いにくそうに言葉を選ぶ

エメラダのその言葉に、恵美はわずかに自分の直前のセリフを反製し、 いや、あまり選んでいない。直球ど真ん中なのにピーンポールだ。

「だっ……なっ……ばっ」

んだから! あいつの生活全部見張るわけにはいかないって以上のことはなくて、もうっ!」 も私も日本で暮らす以上日本の法律に従って、日本のお金を日本の仕事で締がなきゃいけない 一何を言い出すのエメ! そ、そんなんじゃないことくらい分かってるでしょ! あ、あいつ と、一人電話口で暴れはじめる。

一分かってます分がってます~

「からかわないでよね! 私はエンテ・イスラの勇者であって、あいつは魔王よ! どんな状 からからと笑うエメラダの声。恵美は憤然として鼻息荒くまくしたてた。

沢であれ、あいつは私の敵よ! こっ、こっ、恋人とか、もう考えるだけで忌々しい!」 王軍を駆逐し、世界に平和をもたらした勇者エミリア・ユスティーナなのだ。 そう、遊佐恵美と名乗る彼女こそ、聖十 宇大陸エンテ・イスラに於いて魔王サタン率いる。\*\*\*\*

日本人の遊佐恵美として、新宿にある携帯電話会社ドコデモ系列のテレアポ契約社員として輸 魔王サタンが真美貞夫として、幡ヶ谷のマグロナルドで働いているように、エミリアもまた。

ヒ日本に迷い込んだエミリアを追って、二ヶ月前のルシフェルとの戦いに駆けつけてくれた、 そして電話の相手のエメラダ・エトゥーヴァはエミリアの旅の仲間である。魔王討伐のため

エンテ・イスラ西大陸最大版図を誇る神聖セント・アイレ帝国の宮廷法術。士だ。 ルシフェルとの戦いの後、恵美は真真と違い、エンテ・イスラに帰還したエメラダ達からサ

理解しやすい触、媒である。携帯電話。をエメラダとアルパートに渡し、より精密な情報伝達 さらに、定期的な連絡に用いる概念送受の行き違いを防ぐために、通信機器として感覚的にポートを受けられる、というアドバンテージを手に入れた。

「まったく……でも、ここ最近はちょっと監視がおろそかになってたから、明日にでもこの歌 が可能になった。

に請求すればいいのかしら!」 法気の類を試すつもりで様子を見に行ってくるわ。あいつらのために使った交通費、一体どこ かつて真臭と一緒に交番に補導されて、男女の関係と勘違いされた心の古傷が痛んだ忠美。

腹立ち紛れにそんなことを行う。

『なんだかよく分かりませんけど~、でも、安心しました~』 するとエメラダは、急に口調を変えてそんなことを言い出した。

『お願いですから~、私とエミリアが敵対するようなことだけはしないでくださいね~』 「エミリアー、お願いですからー」 -エメ?\_ エメラダは、もともとのんびりした喋り方なところをさらに一言一言強調するように言った。

なら安心ですり 「心するわ。大丈夫、私は勇者よ。父と母の名にかけて、間違ったことはしないと誓うわ」 エメラダの声は柔らかかった。だからこそ、その言葉に込められた意味は重い。

『・恵美』のことも~、日本のことも~、『真梨』のことも~、全部知ってる私のお願いです~』

恵美は息を吞んだ。完全に、腹を突かれた。

魔王軍と人間との戦いの戦火に消えた、父ノルド。そして、

『お会いしたエミリアのお母さん、凄くいい人でしたよー』 天使がいい人っていうのも、当たり前すぎてなんだかね」

に生まれた、「半天使」の血である。 - 最近そっちはどう? - 魔王がいるこっちが平和そのものっていうのもおかしいけど、その後 母、大天使ライラ。エミリア・ユスティーナを勇者たらしめている力。それは人と天使の間

一部だけで主導していたことですしー、エミリアにしろ私達にしろ、建前上は世界を敕った英 『元々エミリアを魔王もろとも葬っちゃおうっていう計画は~、大法神 教 会の上の方のごく 収会とか諸王国軍に何か変化はあるの?」 そうですねぇ」 電話の向こうで、沢山の紙をガサガサと動かす音が聞こえる。

「表立っては、ね」 雄ですから〜、どこの国も表立っては耐客を派遣しようって動きはありません〜」 恵美は、エメラダの微妙な言い回しを聞き逃さない。

**『はいーそういうことですー』** 

エメラダが苦笑する気配が伝わってきた。

州公あたりにきなくさい動きは随分あります!」 『主要国は動いていなくても~、教会と繋がりの深い有力貴族や、教会に取り入りたい小国や

「そこまで偉い人たちに恨みを買うようなことしたかなあ」

が動いてるなんで話もありますけど~、このあたりは噂の域を出ませんね~』 『暗殺者ギルドに依頼が出たとか~、裏の賃金稼ぎとか~、あとは教会の訂教 審議会なんか 『保身しか頭に無い権力者に理屈は通じませんから~』 さらっと毒を吐いて、エメラダは続ける。

「あー、すいませんー、異端審問会のことですー。最近名称変えたみたいでー」 一ていきょう……何?」 聞きなれない言葉に恵美は首を傾げると、エメラダが何かに気づいたように言い直した。

に今さら異端もなにもないし、なんでそんな噂が?」 『オルバが帰ってきていないからじゃないですか~』 「ええ? 異端書間会って……それってどう考えても、人間の私がターゲットじゃない。魔王

交・宣教部を管掌していたからだ。 ある六人の大神官は、それぞれが教会で直 特に管理する部署を持っている。 『六人の大神官』は代法神(教)会の最高意思決定機関の名称でもあり、その名の通り構成員でオルバ・メイヤーは、大法神教会の最高位聖職者『六人の代神官』の一人であった。 オルバがエンテ・イスラ全土を旅するエミリアの旅に同行することになったのも、彼が外

オルバは宣教師として異国へ渡った経験が豊富だった。

者であるオルバが、魔王討伐の旅の同行者には最適な人材だった。 世界への見識が無かったことなどから、教会の支配力が弱い異国の知識が豊富で、有能な聖職 - ミリアの旅は、大法神教会の力が最も強い西大陸から始まった。勇者たるエミリアに外の

に製づく人がいるかもしれません~。いずれにしろ~油断はしないでくださいね~? 中には い数の人々が異端者として処刑されているため、どうしても暗いイメージがつきまとう。 『宣教部がオルバ行方不明の真相を探ろうとしてるらしくて~、もしかしたらエミリアのこと

の発展を助けたりと、基本的には地味で目立たない職務が多い。

一方では教会組織内での公安警察のような側面もあり、異嬌審問会の審判で、年間少なくな 異端審問会は、宣教部の中でも特殊な組織である。宣教部に先駆けて布教先を調査したり、

修行中に放落しがちな若い聖職者達の綱紀を粛 正したり、教会内の神学者とともに教会知識

功を焦って日本に迷惑をかけるような連中がいるかもしれませんから~』 心するわ。エメやアルは大丈夫なの?」

らありませんり 前回かなり無茶したせいで思いっきり監視されてますけど~、私達にはそれ以上のことは何

どんな状況でも勇者一行はラクできないわね」 エメラダもアルバートも、生半可な暗殺者にやられてしまうようなヤワな人間ではない。彼 そうですね~」

『万が一お金かかってて~、恵美が電話代で貧乏になったら気の毒ですし~』 『それじゃ~、あんまり長い間適話してると通話料嵩みますから~、そろそろ切りますね~』 お気遣いどうも。とにかく聖法気ありがとね。アルバートにもよろしく 基本通話料以外のお金かかるのかしら。通話自体は概念送受で、電話機は媒介なだけなのに」

らが大丈夫というなら、恵美はそれを全面的に信じるのみだ。

『ごめんなさい忘れてました~。ホーリーピタン8の服用量には気をつけてくださいね~』 服用量? 摂取制限とかあるの?」 そう言って通話を切ろうとした恵美だったが、突然エメラダは慌てたように声を上げた。

と記載されていた。 小瓶を手の中でまわすと、普通の栄養ドリンクのピンなら成分表に当たる場所に『聖法気』

**『はい~、何せこっちでは息を吸うように回復できる聖法気を~、外部から意図的に摂取でき** 

る形にするなんて前代未聞ですから~』 『そういう意味でもB版なんです~。一応こちらで人体実験しましたけど~、一日最大二本が 

本飲んだりしちゃだめですよ~』

│……色々と言いたいことはあるけど、とりあえす了解したわ」

『はい〜、用法用量を守って正しくお使いください〜。それじゃ〜』 **儀れないカタカナで書かれたエメラダ直筆伝票。佐助急便で送られてきたダンボールの荷物** 今度こそ、エメラダは通話を切った。電話をコタツに置くと、恵美は首を傾げる。

ほんの数時間しか滞在していないはずの日本文化や風俗に妙に馴染んでいる言葉の数々。 一あの子……一体どこにいるの?」

ものは試しよね」 首を傾げながら、手の中の小瓶をためつすがめつして、

まんまドリンク剤ね……本当に効果あるのかしら」 が漂いはじめた。 恐る恐る舐めてみると、 金属キャップを捻って封を切る。すると、明らかに天然のものではない、甘い薬品の台

エメラダのことを信用していないわけではないが、パッケージといい匂い これまたありきたりな、妙に舌に残る甘さの、後を引く薬臭い味わ

売り楽局に売っている正体不明の栄養ドリンクと大差ない。 や味といい、

ゆっくり時間をかけて一紙を飲み干す。焼けつく喉越し、漂う黄色いビタミン臭で、

力は出

タウリンばっかり多ければいいというものでもないのだ

そうだが常用すると健康には良くないイメージがぶんぷんする。

こちているのを目に留めた ビンをキッチンのゴミ箱に捨てようとして、ふと視界の端で何かがぐしゃぐしゃになって落っ 

ピ情報誌の表紙に貼りついていたのだ。 |ああああああああああああ!|

先ほどダンボールを開封した際に放り出したガムテープが、テレビの脇に置いてあったテレ

1

恵美は悲痛な呼び声を上げて雑誌に駆け寄る。

表紙グラピアを引き裂いた。 「せっかく水戸の副将軍様が表紙だったのに……」 試みにガムテープをゆっくりはがそうとするが、粘着 材は無残にひっついて、べりべりと 右手の雑誌、左手のガムテープを束の間交互に見て大きく溜息をついた。その溜息に全ての

左右する。気落ちしたまま敵地に乗り込めば、思わねしっぺ返しを喰らうかもしれない! 一ダメよ! こんなことでへこんでちゃ!」 明日は久し振りに魔王城に乗り込むと、エメラダにも言ったのだ。戦況は精神状態が大きく

気力を持っていかれそうになる。

恵美は奮起すると、雑誌もテープも一緒くたに燃えるゴミ箱に放り込み、

レトルトの『川崎陸軍カレー』とレトルト白米『ゴトウのごはん』を取り出した。 憤然と立ち上がったくせに、どこか憔 悴した足取りでキッチンの流しの下からお気に入り カレーを皿に移してからレンジに入れ、『強』で二分に設定する。

「……でもごはん作る気力ないから、カレーでいいや」

「……私、勇者よね? レンジでチンするカレー作ってても、勇者よね?」 明日、ポロアパート住まいの魔王を訪ねるという子定を思って無性に悲しくなる。 低い唸りを上げながらぐるぐる回るレンジトレーを、出来上がりまでなんとなく眺めてしま

も持って帰ろうかな。雷撃の法術を応用すれば電源もなんとかなりそうだし。ん? ても雷撃 ルト白米の蓋をちょっと開けて、また二分レンジで回す。 「でも、旅の間にレトルトとかレンジとかあったら楽だったろうなあ。向こうにレンジだけで 恵美の詮ない自問自答に、レンジは『ピー』と返事した 折角仕事のついでに返事してくれたレンジを理不尽にも睨みつけてから、恵美は今度はレト

あまり自覚の無い恵美 文明の利器の力を借りて、ものの四分で出来上がったカレーライスの香りに思わず顔が緩む。

最近の理想と現実の間での悩み方が、魔王討伐から徐々にベクトルがずれつつあることに、

法術の電気って交流? 直流?」

「ああ、そう言えばシャンプー切れかけてたっけ。買ってこないとなー」

まだ面白そうな番組やってる時間じゃないかー。あ、今日、水戸副将軍やる日だ!」 食後にシャワーの予定を立てながら、

以前と比べ、独り言が際立って増えたのも、恵美が自覚していない変化の一つだった。 と、壁のカレンダーを見ながら一人頷く。

定期券で乗り降りができるのだが、こう見ると恵美の勤務先であるドコデモが、魔王討伐に必 笹塚と幡ヶ谷が定期の圏内なのが唯一の救いね」 電子音とともに券売機から吐き出された自分のパスモカードを見て、恵美は溜息をつく。 水福町から新宿に通う恵美は、通動に定期券を用いている。なので途中の笹塚や幡ヶ谷ではただから、からず

どうして毎日毎日こう暑いのよ……」 心足取りで駅構内の日除から表に出る。 高架下の駅から出ると、途端に恵美を、早朝にも関わらず尋常でない直射日光が灼く。

笹塚に降りたついでに定期券を更新した恵美。領収書をきちんと発行して財布にしまうと、

要な経費を賄っていることになる。

とにかく毎日が暑いのだ。 エメラダに宣言した魔王一派への偵察の熱意は、それ以上の熱に焼き尽くされる寸前だった。

王軍南大陸攻略軍司令官マラコーダを倒すために、南大陸の砂漠気候帯を徒歩で旅した時

何ほどのことはないはずだが、だからといって暑いものは暑い。 に比べれば、道中で飲み物が百二十円で買えて、喫茶店にでも寄れば冷房に当たれるのだから 恵美はショルダーバッグから花柄の晴雨兼用折りたたみ傘を出すと、ハンカチで顔を拭きな

がら魔王城への道へと踏み出した。

まうくらい観察して力尽きた。二日目は魔王城に来たものの、極めて静かな生活音だけが延々 兄張ることにして、今日で四日目。この炎天下に報われない仕事を延々続けるのはなかなかの 初日は幡ヶ谷駅前の真奥の動め先を、向かいの書店で立ち読み可能な雑誌を全て読破してし エメラダから聖法気補充ドリンク "ホーリービタンタ" が届けられてから毎日魔王の身辺を

は、仕事が押して来られなかった 茶パックと三角コーナー用水きり袋を購入するのを見ただけでなんの異常も無かった。三日目 聞こえる他は、どこか疲れた様子の声屋が駅前スーパーで、ネギとダシつゆとインスタント麦 |完全に……これじゃストーカーよね……]

に通っているのではないだろうか。 なんの用も無いのに毎日毎日相手の生活や職場を見張るとなると確かにストーカーだ。 一日、仕事の都合で来なかった日を除けば、二ヶ月前に魔王を発見して以来一番熱心に笹塚

を選んだのだが、熱波に奪われる体力がものの見事に計算違いを物語っていた。 「ううん、ものは考えようよ! あの魔王一派が毎日普通に働いて食事して寝てるだけなんて、 そして四日目の今日、一切収獲の無いまま週末を迎えている。 金曜日は仕事が押すことが多く、仕事帰りのヘトヘトな状態で来るよりは、と考え朝の偵察

「……でも考えようによっては、やっぱり平和に暮らしてる男所帯につき纏うストーカーよね」 平和でいいじゃない!」 と、すぐに思考がネガティブな方向に陥る。 世塚の住宅街を縦断する用水路沿いの道を歩きながら恵美は、そう自分を鼓舞するが、

魔王城の入っているアパートが見えてきたら、恵美はとりあえずショルダーバッグの中にあ

|今日は確認だけしたらさっさと帰ろ……。時間早いから、どうせまだ魔王は寝てるだろうし 到着前からやる気の無さを露呈した恵美は、見咎められないように傘を畳んでショルダーバ さらに言えば、必要になった時の効果がもっと疑問だ。 今のところこれが必要になったことはないし、必要になることがあるのかどうか甚だ疑問だ。

るホーリービタン8の小瓶を確認する。

門のすぐ内側で二〇一号室の様子を窺う。 ッグにしまい、ヴィラ・ローザ笹塚の古いプロック塀で囲われた敷地内にこっそり侵入すると、 魔王城にはエアコンが無いので、常に窓が開け放たれているため、中の会話が丸間こえなの

だ。もちろん彼らは日常大声を張り上げているわけではないのでほとんど内容は分からない。

何かの無駄遣いを説教しているのが聞こえてきたことがあるが、要するにそれくらい間近て見 「今日は洗濯したのね。随分雑な干し方だけど」 いっていても得るものは無かったのだ。 窓枠からはみ出している洗濯物とタオルケットは、シワシワのまま無造作に引っかけられて 一度だけ、悪魔大元帥アルシエルの人間型である芦屋がルシフェルの人間型である漆原に、

「……やっぱり何も無いか……ちょっと早いけど、会社行こうかな」 そう呟いて、さっさと帰ろうとした時だった。

無くなった頃

いる。そんなことをぼんやりと思いながら時間だけがじりじりと経過し、持ってきた水が全て

!? まったく、洗濯物一つ満足に干せないのか。本当に半歳殿は家事を知らないのだな」

突然聞こえてきた声に意識は硬直したが、体が自然に安全地帯に寄り添って、気配を探る。 恵美は素早くアパートの外壁に張りついて身を隠した自分を褒めてやりたくなった。

「皺のまま干したら型崩れするだろう。乾きにもムラが出る。そういう知識もきちんと持て」 恵美はハンドミラーを取り出して、壁の角から鏡だけを出して二階の様子を窺った。

何? どういうこと……?」

「そら、やりなおし。この夏がけもだ。きちんと広げて左右の端を洗濯パサミで止めろ。落ち 今まで見たことのない女の子が魔王城の洗濯物の皺を一枚一枚伸ばしているではないか。

一はいはい、すいませんねー」 たら洗いなおしだろう」

渋々従う若い男の声は、漆原のものだ。

一……どうせ、一階は誰も住んでないんだもんね」 ぶった少女が、魔王城の中にいた 見間違いでも幻覚でもない。ハンドミラー越しではよく見えなかったが、確かに三角巾をか 恵美はゆっくりと壁伝いに進み、誰も窓から下を見ていないことを確かめてから二〇一号室

半蔵殿がものぐさすぎるのだ。家に篭っているなら家事手伝いくらいはすればいいものを」 あーもう、本当に芦屋がもう一人増えたみたいだ」 のすぐ下にある立ち木の下に隠れる。これなら下を見られても見つかることはない。

|まった……も……||ってや……」

ぐに聞こえなくなり、あまつさえ、 るのか、いまいち聞き取ることができない。 恵美はなんとか聞き取ろうと意識を集中するが、少女と漆原の声もトーンダウンしたのかす

先ほどの少女と漆原が会話する声に混じり、芦屋らしき声も聞こえるが、窓とは反対側にい

ち木に、嫌がらせのように様々な種類の蝉が集結して、この一夏に賭けた生き様を主張する ちょ……こんな時に、し、静かにしてよっ!」 ジージーカナカナミンミンジャワー、ツクツクホーウシスーイッチョンと、一本しかない立 恵美の隠れた立ち木の住人、無数の蟬が早朝にも関わらずけたたましく鳴きはじめたのだ。

全身全態の大合唱。 あまつさえ頭の上に何か軽いものが落下してきて、思わず手をやると、干からびた蝶の抜け

概だった。

一……完全にパカにしてるわね。何か違うのも混じってるし」 思美は迷惑そうな顔で文句を言って肌に引っかかる抜け般を捨てるが、いかにあらゆる言語

を解するエンテ・イスラの勇者といえど、蜱とまで意思疎通はできない。 全く鳴きやむ気配の無い蝉を黙らせるのは諦め、恵美はどうするか考える。

先ほどの少女が、もしかしたら恵美の知らない新たな魔界の悪魔かもしれないのだ。 この四日間で初めての大きな変化。この詳細を摑まないまま帰ってしまうわけにはいかない。

分かるが、いずれにしろ捨て置けないと考えた悲美。 洗濯物がどうこう言っているあたり、今すぐ周囲の害になるような存在ではないことだけは

「ちょっと危険だけど、仕方ないわね」 そして、そろりそろりと音を立てないようにゆっくり階段を上がってゆく。出動前なので靴 意を決して窓の下から離れて、表の共用階段の前まで移動する。

はパンプス。以前のように不様に転落しないよう、手すりに摑まることは忘れない。

息を殺して階段を上がりきるころには汗びっしょりになっていた 共用廊下に面する台所の窓も、風通しのためだろう、案の定開いていた。

一うえし、この暑いのにいちいちうどん茹でるのー」 生卵でもあれば完璧」 うどんを茹でればすぐに食事は整う。茹で上がったら冷水でさっと〆れば立派な冷やしうどん。 「よろしいか、万能葱を刻んで生姜をすりおろし、つゆを冷水で希釈する。これだけであとは 「いいか、こんな時くらい、半蔵殿がきちんとしなくてどうする」 先ほどの少女の声だ。恵美は格子のはまった窓の下で身を屈めて中を窺う。

どうやら漆原は、先ほどの少女に、洗濯物の件に引き続き説教されているらしい。 四郎殿は毎日毎食これをしているのだ。少しは孝行しようと思わないのか」

の声にやや元気が無いのが気になるが……。 「今日は私がやるから、きちんと見て、明日から四郎殿に叱られぬよう精 逝しろ。そら、生 ようやくここで芦屋の声が聞こえる。カマヅキさん、というのは少女の名前だろうか。芦屋

姜をすりおろせ。おろし金くらいは使えるだろう」 「はーい……あれ? 声麗、もしかして生姜、使い切った?」

**常蔵庫を開ける音がして、それから漆原の質問が飛ぶ。すると声屋があの力の無い声で、** 

彼女と魔王城の住人が一体どこで知り合ったのかという疑問が湧いてくる。 に生姜もあったはずだからそれを取ってこようか」 原、冷蔵庫の扉はきちんと閉めろ!] 一ううむ、生姜無しか。だが、それではやはり栄養価が足りないだろう。確か持ってきた野菜 カマツキという名の少女が魔王城の中で料理をしていることだけは分かったが、そうすると 最後だけやたら力強く応える。 「そういえば昨日、終わってしまったな。すいませんがカマヅキさん、今日は葱だけで……漆

「部屋に戻って探してくる。確かまだ結構な量があったはずだ」 が、それを冷静に考えるだけの時間は、恵美には与えられなかった。

のか。恵美は慌てふためくが、周囲には人一人が身を隠せそうな場所などどこにも無い。 なんと少女の声がキッチンから玄関の側に移動しはじめるではないか。まさか外に出てくる

一はいはいはーい」 「半歳殿、私が戻るまで菜ばして麵同士がひっつかねよう、ゆっくりほぐしていろ」

その焦りが恵美の足下をお留守にした。 玄関の扉ががたがたと鳴る。出てくる! | 少女が戻る『部屋』がどこかなど考えている余裕

「返事は一回! では、すぐに戻る」

B 7 .....

さらと輝いている。 気がつけば、恵美は階段で足を滑らせ空中にいた。朝の青空が、蟬の鳴き声をBGMにきら

金のポケットティッシュ、ペンケースとなぜかそれだけ外にあったリップクリームなど、ショ ミラー、ハンカチ、メモ帳、ホーリービタンBの小猴、『楊校ケース、出勤時にもらったサラ、視界の嫡で携帯電話、財布、パスケース、畳んだ傘、読みかけの文庫、化粧ポーチ、ハンド

ルダーバッグに入っているもの全てが豪快に空中に撒き散らされ、

いやあああああああま!

スリップしたのか自分でも分からないが、下手な落ち方をしては今度は大怪我をするかもしれ 一瞬でそれだけの状況を認識した後、恵美自身も盛大に落下を開始する。どれだけの勢いで

ない。受身すら取れずに衝撃を覚悟した恵美だが、

上に乗っていた。そして自分はと言うと、 という聞き覚えのある男の呻き声がすぐそばでした。「いていていてでてててて」 が落ちる音と、 ま、魔王つ!!」 |おおおお下ろせ! 下ろしなさい! ちょ、な、なんてことをっ!」 周囲には恵美の靴がら飛び散った小物類が散乱しており、ポケットティッシュは真奥の頭の ったく助けて損した。お前じゃおすそ分けも期待できねぇしな」 ……お前は前かに階段を上り降りてきねぇのか」 思わず目を眠ってしまったが、想像したような痛みもなく、代わりにパラパラと色々なもの 鈍く柔らかい衝撃とともに、唐突に落下が止まった。 恵美は叫ぶが、状況が把握できずに思わずきょろきょろと首を回す。 目の前に魔王の、いや、真集貞夫のどこか残念そうな顔があった。 恐る恐る目を開けると、

うおおおった

態だったのだ。

恵美は全身の血が一瞬で沸騰するのを感じた。なんと恵美の体は、真爽に抱き上げられた状

挙句にその結果横抱きにされているのは勇者として耐え難い屈 辱 以外の何ものでもない。 正確には真臭が落下地点で恵美を受け止めたのだろうが、よりにもよって真臭に助けられた 夏の暑さと真奥に醜態を見られた羞恥が最高潮に達し、

「は、は、早く下ろしなさい! ど、どういうつもりでこんなっ!」 恵美は状況も職みず顔を真っ赤にしながら手足をパタつかせはじめる。

は。 真臭が最後まで言い切る前に、恵美のつま先が真臭のこめかみにクリーンヒットした。 お前が勝手に落ちてきたんだろが! って……お、おい暴れるな本当に落とぶげっ」

呻き声とともに真奥の腕の力が緩んで恵美は腕の中から転げ落ちる。

あたりをさする。 階段下の敷石の上に尻餅の模範演技のような落下を果たした恵美。顔をしかめて尾てい骨の きゃあっ!」

|痛たたたた...... 顔をしかめる恵美の傍らで、こめかみを押さえている真美が涙目でこちらを睨んでくる。いたたじゃねぇっ!。恩を仇で返すとはこのことだっ!」

「お前が目を閉じてる間にお前の私物が狙い済ましたかのように全部俺の頭めがけて殺到して 身を庇うように両手でわが身を抱く恵美。真臭は三白眼で喚き散らす。 何が思よ! わ、わ、私が目を閉じてる間に何か変なことしなかったでしょうね!」



きたこと以外は何もねぇよ!!!」 一日頃の行いが悪いからそうなるのよ!」 少なくともお前よりはよっぽど品行方正に生きとるわ!」

「調子に乗んな!」もう一度階段の上から叩き落として俺のありがたみを教えてやろうか!」 「あなたの分際で何を偉そうに! 品行方正って四字熟語に謝りなさい!」

「あなたなんかのありがたみを知るくらいなら、ロープ無しでパンジージャンプした方がずっ

とマシよ! 大体いつも昼近くまで寝てるくせにどうしてこんなところにいるのよ!」 が転がっていた。 見ると真臭は両手に軍手を嵌めており、地面には恵美の私物に混じって古びた箒とちりとり まさか魔王の分際で、アパートの周りの掃除でもしていたのだろうか。

|俺がどこに行こうと俺の勝手だろ!| 体調崩しがちな夏場に、健康のために早起きして何が

「マグロナルドの申し子みたいな生活してるくせに、何が健康のためよ!」

|何してんたよ||人とも……」 勇者と魔王の不毛な言い争いを聞きつけて漆 原が出てきたのは、丁度そんな瞬 聞だった。

ているようで、 「ううん、そんなんじゃないの。私の不注意で足下がお留守になっただけだから」 **|すまないな。私が急に罪を開けたせいで」** 浴衣姿の少女は、恵美に向かってそう頭を下げる。どうやら出会いがしらの事故だと思われ

まったくだ。そのまま月にでも飛んでけばよかったのに」 恵美は慌てて首を横に振った。

そしてキッチンには巨大なダンボールがあり、三角巾と浴衣に割烹着という格好をした少女 まず、芦屋がこころなしやつれた顔でタオルケットをかけて横になっていた。 仏 頂 面でそういいながら冷やしぶっかけうどんをすするのは真爽だ。 城の中には恵美の予想だにしない光景が広がっていた。

ひたしがあり、中々に栄養豊富で豪幸な食卓が展開されていた。 が忙しく料理をこなしていた。 「遊佐、外に散らばってたものあらかた回収したけど」 恵美が盗み聞いた冷やしうどん以外にも、みょうがと紫蘇を刻んで載せた冷奴に小松楽のお

一ああ、ご苦労様、そこに置いといて」 漆原に回収された、というのが気がかりだが、鈴乃の手前あまり敵愾心むき出しにするのも

おかしいので、素直に礼を言って受け取ろうとするが、

「大体なんだよこれ! この夏場に栄養ドリンクとか飲んでるの?」 「その超上からの物言い、ムカつくなぁ」 やはり本心は隠しきれないようだ。かといって別に言い訳する必要も無いので肩を竦めると、

て小馬鹿にしたように見せつけてきた。 そこは流石に漆 原。恵美に返しかけた鞄の中から勝手にホーリーピタン8の小瓶を取り出し

気が詰まった小瓶など魔王城の住人に見られていいものではない。 「ちょっと、返しなさいよ!」 慌てて漆原の手から奪い返して鞄の深い場所に入れなおすが、背筋を冷や汗が流れた。 小学生のイタズラのような行動を見せる漆原に憤慨するよりも前に恵美は軽く慌てる。聖法

ええ? あなた夏パテしてるの?! そんなの飲んでると、芦屋みたいに夏パテするよ」 相変わらずデリカシーゼロの漆原を睨む恵美だが、

「それがどうした。私にだって具合が悪くなる時くらいある」 魔力を失い人間の姿になっているとはいえ、悪魔が夏パテするとは、恵美やエンテ・イスラ 芦屋は忌々しそうに舌打ちをすると、寝返りを打ってそっぽを向いた。 その言葉に驚き、機たわる声屈を見る。

にとっては驚 愕の新発見だ。

いるのだ の登場人物かと結覚しそうになるが、それくらい鈴乃の発する気配が、凛として俗世離れして て将来的に脅迫の材料にしたいくらい愉快だ。 「ちょっと興味あるんだけど、具体的にどうなってるの?」 整った美しい顔立ちに、和装がしっくりと似合っている。あまりに似合いすぎていて時代劇 恵美は彼女の胸元に思わず目をやる。そして、 そう言った少女に、恵美は顔を向ける。 原因は、私のおすそ分けらしくてな」 三人の悪魔の中で恵美に対する敵愾心が一番強い芦屋なだけに、この姿は動画として記録し 責様を面白がらせるために夏パテになったわけじゃない……」 なんか食欲が無くなって、お腹の関子が悪いみたいだよ」 本当に面白くなさそうに恵美につっかかる芦屋の言葉には覇気が無い。 思美は面白くなさそうに肩を竦めた。 6通で面白くないわね」 保原が面白そうに解説し、

どこか安心したように息を吐いた。同じくらい……かな?」

ような色を浮かべていた。 ここまで完璧な和装美人だが、その部分だけは恵美と大差なかったからだ。 一方の少女は、恵美のそんなどうでもいい煩悩など知る由もなく、硬い表情に苦悶か後悔の

いと思っている」 「ねー、悪いのは献立だよね。手軽で美味いからって毎日毎日この暑いのに冷やしうどんばっ タオルケットの中で、恵美に対してとはまるで違う居住まいで斡乃を削する声展。「あ、いや、カマヅキさんのせいではありません、うどん、大変美味しくいただいてます」 「男性の所帯におすそ分けをするなら、もっと栄養価の高いものを選べばよかった。申し訳な

鎌月鈴乃と申す。遥か遠い地の、時代遅れの旧家出身故に、未だこの地の水に馴染みきれずに 員から白い目で見られる。 かじゃ、そりや夏バテするよ」 思わぬ堅苦しい挟撐と、正座で三つ指という姿に、恵美も咄嗟に居住まいを正してしまう。「あ、は、はあ、どうも、遊佐恵美です。よろしく」 いる。この田舎者に都会生活の指導を賜れれば幸いだ」 「そう言えば申し遅れた。私は先週、隣の二〇二号室にまかり越し仕まうことになった。名を 自分の食い扶持も稼がず手伝いもしないくせにそんなことを言い放つ漆原は、その場の全 と、そこで鈴乃が、思い出したように背筋を伸ばすと、恵美に向かって居住まいを正した

一ても、こう言っちゃ悪いけど、よくこんなアパート選んだわね」

べきことを不動産屋にかなり細かく指導された。 恵美もかつて、今のマンションを借りる時には、都会で女性が一人暮らしをする上で警戒す 恵美は少々の疑問を込めて魔王城の干からびた畳を指差す。

恵美の部屋は五階にあるが、今でもあえて男物の下着などを買って洗濯物と一緒に外に出し

確かにヴィラ・ローザ笹塚は、駅に近く賃料も安いが、客観的に見て若い女性の一人暮らし たりしているくらいだ。オートロック付マンションでさえそれである。

な上に大半の部屋が空き部屋で、唯一の入居者は異世界の悪魔ときている。 には全く向いていない。 管理の難しい和服を常用したり、貧乏所帯に食糧の提供をするくらいだから安い賃料に釣ら 殿堂入りの築年数、風呂無しエアコン無しベランダ無し、ドアは頼りないシリンダー錠前

戒心が無さすぎるにもほどがある。 だがそんな恵美の内心の心配をよそに、 引っ越してきて一週間弱でここまで隣人の男所帯と仲良くなっているというのは、今日び警 れたとは考えにくい。

一雨を凌ぐ屋根と、風を凌ぐ壁、そして寝床があれば他には何も言うことは無い」

館乃は迷いなく言い切った。

「この町で、故郷に錦を飾れるような仕事をしたい」 「贅沢はしようと思わないし、都会に近ければ仕事を見つけるのも容易かと思った。私は」 そこで小さく言葉を切って、恵美を真っ直ぐ見据える鈴乃。

そして寝床から鈴乃を賞賛する声屋。

当の漆原は聞こえないフリをしてパソコンデスクに戻ってしまう。

「とにかく、こうしてこの広い日本で偶然見えたのは縁あってのこと。是非、よしなにお付き

合いを願い、助力を請いたい」

こ、こちらこそ 仕方なく相手に合わせて頭を下げた。 再び恵美にふかぶかと頭を下げる鈴乃。恵美は困ってしまい、

「ふう、ごっそさん。美味かった」 その脇を通って、手早く朝食を平らげた真臭は、食器を流しに運ぶと大きく欠伸をする。

一何よ、バイトしてるのはいつものことでしょ」 「あー、なんかやることや覚えることが多すぎて流石に疲れるわ」

眉を顰めてそう言った恵美を、真奥はなぜか妙ににやついた表情で振り返った。

「ふふん、お前がぼさっと日々を過ごしてる間に、俺は人間として一つ大きく成長したんだせ」

「聞いて驚け恵美! 明後日の日曜から俺は、マグロナルド幟が谷駅前店の午後時間帯店長代誰が人間だ、思わず突っ込みそうになるのをグッと填える恵美。

はいはい、おめでとうおめでとう」 窓から差し込む朝日パッグに腰に手を当ててふんぞり返る真奥。恵美は、心底脱力した。 理になるのだ!」

ぞんざいに領さおざなりに拍手してみせる恵美の態度を見た真典。

ないの? そのまま頑張って働いてれば」 「あなたがそのことを真剣に私に誇ってるのが一番信じられないけどね。でもま、いいんじゃ 「ふん、向上心の無い奴め。まあいい、いずれ俺は、毎度階段から落ちてるお前なんぞが想像 「あ!」お前、信じてないだろ!「時間帯責任者手当もついて、責任ある立場なんだぞ!」 必死な様子で言い夢る真臭を馬鹿にするように手をひらひらさせる恵美。

ける。余裕の表情でそれをかわした真英。ティッシュは真典の向こう側にいた芦屋の頭の上に べっと舌を出してからかう真臭に、恵美は傍らにあったティッシュボックスを無言で投げつ

もつかない高みに上って、悔しがらせてやるからな」

どうやら真剣に具合が悪いようだが、恵美にはどうでもいいことだし、これ以上真典の得意 何か言われるかと思いきや、それを煩そうに傍らにどかしてもぞもぞと姿勢だけ変える声屋。

げな顔を見ていたくもないので視線を逸らすと、

な,何……?」 厳しい表情で正座したまま恵美を見上げる鈴乃と目が合った。

恵美殿は…… 鈴乃はそこまで言ってからふと、恵美をからかって満足したらしく食器を洗いはじめた真実

を横目に見て、それからすっと恵美の耳に口を寄せた。

「恵美殿は、もしや貞夫殿と親密なお付き合いをされているのか」

はああああっ?!

「な、な、何を言い出すのよ?」 向かせる。 いや、二人の会話を聞いていると丁々発止というか、気の置けないやりとりというか……遠 恵美は思わず素っ頓狂な声を上げ、寝込んでいた芦屋やイヤホンをしている漆 原すら振り

一まあ、確かにものは言いようだけどねぇ」 そう言って遠くからにやにやとこちらを眺めてくる漆原を、

慮の無い間柄だと見受けられるので」

一余計なこと言うんじゃないわよ」

確かにお互い、気遣いや遠慮など一切必要ないしそんなことなどしたくもない相手ではある 恵美は一睨みして黙らせる。

「遠應は無いけど、それ以上に信用とか信頼とか友情とか普通の人間同士にあるようなプラス

が、それを親密な関係ととられるのは全く心外だ。

思ってるからそこだけは理解してね、よろしく」 の感情は一つっつ切無いわ。今日仕事帰りに真奥が事故に遭って死ねばいいってわりと本気で

そ、そうか……」 の気配がよく分かる。 わざと聞こえるように言ったので、声壓のこちらを睨みつける視線と、苦笑するような真原

の戦いを知る一人の少女のことを まさかとは思うけど 情を浮かべていた。 そう考えてふと、既に存在する一つの事例に思い当たり恵美は思わず脂を顰める。二ヶ月前 恵美が真奥と親密でないと何を安心することがあるのか。 一方の鈴乃は、当初からのいまいち真意の搋み芋い硬い表情から一転、どこかホッとした表

「あなたも真奥狙いなの?」 今度は恵美が鈴乃の耳に口を寄せる。

意志の強そうな顔を何故か蒼白にして、恵美の腕を引っ張ると有無を言わさず部屋の外へとその映"間の、鈴乃の反応は劇的だった。

連れ出したのだ。 「え? あ、ちょ、ちょっと!」 後ろ手に乱暴にドアを閉めて中の様子を確認すると、どこか焦った様子で恵美を見て押し殺

「き、聞こえたらどうするつもりだ」 した声で言った。

指摘が図星なら、小声とはいえ本人の前でというのはデリカシーに欠けていたかもしれない。 そんな、血の気が引くようなことを言っただろうかと恵美は首を傾げるが、なるほど、もし

表に出すような性格ではないと思っていたが、やはり女性は女性ということか。 「そ、それにしても大したものだな」 を浮かべて、 「ごめんなさい、本当にそうだとは思わなくて」 そう思って同じく小声で、素直に謝る恵美。鈴乃は先ほどまでの硬い表情にかすかに冷や汗 意志の強そうな凛とした、どこか硬い表情が基本スタンスであるらしい彼女だから、感情を

一どうして、分かった?」 自分の胸に手を当てると、呼吸を整えるために大きく深呼吸をした。

にしては恵美に対して礼儀正しすぎる。 そうにもなった。 ばならないと決心する。 「ねぇ鈴乃ちゃん、ちょっと煩わしいと思うかもしれないけど聞いて」 地の少女と同じた。 の様子の鈴乃 そうか……流石だな……」 一どうしてって言われてもね……なんとなくそう思っただけなんだけど……」 だが考えてみれば、刺客なら引っ越してきて一週間もの間何もしないとは思えないし、悪魔 確かにちょっと変わったところはあるものの、こうして恋心を指摘されてうろたえる姿は普 突然魔王城の中枢に現れた少女だから、異世界からの刺客かはたまた新手の悪魔かと疑い それを見た恵美は、少しだけ胸が痛む思いがするものの、やはり言うべきことは言わなけれ 何がどう流石なのかさっぱり分からないが、とにかく恵美の顔を見てうんうんと感心しきり 悪美としては正直にそう言うしかない。だが、鈴乃はそんな適当な答えに納得したらしい。

一あいつに近づくのはやめた方がいい。きっと、あなたは不幸になるわ」

そして普通の少女なら、極力、自分たちの事情には巻き込むべきではない。

----なんた?

それは……どういう 鈴乃は困ったような顔で恵美を見上げる。 真臭を極端に貶めるようなことを言うのは逆効果だと、以前の経験で分かっている恵美。

すると鈴乃は、どこか思いつめたように反論してきた。

「あいつは、普通の人の手に負えるような男じゃないの。できれば近づかないほうがいいわ」

つ……! し、しかし、私はこう見えて色々な修羅場をくぐっている!」

そんな過去を披瀝されても恵美としては困ってしまうが、恵美が何か返すよりも早く

ない何かがあるのだろう」 「……が、そうだな、あなたがそう言うのであれば、自重しよう。きっとあなたにしか分から

「だが、そうは言っても私は今さらここを離れられない。図々しいことは承知だが、何卒、助 いが、出会ってからの僅かな時間で、こんなに信頼を寄せられることをした覚えはないのだが。 と、妙に物分かりのいいことを言い出した。一体自分の何が鈴乃の琴線に触れたかは知らな

恵美としても無辜の少女をエンテ・イスラの事情に期せずして巻き込んでしまった責任は、 今度は美しい角度で立礼する鈴乃

魔王討伐を完遂できていない自分にもあると思ったので、

一ええ、私にできることなら」

「そうか……少し、これで安心できる」 もちろん、真奥との仲を取り持つこと以外で、という条件はあるのだが。 そう笑顔で頷いた。

したのだろう。 東京で最初に親しく交わった同性である恵美に対して緊張を解いてもおかしくはない。

流石の恵美も、真奥達が鈴乃に狼藉を働いたとは思わないが、やはり男所帯相手では緊張も

すると、硬かった鈴乃の顔が、ほんのわずかに緩んだように見えた。

「そうだ、ちょっと待ってて」

と、恵美は鈴乃を優しくどかすと、部屋の中に戻る。

「これ、私の電話番号とメールアドレスと住所。もしこいつらに何かされたら、いつでも助け 枚破ってその上に走り書きをして鈴乃に手渡す。 私がいない間に、変なことしなかったでしょうね」 ショルダーバッグをまさぐりながら、漆原を睨みつける。 7の無い様子で応える漆原を横目で睨みながら、中からメモ帳とペンを取り出した。メモを 「そんな命知らずじゃないよ」

一了解した、恩に着る」 求めに来て」

鈴乃は頷いて、そのメモを大事そうに懐にしまう。 悪美は、本当の意味で『懐』にものをしまう人を日本での生活で初めて見た。

に変なことしたら、素っ首刎ねてそこの窓際にさらしてあげるから」 |ゴキブリ以下の血に飢えた魔物だと思ってるわ。今さら無いとは思うけど、もし鈴乃ちゃん 食器の雫を拭いながら漱石に顔をしかめる裏奥だが。お前、俺達のことなんだと思ってるんだ」

一どこの悪代官だお前は」 真奥の突っ込みを涼しい顔で受け流した恵美

「お前に言われるまでもねぇよ。一飯の思を仇で返すようなマネはしねぇからさっさと失せろ」 「本当に、きちんと面倒見てあげるのよ。男と女じゃ色々と勝手が違うんだからね!」 「じゃ、私はそろそろお暇するわ。まあ安心して。こいつらこう見えて遵 法精神旺盛だから」 最後の部分は鈴乃に向けて、恵美はショルダーバッグを肩にかけると、 それを信用してしまう勇者というのも問題な気はするが、とりあえず納得した恵美は と、真奥に向かって釘を刺す。

それじゃね」 とドアを閉める

終乃はしはしそのドアを見やっていたが、

ンの新規店舗如きに遅れを取らぬよう、精励したまえよ」 たのは、階段の半ばで両脇の手すりに攫まり、冷や汗を流して固まっている恵美の姿だった。 **一ではまーくん。明日の午後の営業は、君の双肩にかかっている。センタッキーフライドチキ** くさと帰っていった。 「だ、大丈夫、今度は大丈夫だったから、ほんと」 ……みたいだね、アパートから逃げ出すみたいに、随分早く動いてる」 そう応える。すると、 いや、途中で持ちこたえていたぞ」 K点越え? いやあああああま!!!」 何故か漆原が、パソコン画面を見ながらそう呟いたのだった。 能屋の中から真奥の問いかけが聞こえ、 悪美は乾いた笑いを浮かべてから、そろそろと残り半分を降りて、恥ずかしかったのかそそ すぐに恵美の絶叫が聞こえて思わず飛び出してしまう。足袋のまま共用廊下に出た鈴乃が見

理業務のイロハをいくらか理解することができた。 それが漢字になっただけで何やら誇らしい気分になってくる。 は君の判断でことに当たれ、これは君の成長のためでもある」 かれた現場責任者であることを示すネームプレートである。 始まるのだ。ランチタイムに出動すると同時に木崎から与えられたのは、漢字で『真奏』と書 「もちろん緊急の場合を想定し連絡は常時つくようにするが、よほど致命的な案件でない限り 私は笑えない冗談は言わない主義だ」 その話冗談じゃなかったんですか……」 それまでの『まおう:A』というプレートは如何にもアルバイト用という風情であったが、 恵美が朝から押しかけてきた金曜日の夕方、木崎は、真奥にそうプレッシャーをかけた。 思わず顔を引きつらせる真奥だが、 うん、いい返事だ。トリニダード・トパゴに飛ばされないように頑張れ」 今日まで木崎の指導をみっちりと受けたおかげで、心構え以外にも実務的なことや、店舗管 明日から一週間、真臭の午後時間帯での『時間帯責任者』、即ち店長の代理を務める業務が 木崎の一貫は、それこそ笑えない。

一今夜はシフトが薄いから気を抜くな。時間帯責任者の仕事は、もう始まっていると思え」

```
ピタリティの精神と接答業の才能を備えている稀有な女子高生である。
                                                                                                                 てもあるのだ
                                        止めもしていないし、記憶を操作することもない。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     ちーちゃんか……」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              の線は真臭と木崎だけだ
                                                                        真奥にしろ恵美にしろ、知られたからといって特に困ることはないので、積極的に千穂に口
                                                                                                                                                 そして日本で唯一、真奥が異世界の魔王であり、恵美が異世界の勇者であることを知る人物
                                                                                                                                                                                                                ちーちゃんこと佐々木干穂は真臭が研修から手塩にかけて育てたクルーであり、立派なホス
                                                                                                                                                                                                                                                                                         いや、モメてるというわけでは……」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             なんだ、まだちーちゃんとモメてるのかい?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             真寒は小さく呟く。それを耳ざとく拾った木崎が、後ろからシフト表を覗き込む。
干穂自身、現代日本で、『あの人は異世界の魔王だ』などと言いふらすような人間ではない
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     そして十七時に入って二十二時までシフトラインが伸びているのが……。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         真奥は壁にかけられている今日のシフト表に目をやると、閉店時間の二十四時まで伸びてい
```

ż.

し、言いふらしたところで誰も信じないし、何もいいことが無いのは分かっている

ルシフェルとの戦い以降、千穂は真奥に対して妙によそよそしいことだ。 魔王である真奥を、恐れているのではない。原因はもっと別の場所にあると、流石の真臭も そんなことよりも現状の問題は、予徳が真奥たちの正体を知るきっかけになった二ヶ月前の

気づきはじめている 真奥の反応を見た木崎は、切れ長の瞳をスッと細める。

「多分、グリーンランドくらい行っちゃうかもね」 「それが原因で日商に影響が出たら、トリニダード・トバゴじゃ済まんぞ」 木崎の纏う空気が、一瞬にして極北のブリザードになる。

「グリーンランドの人に謝れ! グリーンランドはデンマーク領で、自治政府と議会があって、 「いやいやいや、北極應じゃないですか!」てかグリーンランドって人住んでるんですか?」

十万人以上の人が住んでいる。近年デンマークから独立しようという気運が強く……」 「そんな豆知識求めてませんし、そんなとこ行かないですよ! それよりそれが原因って

い話で済む。だがそのせいで営業に支障をきたすようなら、容赦はしないということだよ」 「仕事はできるけどウブな唐変木が、女子高生に好意を寄せられて対応に困ってるだけなら笑

そう、真奥は全く自覚が無かったのだが、千穂はどうやら仕事を通じて、真奥に好意を寄せ 直球ど真ん中ストレート。真臭は真剣に眩暈を感じてカウンターの内側に座り込んでしまう。

ていたらしいのだ。しかも、それは真臭が魔王だと知った今でも変わらないらしい。 一ふん。今後は若い女性を採用できなくなるかもしれん」

人の悩みも知らずに勝手なことを言う木崎。

奥はそれでも開いた自動ドアに向かって精一杯いらっしゃいませの声を飛ばすと、 「あ、お、おはようございます」 そうこうしているうちに、あっという間に十七時近くになった。落ち着かない気分でいた真

カウンターに出ていた真真に向かって、千穂はぎこちなく出動の挨拶をする。 件の佐々木千穂が、高校の夏服姿で丁度出動してくるところであった。

一あー、おはよう、ちーちゃん」 何を糸口に関係を修復すればいいか未だに分からない。 一あ、ん……お、おはよう」 そこに、横から声が飛ぶ。 業務上必要最低限の会話はするものの、それ以外の日常会話がめっきり減り、真奥としては

一え、あ、あ! お、おはようございます木崎さん!」 **木崎は真奥に見せていた表情とは一転して、面白がるように千穂を見る。** 

と望しておくことかある」 | はやく着替えてきな。明日からまーくんが重賞を担うことになるから、ちーちゃんにも色々

100 ったのに、目も合わせない。 千穂は何くと、真臭の脇を通ってカウンターの奥のスタッフールームに向かう。すぐ隣を通「あ、はい……すいません」 「ふん、なかなか重症だね」

「これは一つ、君に店を任せる上でのちょっとした心配の種かな」 木崎はにやにやしながら千穂の背を見送る。

たわけじゃないし、仕事に影響させるようなことはしませんよ」 「心配の種って……。確かにちーちゃんとはちょっとぎくしゃくしてますけど、別にケンカし

「君は大丈夫でも、ちーちゃんが大丈夫じゃないかもしれないだろう」 真奥はスタッフルームの方を見たまま困ったように言うが、

仕事を回す企業の歯車は、それ以前に人間だ。一方からだけものを見ても人間関係は計れな 木崎にあっさりとそう言われ、真臭は虚を突かれたように木崎を見た。

いし、職場環境も良くはならない」

そう……か。そうですね」

「大丈夫さ。ちーちゃんの方が人生経験浅いから戸惑いが長いだけ。きっかけがあれば、すぐ 四気を和らげた。 自分の浅はかさに気づき、真臭は俯いてしまう。すると木崎はまたも絶妙なタイミングで雰

があるはずなのだが、残念ながらその年月で得られた経験はこの問題には通用しないようだ。 に元通りになるよ そしてそんな木崎の一言に、問題が解決しないまでも少しだけ心が軽くなっていることに気 人生経験という意味では真奥は、干糖どころか木崎に対しても数百年単位でアドバンテージ

づいた真典は、ふと木崎の何もかも見通したような目を見た。

「やっぱ木崎さんは凄いっすね」

年を経れば誰でも気づく処世術だ」

ろうとする。が、それを止めたのは木崎だ。 「それはちーちゃんにやってもらおう。暇なうちに、彼女の仕事ぶりを改めて観察したい」 煙に巻かれた真異は、釈然としないものを感じつつもディナータイム前の店内チェックに入

あ はい……」 木崎は真奥の手からチェックシートをもぎ取ると、

い。それともお店で賄い食べるかい?」 「まーくんは今のうちに休 憩に入りな。十八時までに戻ってくるなら、ご飯食べてきてもい 木崎の提案に真臭は首を振る。

「お弁当か。自炊はいいことだが、暑いから防腐措置は怠りなくな。店舗内での食事はどんな いや、スタッフルームで休んでます。今日弁当持ってきてるんで」

取り出すのを見て、足を止める。 食中毒対策の基本でもある。真臭は頷いた。 食中毒対策の基本でもある。真臭は頷いた。 一真奥さん、それ……」 「わ、分かりました……」 を改めて見たいんだってさ」 「あー……うん、俺、ちょっと休憩入るから。木崎さんが、暇な時間にちーちゃんの仕事ぶり đ..... 「そこらは大丈夫です。懒けなくなったら困りますからね。じゃ、休 憩いただきます」 真奥が普段使っている肩掛け鞄がら、百円ショップに売られているパンダナに包まれた箱を 胸の前で何かを抱えるようにして焦ったように頷くと、真奥の傍らを通り過ぎようとして、 千穂は真奥の姿を認めると、息を否んで目を伏せてしまう。 丁度、スタッフルームの奥にある女子更衣スペースから千穂が出てくるのにでくわした。 ここ二ヶ月では本当に珍しく、千穂の方から話を振ってきた。 動意コードを『休憩』にして、スタッフルームに入る真奏

真奥がほどいたパンダナの中から出てきたのは、男の真奥が持つにはかなりファンシーな、

花柄の大きめな弁当箱二段重ねだった。 一これ? 弁当だけど」 お弁当……? 何か可愛いお弁当箱ですね。芦屋さんが安売りか何かで買ったんですか?」 真奥は手に持ったそれを願の高さまで持ち上げて答える。

干穂の何気ない質問だったが、二ヶ月ぶりに干穂とまともな雑談をするチャンスに恵まれた 事で真奥の生活を支えていることも知っている。 真奥の正体を知る千穂は当然声屋とも面識があり、その正体も、異世界の悪魔でありながら

真異は、あまり深く考えることなく正直に答えてしまう。 一隣って……あのアパートに?」 一いや、借り物。実はちょっと前に、隣の部屋に引っ越してきた人がいてさ<u>」</u>

真典たちが暮らすアパートの実情を知っている千穂は驚いて目を見開くが、その後に放たれ

「お、お、女の子って、その人に、お弁当精借りたって、一体どういう……」 5 い、いきなり大きな声出すなよ」 うん、若い女の子なんだけど……」

、女の子っ!」 べに身を強張らせる。

「ちーちゃん揺らすな揺らすな!」 気がつけば千穂は、真奥の胸倉を擱んでグラグラと揺さぶっていた。

「つ、つ、つまり、その、ととと隣の女の人が、ままま真奥さんに……!」

「まさか、まさかとは思いますけど、まさかとは思いますけどっ! ててて手作りですかり」 「そ、そ、そ、そう、そうだ、けど、お願いだから、揺らすの、やめて」 女子高生にフィジカルな意味で負ける魔王。

白眼で真奥の顔を睨み上げる。 もちろん引っ越してきた若い女の子とは鍼月給乃のことであり、善屋が体調を崩してグロッ この二ヶ月のよそよそしさなどウソのように、千穂は必死の形 相で胸倉を引き寄せて、三

が、まさかこんな形で地雷が埋まっているとは思いもしなかった。 持ち込んでは様々な料理を振る舞ってくれるのだ。 キーな今、真奥に甲斐甲斐しく食事を作ってくれる人間など鈴乃をおいて他にあり得ない。 初日のうどんや今日の生姜などを見ても分かる通り、鈴乃は色々な食材を自主的に魔王城に 真典達としても近所付き合いの緊張が解けて家計も助かり文句を言う筋合いは全く無いのだ

一う、うん、た、多分、手作り、たと、思う」 今さら語尾をボカしたところで誤魔化せるような千穂ではない。

一ろろろろろろろろ



おせち・・・・・・・ 中身を凝視した。 ようやく真臭の胸倉から手を難してくれた干穂は、怯えるようにして真臭が開いた弁当箱の「分かった!」分かったから揺らすのやめて!」お願いだから!」 「み、見せてもらって、いいですか!」 下の段見せてください!」 おせち?何が?」 その内容に思わず順を強張らせた干穂だが、すぐにあることに気づき首を傾げた。 白米の上に海苔を切って梅干で縁取りした、巨大なハート型が描かれていたのである。 そこには千穂が予想をしつつも見たくないものがあった。 と、おかずの段を持ち上げる。 真典は恐る恐る尋ねるが、千穂は首を横に振り、 キンピラゴボウに筑前煮に紫花蕪、ダイコンとニンジンの鱠に栗金時などを見た干穂。 二段重ねの上の段は、色とりどりのおかずでぎっしり隙間なく埋められている。豪華に見え

夜になっても尚、東京の熱波は養えを見せない。

「つらっしゃいあせー」 恵美は冷房の効き具合にほっとしつつ弁当コーナーに真っ直ぐ向かう。 接客態度という点からすれば魔王よりはるかに劣る学生アルバイト店員の声を聞きながら、 天は自宅最寄りのコンビニ『フレンドマーケット永福 町 栗の花通り店』に入る。 美以外の客がいない店内。

ローサラダとインスタントのカップスープとデザート用にエクレアを手に取り、その上に重ね ccal』という大変長い商品名のカレーを手に取り、それだけでは寂しいので小さなコールス 「……つい、いつも同じの買っちゃうのよね」 と、最近お気に入りの『たっぷりヘルシー夏野菜カレー! この量でカロリー500

げで随分帰宅が遅くなってしまった。 テレアポの仕事は定時で上がったものの、勇者の仕事のために幡ヶ谷で途中下車をしたおか

カレーのローカロリーな気遣いを台なしにしながら、恵美はレジに向かった。

要があると考えた恵美。京王新様に乗って幡ケ谷で途中下車し、マグロナルドを見張るのに最 見張っていた四日間の中で一番大きい変化があった日だったので、一応職場の様子も見る必

正体を知る唯一の日本人である佐々木干穂がごく真面目に働いているのを延々見続けただけとだがある意味予想通りというかなんというか、真果と彼の上司である店長の女性と、自分の 心な向かいの書店で雑誌を立ち読みしつつ観察していた。

いう、ストーカー行為を地で行く結果に終わった。

「つちら、っためますか」

最初の一音が何故か消える店員に適当に相槌を打ち会計を済ませる。

ビニ銀であることに釈然としないものを感じつつ、 真美が隣人のおかげで豊かな食生活を送っているのに自分が時間と体力を浪費した上にコン

一つりがとうっざいあしたー。ったお越しくださいあせー」 温めてもらったカレーの入った袋を受け取ってから店を出ようとする。

!! 恵美は明確な殺気に顔を上げる。

のはなかなか衰えるものではない。 夏だろうが仕事帰りだろうがエアコンが手放せない生活になろうが、鍛えられた勘というも

こと、命にかかわることでは。

得ない速度で間合いを詰めてきた時に、すぐに身構えることができた。 そしてその人影があまりに速すぎたため、恵美との間にあったゆっくり開く自動ドアに気づ

だから突如として現われたその黒い人影が、殺気を放射しつつ恵美目がけて日本人ではあり

「っ! っんすか? 今の」 かず、透明のガラスドアに微突してもんどり打って倒れても、油断なく身構えたままだった。

どうやらこれが地の喋り方らしい店員が、物音に驚いて恵美の方を見る。

ゆっくり開くヒビの入った自動ドアの向こうに、目撃証言を集めたら『床屋から逃げ出した

った迷彩ズボンといういでたちの小柄な人物が倒れていた。 銀行強盗』としか言いようのない、ツルツルのビニールポンチョを纏い黒い目だし帽子をかぶ

い物袋もレジに置きなおそうとした時 内の冷気が急激に逃げていく 外のセンサーにひっかかる場所に倒れているので自動ドアが開きっぱなしの状態になり、店 っ客様、大丈夫っすか!」 相手がどう動いてもいいように、自分の動きの妨げになるショルダーバッグを床に放り、買

入り口に駆け寄ろうとするが、倒れた人物のあんまりないでたちに思わず足を止めてしまう。 新しい客が事故を起こしたと思ったのか、店員は、慌ててレジカウンターの中から飛び出て

「危ないっ!」

2子のラックに突っ込むが、結果、それが彼の命を救った。 凝固した店員を、恵美は横合いから突き飛ばした。予想外の攻撃に店員はドア脇の無料求人

ピースの袖を散らし、それどころか買ったばかりの弁当が入った袋すら真っ二つに引き裂いた。 今まで店員がいた空間を光が薙ぎ、彼を突き飛ばした恵美の肩口を巨大な質量が掠め、ワン

恵美の判断は早かった。店員がまだ起き上がっていないことを確認して、

発動させた。 恵美の袖と弁当を引き裂いた奇怪な姿の強盗目がけて、迷うことなく『進化型剣・片翼』を 対の方に出現した照剣から放たれた指向性の高い衝撃波が奇怪な強盗姿に散突し、轟音ととも

「出てきちゃダメよ! それと、早く警察を!」 に強制的に店内から外へ弾き飛ばす。 聞こえているかは分からないが、店員に型剣を見られる前に恵美も外に飛び出して、曰く言

恵美はそれを聖剣を振るって弾き返す。響きわたる金属の打ち合う音。恵美は待ち構えてい だが、店内から飛び出した恵美に、再び鋭い斬撃の光が真横から襲ってくる。 れい姿の襲撃者を迫う。

た相手の上を飛び越えるようにして跳 躍した。

一人間なのか、それとも悪魔なのか知らないけど、こんな人目につく場所で獲ってくるなんて 地球の人間ではあり得ない。 てそんなものを何もないところから取り出したことを考えても、この失敗スタイルの強盗は なかったのだ。 もある、タロットカードの死神くらいしか持たないような鍛だ。 人間でないと気ついたからだ。 この失敗スタイルの強盗は、自動ドアにぶつかって倒れた瞬間は、そんなものは持ってい 天光殿靴!! 聖剣と打ち合った時の金属音や、そもそも恵美の聖剣と打ち合えるだけの材質の強度、そし 普通の強盗が持ちそうな凶器と違い、体のどこかに隠しておけるような性質のものではない。 人間なら三人くらいまとめて両断できそうな、使い手である小柄な目だし帽強盗の身長ほど その手にあるのは、巨大な嫌だった。 思美が迷いなく聖剣と破邪の衣を出現させたのは、相手がいでたち以前の問題として普通の そんな普通の人間にはあり得ない運動能力を発揮した恵美を、見失うことなく振り仰ぐ目だ 破邪の衣を足だけに集中させ、恵美は一足飛びでコンピニの向かいの一軒家の屋根の上に着。こ

112 どういうつもり?」 私だけならともかく、日本の人たちに迷惑をかけようって言うなら容赦はしないわ!」 恵美は聖剣を構えると、上段に構えて屋根から飛び降りる。 恵美はとりあえず襲撃者に向かって気勢を吐く。

**左足の後ろ回し蹴りを繰り出した。** 一せえええいっ!」 単に慣性に任せた落下ではない。足の破邪の衣を最大限生かした突撃だ 鈍い衝撃とともに体制を崩した大鱗使いのボディががら空きになる その動きは子想済みだった恵美、剣を横に払われた勢いを借りて、体を一回ぐるりと捻り、 だが、襲撃者はその場で鎌を構えると柄で恵美の上段からの振りかぶりを払う。 全ての勢いを載せた破邪の衣つきの蹴りが相手の左肩に突き刺さる。

冗談以外の何ものでもないが、恵美は悪寒を感じてその閃光を聖剣で瑇ぎ払う。 目だし帽の目の部分から紫色のビームのようなものが飛び出るなどという映像は、 だが、その瞬間、大鎌使いの目だし朝から露出している両目が閃光を放った。

何故か体に喰らってはいけないような気がしたからだ。

気絶させるために、鳩尾を狙って聖剣の柄を繰り出すための突撃姿勢を取る

だが隙ができたからといって、敵をそのままぶった斬ってしまうわけにはいかない。恵美は

だが、結果は恵美の予想を遥かに超えるものだった。

型剣が、光を失ったのである。 《の聖法気と呼応して姿を変える"進化聖剣・片翼』が、切れる寸前の電球のように明滅

短剣のようなサイズに縮小してしまったのだ。

一な、なんなのコレはっ!」 逃さず大鎌使いは次々と紫色の光を放ってくる。 連射速度は大したことはないが、聖剣を縮小させてしまうような力など聞いたことがない。 5てて聖法気を送り込み直し、もとの『第一段階』サイズに戻そうとする恵美だが、その隊

敵の予想外の行動と力に慌てる恵美。どう考えてもエンテ・イスラからの刺客としか思えな 目から光を放つ変態大鎌強盗との戦いは、思わね形で終了することになった。

形勢が逆転してしまう。

に直撃したらどうなるかまるで予想できないし、かといって剣で払うこともできず、一瞬で

突然、大鎌使いが小さく呻いて紫色の閃光の連射がやんだ。

ンジ色に変色しているではないか。 いて相手を見ると、大鱳使いの地味な色の目だし帽が、目の部分まで蛍光色のオレ

114 「っのっ!」 それは大鎌使いの肩に当たり、上半身の広い範囲を鮮やかに染め上げた。 今度は男の声とともに恵美の視界をオレンジ色の丸いものが横切る。

なんと先ほどの店員が飛び出して、大鎌使いめがけて防犯用のカラーボールを投げつけたのだ。 思美は驚いて、コンピニを振り向く。

する犯人を追跡するためのもので、特殊な臭い加工がされている以外は繋退する力は大した事 さえて悶絶しはじめる。 547 ..... だが恵美は店員の霊勇に焦っていた。職務に忠実なのは結構だが、カラーボールは本来逃亡 恵美の聖剣の斬撃にも果敢に応戦したくせに、カラーボールの塗料が目に入ったのか顔を押

かないはずだ。

下手に歯向かって、大鎌使いが報復行動に及ぶのではないかと一 瞬 危惧した恵美だが、

ける失敗スタイル強盗の姿が! .....X-..... 大郷使いに再び目をやると、なんとそこには、こけつまろびつしながらこちらに背を向け逃

恵美は思わず呻く。

したかどうかは分からない。 「っのっ!! 逃げんなっ!」 店員氏だけはその行動にも驚くことなく、逃げる背に向かってカラーボールの追撃をかける。 しかし宵闇の少し離れた場所でボールが破裂した音が聞こえてきただけで、それが効果を表

思美を狙ってきたエンテ・イスラの刺客と思しき存在のくせに、コンビニ店員が投げつけたカ 目動ドアにブチ当たるという大恥をかました上に、あんな巨大な武器を振り回し、明らかに ※美は慌てて聖剣を体内に格納するが、それにしても、と心中で呟く。

「あっ! っ客様、大丈夫っすか!」 フーボール如きで退散するのはどうなのだろう。 興奮冷めやらぬ顔で周囲を見回し、ようやく恵美の姿を認めた店員。恵美は大鎌使いが逃げ もちろん無用な戦闘や犠牲は避けるに越したことはないのだが、何事にも張り合い、という

一あなたこそ平気? ごめんなさいね、突き飛ばしちゃって」 求人誌のラックに顔から激突したらしく、額に赤い痕が残っていた。もちろん、そのままあ 大丈夫っす。っとデコんとこイッたくらいなんで」

いたかもしれない。

出すと同時に密かに聖剣と破邪の衣を解除していたが、彼がもっと冷静だったら見咎められて

の変態強盗に駆け寄っていれば、大線に両断されていたかもしれないのだが。

「あっ、ダイジョブっす! 緊急通報で警備会社とケーサツに連絡行ってるハズなんで!」 「警察とかに連絡は?」

にしといてくれって言われてるんすよ。ケーサツ来るまで、ちょっとここで待っててもらって いっすか?」 「あ、で、っ客様、申し訳ないんすけど、こういう時のマニュアルで、店内のお客をそのまま そして何かを思い出したように、恵美に向かって手を合わせる。

恵美は呻いた。要するに強盗事件の実況検分に証人として立ち会えということなのだろうが、

まさかこんな展開を予想していなかった。

警察の実況検分というのは、短時間で済むものなのだろうか。

「……あー、はい、分かったわ」

のの、自ら却下。自宅最寄のコンピニに自分のプライベートが割れるのは得策ではない。 携帯電話や身分証明書などを置いて一旦マンションに戻る、という選択肢が頭に浮かんだも こればっかりは店員氏を信用するしないの問題ではなく、東京の一人暮らしの防衛本能のよ

すごすごと店内に戻ると、そこにはぶった切られた恵美の買い物袋。カレーとサラダとエク

「ポットのお湯 Tg/載。お腹空いたから、スープだけ、ここで飲ませてもらうわ」その中から、たった一つ無事だったものを拾い上げ、恵美は店員に言った。 レアがぐしゃぐしゃに取り混ざって蘭ピザのような状態になっていた。

は恵美を気遣って、店の事務室に案内して椅子を貸してくれた。 店の隅っこで古びた電気ポットからへしゃげたインスタントスープに熱湯を入れると、店員

普段入ることのない店舗の裏側を見回しながら恵美は小さく呟いた。

階」への移行だけでなく、破邪の衣を展開する際も効果的に運用できることだろう。 前のルシフェルとの戦いの時とは比べものにならない力を内包していた。これなら【第二段 |今回顕現した『進化聖剣・片翼』は、進化の状態は『第一段階』に留まっていたが、二ヶ月『ちゃんと、効いてたわね』

は出会ったことがない。 だがそれだけに、あの紫色の光の正体が分からない。聖剣や聖法気を無効化するような敵に

食をさらに惨めな有様にしてくれた、あの迷惑な変態大鰤強盗 **「あの、っ客様、これ、っ客様のですよね」** 一分で出来上がったスープをすすりながら、悔しさで歯嚙みする恵美。ただでさえ切ない夕 と、そこに恵美が最初に放り出したショルダーバッグを持って店員氏がやってきた。 次回会ったら、変な力を使われる前に迷わず一刀両断することを心に誓う。

118 「え? あ、えつ!!」 「なんか、中でケータイ鳴ってるみたいっすよ。着メロが……」と生真面目な顔で言う。 「あ、ごめんね、ありがとう」 そう言えば、店の床に放り出したままだった。受け取ると店員がパッグを指差しながら、

「あ、あははは、その、好きなのよ、意外と」 メロディが最大音量で朗々と流れていた。 「遊佐さんっ! 真奥さんが大変ですっ!」 マナーモード設定を忘れていたのか、恵美の好きな時代劇の一つ『怒りんぽう将軍』の着信 バッグを受け取った恵美は、思わず顔を赤らめてバッグの中から携帯電話を取り出した。 しなくてもいい言い訳をしながら店員から顔を背けて電話に出る恵美。

耳を近つけた ぼしそうになりつつ、千穂の唐突すぎる絶叫に困惑の表情を浮かべながら恐る恐る携帯電話に 画面に表示されているのは『佐々木千穂』の名と電話番号。驚いたせいでスープを作うくこ

「遊佐さん! 遊佐さん?」

全力で飛び出してきた絶叫に、恵美は携帯を思わず耳から放してしまう。

一ち、千穂ちゃん? いったいどうしたの?」

何をこんなに慌てているのかと思うと、 「お弁当? でも芦屋もあれで結構マメみたいだし、確かマグロナルドって賄いはタダじゃな 光を交換した恵美は、時折取りとめのない会話をメールや電話で行っているのだ。 「ちょっと落ち着いて日本語整理して頂戴」 『声屋さんじゃないんです! お弁当付きハートマークの手作り女の子が二段重ねで!』 ・んでしょ。別にお弁当持ってきても不思議は……」 「お弁当持ってきてたんです! 手作りの!」 アレがどうかしたの? 死んだ?」 考えなしの真臭が、また女の子の気持ちを逆撫でするようなポカをやらかしたのだろう。 恵美は苦笑して言う。ようやく千穂が何を取り乱しているのか分かった。 恵美は一口スープをすすってから、千穂が涙声である理由が分からず首を傾げる。 涙ぐむような声でそんなことを訴えてきた。 恵美が見たところ今日のマグロナルドの真奥と千穂にはなんの異常も無さそうだったのに、 二ヶ月前の戦いの後、千穂の安全を図り、かつ真奥の仕事中の動向を探る意味で彼女と連絡 **愛鬱な気分の今、真奥のことなど思い出したくもない恵美は、そんな物凄いことを尋ねる。** 丁穂が真奥に好意を寄せていることは恵美も知っていた。

『真奥さんがっ! 真奥さんがっ!』

『遊佐さん知ってるんですか?』遊佐さんはそれでいいんですか?』 「あれでしょ?」あいつらの隣の部屋に引っ越してきたって言う……」

ええ? 何か? 突然何を言い出すのか。別に真異が誰の作った料理を食べようと知ったことではない。むし

の危機に繋がるのかもしれないけど、流石にそこまで面倒は見きれないわよ」の危機に繋がるのかもしれないけど、流石にそこまで面倒は見きれないわよ」 ろ今は自分の食事をなんとかしたい。 鎌月鈴乃は確かに世間知らずの一面もある少女だったが、日本は広い。東京に暮らしている。

と想像もつかないことだが、辺鄙な田舎から出てきた旧家の令嬢、と思えば、あの性格やライ

そもそも何か危険なマネをするような相手なら、恵美が鈴乃の存在を知らなかった数日の間

「遊佐さんそれでも勇者ですか!」 そんなことを考えながらまたスープを一口すすった恵美だが、 にとっくに何かが起こっていて然るべきである。 フスタイルもあり得ないことではないと思えてしまう。

憤然とした千穂の大声で、恵美はまた電話をちょっと耳から離した。

するんですか! |もしその隣の人が、何か悪いこと考えてて真臭さん達を殺そうとする刺客とかだったらどう

-

けど、会って何日もない単なるお隣さんにそこまでする女の子っていると思います?」 人が、そんな急接近するとかあり得ません!! 真奥さんは単なるおすそ分けとか言ってました 見るからにお金の無い、特別格好良くもない真奥さん達に、引っ越してきて間もない若い女の 『大体おかしいじゃないですか! あんなボロボロの狭いアパートに男の人三人で住んでる、 まさか千穂の方からそうくるとは思わなかった恵美。思わず絶句してしまう。

見ているし、魔王に好意を寄せているようなことを言っていたことも聞いている。 「だから私くらいです! そんなことしようと思うのは!」 「……私が言うことじゃないけど、千穂ちゃんて、あいつのこと好きなのよね?」 そう言われても、恵美は実際に鈴乃が甲斐甲斐しく魔王城の世話を焼いているのをこの目で自分が唯一の例外、と思うのは、若さゆえの首目、というやつだろうか。 だが、恵美は今朝の魔王城でのやりとりを思い出し、ふと、あることに思い当たった。 そういう意味では千穂が危惧しなければならないのは、もっと別のことだろう。 恵美が思わずそう確認したくなるほど、干糖はさらっとヒドイことを言っている気がする。

が初対面の人間に連絡先を教えたその日に、変態大錬使いが恵美を襲撃してきた。 同性の友人がいないと心細いだろうと思ってのことだったが、魔王城に異常が発生し、恵美 恵美は、鈴乃に自分の連絡先をかなり細かく教えていた。

何か関係があるのだろうか。 しかし、和装を見事に着こなしていた礼儀正しい鈴乃が、あんな失敗強盗スタイルをするな

122

ど想像できない。共通するところなど、やや小柄だということくらいた。 魔王と勇者に同時に異変が起きることが、果たして偶然だろうか。 それでも、と恵美は思考を正す。 干糖の呼びかけで、没入していた思考から復帰した恵美。 一ヶ月前の、ルシフェルとオルバの襲撃が脳裏をよぎる。

やいけないんですよね!! **『だから遊佐さん、お願いです。遊佐さん勇者なんですよね。真臭さんは遊佐さんが倒さなき** 一あ、こめん、ちょっと考えことを……」 「遊佐さん、遊佐さん?」

【だから、私を助けると思って……】 思美が真臭を倒すという予定がどう千穂を助けることになるのか、全くさっぱり分からない

「え、ええ、まあ、そうだけど……」

まるで目の前で迫られているような千穂の迫力に息を呑む。

が、恵美は千穂の言葉の続きを待った。



識である大神官型壇を大きく揺るがした。 オルバは六人の大神官の一人であり、魔王討伐の勇者の仲間の一人でもある重要人物だ。 オルバ・メイヤーが異世界で失踪した、という報告は、『六人の大神官』全員を招集した会

の執務室を調査した訂教審議会からの報告が、状況を一変させた。 「勇者エミリアが、異世界で生存しているだと?!」 しかし、彼の行方を詳細に探るべく、大法神 教 会総本山サンクト・イグノレッドのオルバ

司教座統括の大神官で"六人の大神官"の中で最も高齢のロベルティオ・イグノ・ヴァレン

「オルバの話では、エミリア・ユスティーナと"進化聖剣・片真。は、魔王ヲタンとの激闘のティアは、大神官聖壇で為されたオルバを除く五人への報告に、腰を抜かさんばかりに驚いた。 「どうやら、真っ赤な嘘のようです」 末に消失したのではなかったか?」

ーヴァとアルバート・エンデが何者かによって拘束された件も、オルバ様の差し金によるもの **「異世界に向けて何度もソナーを発信した痕跡が確認されました。先日の、エメラダ・エトゥ** 五人の大神官を前にしてばっさり最長老を斬って捨てた報告者の女は硬い口調で言い放った。

最近健康状態が心配されているロベルティオは、信じられない報告の連続に早くも顔が真っ

```
「セント・アイレの宮廷法 衞 士が公式にエミリアの生存を認めたとなると、その影響は無視
                                                                      しという「事実」を完璧なものにするべく行動したと考えるのが自然です」
                                                                                                         誰にも知らせずに一人で処理しようとするのですか。オルパ様は、理由があってエミリアの死
                                                                                                                                   一そんなはずがないでしょう。死んだはずの勇者が生きていたなどという大ニュースを、何故
                                                                                                                                                                               ゆことを知って自分で助けに行ったのかも……」
                                                                                                                                                                                                         一だ、だがオルバが嘘をついていたと決めつけるのは……。もしかしたらエミリアが生きてい
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          エミリアの生存を吹聴し、オルバの背 教 行為を広めようとしているとの報告が」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    亦になっている。
                                       報告者の女は程息をついて大神官たちに冷酷な事実を告げた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                そうは仰いますが、事実ですので」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        ロベルティオ殿! お気を確かに!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        エメラダ・エトゥーヴァに関しては、神聖セント・アイレ帝国への帰還が確認されています。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     教会農政統括の大神官、セルヴァンテス・レベリーズがロベルティオの背をさすりに立ち、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       報告者に苦言を呈するが、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      あまり刺激の強い報告は……]
                                                                                                                                                                                                                                                 取りつくシマもない。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       は、背教……大神官が、背教!」
```

**できません。エミリアが死亡したという教会の公式発表と矛盾します。いかがいたしますか」** いかが……とは……」 ロベルティオは過呼吸気味で今にも憤死せんばかりの有様だ。

「もっと具体的に言えば、大神官の背 教 行為を認めるか、エメラダとアルバートと、そして 大神官型境は、一瞬で水を打ったように静まった。「オルバ様の過ぎを認めるか、教会の決定を押し通すか、です」 報告者の女は、うろたえるばかりの最長老大神官にむかって毅然として言い放つ。

エミリアの三人を採殺するかの二択です」

教会がやってきたことでしょう。さらに言えば、私を始めとした旧『異端審問会』の面々が』 「魔王軍がいたころから、この西大陸を大法神 教 会の名の下に一枚岩にするために、ずっと 「そんな無茶苦茶な……エミリアとアルバートはともかく、セント・アイレの宮廷法 術 士を セルヴァンテスは苦しそうに言うが、報告者の女は全く硬い表情を変えずに言った。

れば教会の威光は糾陽の時を迎えます。人類の希望である魔王討伐の勇者を使い捨てにした教 「いずれを選んでも教会は大きな犠牲を払うことになります。ですが、このまま問題を放置す だが彼女はそれに構うことなく続けた。 その言葉で、タダでさえ重苦しかった聖壇の空気が、益々重くなる。

会を、信仰の拠り所にしたいと思う人間はそうはいないでしょうね」 「君は、異媾……いや、。訂 教 審議会』の人間だったな。君ならこの問題、どう処理する」 動揺するばかりの聖壇の一同を睥睨する報告者の女。セルヴァンテスが重い口を開いた。

りにならないセルヴァンテス様ではありますまい」 「これまでは魔王討伐という大義名分があった。だが、その骨 威が去ったと誰もが思ってい 女の視線に、セルヴァンテスはすぐに目を逸らした。

『異端書間会』という組織が、名前だけでも『訂教審議会』と変わったことの意味をお分か

女の答えは、簡潔だった。

る今、神の名の下に行うことが、なんでも許されると思ったら大間違いです」

一な、何を言っているのだ?」 これは、今のショックが去ってからの方が良いかと思ったのですが」 女の微妙な言い回しを、ロベルティオは聞き逃さなかった。

女は前置きし、五人の大神官を順縁りに見回した。

一魔王サタンもまた、異世界にて生存しております」 ロベルティオは、今度こそ泡を吹いて卒倒したのだった。

「……つまり、自信が無いのね……」

魔王城のドアの前に立っていた。 ッグを抱えている。中身は、恵美にも容易に想像がついた。 一だ だって……」 翌日、土曜日の朝。初夏の陽気が本領を発揮しつつある朝の早い時間、忠美は千穂とともに 恵美の背に隠れるようにして魔王城のドアを恐る恐る見る干穂は、やたらと大きなトートバ

もし負けたら一人じゃ立ち直れないじゃないですか……」 何に負けることを恐れているのか、問いただすのも馬鹿馬鹿しい。

の心配事の方が、緊急性が高いように思えた。 「エンテ・イスラの刺客が遊入れてたら、とっくにカタはついてるわ」 それにほら、もし毒とか入れられてたら真美さん達危ないかも……」 「だ、だって、季節感無視した内容でしたけど、物凄く丁寧なお弁当だったんですよ! そ、「だ、だって、季節感無視した内容でしたけど、物凄く丁寧なお弁当だったんですよ! そ、 それだけは恵美にも断言できる。 干穂としては、いずれにしても困ったことになるのだろうが、どちらかと言えば千穂の本音

「取ってつけたように私達のこと理由にしなくていいから、千穂ちゃんらしく正面からぶつか

「は、はいっ!」 6に隠れる千穂を強引に前に押し出すと、気合を入れるようにばしっと肩を叩く。

すると千穂は、緊張した顔つきのまま、ふと恵美を振り返った。

助けにきてもらってエンテ・イスラに帰る。ただそれだけのことだ。 穗をこれ以上真奥に近づけるのは決して褒められたことではないのだ。 あ、あの、遊佐さん、ごめんなさい、ありがとうございます」 だが、恵美は複雑な笑顔を浮かべた後、こう答えた。 真奥に関わったそう多くない日本の人々の記憶を抹消し、魔王一派を抹殺し、エメラダ達に 聖法気を制御できるようになった今、恵美が魔王を討伐する障害は一つも無い。 いくらエンテ・イスラの事情に片足を突っ込んでいるとはいえ、本来なら恵美の立場で、千 恵美。のことも『真典』のことも全て分かっている干穂からの言葉だった。

一別にいいわよ。あいつらなんかどうでもいいけど、千穂ちゃんとは友達でいたいからね」 それもまた、恵美の偽らざる本心なのだ

言葉に込められた気持ちが伝わったのか、それに勇気づけられたように、千穂は改めて息を

整えて魔王城の呼び鈴を鳴らした。

130 はい、ただいま 反応はすぐにあった。

撃えた決心が早くも揺らいでいるのが手に取るように分かる。 聞いたことのない女性の声に、千穂は息を吞んで立ち竦んでしまう。恵美の目からも、折角で

- の潔/原でもなく、朝顔の柄が凉やかな水色の浴衣に割死者という相変わらずの姿の鑑月鈴果たして、ドアを開いて現れたのは家主の真臭でも、主夫の产屋でも、まして引き鑑りニー果たして、ドアを開いて現れたのは家主の真臭でも、主夫の产屋でも、まして引き鑑りニー

す肌には一適の汗も無く、タオルで手を拭って現れたその仕草は、たった今まで水仕事をして いた証に他ならない。 アップにまとめていても朝の光に煌く髪。既に蒸しはじめているにも関わらず和装を着こな 一見幼く年下にも見えるが、恰削で引き締まった表情には、千穂には無い大人の空気を漂わ

おや、恵美殿と……あなたは?」

|最大殿、お客人が| |最大殿、お客人が|

祝を変えられるのは千穂自身か、 「あれ? ちーちゃん!? どうしたんだこんな朝早く」 一ああ? また恵美が来たのか?」 ま、真爽さん……」 干穂がいることに気づいて、あっけらかんと尋ねる。 \* いや、恵美殿だけではない」 千穂は、眩暈ではない絶望感で立っているのが辛くなる。 その様子を見て恵美は思わず額に手を当てる。ダメだ。真奥は状況が把握できていない。 戦う前からうっすら涙目になっている千穂。 千穂が好意を寄せている人物、真奥貞夫だけだ。 そんな干穂を後ろから見る恵美だが、彼女に助け舟は出せない。これは、干穂の戦いだ。状 自分は、先輩で年上である真奥のことを下の名前で呼んだことなどないし、呼べやしない。 真奥のことを、下の名前で呼んでいる。そんな人間は、千穂の知る限り真奥の周囲に一人も この唐突に現れた女性は、もう真奥のことを親しげにそう呼んでいる。

見知らぬ美しい和装の女性のその言葉に、千穂は立ち竦む。

132 ろおろするばかり。 まく喋れないようだ。 いるのに気がついた 「あの、ちーちゃん、ど、どうした?」 「その、あの、わ、私、あの、良かったら、あの、ご飯……」 いや、病気というか、なんというか」 え? 芦屋さん、病気なんですか?」 さ、佐々木さんが、いらっしゃったのですか……」 流石に千穂の様子がおかしいと気づいた真奥だが、今にも泣き出しそうな千穂を見てただお 千穂は、真奥と見知らぬ女性の向こう側で、芦屋が毛布のようなものをかぶって横たわって 芦屋の力ない声。だが、妙にその声はよく通った。 蚊の鳴くような声でなんとか言葉を紡ごうとするが、出鼻を挫かれてしまったショックでう 真臭は頭を揺いてから千穂と芦屋を交互に見て、 旅月さん、すいませんが、来客用の紅茶のティーバックが、流しの下の戸棚の奥に……」 助け舟は魔王城の中からやってきた。

「まあ、あれだ、昨日の弁当の正体は、これだ」

干穂は涙を浮かべたままキョトンとして首を傾げた。

「うわー、紫蘇がこんなに細かく刻まれて、凄く綺麗……」 よく包丁を祈いで、紫蘇を半分に切って、重ねて丸めてから千切りにすれば簡単だ」

「サニーレタスがシャキシャキしてるのは……」 | きちんと水にさらして、その後水分を振ればいい。芯の部分を取り除いてばらばらにしてか

らなら目に見えない砂なども落とすことができるから、水道水で流し洗いするよりも確実だ」 「白だしを水で希釈したものの方が、塩分と刺激が少ないからな。味わいも柔らかくなる」 「冷奴、これおしょうゆはいらないんですか?」 全て、干穂と鈴乃の会話である。

うやく涙を引っ込めた。 きた鈴乃が助けている、という構図と、人を下の名前で呼ぶ彼女の性格を理解した干穂は、よ 芦屋が夏パテで倒れてしまったせいで家事の勝手が分からず困っていた真爽を、隣に越して

恵美は気の抜けた様子で二人の会話を聞くともなしに聞いていた。

244 糖は改めて鈴乃に自己紹介したのだった。 一種厳がおかずを沢山持ってきてくれたおかげで、食卓が豪華になるな」 既にある程度整っていた食卓に、千穂が作ってきたらしい鶏唐揚げやポテトサラダなどが加

わって、朝食にしては少々多すぎるほど豪華な食卓になった。 「あー、その、ちーちゃん、ありがとな。ちょっと驚いたけど、ありがたく頂 戴します」

は、はいつ 鎌月さん、本当にすいません」 どこまでも決まらない真典は、不審な挙動で手をばたばたさせながら言う。 尸屋がやつれた顔で起き上がって頭を下げれば、

「あ、私自分で持ってきました」 では、恵美殿は私の隣に来るといい。割り箸で済まないが」 ·人口密度高いな。箸と茶碗足りるか?」 と千穂がマイ箸セットを取り出し、 具典が人数を数えはじめ、

き渡った頃、ようやく漆原がむにやむにやと起きてきた。 本当にここは魔王城かと疑いたくなるような朝の服々しい食卓の風景。全員に箸と茶碗が行鈴乃はほったらかされていた恵美を自分の隣に招き、割り箸を差し出す。

「あ、もう朝ご飯?」 スケスケと言い放ち全員に白い目で見られても全く堪える様子もない。

「僕の席と箸と茶碗が見当たらないんだけど」

「お客様が優先だ。そしてこの場合、家庭に対して最も貢献度が低い者が冷遇される」 代わりにパソコンデスクの上にポリスチレンの容器とフォークが置かれており、 真典、芦屋、千穂、そして恵美と鈴乃でコタツの一辺ずつを占領して漆原の座る場所が無い。

と、声屋の冷酷な宣言。

「なんだよそれ! 仕方ないだろ! てか僕が遊佐以下なのってなんかおかしくない!!」 「そんなことより熱いうちにいただこうぜ、鈴乃ちゃんも、ちーちゃんも、本当ありがとな」

「……グレてやる。てゆーかこれ、この前の杉家の豚丼の容器じゃないの?」 概ね誰に対しても優しい千穂ですら全く意に介さないのだから、自業自得としか言いようが と悲しげに呟いて、ポリエステル容器のどんぶり片手にすごすごと米を釜からよそう。 真典に、そんなことより、で片付けられた漆原は、

一でも、芦屋さん、本当に具合大丈夫ですか?」 「お気遣いありがとうございます。鎌月さんのおかげで十分休養をいただきました。あまりお

ないところではある。

世話をかけてばかりもいられませんし、今日あたりから復帰しようかと思っております」

「ええ、でも鈴乃さんみたいなお料理、作ってみたいです」 「千穂殿が精のつきそうなおかずを持ってきてくれたからな。やはり殿方は肉類だな」 また。 至極和気藹々と進む会話。それを聞きながら、恵美は鈴乃の様子を観察する。 流石に昨日の今日で真美を突き放すことはしなかったようだが、それでも千穂との会話や料

理を見る限り、怪しい点は見当たらない。 それに、考えてみれば昨日の変態強盗は目だし帽の隙間にペイントボールを喰らっている。

は昨日の襲撃者ではないと断じていいだろう。 あの塗料や臭いは一日二日で落ちるようなものではないと聞くし、そのことから考えても鈴乃 干穂厳も、経験を積めばすぐに私など追い越すことができるようになる」

たされてな」 は押しつけがましく食材の消費を手伝わせているだけだ。引っ越しの際に、大量に田舎から持 「いずれ嫌でも機会は来る。私も、手料理をご馳走しているといえば聞こえはいいが、実際に でもうちではお母さんが作ってくれちゃうから、あんまり機会が無いんですよ」 なるほど、魔王城の冷蔵庫を知る恵美に、この食材の豊富さは一つの疑問ではあったが、ま

た一つ謎が氷解する。

そういう意味では、食べ盛りの男性三人というのは、本人達を前に言うのもなんだが助かった」 「仕事が見つかるまで食費を節約するためとは言え。夏場に量だけあっても腐らせるだけだ。

んなことを言う鈴乃。 そういえば、昨日仕事で大成したいと言っていたので、緊張と警戒を解いた恵美は何気なく

干穂を安心させるためなのか、それとも恵美の忠告を受け入れて真臭狙いを諦めたのか、そ

話を振った

「ところで、どんなお仕事考えてるの?」 すると、何故か鈴乃は、不思議そうな顔をして恵美の顔を見た。

塚でのことなので選択肢は豊富だ。月の頭でもあることだし、早く動め先が見つかれば米月以 納得したように無いた。 「正社員などと贅沢は言わない。最低限の生活さえ営める奉公ならば、それでいい」 至近距離で見つめられて困惑する恵美だが、給乃がすぐに真典と為屋の顔を見てから何かに 鈴乃の回答は簡潔だった。奉公とはまた時代がかった単語が現れたものだが、都心に近い答

一なら、うちの店来れば?」 恵美がなんとなく思ったその瞬間だった。 談の答えとしてはそんなものだろう。『故郷に錦を飾る』には少々目的意味の生活に余裕も生まれるだろう。

『故郷に錦を飾る』には少々目的意識の低い回答とも思えるが、知り合って同もないうちの雑

考えなしの魔王が、空気を訪まずにそう言い放った。

138

[ ]

「最近シフト薄いことが多いから、新しい人が来ても大丈夫だと思うし、それにちーちゃんも ・・・・・・ダメだこりゃ」 千穂が身を困くし、恵美が眉根を寄せ、鈴乃が首を傾げ、芦屋が天を仰ぎ、漆 原がポヤく。

いるから、あんまり緊張しないで新人研修できると思うぜ」 全く別種の緊張が発生するとは考えないのか、そもそも真臭は、千穂が今日、どういうつも

そう性能に決めることはないわ」 恵美は仕方なく、千穂に助け舟を出すつもりで口を開く。

食卓から離れた所にいる漆原には、複雑な色の禍々しい空気が室内に渦巻くのが見えた。

で来ているのか結局分かっていないのだろうか。

候補の一つとしては考えてもいいかもしれないけど、知り合いがいる職場っていうのは、メ ットと同じくらいデメリットがあるものよ。もう少し色々考えてもいいんじゃないかしら」

なるほど、確かに一理ある」 干糖が呆気に取られつつ恵美を見る

あ、ああ。まあ、いいけど」 ありがとう貞夫殿。候補の一つと考えて、最終的には紹介をお願いするかもしれない」 鈴乃は納得したように頷き、

千穂は一瞬、恵美を見てから鈴乃に合わせて頭を下げた。恵美もその視線に気づいてほんの

千穂殿も、その際にはよろしく頼む」

似合う実面な性格 わずかに、視線を揺らした。 千穂にも恵美にも、鎌月鈴乃を怪しむだけの材料は、一切見当たらない。 全く街いのない対応。含みの見えない素直な言葉。心と技術の篭った食卓。硬い言葉遣いに

「よかったら、私が新宿とか案内しましょうか?」 恵美は思い切って、そう誘いをかけてみる。

わりを持たないわけにはいかないが、その輪を必要以上に広げる必要も無いのだ。

鈴乃が本当にごく普通の日本人であった場合、彼女の人生は極力真奥から遠い場所にあった 恵美も真典も清貧に甘んじて死を選ぶわけにはいかないので、どうしてもある程度社会と開

「女同士の方が分かることって色々あるし。こいつらに任せてたら分からないことも教えてあ

げられるかもしれないし」 真奥は不満を漏らすが、恵美は取り合わない。 ひでえ言われようだなおい

「そうでなくても、あなたに任せるよりはずっとマシだという自信はあるわ」

つんけんした態度で真臭を鼻で嗤う恵美。真臭は肩を竦めるがそれ以上食い下がらなかった。

思うけど、やっぱ遊佐みたいなオフィスカジュアルとか、スーツとかバッグとか必要じゃな い? OLならそういうとこ、知ってるんだろ?」 「仕事もそうだけど、とりあえず服装とか持ち物なんとかしてあげたら? 浴衣も可愛いとは

ていた通動用のショルダーパッグを勝手に手に取って持ち上げてみせたのはよろしくない。 「ちょっと! 勝手に触らないでよ! ニートが伝染るじゃない!」 伝染るか! なんだよ! ちょっと見ただけじゃん!」 漆原は珍しく恵美に同調するようなことを言う。それだけなら良かったのだが、脇に置い

一相変わらず、漆原さんてそういうこと平気でするんですね」 あんまりの言われように口を尖らせる漆原だが、

なんだよなんだよ! みんなして僕をバカにして!」 という千穂の冷たい声に、

と遠吠えを上げながらまた自分の棲家へと逃げていった。

まさか、浴衣しか持ってないわけじゃないわよね」 確かに私の筆笥の中身は乏しく、靴や腹物の類も数が無い。必要なら購ってみるとしよう」のなった。

持ってない。浴衣と下駄と足袋もあるが、恵美殿や千穂殿のような洋服の持ち合わせは無い」 さらりと放たれた衝撃の告白に、思わず座の人間が顔を見合わせる。

鈴乃の和装しか見たことのない恵美が何気なく尋ねるが、

E々が驚いたのを察したか、珍しくうろたえたように皆を見回す鈴乃。 、何かおかしいのか?」

芦屋が言い酸む。 鈴乃ちゃんて、大昔のお姫様とかじゃないよね」

いや、おかしいということではないのですが……」

流石の漆原も驚いたようだ。

「……遊佐さん、服屋さんとか、案内してあげたら……」 女性二人はそこまで驚きを露にすることはなかったが、

その傍らで真臭はぼつりと、一穂と恵美が困惑を顔に貼りつけて傾きあう。ま、まあ、時間あったらね」

下手なことはしない方がいいと思うがなあ」

「こちらこそ、結構なものをありがとうございます。魔王様、佐々木さんをきちんとお宅まで 「それじゃあ、朝早くからお邪魔しました。声屋さん、お大事にしてくださいね」

公私ともに魔王様をご支援くださっているのです。礼を尽くすのは当然のことです」 と、苦りきって芦屋を睨み上げる。 芦屋に見送られて部屋を出る真奥と千穂。千穂は芦屋の言葉に嬉しそうにはにかみ、真奥は、

「お前は俺のおふくろか」 お送りするのですよ」

ったく……それじゃ、行ってくるわ」

「わざわざ手料理を作って魔王城まで運んでくれた佐々木さんをお一人で帰すつもりですか」 見送ってから、扉を閉めた。 具奥と千穂の勤務は昼からだが、 8れたような顔でアパートの階段を降りる真臭と、それについていく千穂。芦屋はその姿を

と芦屋に言われて、家まで送っていくことになったのである。

も家計を助けてくれる相手に対しては寛容でいることにしたらしい。 実は漆原が延々無為健食の生活を送っていることへの苛立ちの反動だったりするのだが、 以前の芦屋は千穂が真臭に接近することをあまり快く思っていなかった節があったが、どう

奥は千穂と並んで歩き出す。 に魔王城を後にしていた。 真奥も声屋自身もそのことには気づいていない。 デュラハン号の前カゴに、千穂の持ってきたタッパー類を入れたトートバッグを積んで、真 恵美と鈴乃は、恵美が出動時間前にできるだけ鈴乃を色々案内したいということで、一足先

ちょっと残念 「デュラハン号な。でもシティサイクルってみんなそんなもんだろ?」 「……真臭さんの自転車、後ろに荷台ないんですね」

干穂はいたずらっぽく微笑む。すると真臭は難しい顔で

「二人乗りは二万円以下の罰金だぜ?」都内だと傘を差しててもダメらしいからな」 真奥がこんなことを知っているのは、ひとえに芦歴が法律違反による罰金や科料で家計にダ と言ってみた

メージを受けるのを極度に恐れているからなのだが。 すると千穂は呆れたような、諦めたような顔になり、

一知ってますし、するつもりもありませんけど、でも、そーゆーことじゃないんですよ」 なんでもないです。とりあえず笹塚駅まで出て、平州 街道沿いを幡ヶ谷の方に行きますね」

144

あ、ああ」

ることになるかもしれない。 家なので家族と同居しているはずだし、もしこのまま干穂の家にたどり着くと、家族と対面す の後ろに統く真奥。その背を見て、真奥はふと気づいた。千穂の家は一軒家だったはずだ。実 そう言うと、千穂はゆっくりと真臭の半歩先を歩きはじめた。デュラハン号を手押ししてそ

一はい、なんですか?」 「ち、ちーちゃん、あのさ」 千穂は顔だけ振り返って答える。

から美味い飯食わせてもらって、その、ありがとな」

よつけてみた。 5万さんのには敵いませんけどね。でも、美味しいって言ってもらえて嬉しいです」 |な色の声であることは分かったか、ケアのしようもない真臭はとりあえず目先の疑問を

あのさ、ご家族は何も気にしてないの?」

何をですか?」

妙に気後れしてボカしたところを尋ね返され、真臭は思わず詰まる。 、いや、その……あれだよ。ちーちゃんみたいな女の子が、俺達みたいな男んちに来るの、

ご両親に何か言われたりしないの」 一あ、そういうことですか」

「お、親父さんは?」 いながら作ったのもあるんで。言うなればお母さん公認です!」 予想外すぎる回答だ。 別に何も言われませんでしたよ。行き先は正直に話してますし、お母さんに色々教えてもら 千穂はなんでもないことのようにうーん、と、顎に指をあてて考え込む。

ある父に、真臭といるところを見られたくないような素ぶりを見せていたが…… 一あの時は、お父さんに行き先話してなかったんですけど、今日は大丈夫です」 一ヶ月前に、千穂は真臭と 18ck 巻き込まれた地下道崩落事故から救助された際、警察官で

L 「はい。今朝なんか、『もう手料理を作ってやりたい奴がいるのか』とか言って泣いてました 「あ、そう。だ、大丈夫なんだ」

一あ、それで思い出した。今日鈴乃さん出かけちゃいましたけど、お弁当どうするんですか?」 肉親公認。ますます予想外すぎる。

たのだが、真臭のその答えに、千穂は背中で問いかけた。 になっているわけではない。だから今日の勤務中の食事については本当に何も考えていなかっ 「どうするって……や、特に何も考えては……」 正直なところ、鈴乃に弁当を作ってもらったのは千穂に見られた日が初めてで恒常的な習慣

「他の人のお弁当作るのに真奥さんに聞く必要ありますか」 真異はそんな間抜けな返答しかできなかった。すると千穂は、むくれた顔で振り返る。 ……俺の?

「なら……もしよかったら、私、お弁当作ってきていいですか?」

ちゃんに作ってもらったの食ってる方が安心するだろうし、お言葉に甘えようかな」 ょんと飛び跳わた。 「いや、無いけど……まあその、あの、芦屋も、俺がジャンクフードばっか食うよりは、ちー

のためにここまでして手料理を作ろうとする意味を分からないわけてはない。 「やった!」 じゃあ声屋さんが安心できるように、栄養パランス考えて作らなきゃですね」 ただ、真奥としてはどうしても気になることがあるのだ。 本人の許可を得た干穂は、むくれた顔から一転、ぱあっと花が咲きそうな笑顔になって、ぴ もちろん真奥だって、一年以上日本で暮らしているのだ。女子高生がわざわざ赤の他人の男

ちーちゃん、そのさ」

「よその世界の悪魔だってことですか?」 ああ、真奥さん達が」 千穂はそこで言葉を切ると、周囲を見回す。

問りに誰もいないのを見ると、あっさり言ってのける。振り返り様に、夏服のスカートがふ

「……気にならないの? その、俺達がさ」

**所で真奥さんが何をしたのかも少しだけ知ってます」** 分かると思いますけど、時々遊佐さんとメールとかしてるんです。だからエンテ・イスラって わりと舞った。 「そうですね……気にならないって言えば、嘘になります。今日、遊佐さんと一緒に来たからまさか言いあぐねていることをあっさり切り返されるとは思わず、詰まる真実。 ああ、まあ……」

そんな難しないでください。アルバートさんが言ってたこと、分からない真臭さんじゃない 千穂はそんな真典の顔を見ると、困ったように笑う。 そして、本当にすんなりとその言葉が出てきて、真奥は弾かれたように顔を上げた。

| でも、私、そんなこと知る前に、真奥さんのこと、好きになっちゃいましたから|

正午少し前の日差しが降り往ぐ中、汗ばむ陽気に千穂は軽く息をつく。

ですよね 「ほら、道の真ん中で立ち止まらないでください。後ろから車来ますよ」 特に気負いもなく干穂は真異を促す。「あ、ああいや、その」

「真奥さん、二ヶ月前から、私がずっとぶりぶりしてた理由、気づいてます?」 いや……はっきりとは」

目転車を押して道の端に寄ると、傍らをクロベコヤマトの輸送車が通り過ぎていった。

あ ああ……」 「漆 原さんと戦った日のシフトで、真臭さん私に、記憶を消すかって聞きましたよね」

干穂は、大きく深呼吸してから振り返った。夏の陽光が、ふわりとまわるスカートの軌跡と、

真奥は息を吞む。その様子を見て苦笑する千穂。 ほんの少しだけ染まった類を一瞬風が撫で、干穂の髪をかすかに揺らした。 千穂の柔らかい笑顔を照らし出す。

「私、どんなことでも、好きになった人のこと忘れたくなんかありません」

いちても いちいちショック受けて立ち止まらないでください。本当に世界征服目指してるんですか?」



150 「ほら、足だけでも動かして!」 完全に干糖に場を握られる真典

っ直ぐな鍋の芯が入っていた。 その全ての覚悟が、笑顔になって表れている。真臭は、応える術を持たなかった。

分で真奥さんを好きになったんです。だから好きでなくなる時も、自分で決めます」 「遊佐さんは私が真典さんを好きになって後悔しないように、止めてくれましたけど、私は自

ふんわりと綿菓子のように甘やかな気持ちの中には、真奥ですらどうにもできない、一本真

一だから真奥さんが私のことを職場の後輩だとしか思ってなくても、別になんともありません。 「ちーちゃん……」

そのことと、私が真臭さんのことを好きでいるのとは関係ありませんから

夏の日の光が、千穂の笑顔の上に一点の嘘も無いことを、真奏に教える。 たかだか十数年しか生きていないような人間の娘にここまで言われて、魔王がただ黙って困

| そうですよ、特に女の子には気をつけてください。男の人は勘違いしがちですけど、ナメで 「……全く、人間ってのはこれだから恐ろしいな」 っているだけでは多くの悪魔達に示しがつかない。

かかると大怪我じゃ済みませんからね」

「へいへい、せいぜい時給を減らされないよう頑張りますか」 すすすすす鈴乃さん、いいいいいいいつからそこにいたんですかっ!」 あれこ そうですよ! だから私も足引っ張らないように頑張らないと……って」 真奥さん、今日から正式に時間帯責任者ですよね。頑張ってくださいね」 真臭は苦笑して頷く。千穂はそれだけで満足したのか、 鈴乃さん!」 貞夫殿、髪されているな」 真臭は自分の傍らを千穂以外の人間が歩いていることに、全く気づいていなかった。 責任ある仕事を任され、後輩から慕われている。立派な職業人なのだな、貞夫殿は」 真臭も、その気遣いに乘せてもらい話を合わせる。 共奥と千穂は揃って飛び上がる。 、やや強引に話題を変えて空気を明るくすると、意気揚々と大股で歩き出す。

先ほどまで桜色の頬だった干穂が、熱れたリンゴ状態にヒートアップして給乃に詰め寄る。

152 り雅やかだが、隣に立つまで下駄の音どころか気配すら感じさせないとはどういうことか。 浴式姿に凄 塗りらしい下駄、大きめの相柄の巾 着 袋を提げている姿は、どことなく品があ事美し 『緘止先に出たはずの鈴乃が、何故真輿と千梛の隣に忽然と現れるのだ。

目にも深刻な話し合いをしているのが分かって声をかけそびれた。勢いで出たはよかったが、 「追いついたのはつい一分前。聞こえたのは『私のことを職場の後輩だとしか……』から。遠 かなんでここにいるんですか先に出たじゃないですか!」

千穂が顔を真っ赤にしながら凄い剣幕で鈴乃に詰め寄り捲し立てる。

「い、い、一体いつからいたんですかどこから聞いてましたかなんで声がけてくれないんです

財布を忘れたことを思い出して、恵美殿に先に行ってもらい、戻ってからまた出てきたところ

そして鈴乃は涼しい顔で、千穂が捲し立てた質問にいちいち律儀に回答してゆく。

ついていたから」 「すすすすすすが乃さん!! ワザとですよね!! ワザと言ってますよね!!」 案ずるな。千穂殿が真奥さんに好意を寄せていることは、今朝の貞夫殿への態度から察しは 千穂は一 瞬で全身真っ赤にして、頭から湯気を立てはじめる。 つまりは、自分の口から真美を好きだといったことをパッチリ聞かれていたということだ。

しいんです! もうっ、も、もうっ!」 がついているのだから、改めて聞いても私は別に特別な感慨は……」 とこまでも真摯に真面目に語りかける鈴乃だが、千穂は完全に臨界点を突破した。「ん?」今なんか俺、酷いこと言われた気がするぞ」 「そういう問題じゃないんです! 理屈ではそうかもしれないけど、恥ずかしいものは恥ずか 「そうは言うが、あれを見てそれが分からない方が問題だと思う。それに自分で気持ちの整理 「そりゃそんなこと言われたら赤くなりますよ恥ずかしいですよ一体何考えてるんですか!」 「ワザととは? 何故そんなに顔を赤くしている?」 「あっ! ちょ、ちーちゃん!」 「ち、ちーちゃん、ちょっとおちつ……」 「むしろ自分の心に素直である千穂殿は、とても高濱で可愛らしいと思う。相手がどんな人で 真奥からデュラハン号をひったくり、物凄い勢いでペダルを踏みしめ、全速力でその場から 顔を真っ赤にして声無き悲鳴を上げると、

逃げてしまったのだ。

後に取り残された真異は、テールスライドでドリフトしながら曲がり角に消えた千穂に向か

って手を延ばしたまま、ぎこちなく隣の鈴乃を呪む。 髪されているな

「ナイーブな年頃なんだから変に刺激しないでくれよ……ったく」 がっくりと力なく項垂れる真臭。

「ったくもう……ちーちゃん、あんな勢いで飛び出して事故んなきゃいいけどな」 ……意外だ」 真奥が頭を搔きながら呟いたその言葉に、鈴乃は少し驚いたように目を見開いた。

あ? 俺が人の心配すんのがそんなに意外か?」 あー、なんか前も誰かにそんなこと言われたな。どんだけ俺は周りに信用がねぇんだよ」 失礼ながら……」 不貞腐れる真奥

「人から好意を寄せられることについて、どう思う?」 すると、鈴乃が突然そんなことを言い出した。真奥は暑さだがなんだかよく分からない汗を

「あ? なんの意識調査だ?」 いや……深い意味は無いのだが」

シャツの袖で拭いながら、眉根を寄せる。

「この状況見られて深い意味が無いで通るかって。でもまあ、そうだな、あんだけストレート

なんだその目は ご両親に信用されちゃあ、どういう答えを出すにしろ、誠意を見せなきゃならんだろうな…… に来られちゃな。こっちとしても下手に誤魔化したくはねえし、それにちーちゃんがってより、 変な質問をしてきたくせに、真面目に同答したら、初めて見る生き物を見るような目で見返

「だから何がだよ!」ああもうそんなことより、恵美の奴待たせてんじゃないのか?」「えっ?」あ、ああ。あ、いや、な、なんでもない。ただ、少し意外だっただけだ」 「……俺、なんかおかしなこと言ったか」

「……あ、ああ、そうだった」

ほんやりしていた鈴乃は、我に返ったように首を振った。真美は相変わらず流れる汗を拭い

ながら言う。 「笹塚駅だろどうせ。近道教えてやるよ」 ż....

「そこの小道入ってちょっと歩くと、菩薩通り商店街ってのに出るから、左に曲がって商店街 またも鈴乃は意表を突かれたように息を吞んだが、真臭はその反応を無視し、

「あ……わ、分かった、ありがとう」

を道なりに歩けば駅の真正面に出るぜ」

ら恵美に案内させて都心で買いな。んじゃな」 「あと、もし仕事すんなら電話連絡つくようにしといた方がいいから、多少金銭的にキツくて - 携帯電話は持っておいた方がいいぜ。駅前の小さな店もいいけど、気に入るのが無かった

方へと引き返していく。 千穂が走り去った方向を見てやれやれと溜息をついた真臭は、鈴乃に背を向けてアパートの

一……ああ、すまない」

いい仕事、見つかるといいな。都心に行ったら人の多さにピピるぜ、気をつけろよ」 鈴乃はその背をつい見送るが、敷渉離れた所で真奥が思い出したように振り返った。

鈴乃は、その場にしばらく立ち尽くしたまま動くことができなかった。 それだけ言って給乃の返事も聞かずに今度こそ歩き去った。

財布あった?」 笹塚駅の改札機の前で待っていた恵美は、鈴乃が来たのを認めて歩み寄る。鈴乃はどこかぼ

んやりした様子で頷いた。 一それはいいけど、どうしたの? なんか元気ないけど 一あ、ああ、大丈夫だ。待たせたようだ、すまない」

持ってる? 持ってないなら切符買わないといけないけど、作っとくと後々楽よ」 行きに乗ると、二駅増える上に新宿の端っこに運ばれちゃうから気をつけて。スイカかパスモ、 一ああ、あの、そのことなんだが」 そうね。笹塚から新福までは一駅だけど、歩くにはちょっと遠いしね。あ、間違って本八幡 電車に何故疑問符がついたのかは分からないが、恵美は気にせず頷く。

「いや……それより、これから電車? とやらに乗るのか?」

|実は、私は電車に乗ったことがない| 鈴乃は少し戸惑ったように、周囲を見回し、

などと、とんでもないことを言い出した。

「……私は、何かおかしなことを言ったようだ、申し訳ない」 617 今、鈴乃の発音は、どこかおかしくはなかっただろうか。

「しかし東京では、西瓜が通行手形として利用されているのは本当なのだな。あんな重いもの」

体どんな僻地に住んでいたのか。恵美は疑わしげな目で鈴乃を見る。

鈴乃の年齢がいくつか知らないが、一人暮らしをする年齢まで電車に乗ったことがないとは

200

と、そこまで言って、恵美は鈴乃が券売機を見て固まっていることに気づく。ては、また今度説明するわ。切符は……」 「おかしなって言うか……ううん、まあとにかく、まずは切符を買いましょう。スイカについ

東京までは出てきているのだ。その間一度も公共交通機関を使わない、というのは不可能では 「……ちょっと聞くけど、一体どうやって笹塚まで来たの?」 いくらなんでも切符の買い方まで分からないとはどういうことか。出身がどこであろうと、

ないかもしれないが不便にすぎる。 不審がる恵美をよそに鈴乃は、困惑顔を隠さずサラリと言い放った。

「私はゲートを使って直接笹塚に降り立ったんだ。多少の知識不足は、容赦してほしい」

「……なんですって?」 |ああ、そういう……| とんてもない告白を聞いたような気がして、顔を強張らせる。 あまりにも当たり前のように言うので、恵美も危うく聞き流しそうになるが、

「ま、待って、ちょっと待って!」 「だから、ゲートで直接笹塚に来て色々擬装を施したから都市生活に慣れていないと……」

恵美の心拍数が急激に上がる。意味なく胸に手を当てて周囲を見回してから、強張った顔で

パニックに陥っていた。 「あ、あなた、エンテ・イスラから来たの!!」 ちょっと変わった無害な女の子、という結論を出した矢先の出来事である。恵美の心は半分 方の鈴乃は鈴乃て、やはり驚いたように目を丸くして恵美を見上げる。

「そんなこと一言も言わなかったじゃない!」 「気づいていたのではないのか?」 - 体例をどう気づけというのか。恵美は言い募る。

「まさか本人の前で言われるとは思わなかったから焦ったが、その後あなたは魔王に近づけば 「あなたから言ったのではないか! 『魔王を狙っているのか』と」

不幸になる、迂闊に近づくなと警告してくれただろう」

ええええた!

たは協力を約束して連絡先を教えてくれたではないか」 らざるを得ない。だがすぐにあそこを引き払っても行く当てがないから助力を陥ったら、あな

「私もこれで数々の修羅場を潜り抜けている身だが、勇者であるあなたに言われては引き下が

えええええええー 混乱の巷にあった恵美だが、給乃が何を言い出したのかようやく分かってきた。

そして、初めて鈴乃と二人きりで話したあの時、双方の思惑が致命的に食い違っていたとい

「私の正体を察してああ言ってくれていたワケではないのか?」

「何をどう察すればあそこであなたの正体に気づけるのよ!」 流石に恵美は怒っていいと思った。

所帯に乗り込んで甲斐甲斐しく世話を焼くなど、あり得ないだろう!」 一おかしいと思わなかったのか! 引っ越してきたばかりの私のようないたいけな少女が、男

「思ったけど今それをあなたに言われると物法く腹立たしいわ!」

である。巻き込むも何も、最初から関係者だったというわけだ。 変わり者の少女をできるだけ自分たちの争いに巻き込まないよう色々気を揉んだ結果がこれ

じ入りそうになったが、その可能性を一番に考えてしまったのも、元はと言えば鈴乃のせいだ。 「あ、あなたこそどういうつもりで『真奥と親密な付き合いをしてるのか』とか聞いたのよ!」 「え? あ、それは、その」 「じゃあ、一体どういうつもりで『魔王を狙っているのか』などと聞いてきたのだ!」 女として真臭貞夫に思いを寄せていると勧進いしていたなどと言えるはずもない。思わず恥

一あなたが魔王と共闘したという情報があったからだ!」 その答えは、簡潔だった。

て、パカなこと言わないで!」 ったつもりでいる。 『冗談じゃないわよ! 偶然共通の敵を仕方なく一緒に倒すハメに陥っただけで、共闘だなん 恵美は、まずは自身の身の潔白を主張する。 としか考えられない。 は、日本の警察に捕えられているオルバが、なんらかの手段で情報をエンテ・イスラに送った けば千穂、エメラダ、アルバート、そしてオルバだけだ。 「勇者エミリア」が『魔王サタン』と共闘したことを知っているのは、今の魔王城の住人を除 それを世間では共闘と言うのだが、恵美の中では、かなり厳密な線引きがあるようだ。 傍目には、勇者は魔王と手を組んで大法神教と会の大神官を倒した、と見えなくもない。そだが、人がそう思うかは、確かに別問題だ。 少なくとも恵美は、二ヶ月前の戦いでは、魔王とは敵同士のまま、ルシフェルとオルバと戦 恵美は目を見開いた。 オルバの情報を得られるエンテ・イスラ人となると、その正体はかなり限定されてくる。 エメラダやアルバートが、恵美に不利になるような風説を流布するはずがない。ということ

「じゃあまさか、あなたは私が魔王と結託して教会に復讐でも企んでると思ったわけ? だか

して、電話番号と住所を敷えたその夜に襲われた。

ら昨日、コンビニであんな変な格好して襲ってきたのね?」 だが、傲然家性の怪しくなった鈴乃は、歌美の言っていることがイマイチ理解できないのか、オルバの畝間を知らず、純粋に大概官の忱を討ちに来たという可能性だってある。 オルパに近い人物ならば、彼の意志を継いで自分を狙ってきてもおかしくないだろう。

「何言ってるんだはこっちのセリフよ! ワザと間違えてるの? それとも素なの?」 「昆布煮を纏う? 何を言っているんだ?」 戸惑い顔で眉根を寄せ、考え込むように腕を組んだ。

とは、あなたしかいな……!」 魔王を庇うわけじゃないけど、聖剣を無効化する力を持ってたから悪魔じゃない、となればあ 一あなたに住所教えたその日に私コンピニで襲われたのよ! エンテ・イスラから来た奴に! そこまで言い募って、恵美ははたと踏みとどまる。 大は頭を抱える。

だと知っていたんだぞ! 教会騎士としてのあなたの実力はよく知っている! 腕に覚えが無 い訳ではないが、そんな分の悪い戦いを挑むほど愚かではない!」

**「ま、待ってくれ、私があなたを?」そんなことはしていない!」私はあなたが勇者エミリア** 

あの変態大量使いは、目だし相の隙間まで思い切りカラーボールを喰らっていた。 難いた様子で弁解する鈴乃をよくよく観察する。

なら、彼女の目は今頃蛍光オレンジのパンダになっているはずだ。 食卓で隣に座った時、彼女からは異臭も、それを隠す不自然な芳香もしなかった。 整った顔立ちと瑞々しい肌のせいで気づかなかったが、よく見れば給乃はすっぴんである。 カラーボールの特殊塗料は市販の洗剤では落ちないよう作られているが、昨日の強盗が鈴乃

困惑する鈴乃を追求するのはとりあえず控え、恵美は仏 頂 面を作ると低い声で尋ねた。

りで魔王城に入り浸ってるの!」 「……とにかく、祭しの悪い私に教えてくれない? 結局あなたはどこの誰で、どういうつも とは言え、一応真臭や芦屋の気配を警戒し周囲を見回した恵美は、半ばヤケクソである。大声で話しているが、周囲の人に聞き咎められて困る内容でもない。 もし意思の疎通に行き違いがあったとしたら、申し訳ない。だから改めてお願いしたい。私 私の本当の名は、クレスティア・ベル。訂教審議会筆頭審問官だ」 思いがけないところで出てきた『訂教審議会』の名に、思わず鈴乃の顔を二度見した。

真摯に頭を下げる鈴乃。その頭のつむじと、。十字花。と呼ばれる四枚花弁の花をあしら

、協力をしてはくれないだろうか。勇者エミリア・ユスティーナ。私は、決してあなたに害

「とりあえず会社に遅刻したくないから、詳しい話は新宿に着いてからね」 った朱色の簪を見ながら、恵美は溜息をつきつつ駅の時計に目をやった。

くして恵美の背を見る。 「日本て、そういう国なの。ほら、行くわよ」 ああ、あ? ええ?」 鈴乃は鈴乃でまさか自分の正体より日本の会社を優先されるとは思わなかったのか、目を丸 そして、さっさと改札へと向かってしまう。

少ししてやったりの気分の恵美はパスモカードをタッチして改札を抜けるが、

「ま、待ってくれぐっ!」

「は、離せっ! わ、私はここで立ち止まるわけには……」 恵美は、新宿にたどり着くまでに鈴乃が遭遇するであろうカルチャーギャップと、それにま 切符も持たずに自動改札を通ろうとして閉じた扉に腰の帯紐の端を挟まれている鈴乃を見た。 後ろで鈴乃が妙な声を上げたので振り向いた。

つわるトラブルを想像し、一気に憂鬱になるのだった。

に捕らわれていること、助けを求めていることが分かった。 あったのだ。それはなんと、他ならぬオルパからの着信だった。 してもおかしくないからだ。 **規を彼女は手に入れていた** 魔王サタンの反応が一番多く検出されたらしい記録が残ってはいたが、それ以上に明確な証 ーンに呼応するよう編まれたソナーも無数に発信されていた。 勇者エミリアは異世界で魔王サタンと結託し、共闘していた』 66分ムシのいい話だとは思ったが、流石に次の一言だけは聞き流すわけにはいかなかった。 ノイズの多い概念送受だったが、彼が存命であること、異世界でゲートを開くことができず 彼女がオルバの書斎を調査していた際、概念送受の触媒となる宝具。念話品球。に着信が それはほんの個然だった だが、これを彼女は聖壇には報告していない。これを報告した日には、全員がその場で卒倒 また、エミリアが打ち砕いたという魔王サタンの片角の破片。そこから読み取れる魔力パタ その聖法気波動を探査するソナーを、異世界に向けて放った痕跡が見つかったのだ。 エミリアの持つ聖剣の母体である聖具『進化の天銀』

166

本という国は、私の理解を超えている……こんな都市は、エンテ・イスラのどこにも……」 彼女の混乱は笹塚駅で自動改札に行く手を阻まれることから始まった。改めて切符を買った 鈴乃は、疲労困憊していた。 宣教部出身として……未知の国を分析する専門家を気取っていたことが恥ずかしい。この日

はいいものの、ICカードと切符の違いを理解せずにタッチセンサーに切符を押しつけて再び

「あくまで私の邪魔をする気か!」

ばし、電車の車内放送に律儀に返事をして周囲から合異の目で見られ、終点間際のポイント切 り替えの調動に足をすくわれて車内で転んだ。 と叫んだのを皮切りに、エスカレーターに乗れば終わり間際で転倒して腹いていた下駄を飛 6に到着してからも人の多さに驚き、献血ルームの赤十字記号を教会とカン違いし、地上\*\*

に出れば無数の高層建築と車と人の波に仰 天する。 **ます患脱しきってしまっていた。** 恵美の職場近くのカフェ『足りず』に落ち着いたときにはもう驚き疲れて無表情な顔がます

「それで……なんの話だったか……」 たな満足を求め続ける、という社風から来ているらしい。 ちなみにこの店名の由来は、商品を提供する側の品質の向上と接客に満足は許されず常に新

|まさかテレビ見て『薄い板の中に人が』なんてセリフを本当に言うとは思わな……| 鈴乃は頬を染めてテーブルを叩く。

一その話はもうやめてくれっ!!」 本人の弁を信じるなら、パソコンや携帯電話、テレビの存在はきちんとリサーチ済みだった

らしい。だが、実際に見ると驚きの方が勝ってしまい、ついそれが口を突いて出たというのだ。

「私が調べた限りでは、もっと大きな箱型だったはずだ! 箱型の機械なら、人が入っていた

義をはがす際に思い切り中身をはねさせた。 一一体あなた、何を見て日本を勉強したの?」 恵美は運ばれてきたアイスコーヒーのグラスを手に取ると、一口含んで乾いた喉を潤した。 **町乃は紅茶を注文したのだが、一緒についてきたコーヒーフレッシュの使い方が分からず、** 

「形の問題じゃないし、人が入ってるワケでもないんだけどね」

《かなかった!」

と為すことは現代日本にそぐわないからだ。 \* 恵美はかねてからの疑問をぶつけてみた。日本を学んだという割には、色々と鈴乃のやるこ

だ。他にも、日本の近現代で最も長い期間続いた昭和時代のドキュメンタリーなどを中心に」 「和服は日本の伝統衣装だと分かってから、一番多く和服が出るジダイゲキというもので学ん 一つ一つ思い出しながら言う鈴乃に、

「聞きたいんだけど、気に入った時代劇ってなに?」 少しだけ勢い込んだように尋ねる。 恵美は苦笑する。そして、 「あなたの妙な時代錯誤の謎が色々と解けたわ」

そこだけなら時代劇好きの女同士、分かり合えるかもしれないと思ったからだ。 忠美自身時代劇が好きなのだが、自分の周囲には時代劇の話題を振れる人間がいないので、

のが好みだな。『水戸職 将 第』や『怒りんぼう将 第』などは、あまり架線に響かなかった』『そうだな……『大展 紋太郎』や『子連れ郷子』に、あとは『三匹が蹇ぐ』のような浪人も「そ 「はあ……。それで、話を管塚まで戻すと、『『教 審議会の筆頭審問官さんが、一体私になん ---あっそ」 どこまでも、鈴乃と恵美は意思が食い違うようだ。

の用? どういうつもりで魔王城の隣なんかに住んでるの」 恵美は気を取り直して、本題に戻った。

た刺客、というワケではないようだ しかし、ならばその目的はなんなのかと言えば皆目見当がつかない。 これまでの鈴乃の恵美への態度を総合すると、町教審職会とは言うものの、恵美の命を狙っ

恵美は鈴乃の一挙手一投足を慎重に見極めながら話す。

「そうだな、かいつまんで話すと」

鈴乃は緊張の面持ちで、恵美に向かって身を乗り出した。

王を見張っていれば……」 査して分かったのは、魔王がどこでどういう暮らしを含んでいるかということだけ。だから磨 「いずれは勇者が現れる、と。とんだネズミ捕りにひっかかったものね」 私の最初の目的はあなたの生存を確かめることだった。だが、オルバ・メイヤーの痕跡を調 それで本当にはいほい誘われてしまったのだから、恵美としても肩を竦めるしかない。

話も、オルバの捏造なのだろうということは分かる。彼の意志が教会の総意では決してない。 が私をエンテ・イスラ人と知らずに見せた態度を見れば、あなたが魔王と共闘しているという 「オルバ・メイヤーがあなたに対して行った不義に関しては、お詫びのしようもない。あなた

少なくとも私は、あなたの味方でありたいと思っている」 そこで本題だが、と前置きして、鈴乃はより一層身を乗り出した。

「私と一緒に魔王サタンを倒し、エンテ・イスラに戻ってほしい。あなたの生存を知らしめて、

オルバの不正を隠そうとする教会を正してはもらえないか」

テーブルの上で盛大にずっこけた鈴乃、危うく紅茶をぶちまけそうになる。

「もうちょっと考えてくれたっていいだろう!」

恵美はアイスコーヒーにシロップを入れてかき混ぜる。 や、私もう教会の人に協力するつもりないし」

「あなたのエンテ・イスラでの地位と名誉を、在るべき姿に戻そうというのだぞ?」 「私が気づいていない間の約束なんて無効よ」 協力すると約束したじゃないか!」

別に教会や諸王国にどう思われてようと気にならないし」 恵美はあっさりそう言って、窓の外に視線を移す。鈴乃もそれにつられて表を見た。

厳しい表情で問いかけると、恵美はカフェの表にある、地下道への入り口を目で指し示した。

かってもらえるわよね? オルバがこっちに来てることは知ってるんでしょ?」 たところから来ましたってあなたを、私がはいそうですかって、素直に信じられないのは、分 「大勢の人がいた地下道を、私と魔王を殺すためだけに崩落させた奴が最高責任者を務めてい

「……それは何故」 ても、あなたが町 教 審議会だというなら、あなたと協力するつもりは一切無い」 かしら。漆原がルシフェルだってことは分かってるのよね?」 アルバートも知ってることよ。なんなら後で、ルシフエル本人に聞いてみてもいいんじゃない 「あいつを倒すのは私一人の仕事よ。あなたは手を出さないで」 「だから、私も魔王も討伐するつもりでやってきた。お互いに協力すれば」 一私が昨日の強盗をあなだだと思ったのも、それが理由。ただ、もしそのことが無かったとし 「オルバが私を殺すために、ルシフェルと一緒に散々日本に迷惑をかけたことは、エメラダや 「まさか、そこまでのことを……」 何故、そこまで」 魔王を討伐するのは、勇者の仕事だからよ」 恵美の答えは至極簡潔だった。 恵美はグラスを置くと、毅然として言い放った。 当たり前のことのように言い放つ恵美。鈴乃は勢い込む。 恵美と外を交互に見ながら言葉を失う鈴乃。領きながらも信じられないといった面持ちだ。

訂教……いえ、異端審問会出身のくせに、全部説明しないと分からない?」

いがして、口を噤む。 『記教 春議会』ではなく『異端春間会』と敢えて言い直した恵美。鈴乃は、血圧が下がる思

「私はあなたが何をしてきたか知らない。だから気に障ったらごめんなさい」

鈴乃の雰囲気が硬くなったことに気づいた恵美は少しだけ口欝を和らげるが、しかし、

まらない小細工で下手なちょっかい出すと、すぐに看破されるわよ。あれでも魔王ですからね」「それとなんのつもりであいつらに食糧援助してるか知らないけど、一応警告しておくわ。つ 「私は、自分の魔王討伐の結果を、誰かに利用されたくないの。それだけは分かって頂戴」 そこまで言った恵美は店内の時計を見ると、出勤の時間が近づいていることを見て取った。

一……忠告擁み入る」

「私は私のために魔王を討つ。だからもう魔王には近づかないで、安心してエンテ・イスラに

帰って。二度と魔王達に、向こうの土は踏ませないわ」

し針乃に差し仕した。 伝票を手に取り立ち上がる恵美は、ショルダーパッグの中から丸められた薄い冊子を取り出

駅で取ってきたんだけど、他にも色々あるから自分で探してみて」 「とは言っても、あなたにはあなたの都合があるもんね。だからこれ、無料の求人誌。さっき

鈴乃は呆けたように、ブタが描かれた求人雑誌の表紙と恵美の顔を交互に見た。

「こっちにある程度の期間いるつもりならよく読んで、ちょっとこの世界の仕事を勉強しなさ

少しだけ疲れたように額に手を当てて、溜息をつく。 呆気に取られている鈴乃を残して、恵美は会計を済ませて店を出た。 ンを研究したほうがいいわ。じゃ私、これから仕事だから。帰りは一人でも大丈夫よね」

い。その言葉遣いやスタイルは、いくらなんでも時代がかりすぎよ。道行く人見て、ファッシ

ことはないだろう。 一週間もの間何もしなかったのだから、今さら恵美に突っぱねられたくらいでヤケを起こす

「あれだけ言っておけば、大丈夫かな」

オルバとは違って恵美を連れ戻したいような素ぶりも見せているので、恵美の不興を買うよ

ーリーピタンではなくきちんとしたドリンク栄養剤でも購入しようかと思ったその時、 うなこともしまいという計算もある。 なんとも過密なスケジュールの午前だが、この後仕事が終わるまで気力が持つだろうか。

「……あ、おはよう梨香」 「あれ、恵美じゃん、おはよう」 声をかけられて振り向いた。 職場の同僚、鈴木梨香が丁度出動してきたところだった。今のところ、日本で恵美の最も気

一珍しいね、カフェでモーニング?」 のおけない友人である。

「そんなわけないでしょ、女の子よ」 「まあ、そんなところかな。ちょっと、知り合いと会ってて」 「おや、恵美がプライベートな人間関係を言い出すとは珍しいわね。何?」ひょっとして男?」 日常の益体もない朝の会話を交わしながら、恵美は友達と連れ立って、職場に向かって歩き

174

はじめたのだった。

お使になって出動した真臭に、千糖は米搗きパッタのように何度も頭を下げてデュラハン号「す、すいませんでした\*\*。」

店の裏にデュラハン号を駐めて、なんとか千穂を宥めすかして二人で店に入った真奥。 真奥は笑って許したが、千穂は顔を真っ赤にしたまま真奥の顔を見ようともしない。

あれ?」 店内を一瞥して眉をひそめた。羞 恥心で全身が炎上しそうになっていた千穂も、すぐに機

子がおかしいことに気づく。

真奥の出動時間は基本的には十二時。マッグ幡が谷駅前店は住宅街とオフィス街の狭間とい

```
「何故……何故私はこんな日から、事業所の研修などに行かねばならんのだ!」
                                         ンタッキーのせいと信じて疑わないようだ。
                                                                         らば天気や曜日などの事情でも決してあり得ない数字ではないのだが、今回ばかりは木崎はセ
                                                                                                                                                   はないかと想像する」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                が、顔面を蒼白にして木崎を遠巻きにしている。それだけで真奥は何が起きたのか悟る。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     う立地もあって、その時間からランチタイムの混雑が始まるのだが、今日に限っては普段のラ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           「お、おはようござ……」
                                                                                                                                                                                       「前日比が八十パーセントを割っている。私はにっくきセンタが、姦計をめぐらせているので
                                                                                                                                                                                                                                                        制のオープンから六時間。総集客数は、既にセンタッキーの後塵を拝している」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      振るわん」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    ・シュの子兆が見られない。
                                                                                                              いくら新規オープンのライバル店とは言え、流石に言いがかりである。それに前日比八割な
                                                                                                                                                                                                                                                                                            恐る恐る声をかけた真奥に、木崎は硬い口調でそう返す。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      いま・・・・は?
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           木崎のあの張りついたような笑顔は、売り上げが伸び悩む日特有のものだ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                レジカウンターの中では木崎が満面の笑みで立っており、その後ろでは早番の学生スタッフ
```

笑顔のまま怒号を発する木崎。早番のクルー達がびくりと身を震わせた。

「ハイ、イヤデス」 凍るのは何故だろう。 「想像するだに悪夢だが、もし今日の時間別集客数のペースがこのままなら……」 「グリーンランド行きは嫌だよなぁ? ああ? 店長代理の真典貞夫」 まさか魔王の身の上で、蛇に睨まれた蛙の気持ちを実体験するとは思いもよらなかった。 木崎は真臭、千穂に続き、ぐるりとクルー一同を見渡す。美人の笑顔のはずなのに、背筋が

木崎は真奥の両肩をカウンター越しに振むと、血に飢えた鍬のように双眸を光らせる。

を伸ばす策を講じろという意味であり、センタを物理的に亡き者にしろという意味ではない。 「イエス、マムー」 「私が許可する。どんな手を使っても構わん。センタッキーを、倒せ」 もちろん、どんな手を使っても構わんというのは、常識的な範囲でマグロナルドの売り上げ 真臭どころか、千穂やクルー達も居住まいを正して敬礼を唱和したのだった。

タッキーフライドチキンの新規店舗は遠目に見ても分かるほどの繁盛ぶりだ。

ランチタイムのピークになってもラッシュと呼ぶにはいまいち手ごたえが悪く、一方でセン

メイジャー・ファイヤーズおじさん人形の笑顔が忌々しい。 センタッキーフライドチキンのマスコットキャラとして、各店舗に飾られている髭の老紳士、

らには期間限定コーヒーおかわり自由の告知を呼び込みで行うなどを、千穂や他のクルーにも 売り上げの鬼の異名を取る木崎がまさしく鬼の形 相で店を後にしてから、真奥はできうる 叱責を受けない程度の量的サービス。クーラーボックスを使った店頭でのシェイク販売。さ

しかしそんな努力も遠しく、十四時のレジチェックの合計集客敷の項目には前日比七割程度

積極的に指示。時には自分も表に出て声を噴らして呼び込みを行ったのだ。

の数字が記載されていた。

一あー、参ったなあ……初日からコレじゃあ……」

客が入っていないわけではないが、センタッキーフライドチキンに対して異常な敵愾心を燃 真奥のみならず、千穂やクルー達も思っていることだ。

やす木崎を納得させられるだけの数字では到底ない。 少々効きすぎの感があるエアコンによる体と心の寒さが全員の脳裏に『グリーンランド』を

いらっしゃいませ!!」

真奥は素早く声を上げた。自動ドアが開き、新たな客が訪れた。

お忙しいところ失礼します。店長はいらっしゃいますか?」 その人物は真っ直ぐカウンターまで歩いてくると、開口一番言い放つ。 小柄な男性だった。細身の体で整った顔立ちに大きめのサングラスをかけている。手に持っ

・臓が谷駅前店に関わる幹部社員の顔と名前は熟知しているので、外部の営業か何かだろうか。子どもが一昔前のヤクザのモノマネをしているようにしか見えない。

た靴を見るに勤め人のようだが、小柄な体型にそれだけやたらと浮いたサングラスのせいで、

店長不在の時こそ、時間帯責任者にして店長代理たる自分の出番と意気込む真典。突然の申

す真奥と申します。私が代わりに 承 れるご用作でしたら、お何いいたします。 男性は少し大明に暦を上げた。 し出に困惑するクルー達を尻目に、真奥はカウンターから出て男性の前に立つ。 「あなたが真臭貞夫さんですか、お噂は伺っておりますよ」 『申し訳ございません、店長の木崎は本日不在でございます。私、時間帯責任者をしておりま 小柄な男性は、物理的には下から真奥を見上げているのに、精神的に真奥よりずっと上から

の目線でものを言っているように聞こえる。 その名にそぐわぬ勤勉さ、優秀さ、包容力、どれを取っても、非常に人間味溢れる方だと」

一は、はあ……恐れ入ります」 その名にそぐわね、とはどういう意味か。以前恵美に、名前が若者らしくないとは言われた

ドラントか香水でも使っているのだろうが、ここまで強い人工香料を嗅いでしまうと、飲食店 ことはあるが、初対面の人間の名前を馬鹿にしているとも取れる発音に違和感を覚える真臭。 従業員には仕事の妨げになってしまう。 また目の前に立って気づいたことだが、やたら強いミント系の香りを身に纏っている。デオ

一いいえ ありませんよ ですが、あなたのことは、ずっと以前から存じておりました」 困った人なのだろうか。真奥の脳裏にそんな失礼な考えがよぎる。 小柄な男性は口の端を上げて笑う。

というのか。

"あの、失礼ですが、どこかでお会いしたことはございますか?」

それ以前に、ファーストフード店のアルバイトに過ぎない真奥の話など、どこの誰に聞いた

一失礼、申し遅れました。私、こういう者でございます」 と、内ポケットから名刺入れを取り出し、一枚抜き取って真奥に差し出す。真奥は一礼して

そこで初めて男性は、思い出したように手を打った。

その名刺を両手で受け取り、肩書きを見て聞まってしまった。 センタッキーフライドチキンの、店長さんでいらっしゃる……」

マグロナルドのクルーに、動揺が走る。

「猿江三月と申します。これからはお向かいさんとして、よろしくお願いいたします」

美しい。早くからこちらで営業されていたマグロナルドの煩眼、恐れ入ります」 「それにしても嘘が谷はいい町ですね!」住宅街とビジネス街の狭間で客層は豊か、女性は皆真典は、頭の臭でチリっと火花が飲るのを感じた。 「本当はもっと早くご挨拶に似っべきでしたが、何せ忙しくて、遅くなりまして申し訳ない」鏡江と名乗った小柄な男性は、小さく微笑んで頭を握く。

「……はあ?」 千穂が真奥の後ろで、呆れたように呟く

も大丈夫な様子で安心しました」 「初日から大変な盛況でして、ようやく暇を見て伺えたのですが、こちらは私がご挨拶をして 遠まわしにこちらの売り上げが振るわないのを当てこすられて、真奥ははっきりと、現実世

界には存在しない『イラッ』という擬音が脳裏に響くのを聞いた。

店長代理真奥貞夫ではない。ギリギリの締で切り返した うしてゆっくりご挨拶ができましたから」 「いえいえ、たまたまウチが目新しさで勝ってしまっているだけで、じきに元に戻りますよ」 「……恥ずかしながら、当店は本日お客様の入りがはかばかしくなくて。ですが、おかげでこ しかしこんなことで営業スマイルを崩すマグロナルド幡ヶ谷駅前店午後時間帯責任者にして

セットをいただきましょう。.....っと」 したが、いずれこちらからもご挨拶に何いますので、その時はよろしくお願いいたします」 るのだ。 ているだけの真臭がそれをするわけにはいかない。最終的に真臭の行動の責任も木崎に帰属す 「噂の美人すぎる店長にお目にかかれなかったことは残念ですが、折角ですから、持ち帰りの 「これは……どうやら本当に、私の知るあなたではないようだ」 「そう願います。駅前商店街の仲間として、お互い頑張りましょう。生憎今回は店長が不在で真臭はその挑発を大してストレスなく受け流すことのできた自分に、内心驚いた。 美しい」 猿江は少し意外そうに、それでも皮肉な笑顔を浮かべたまま 真奥の後ろで成り行きを見つめるクルーの中から千穂に目を留める。 頭を下げ続ける真奥を見てそう言った なので今日はとっとと帰れ、という一言を音外に含んだ丁寧な応対 もしこれが木崎だったら、意外と堪え性なく猿江を叩き出しそうな気がするが、店を預かっ しかし、それをさらに切り返す、跳道を隠れ蓑にした、自分の優位を誇示するための挑発。

真典が猿江の視線を迫って千穂を見た一瞬のうちに、猿江は千穂のいるカウンターまで瞬

間移動していた。 「実に将来性豊かな可愛らしいお願さんだ。ぜひあなたに、私の注文するセットを作っていた

だきたいものですね。そのたおやかな手で」 その一言に、千穂はあからさまに顔をしかめる。

「佐々木さん」 を逸したスタッフへの態度に千穂は一瞬口を開きかけて、 猿江がマグロナルドを挑発しに来たのは誰の目にも明らかだ。その上、お客としても常 軌

って帰るまで、ずっと千穂の挙動を目で追っていた。 お客様に、商品のご案内を」 その口を、真臭の鋭い仕事用の呼びかけが塞いだ。 真奥は猿江をカウンター前に促す。猿江はもう一度だけ真奥を見ると、注文した品を受け取

一だって絶対、あの猿江って人、うちのことパカにしに来たんですよ。あんなこと言われて、 猿江が去った店内で、干穂はずっと仏 頂 面だった。

取る以上のプライドを持つまでに成長したってことだから、俺としてはそっちの方が嬉しいね」 真爽さん悔しくないんですか」 「店をバカにされて悔しいと思えるなら、俺の育てたちーちゃんが、仕事に対して時給を受け

つもりなのに、真臭に褒められて顔がだらしなく緩んでしまうのを見られたくないからだ。 真典には聞こえないように呟くと、千穂は顔を伏せてしまう。店を馬鹿にされて怒っていた 「……真臭さん、普段鈍いくせにこんな時ばっかりそういうこと言うんだから」

膨れっ面で口を引き結んでいたはずの千穂の顔が、むずがゆそうに歪みはじめる。

「ムカつく客相手にムカついたまま応対したら、相手のレベルに落ちることになるだろ。こっ

くれる人は、どんな奴でも客は客」 ちはきちんとスジ通してこそ、仕事は成り立つしプライドも保たれるってもんだ。お金出して

鼻の下をこすりながらふんぞり返ってみせる真奥。

千穂は苦笑する。 「それ言ったら台なしです」 「どうだ、少しは店長代理らしいだろ」

なかった。気分悪かったろ」 「あー、でも、ちーちゃん相手にナンパまがいのことをするのを止められなかったのは。すま

「そんな、気にしてないです、あんなちびっ子店長の言うこと」

「ちびっ子店長か、そりゃいいな」 真臭は手を叩いて笑い、他のクルーも千穂の感想に同意するように頷く。 軽く頭を下げる真臭に、千穂は慌てて首を横に振る。

な強い香水つけてたらクレームつくぞ」 一ても、あーいう店長の下で働くのは、不幸だよなあ。飲食店やってる自覚あんのか? あん

ライバル店のことながら気になってしまう真奏。同じ商店街に所属している店舗同士だと、

同業の評判が影響してくる可能性があるため、手放しに喜べないのが困りものだ。

一様答葉でサングラスっていうのはいいんですか?」 千穂が尋ねる。

あるかもしれないし、最近じゃ線引きは難しいかもな」 「あー、サングラスは紫外線対策になるって声屋も言ってたしなあ。健康上の理由ってことも そしてそれ以上に猿江の不思議な言い回しは気にはなったが、今はそれよりも閉店までにな

よっし、気合入れていかねぇとな」

んとか客数と売り上げを盛り返さねばならないのだ。

一私も、ぜええったいに負けません!」 干穂も透き物が落ちたようにスッキリした顔で、他のクルーが驚くような大声を張り上げ、

「さぁー! 何百人でも来てください! 私頑張ってお仕事しますよっ!!」 と気勢を上げた。

「その意気だ。今日はこの後、具体的な敵情報告も入ってくることになってるから、締まって

「立ってる者は親でも使え、まして部下はこき使えってな。俺の収入にかかる必要経費だっつ 一般情報告ですか?」 十穂が尋ね返すと、真奥は胸を張って策く。

ずかに適巡して、 ったら、淡々了解してくれたよ」 一ちょっと行く所があるの」 恵美は梨香と揃って退勤する。ロッカールームで梨香に夕方の予定を尋ねられた恵美は、わ 夕刻になっても夏の東京は昼間と変わらない熱波が町を席巻している。 てお誘いを軽く回避した

今朝は鈴乃に対して強いことを言ったが、恵美が硬い態度を見せたことで、鈴乃がなんらか。 \*\*\*\*

のリアクションを起こしていないとも限らない 「ありや残念。今朝のお友達さんと何か関係あるのかな。じゃあ、仕方ないから鷹野フルーツ

バークの割引券が有効なうちに、私とデートしてね」 一……か、必ずどこか空けるわ。今日はごめんね」 は命感と自制心を発揮して煩悩を断ち切った。 恵美の脳裏に色とりどりのフルーツパイキングの映像がフラッシュパックしたが、最大級の

がいることに驚いて、情けなくも動揺を表に出してしまう。 「あれ?」もしかして朝、恵美と一緒にいた人?」 そんな一幕があったものだから、ビルから出た途端に、そこに朝とは全く違う姿をした鈴乃

|恵美殿、ようやく動務を終えられたか!| 恵美は一瞬、知らんぶりして逃げ出そうかとすら思ってしまった。だが、

当の鈴乃が恵美を呼びながら駆け寄ってくるのだ。観念するしかない状況に追い込まれて、

工の簪を挿し、ファッションビル角丼に入っている女性ものブランドの紙袋に、DEFマート 呆れ顔で鈴乃を見る。 京都旅行のパンフレットにでも使えそうな涼やかな流水模様の浴衣に、十字架形のガラス細

のピニール袋にはサンダルらしい箱が透けて見えている。 金魚が描かれた和柄のトートバッグには風船がくくりつけられており、中からミネラルウォ

「そこまでやって、どうして浴衣以外の選択ができないのよ」 ーターのペットボトルとムーンバックスコーヒーのタンブラーが覗いていた。

この半日で一体何が起こったのだろう。 恵美としても、開口一番そう言うしかない有様だ。勇者に魔王討伐の協力を申し出た人間に

一布教子定地域の経済動向の調査は、宣教部の仕事の一貫だ。それに道行く若い女性には、浴

衣姿も散見されたしな」 「……お金、そんなに持ってたの?」

だったのだろう。現代日本の『円』の価値に疎そうな彼女が、貴重な品を拾て値で手難してい くつかを『ムギ兵』という店で買い取ってもらった」 一こちらに来るに当たり、換金性の高いものはある程度持ってきているからな。そのうちのい 有名な質屋の名前を挙げる鈴乃。だが高位聖職者が言う『換金性の高いもの』とは一体なん

なければ良いのだが、 「どうだ、ちゃんとスイカも買えたぞ! 一人で、ちゃーじ? とやらもできた!」 更に鈴乃は、パッグの中からこれまた可愛らしい和柄のパスケースを取り出して、 と、珍しく興奮した様子で、ICカードのペンギンのロゴを恵美に向かって見せつける。

ここまでくると初めてのお使いを達成した子どものノリである。

188 こちら、恵美のお友達?」 いっそのこと頭を撫でてやろうかと思った恵美の傍らで、梨香が尋ねた。

「初めまして。私は鑑月鈴乃という。東京に引っ越してきて聞もないが、恵美殿には色々とよて逸。巡じていると、何を思ったか鈴乃がいきなり梨舎に向かって自己紹介をしはじめた。 「なんでちょっと煮え切らないの」 をなってい訳が頭を巡ったものの、自分の出 自について嘘をつかねばならないものばかり色々な言い訳が頭を巡ったものの、自分の出 自について嘘をつかねばならないものばかり

「ま、そういうことになるのかしらね」

えーっと

恵美は一瞬 悩んでから、

「あ、どーも。私は鈴木梨香。見ての通り、恵美の同僚よ」 くしてもらっている」

「てことは、鎌月さん、永福町に越してきたの?」 してきたと思うのは自然なことだ。 梨香が当たり前のように尋ねた。恵美が世話を焼いたというなら、恵美の家の近所に引っ越 鈴乃の真意を図りかねて口を出せないでいると、

「いや、笹塚に引っ越してきた」

だが、この瞬間、恵美は嫌な予感に襲われた。

そ、そうだけど 「私が越してきて聞もない頃に、お隣を尋ねてきた恵美殿に声をかけてもらったんだ」 何を言い出すつもりだ、鈴乃に目で問いかけるが、鈴乃は恵美を見ていない。

「笹塚? あれ? 恵美んちって、水福町だよね?」・

「ここで待っていたのは、恵美殿に、改めてお願いがあって」 たような顔をしたまま、恵美と鈴乃の会話を聞くという構図が出来上がった。 計らって、鈴乃は素早く恵美に視線を移す。そして会話を切られた梨香が、喉に小骨が刺さっ 一……何を誰い出すつもり?」 「あー、なるほど……ああー? 恵美が、笹塚?」 梨香は一瞬納得しかけて、何かに引っかかったように言葉を途中で切った。その瞬 間を見

が、狙いが分からなければ対処のしようがない。 をしてくるような相手ではないはずだ。ここまで来れば鈴乃が何かを企んでいることは分かる 今朝あれだけ手厳しく突っぱねたのに、今さら無関係の人の目があるところで同じ頼みごと

ねないので少し厳しめの声色を出すことで、 今まで輪に入っていた梨香を下手に場から離せば、逆に梨香に疑念を抱かせることになりか

「……えっと? 私がいたらマズそう? 席外そうか?」 空気の読める良き友人である梨香からその言葉を引き出すことに成功する。だが、鈴乃はさ

らにその上を言った。 を見に行きたいんだ」 「いや、大したことじゃない。すぐ済む。お願いというのは、恵美殿と一緒に、貞夫殿の職場 「ちょ、何を言い出す……」 「サダオ? なんか、聞いたことあるような……」

いのは分かるが、私も私で、はいそうですかと引き下がるわけにはいかないんだ」 「あなたにあそこまで言わせる真奥貞夫の仕事を見てみたい。あなたが私を彼に近づけたくな 梨香の前で平然と真臭の話をしだす鈴乃。ようやくその意図を悟った恵美だが、既に手遅れ

「ちょ、梨香、違っ……」 恵美がうちに来た時話してた人だ! え、何、私もしかして修羅場に遭遇してる?」 ほら……こうなった……」

「思い出した! 真奥貞夫って、恵美の友達の男だ!」

その瞬間、二人の会話を横から聞く格好になっていた梨香が、手を打って大きな声を出した。

恵美は頭を抱えた。鈴乃は、日本語の運用を恣意的に誤った。

しれないけど、後々面倒ないよ?」 からさ、本当に後腐れなくするなら、やっぱりその真臭って人を同席した方が、気まずいかも いだってことは分かってるんだけどさ、修羅場って根本的にワンサイドじゃ解決しないよ。 男の心臓を、物理的に射止めるという意味で狙っているのだから。 ……確かにそうかもしれないな 一だから契香、そんなんじゃ…… 「あの、あのさ、一人の女として、あと部外者として一つ言わせてもらうと、その、おせっか ちょっと 幡ヶ谷のマグロナルドで働いているらしい」 て、どこにいんの、そいつ」 ちょっと! 日本語の字面だけを見れば、確かにそう聞こえなくもない。実際に二人の女が、真臭という 恵美、落ち着きな。幡ケ谷か、こっからスグじゃん。なら、決着早い方が良くない?」 鈴乃はさもその空 勝手に想像を膨らませる梨香を止めようと慌てる恵美だが 梨香は場を和ませたいのか、複雑な笑顔を浮かべたままひらひらと両手を振った。 **恵見を参考にするかのように、会話の相手をさり気なく契香に戻している。** 

一わ、私は落ち着いてるわよ! 梨香、そんなことする必要なんか無……」

「大丈夫、取り乱さないで、冷静になろう。私は基本的には、何があっても恵美の味方だから」 勘違いをさせた鈴乃とした梨香、がっちり握手。なんのフォローのつもりか、鈴乃を安心させるように微笑みかける。 だけど安心して、ジャッジは常にフェアなつもりよ」 事態を誤解したまま味方もクソもないものだ。

□一人とも私抜きに何勝手なこと言ってるの! わ、私は行かないわよ!」 状況を修正する手段が見つからない恵美は

と、最後の手段に打って出た。だが、そんな恵美に対して、日本人の同僚と、エンテ・イス

しいいのか?」 ラの聖職者は同じ内容の日本語で、全く違う意図を投げかけてきた。 どこか悲しげな梨香の瞳。自分が好き勝手に振る舞っていいのかと問いかける鈴乃の視線。

その呻き声を観念したと受け取ったか、

完全に、総乃の作職勝ちた、

けど、おせっかいに首突っ込んだ以上相応に責任は取るから、大船に乗ったつもりでいて」 「……じゃ、ちょっと遠征しましょうか。もちろん、大事なところでは私はきちんと席を外す

乃が、珍しく申し訳なさそうな顔をした 「一緒に来てくれと言っても、聞き入れてはくれないと思って」 その背を見てから、恵美は遠慮なしに全力で給乃を睨む。すると、何事にも堂々と応じる鈴

と、先頭に立って歩きはじめたのだった。

聞き咎められることもない。 「それが何つ!」 土曜の夕方ではあるが、まだまだ陽は高く街行く人は活気に溢れ、おかげで梨香に内緒話を そう言えば、店長代理に出世したなどとほざいていたような気もする。

一魔王は、今日からごくわずかとは言え、人間を支配する責任者になるんだろう?」

剱吞な小声で、前をどこか愉しそうに歩く梨香に聞こえないように言う恵美

なんのためによ!

どう豹 変するか分からない。惨事は未然に防ぎたいが、いざという時私一人では心もとない 「確かに日々の生活から一見無害に見えるが、やはり魔王は魔王。人間を支配し権力を得たら 真奥がマグロナルドを一店舗、時間限定で支配することでどんな惨事が起きると思っている。 鈴乃は真剣な眼差しで、前を歩く梨香の背を見ていた。

「あなたが魔王討伐に対し、随分悠長に構えているのが気になった」

のだろう。真臭の勤務態度を知っている恵美にしてみれば杞憂もいいところだ。 「勝手に行動していらぬ災厄を引き起こすわけにはいかないが、恵美殿に正面からお願いして

「もういいわよ、分かったから」 らまた突っぱねられるだけかと思った。なのでこのような方法を……」 恵美自身、かつては真奥がいつ魔王の本性を現して日本に災厄をもたらすか戦々恐々として 恵美は諦めて溜息をついた

さえしなければ日本に対して無害な存在であることだけは納得しかけている。 だが今は、決して魔王の過去の全てを許したわけではないものの、魔王一派は迂闊な手出し なんだか真奥の擁護派に回っているようで気分は悪いが、これで真奥の動務態度を見れば鈴

いた時期があった。

いざという時には力になれるかもしれない」 あなたを無事にエンテ・イスラへ連れ帰りたいのだ。一緒に行動すれば私の疑いも晴れるし、 乃もある程度は納得してくれるだろう。 「あとは、謎の襲撃者の作もある。私は魔王を倒すだけでなく、真実を明らかにするためにも ちゃっかりセールストークを織り交ぜてくることも忘れない。ここまで堂々と押し切られた

**一でも、正直なところ、私にとっては突っ走った梨香をどう止めるかの方が大問題よ」** 

待する響きがあるように聞こえるのは恵美の考えすぎだろうか。 え向きに向かいに繁盛しているセンタッキーフライドチキンが。まずはあそこで作戦会議ね」 いるといないじゃ自獣の利き方が違うしなぁ」 |相手の男に理があった場合は、職場環境を乱すことにもなりかねないし……そしておあつら 「……ううん、なんでもない。さっさと行きましょ。手早く終わらせたいわ」 暴走した善意ほど、怖いものはない。 お、独気だねー」 梨香、絶対楽しんでるわよね」 **冷静に分析しつつも、その声色にはほんの少しだけ。自動が利かなくなるような事態。を期** もうなるようにしかなるまい。背後から気づかれないように梨香の配憶を操作することは可 修羅場向きじゃないわ。騒がしい店じゃないと孝朋気悪くなった時には最悪だし、他人が タ谷到着はいいけど……どーも、肝心のマグロナルドの方はお客が少なくて振るわないわ 「線幡ヶ谷駅の地上出口に出た梨香は、腰に手を当てて周囲に鋭く視線を走らせる。

「私がなにー?」

先を歩く梨香が自分の名前に反応して振り向く。

能だろうが、勘違いとは言え善意で動く友人にそこまでするのは気が引ける。

うだ。入店すれば真剣と干棚は、間違いなく恵美の姿を認めてリアクションを取るだろう。 ちらりとマグロナルドの様子を窺うと、確かに製香の言う通り、客足の勢いはいまいちのよ

鈴乃はそこをどう回避するつもりなのだろう。 つかるかもしれないしね」 「まずは、その真臭って人について詳しく聞かせてもらうわ。そこから修羅場解決の糸口が見 まさか本当に、自分と恵美が真奥という男を奪い合っているなどという嘘をつくつもりなの

うやむやになる、という展開を一 瞬 期待したが、 に入店する三人。梨香の言う通りかなりの繁盛ぶりであったため、恵美は満席で入れずに座が 重々しい押し扉を開いて、建物を三階まで使ったセンタッキーフライドチキン幡ヶ谷駅前店 真奥が魔王で恵美が勇者である時点で何をどうしたって修羅場にしかなりようがないのだが、

「よろしければこちらをお手に。見やすいメニューです」 三人ではカウンタのメニュー表を覗けないので、小柄で、飲食店従業員には珍しくサングラ

という店員の小さな親切大きなお世話で、望みははかなく潰えた。

「いらしゃいませ、ようこそセンタッキーへ! 丁度四人席が空いております。こちらのレジ

スをかけている男性店員が鈴乃と恵美に一枚ずつ、メニューを手渡してくる。 一では、メープルピスケットとアイスティーのセットをいただこう。ミルクで頼む」 「私、アイスコーヒーね。二人は?」 恵美は素直に受け取るが、カウンターのものと大して見やすさは変わらなかった。

一……アイスコーヒーで」

ポン券でございます、ご利用くださいませ。お会計失礼いたします」 「かしこまりました、少々お待ちくださいませ。こちらよろしければ、オープンフェアのクー 最後の一言を店員の男性に向けると、小柄な店員は満面の笑顔を浮かべて頷いた。一はいよ、じゃあとりあえず私がまとめて払っておくね。あ、以上で」 差し出されたクーポンチラシを素直に受け取ると、梨香はぞんざいに千円札を出す。

梨香の反応を気にする様子はなかった。 いた手を握られ、その上にレシートとお釣りを返されて妙な声を上げてしまう。 思わず店員を凝視してしまうが、既にこちらに背を向けてドリンクなどをセットしており、 クーポンの内容に関心が移っていた製膏は店員の方を見ずに手を出していたのだが、出して

一は一い……ひゃっ?」

ぞ喜ぶことでしょう。こちら、お返しでございます」

「これより心をこめて調理いたします。雕しい女性に召し上がっていただけるとは、商品もさ

「女性をお待たせするとは、罪なことをしてしまいました。ご注文の品、どうぞお持ちくださ 「あー…… 『はい客んでー』的なアレかな?」 あまり深く考えることなくクーポンに再び目を落とす梨香。やがて、

東美と鈴乃と合漢する。 「分も待っていないのだが、梨杏は曖昧に偏くとトレーを受け取って、階段下で待っていた」 一分も待っていないのだが、梨杏は曖昧に偏くとトレーを受け取って、階段下で待っていた。 いませ

だほかの客に遮られて様子を見ることはかなわなかった。 なんの話? 「あーゆー男ほど、意外と遊ぶのが下手で面倒抱え込むものなのよねー。香水も趣味悪いし」 んーん、なんでも。ま、とにかく二階上がろ 恵美も鈴乃も素直に階段を上がる。梨香は一瞬だけ先ほどの店員を見やったが、後から並ん

裁判官よろしく生真面目な顔で身を乗り出す。店員が言っていた酒のと空いていた四人席のソファ側に恵美と鈴乃を並べて座らせ、梨舎は店員が言っていた酒のに空いていた四人席のソファ側に恵美と鈴乃を並べて座らせ、梨舎は 「さてさて、まずはことの成り行きから伺いましょうか。真奥貞夫さん、だっけ?」

「私にとっては引っ越し先の隣人だ。……まあ、良き隣人ではある」 口から聞かせて」 「少し前に、ほんのちょっとだけ恵美からどんな奴なのかは聞いたけど、もう一度あなた達の

「意見割れたねー。でも恵美って素直じゃないからなー」 一私にとっては可能ならばすぐにでも殺したい相手よ」 忠美は嘘は言っていないのだが、梨香は当然字面通りには受け取らない。

魔王討伐を口にしておきながらしゃあしゃあと言ってのける鈴乃を、恵美は横目で睨む。

たくなかったのは全く違う理由で、私達が真臭を奪い合ってるとかそんなんじゃないのよ」 「ねぇ梨香。はっきり言っておくけど、私はその真奥とはなんでもないの。彼女を引き合わせ 思いっきり素直に正直に話しているつもりの恵美は、心外そうに食い下がる。

「ええ? てもなんかうちに来た時は、真臭は私のもんだとか言ってなかった?」 「言ってない! ていうか、部分部分を抜き出して適当に繋ぎ合わせないで!」 二ヶ月前、地下道崩落事故の夜に梨香の部屋にお泊りした恵美は、現場で言葉を交わした真

**奥で狡猾で意地汚くて無神経で貧乏で拾った傘で人に思着せるような非常識男が……」 馵について、『腐れ縁の知り合い未満。いつか必ずこの手で引導を渡したい相手』以上のこと** 「大体どうして私と真奥をそんなにくっつけたがるのよ! 考えるのも忌々しい! あんな残

真奥の悪口ならいくらでも出てくる恵美" いつまでも鈴乃のペースに乗っていたくないという思いもあって、奔流の如く悪口雑言を撒

「聞き拾てならんぞ遊佐っ!」 第三者の声に、その口上はせき止められた。

何事かと鈴乃は顔を上げ、梨香は振り向く。

「なんであなたがこんな所にいるのよ!」て言うか、今までどこにいたのよ!」 魔王城の住人にして、今朝まで夏パテで半病人状態であった芦屋四郎がそこにいた。 そこには今しがた食べ終わったと思しきトレーを構えたまま、仁王立ちで恵美達のテーブル

を見下あす長身の男。

としていたところだ!」だがわが家主をそこまで悪し様に罵る貴様を見逃しては私が廃る!」 「貴様が入ってきたのには気づいていたが正直面倒事は避けたかったからこっそり出ていこう こっそり出ていこうとした時点でとっくに何もかもが廃っている気もするが、恵美との会話 芦屋はホールの端のカウンター席を目で示した。 思わず指を差してしまう恵美。

「そうだ芦屋!」いい機会だから、力貸しなさい。あなたや真臭の沽券にも関わることよ」 恵美はふと、ここで芦屋と言い合うよりももっと相手を効果的に使う方法を思いついた。 で真実を呼び捨てにせず、かと言って魔王様と口を清らせないあたりは流石である。

「どうせこっちのお店のリサーチに来たんでしょ。なんでも好きなものおごるわよ」 「何っ? 何故私が貴様に力を貸さねばなら……」

## 「そこまで言うなら仕方がないな」

601

わずかも目を雕していないのに突然鱗に座っているのだ。 その変わり身の早さには、芦屋を利用するだけのつもりだった恵美すら呆れさせる。

仰。天して声を上げたのは梨香だ。今の今まで自分を挟んで恵美と言い合いをしていた男が、

駄な出費を抑えるためなら、私はどんな屈辱にも耐え、喜んで自ら泥にまみれよう」 を注文するとしようか」 「……あなたがそこまで意地汚いとは手想外だわ……」 「ふん、勧違いするな。今の私にとって最優先されるべきは我が家の家計だというだけだ。無

「黙れ。とにかくだ、デザートとサラダについては予算内でリサーチできなかった、後でそれ 「そんな、大義のためなら汚れ仕事もいとわないみたいなこと言ったって、格好よくないから」 ええと、なんだかよく分からないけど、お友達さん?」 題面もなく言い放つ。

どちら様か存じませんが、私はこの中の人間関係で言うならば、鎌月さんの隣人です。芦屋 一断じて違う (わ)!!」 梨香の質問に芦屋と恵美が全力で唱和し、その大声に周囲の人が再び何事かと恵美達を見る。

四郎と申します」

か、という意味の問いかけだったが、恵美は力なく首を横に振った。 その、真臭さんのおうち、ってことよね?」 「ああ、どうも。私は恵美の同僚の鈴木梨香って言います。鈴乃ちゃんのお隣ってことは…… 「そうねぇ、ちょっとよく知りたいがためにお聞きしたいのよ」 「ええ、そういうことになります。うちの家主のことをご存知なのですか?」 梨香のその一言に声屋は警戒感を強める。 芦屋は、ちらりと恵美を見る。よもや梨香が、千穂のように真奏たちの正体を知っているの

「あー、芦屋? あなたが警戒するようなことじゃ、きっと全くないと思うわよ」 梨香は芦屋にとっては全くの新顔だ。それが見ず知らずの真奥のことを知りたい、とはどう 恵美の言葉は芦屋の緊張を解かせはしなかった。

「遊佐、これは一体なんの話だ」 一大まかに言うとね、恵美が、女の子を近づけたくない男がいる、って話なんだけど」 芦屋は眉根をよせて、真剣に困った顔で恵美を見る。

あ、芦屋! 何を言い出すのよ!」 「えええ?か、会社あり」 「そうですね、何からお話すればよいものやら」 「これは鎌月さんにも初めてお話しますが、真臭と私はかつて会社を経営していたのです」 梨香の一言を反芻した。 梨香が素っ類狂な声を上げ、 严圧は少し考える屋を装うと、 活券に関わる、か、なるほどな。語るに落ちるとはこのことだな、遊佐」 と、とんでもないことを言い出した。 芦屋は一瞬だけ、口の端を歪めて恵美を見て、勝ち誇ったように言う。 美は全く予想だにしなかった展開に目を丸くする。

一真爽さんってそんな年いってるワケじゃないよね?! 青年実業家ってやつ?」 せているつもりなのだろう。

鈴乃自身は真奥達に正体を明かしていないのだから、声屋は鈴乃にも本気でこの解説を聞か

鈴乃は恵美に小声で尋ねるが、恵美にだって答えられるはずもない。

一体後は何を言っているんだ?」

もあります。社名はまおうぐ……『真奥組』でした』 **「そうですね、主に土地運用や人材派遣に力を注いでいました。土建などにも手を出したこと** 『はー……こ、これはまた意外な方向に話が進んだわね。ど、どんな会社だったの?』 一そういうことになりますね」 「……ああ、確かに建設会社なんかは『社長の名前組』な社名、多いわね』一方の事実と斡乃は、

「……なあにが人材派遣よ」 「【組】とは、また言い得て妙な……」 と小さく呟く。

す。それで、そこに遊佐がどう関わってくるか、なのですが」 いるのですが、当時の経営陣が集まって臥薪(嘗) 胆の 志で経営再建を目指して頑張っていま事業に失敗しまして、ポロアパート住まいのフリーターで、今は真臭と私と、あともう一人 ですが、今は……こう言っては同じアパートの住人である鎌月さんには申し訳ないのですが、 恵美は一体芦屋がどのように話を持っていくつもりなのかまるで想像がつかない。 来た。恵美はこっそりと息を吞む。どうか下手なことを言ってくれるな。

梨香の、友達の配憶を操作しなければならないようなことにはなりたくない。

そんな恵美の願いを聞き届けたわけでもないだろうが、芦屋は解説を続ける。

「遊佐は、当時ライバル社の社員でした」 え? 恵美

派遣……ええ、まあ、その」 「いや、確かお前はあの当時、派遣だったな?」 梨舎の興味が一瞬で恵美に移るが、恵美が何かを言う前に芦屋がすぐさまフォローを入れた。え? 恵美、前の仕事って土建屋さんだったの?」

騎士とは違い、実労働時間に対してしか報酬が発生しないという意味で正しいかもしれない。 勇者が深遺契約かと言われれば、寄進で運営される教会騎士や、領主に仕えて税で養われる

何を真に受けてるのよ」 そうか……勇者は派遣社員だったのか」

恵美はパレないように鈴乃の脇を突っつく。

らない程度の規模でした。ですが遊佐は、本人の優秀さと会社のバックアップもあって、現場 てよく我々と仕事の奪い合いをしていたのです」 「うちは手広くやっていたとはいえ中小零細。経営陣が自ら現場で陣頭指揮をとらなければな

あー、その、こう言っちゃなんだけど、コネでね、その、重役に知り合いがいて……」 悪美は自分の過去の身の上を現代日本で聞いても問題が無いように、苦しい解釈を加えて声

仕事の奪い合いって……派遣にそんな仕事与える大きな会社にいくつの時にいたのよ」

流れ流れて登場のアパートに流れ着いて一年近くして、我々は偶然、遊佐と再会しました。遊 るので、今の芦屋の話には思うところがあるのだろう。 んかが入ってきて、どんなにこっちの性能が良くても、一気に受注が減ったりするのよね」 「ああ……そうね。分かるわ。銀行も掌。返したように融資くれなくなるし、安い海外製品な不況の折、大手に仕事を奪われては、若僧の経営する会社など簡単に消し飛んでしまいます」 屋の話に合わせる。 「それで結局、最後に受注を争った相手が遊佐だったのです。結果我々は負けて会社は倒産 我々の様子を見に来てくれるのですよ」 \*も最後に受注を争った我々のことを覚えていて、色々と思うところがあったのでしょう。時 遊佐には優秀な仲間や先輩がいましたが、我々は全員が実務経験に大差の無い若僧でした。 梨香は大いに納得がいったらしく、何度も無く。 彼女の実家は神戸の工場だ。両親親族が家族で会社組織を営んでいるのを幼い頃から見てい 最初は驚きと好奇心で話を聞いていた梨香だが、芦屋の話を聞く間に、表情が少しずつ変化 あー、でも、恵美って外国語堪能だもんなあ。なんか納得。それで?」

一方の恵美は、すっと血の気が下がっていた。芦屋の口から恵美を持ち上げる発言が出た末

に、梨香が納得してしまった。

一方の恵美は全然ちっともさっぱりそんなつもりはなく、その時点では普通の女性だと思っ

鈴乃が、今度は芦屋に聞こえるように尋ね返し、芦屋は穏やかに頷いた。

「……無茶な、生き方?」

ったのではないでしょうか」

ないようにと考えたのは、今のご時勢、我々のような無茶な生き方が伝染してはいけないと思 ようなものではない。 「その折、辮月さんが引っ越していらっしゃった。恐らく遊佐が鎌月さんを我々に深く関わら この借りは恐ろしく大きい。少なくとも今すぐデザートやサラダをおごってチャラにできる

恵美は、ほそりと悔しそうに呟く

「我々のように無茶な賭けに出るのではなく、<br />
堅実に糊口を凌ぐ術を探すべく、遊佐は鎌月さ

圧倒的に不足していた。だから末端の遊佐にすら負けるような仕事しかできなかった」 い身空で起業するなら、よほどの貯蓄か知識か縁故が必要です。しかし我々にはそのどれもが 者が前得できるように翻ず方法が見つからない。 せいた鈴乃を魔王一党から引き難したかっただけなのだが、妙に説得力のある芦屋の説明を梨香が前得できるように翻す方法が見つからない。

……未蝿とか言わないでよ」

| 真奥はまだ若いですが、大学や専門学校などの高等教育機関を卒業していませんでした。若|

芦屋は鈴乃の髪の簪や、朝とは違う浴衣、それに沢山の買い物を見て苦笑する。んを導いたのでしょう。……今日は、どうやら都会の空気を満喫されたようですが」

ていたのは事実のようだ。 「恥じ入ることはありません。女性ですし、街を楽しむのも立派な社会勉強です」 鈴乃も思わず顔を赤らめて傍き加減になるあたり、やはり物量豊かな日本の街に少々浮かれ「あ、いや、これは一つの社会勉強というか、その……」

つですが、いわば人生を賭け金にしたギャンブルです。それに鎌月さんが巻き込まれたら、と 職者を目の前に、世界征服を踏めていないと宣言したのだ。鈴乃が聚張するのも当然である。 我々は真臭の下で、もう一度起業を志すつもりです。私はそれを全力で支えたい」 くマグロナルドで猛烈に働き、一年で時間帯責任者を仰せつかるまでになりました。いずれ 「真臭はまだ、起葉して成功する夢を諦めておりません。今は一から経営というものを学ぶべ その言葉に、鈴乃が顔を強張らせたのを恵美は横目に見ていた。芦屋は今、勇者と教会の聖 上よりはよほど女性に気を使えるところを見せてから、芦屋は表情を引き締める。

く間を置いて言葉を続けた。 鈴乃が思わず零した言葉に、恵美は冷や汗を流す。幸い聞こえていなかったのか、声壓は軽 思えば遊佐が鎌月さんを我々と深く関わらせたくなかったのも頷けます」

一もうとっくに巻き込まれ済みだがな」

ようなことは、ないと思いますよ」 る遊佐を敵とみなして根本的には嫌っています。ですから、鈴木さんが想像していらっしゃる 「真奥は結構意地っ張りと言うか、根に持つところがありまして……。我々を心配して見に来 芦屋の言うことは、受け手によって解釈を変えられる絶妙の説明で、一本筋が通っている。 悪美は人目が無ければ、床を踏み抜くほどの地団太を踏んでいたことだろう。

確かに恵美は真臭だちを全く違った意味で心配しているし、鈴乃を自分たちの争いに巻き込み

たくないと思ったのも本当だ。

だが、それを悪魔である芦屋の口から、恵美を助ける形で言われてしまった。

恵美は恥ずかしさで消え入りたくなってしまうが、青年実業家の凋 落秘話に感心してしま

そうと言ってくれればよかったのに」

なんか凄いなー。勝手に色々妄想膨らませて首突っ込んだのが恥ずかしいわ。恵美もそうなら

一やー、でもそうかー。私とそんな変わらない年で、そんなことしてる人たちもいるんだー。

っている製膏はそんなことには気づかない。

「結局は失敗して、社長が今はマグロナルドのアルバイト、私は日がな一日主夫業。一人に至 ス的言い訳を思いつかなかった己を呪う思いが重なり、ただただ沈黙するしかない。

恵美としては、言っても聞かなかったじゃないか、という思いと、芦屋のようなコペルニク

## っては仕事も見つけられずにニート状態です。大したことはありませんよ」

うまく負けたってことでしょ」 「今はアルバイトでなんとか生活できてて、あなた達もわりと悠長に過ごしてるってことは 梨香は感心したような表情から一転、真剣な顔で芦屋を真っ直ぐ見た

一うまく負けた……とは?」

梨香の言葉の意味を図りかねて尋ね返す芦屋。

に追われてるわけでもないんでしょう? そんだけうまい具合に片付けられる力があるなら 「倒座に伴う負債は最小限だったってこと。不渡り出したわけでも、破産したわけでも、借金

きっとまた起業のチャンスは巡ってくるわよ」 かいことでも、仕事に関係ないことでも、みんなで協力して頑張って乗り切ったからさ。あな 一私も実家が小さな工場で、会社組織なんだけど、本当に危ない時なんか家族総出でどんな細 全く見当違いではあるのだが、思いも寄らぬ真摯な励ましに、声屋は一瞬 呆気に取られる。

いを支えあえる間柄なんだから、きっとこれからうまくいくわ」 たがみんなの基礎を支えてるんだから、もっと誇っていいと思う。あなた達はそうやってお互 ご飯食べて、あなたが干した布団に寝て、あなたが洗ったパンツ穿いてるんでしょ。ならあな た達は確かに一度は失敗したかもしれないけど、真臭さんもそのもう一人も、あなたが作った

「そうか……そうですよね」 そしてはっきりと梨香の顔を見た。

ものの、梨香の言葉がどこかすとんと心の中に落ち着いた様子で、小さく頷いた。

梨香はゆっくりと、自分の言葉を噛み締めるようにして声屋に伝える。声屋は最初は驚いた

雰囲気が浮かぶ。 ことのすっきりしたような柔らかい笑顔。夏の薄暮の日差しの中で、少し痩せた顔に儚げな「ありがとうございます。そんなことを言ってくださったのは、あなたが初めてです」。

「あっ……や!、まあ、うん、そういうこと。なんかゴメンね、本当に立ち入ったこと」 梨香の一瞬の凝固に芦屋が声を上げると、製香は我に返って慌てた様子で手をパタつかせる。 、心拍数が一瞬だけ上がるのを感じた。、心拍数が一瞬だけ上がるのを感じた。

も表立って評価はされないものだ。 魔王の颗業が日本企業での正社員登用から再開されたことに芦屋は少なからず、自分たちは

芦屋の言葉には、多分に本気の音色が混じっていた。主夫業というものは、基本的に誰から

が、賦ましてくださって少し元気が出ました」

「そんなことはありません。最近、色々と思い悩むことが多くて自信を失いかけていたのです

このままでいいのか、という漢然とした危機感を抱いていた。 そこにかけられた梨香の一言は、誰からも指針を得られなかった芦屋の心に深く染み入った。

染み入っていいのか、という問題はこの際問わない。 「そ、そう?な、なら良かったけど、うん。良かった」

梨香? 突然。豹変した梨香の態度に流石に不審を抱いた恵美が梨香を呼ぶと、 乱れた気持ちを吞み下すように、わざとらしくアイスコーヒーをすする製香

慌てた梨香は手に持ったカップを落としそうになる。 ひゃあっ! え、恵美、何? 何?」

「何って、いや、こっちが何? なんだけど、どうしたの突然」 なんでもないなんでもないなんでもないなんでもない」

にしても、そっかー……人に歴史ありねぇ……」 ……四回も言った」 鈴乃は律儀にカウントしている。

なんか個人的に、その真臭って人見たくなった」 梨香は殊更大仰に言ってから、一気にコーヒーを飲み干すと、



「マグロナルドみたいな大きなチェーンで、そんな短期間で時間帯責任者になるなんて相当だ と、恵美が仰天するようなことを言い出した。

よ。前は失敗したかもしれないけど、もしかしたら凄く仕事できる人なんじゃないの?」

はやはり驚いたらしい。 のとは違うよね。マグロナルドに限って従業員に半端な甘やかしはしないでしょ?(もっと環 「ええ?」百円? それ凄いよ。二ヶ月っていうことは研修時給から普通のになったっていう 「どうでしょうか……時給は二ヶ月ほどで百円上がったと言っていましたが……」 その時の真美の笑顔を思い出すと、芦屋は今でも悲しみに胸が締めつけられるのだが、梨香

そうですね……環境に恵まれれば……」 声屋にしてみれば、そもそも自分たち悪魔の存在の大前提として、日本という舞台そのもの

境に恵まれれば、きっと凄いことできるんじゃない?」

が環境設定ミスなのだが。

一そっかあ。じゃあ、今のうちにツバつけとこうかな」 ちょっと梨香に

「変な意味じゃなくてね、純粋に、有望な企業人って意味でよ。一応、私も名乗ろうと思えば 流石に黙っていられなくて声を上げる恵美。だが、梨香は真面目な顔で恵美を制した。

社長金鍍ですからね。ビジネス感覚は常に研ぎ澄ましてるのよ」

かと全国あちこちで繋がってるのよ。 真奥さんがこれから興そうとしてる会社の事業内容がう 「よく分からないんだけど、一体どういう……」 |短葉して成功したら、今の内に縁故を作っておくのは決して損じゃないの。中小企業って意 小さい工場なんかやってるとね、横の繋がりとか大事になってくるのよ。もし真臭さんが今

がて損は無いし」

5の実家とマッチするかどうかは分からないけど、マッチした時のことを考えれば知り合って

「靴底をメインに、履物付属品作ってるんだ」 「そういえば聞いてなかったけど、製香の実家の工場って……」

真奥がやろうとしていることと、世界が何度生まれ変わろうとマッチしそうにもないが、そ

将来的に鈴木さんのご実家で靴を発注することもあるかもしれませんね」 れを話したところでどうなるものでもない。 |……真実は、あれてマグロナルドでそこそこの地位に上がることを考えているようですから、

気注するわよ 「人材派遣するんなら、削服用に安くて頑丈で長持ちする揃いの靴、どんな小さいロットでも むしろ芦屋の方がフォローに回るほどだ。

| 枯局私が振り回してるようで悪いけど、早速行っていいかな。芦屋さんも、敵情報告がある そんなことを言いながら

だろうし、何より向こうの売り上げにも貢献しなきゃじゃない?」

もとよりそのつもりでした……では」

「当然、貴様も来るな? 期待しているぞ? とりあえず特製ピスケットとサウザンドレッシ と、芦屋は急に悪魔らしく含みのある邪悪な笑いを浮かべて恵美を見た。

ングサラダをテイクアウトしてもらおうか。それが済んだら、マグロナルドだ」

「あ、い、いや、私は帰って作るから……」 『鎌月さんには日頃のお礼もあります。私がご馳走しますので、よろしければ何か仰ってくだ 下階に降りると、繁盛しているだけあってレジカウンターはそこそこ行列していた。 そんな声屋の後ろでちょっとだけ口を尖らせる梨香を見て、恵美は益々頭が痛くなってきた。恵美に対する態度とはまるで違う給方への声屋の態度。 小さく毒づいた恵美だが、言うことに従わなければどう前言を翻されるか分からない。

計算高い芦屋が相手では、下手に思をないがしろにすると、いつまでもネチネチと言い続け 梨香の誤解は解けたものの、また別種の厄介事を抱えてしまった。 恵美はそう言って、力なく一人で行列に並ぶ ……買ったらすぐ行くから、三人とも表で待ってて」

た挙句に、妙な姦計を巡らせないとも限らない。

論に至った瞬間、いつの間にか自分の注文の番になっていたことに気づいた恵美は、とりあ えず芦屋に言われていたものをメニュー表の中から探しはじめる。 「おやおやお嬢さん、そんな顔をしていては、折角の食事が美味しくなくなってしまいますよ」 の性店員だった。 そんな声がかかって恵美が顔を上げると、そこにいたのは先ほど梨香の注文をとった小柄な 芦屋を納得させられるような借りの清算の仕方について悩み、やはり討伐しかないかとの結

名札が漢字で『猿江』と書かれていることから、店長か何かなのだろう。対面販売スタッフ 小柄で細身の整った顔立ちに、他の店員とは違いYシャツに黒いエプロン姿。

にしては珍しくサングラスをしているが、それがまた果てしなく似合っていない。 「それはどうも。特製ビスケットとサウザンドレッシングサラダを持ち帰りで」 はっきり言って余計なお世話なので、恵美は取り合わずにほとんど放り投げるようにして子

かあるものですしね」 円札をトレーに出す 「かしこまりました。若く美しい女性が思い悩む姿、というものも、それはそれで別の美しさ

はないだろうか。 恵美は胡散くさげに男性店員を見る。こんな接客をしていたら、いつかクレームがつくので

218 に詰めて頭を下げる。 分の意志を介在させることができなくなった時、後悔されませんよう」 「しかし、どんなに思い悩もうが、時間というのは否応なしに状況を変化させていきます。自 「……センタッキーの店員さんに、そんなおせっかいを焼かれたのは初めてだわ」 これは差し出がましいことを申しました。ですが、これだけは言わせてください」 不快そうに眉根を寄せる恵美。だが男性店員は堪えた様子もなく、恵美の注文を手際よく袋

て袋を差し出してきた。 「男は女性が弱ったところにつけ込むものです、努々お気をつけなさい」 **猿江というらしい男性店員は、恵美に手渡すためだろうが、少々大仰なほどに身を乗り出し** 

おります。お次でお待ちのお客様! どうぞ!」 「いえ、特に深い意味はありませんよ。ありがとうございました。またのお越しをお待ちして 一……どういう意味?」 明らかになんらかの意味を含ませたらしい店員の言葉に抱いた疑問は、恵美の後ろからやっ

てきた親子連れに阻まれた。

あっ

「あ、あら、ごめんなさい! ちょっと、走っちゃだめでしょ! 大丈夫でしたか?」 走り込んできた小さな男の子が恵美にぶつかって声を上げる。

ずっと自分を追いかけているような気がした。 いることもあるので、恵美は仕方なくレジから離れる。 しもう面倒なことは提弁してほしいわ」 「今お調べしますので、少々お待ちください……」 一あ、いえ、大丈夫です……」 オープニングセールに、クーポンかあ。それ以外に本当に何もないのか?」 「……アレルギーがあって……海老と蟹とフルーツが……」 芦屋はマグロナルドで真臭に敵情視察の報告を行っていた。 気持ち悪いし面倒なので振り向くことはしなかったが、何故かあの猿江という店員の視線が、 口の中でそう呟いて、店を出る。 そんな会話を聞きながら、 後続の客がいるのにこれ以上店員と話をしているわけにもいかない。外に梨香達を待たせて

赤ん坊を抱えた母親が、上の子らしい男の子の手を引きつつ恵美に向かって頭を下げた。

「私が観察した限り、マグロナルドとは主力商品が違うという点を鑑みても、そこまで極端に

差があるとは思えません。接客も、ごく普通でした」

よりますが、骨まで美味しく食べられるというのも驚きてしたね」 「特筆すべきことと言えば、看板商品であるフライドチキンは流石の仕上がりでした。部位に 

「漆像に調べさせたところ、センタッキーはフライドチキンの加熱に独自の技術を持ってい家典は^^ 籐 顔をしかめるが、芦展は首を扱って真臭を制する。

骨までってお前……」

るらしく、この前のホルモン焼肉のナンコツのように、鶏の軟骨の芯までしっかり火が通って

いるのです。もちろん必ず食べなければいけないというものではありませんが、食べ終わった 後に残るゴミが少ないというのは、細かいことのようで重要です」 如何にも主夫らしい意見に、真奥は腕を組んで頷く。

気分いいもんな。トレー片付けちまうと逆に居辛くなるし」 「あとは、告知を額面通りに信じるなら、コーヒーは一杯一杯きちんと豆を挽いている、オー 「なるほどな。回転率的にはいいことじゃないけど、居座りたい時なんか、ゴミが少ない方が ペニックコーヒーを採用しているとか」

オーガの肉のコーヒーがなんだって?」

悪魔らしい真臭の聞き違いを、声屋はやんわりと訂正する。

||でも、オーガが勇気出して一回一回挽いたって、豆がブルーマウンテンになるわけじゃねぇ 「オーガニックです。有機栽培で生産された豆を使用しているということでした」

あの値段で購入できるものとしては十分に美味いコーヒーでしょう」 「今はホットコーヒーの時期じゃねぇとは言え、長期的には問題になる、かあ」 「だとしても、そう言われれば聞こえがいいのは確かです。実際に美味い不味いで考えれば、 どこまで本気か分からなかった芦屋は、流すことに決めた。

三万円近く差をつけられている計算だ。 タッキーの予測平均単価を計算すると、集客数は既に五十人近く。純売り上げに至っては機算 いる観測員がセンタッキーの一時間おきの客敷をいちいち電話で伝えてくる。その人数とセン 「だがなあ、確かに一つ一つは決定的な差とは思えねぇよな」 しかもこちらは朝から下降線を描く集客状況を引き摺り、ディナータイムに突入してから新 売り上げ目標額が高く設定されている土曜日だということもあって、事業所から派遣されて 真奥は困ったように額に手を当てると、声屈に店内の様子を見るよう促す。

規に訪れた客は、声屋を除くとたった一組である。

申し上げることが無かったのも事実です。そうなると、あとはもう通りかかる人が新しいもの 「おっしゃる通りです。しかし実際に二時間ほど居座って観察した結果、この程度しかご報告

に目移りしているとしか……」 **維率論の問題になっちまうな、これじゃ」** 

真典は肩を竦めた。

ってみるわ。ご苦労だったな」 「ま、こっちもただ暇を持て余して指くわえて見てたわけじゃないからな、悪あがきを色々や 真奥の労いの言葉に、芦屋は危うくその場で跪きそうになるのを堪えるのに苦労した。

クもポテトもLサイズで。漆 原は文句を言うでしょうが、今日の夕食はこれで行きます」 げに貢献するために、ピックマグロバーガーセットを二つ、注文させていただきます。ドリン 「勿体ないお言葉。とにかく、私もささやかながら協力させていただきます。少しでも売り上

魔王城の不良債権のくせに出された飯に文句言うようなら、俺が許可するからプン殴れ」 ±たる魔王から生活感溢れる御意を承った声屋。

あ?ああ、なんかよく分からんが」 彼女達には、期待してください」 、一瞬あるテーブルの方を振り返り、皮肉な笑みを浮かべた。

真奥は曖昧に頷いた。

分かってもあんま意味ねぇし。でもお前病み上がりなんだから、あんま無茶すんなよ」 を探らせましょう。何か外側からは分からない仕掛けがあるかもしれません」 ネットで何か出てくるとも思えんがな。業態が微妙に違うから、仕入れとか調理の秘密とか

勿体ないお言葉」

「この後帰宅してからは、別方向からのアプローチも試みるつもりです。漆原にもう少し裏方

て、ものの一分でセットを完成させ、芦屋に手渡す。 二人の悪魔がぶつくさと言い合っている間にも、後ろから千穂が手際よく全ての準備を整え

「恐れ入ります。お二人とも、ご武運をお祈りしております」 「お待たせしました声屋さん、お仕事お疲れ様です」

「はい、ありがとうございます、頑張りますね」 干穂もにこやかに答礼

芦屋が大きな袋を指えて店を後にすると、それを見送りながら、店内にいる一組の客が感心

心構えを忘れないって、凄いプロ根性ね。恵美の周り、デキる人間多いね。あ、私自身もカウ しもうご自由にどうぞ」 「へぇー、彼らの繋がり相当なもんね。いい意味での公私混同? 常に組織を再興するための したように行った。

らに目を向けると、ひきつった営業スマイルで近づいていった。 「……センタッキーより、椅子が硬い……」 三人組の女性が、何も注文せずに席に座ったまま、言いたいことを言っている。真臭はそち

……何よ 「あの1、お、きゃ、く、さ、ま?」

三人組の一人が、ウルサそうに真臭を見上げる。

「お席には、ご注文されてからかけていただけませんかねぇ?」

「あー、じゃ、アイスコーヒーSサイズ一つ。持ってきて」

最も安い注文である。芦屋の目が無いのをいいことに、面倒なことを先送りにしようとする

恵美。真奥のこめかみが引きつる。 「じゃあついでにアップルパイも頼んであげるから、ありがたく持ってきなさい」 「当店レジ注文のセルフサービスなんですよねー基本的に!」 恵美は頑として席を立とうとしない。真奥はギリギリ保っている営業スマイルを、今度は康

美の向かいに座る梨香に向けた。

たワリには、あんまりカリスマ性ないね。責任負った時間帯に店空いてるし」 「〜ー、あなたが真臭さんかあ。なんか、芦屋さんがあそこまで忠誠心いっぱいに持ち上げて

「……く様は藪から棒に一体何様だオイ」 「ちょっとー、言薬遣いなってないんじゃない? 態度悪い店員って本社に投書しちゃうよー」 初対面のくせにあまりにもあまりなトンデモ発言に、真臭はついにキレた。

から聞いたわ 「私は鈴木梨香。恵美の間僚よ。真臭貞夫さん。あなたのことは恵美や鈴乃ちゃんや芦屋さん 恵美の友人であることは想像に難くない。となれば、基本的にこの女性は真臭の敵である。

んたなんなんだよ

**「うっせぇ。客にだって従ってもらわなきゃならねぇ店のルールってもんがあるんだ。大体あ** 

梨香はにやにやしながら、堪えた風もなく悠然と真奥を見上げる。

「……芦屋と鈴乃ちゃんはともかく、どうせコイツはロクなこと言ってねぇんだろ」 ったく、客は来ないし恵美は来るし、このままじゃ今日もジリ貧だ……」 ちょっと何言ってるのか分からねえんだが、あれか、あんたおせっかいな人か」 芦屋さんと恵美はかなりワンサイドなものの見方だったから、私が直々に確かめに来たのよ」 真巣は、テーブルに頻杖をついたままどこかばんやりしている恵美を見下ろす。

一ダメですよ真奥さん、そんなこと言っちゃ」 するとそこに、トレーを持った千穂が現れた。

「千穂殿、精が出るようだ」

千穂も突顔で会釈をしてから、少し怒ったような表情を作って真臭の隣に立った。お疲れ様です鈴乃さん」 それを見た鈴乃が声をかけ、

客さんって言ってませんでしたっけ?」

そして干穂は、トレーを恵美達のテーブルに置く。

「遊佐さんも大切なお客さんですよ。お金を払って商品を買ってくれる人は、どんな人でもお

間じゃありませんから。三百円です」 「大丈夫です、分かってますよ。本当はレジ入力前に作っちゃダメなんですけど、まだ混む時 「ごめんね! なんか真奥相手だからつい……」 あ、千穂ちゃん!」 「はい、アイスコーヒーと、アップルパイは出来たてです」 先ほどの恵美の注文を聞いていたのだろう。恵美は慌てて立ち上がって財布を取り出す。

"ったく、ちーちゃん相手だとこれだよ」 心底申し訳なさそうに千穂に硬貨を渡す恵美。

当たり前でしょ。あなたと千穂ちゃんを同列に扱うなんて、千穂ちゃんに悪いわ」

そのやりとりを聞いていた梨香が苦笑する。

そうよし お客様は、遊佐さんの 友達ですか?」

|私、佐々木干穂といいます。遊佐さんには、 べこりとお辞儀をした千穂。梨香は少し考えるように千穂の顔を見る。そして、ちょいちょ 色々お世話になってます」

・と手招きをして、干穂を招き寄せる はい?

千穂ちゃんっていうのね」

あ、はい……わっ!」 **火然梨香は干糖を抱きすくめる。** 

れれた 可愛い! 何この子! 可愛い! ええ? ちょっと、これは現代日本の奇跡よ!」

ケに可愛くて、反則よ反則! 天然記念物よ! ワシントン条約で保護すべきよ!」 ちょっと恵美の周りの人間って逸材が多すぎない? 礼儀正しくて、仕事に哲学あって、オ **梨香の突然の行動に、千穂は慌てふためき手をばたばたさせた。** 

そんなところも可愛いのう!」 ちょっと、千穂ちゃん驚いてるじゃない」

「酔っ払い親父じゃないんだから、梨香!」 『ぶあつ……は、はい……なんか、よく分かりませんけど……」 "はいはい、ごめんね千穂ちゃん。お姉さんつい興奮しちゃって」

一で、良さそうな仕事は見つかったのか?」

解放された千穂は、何がなんだか分からず自を回している。

千穂でじゃれる梨香を横目に見ながら、真臭は先ほどからだんまりの鈴乃に水を向けてみる。

「いや、まだ……」 と、知く答えた すると話しかけられたことに驚いた様子の鈴乃は、少し逡 巡してから

し、社会勉強だっ!」 「そっか。でもま、概ね町を楽しんだようなら良かったじゃん」 浴衣姿に風船など持っていれば、完全に縁日のノリである。

「まだ仕事決まってないんだから、あんまり買い物好きのOL流儀を教えるなよ」 えよ。毎回そんなに買い物してたら、破産するぞ」 そう言ってから真奥は恵美に視線をやり、

「社会勉強な、結構結構。でもま、最初のうちは浮かれるのも仕方がないが、金は計画して使

今度は、鈴乃は恥ずかしそうに顔を赤らめながらも抗弁してみせる。

と、つい心の中でグチってしまう。 い。どうして周囲の都合で振り回されている自分だけが秘密を抱えていなければならないのか 恵美にしてみれば青天の霹靂だが、立場上、真夷達には鈴乃の正体をバラすわけには行かな

渋い顔ををしてみせる。

悪いわ 「大きなお世話よ。あなた達が彼女の平穏な生活を乱すようなことをしなければ、何も問題は 「芦屋の口ぶりから察するに、面倒なこともあったみたいだが?」

ちょっと、それどういう……」 「だから言っただろ、面倒なことになっても知らねぇぞって」 真奥と、そして鈴乃にも、二重の意味で釘を差す恵美。真美は肩を竦めて苦笑した。 と、意味深な一貫を発する。

\*に妙な連和感を覚えた恵美だが、問いただす言葉は梨香の勢いに遮られた。

る筋合いねぇよ。事業所の幹部でもあるまいし」 には逸材が揃ってるんだから、あんたも見た目通りのボンクラではないと睨んでるんだけど」 「あんた、つまりそれは俺の見た目はポンクラだと言いたいのか。そんなこと、客に心配され しところで、あなたこれからお店どうすんの。何か振るわないみたいじゃない? 恵美の問り

他社の営業だと思って頂戴」

この際はっきり言うけど、私はあなたの仕事ぶりを見たいのよ」 しゃあしゃあと言い放った製香

ワケわかんねぇんだが、あんた一体なんなんだよ

恵美の友達で、鈴乃ちゃんの友達で、社長令 譲?」

芦屋さんに悪あがきしてやるみたいなこと言ってたじゃない? 何するつもりなの」 いよいよ分からん! 飯食うつもりが無いなら帰ってくれ。こう見えて暇じゃねぇんだから」

真奥は仏頂面で溜息をつく。 あんた、とことん人の話を聞かない女だな」

力した様子の恵美も、何事かとそちらを見る。 |真臭ちゃん、いるかい?| 店内に、緑色の大きな何かを抱えた高齢の男性客が入ってきた。梨香と鈴乃はもちろん、脱 そこに突然、店の入り口の方から第三者の声がかかった。

一ナべさん! わざわざ来てくれたんですか!」 当の呼ばれた真臭は、老人を認めると恵美達を放って慌てて飛んでいった。

「そりゃ、真奥ちゃんの頼みだし、早い方がいいと思ってなぁ」 そんな、俺取りに行ったのに、ほんとすいません。あ、そっちの壁に立てかけてもらってい ナベさんと呼ばれた老人は間達とした笑い声を上げる。

「すげぇ、立派なのもらいましたね!」 りどりの色紙のようなものを手に飛び出してきて、 番いいの見締っておいたから、綺麗に飾ってやってくれ。ほいじゃ、届けるものは届けたから、「小さいのや、子どもの目の高さの枝は一日かけて取っ払っておいたから、すぐ使えるよ。一 「おお、そうだな、でかい生木を店に持ち込んじゃいかんな」 「ディナーのピーク前に、さっと飾りつけちゃいましょうよ!」 「カミさんが晩飯作ってるから気持ちだけいただくよ。また次の清掃でな。本崎ちゃんによろ 「え、帰っちゃうんですか。俺おごりますから何か食べてってくださいよ」 そしてそれを見計らったかのように、手の空いていたマグロナルドのクルー達が一斉に色と ナベさんはさっと手を振ると身を翻して確かな足取りで帰っていった。 **灯ろうとするナベさんを引き留めようとする真爽だが、ナベさんは首を横に振る** 額をピシャリと叩いた。ナベさん。は、緑色のそれをドアの外の壁際に立てかける。

「倉庫の奥に天辺が欠けたカラーコーンありましたよ。あれに刺してテープで固めれば飾れる

232 口々に言いながら群がる。

ねぇ、そのもっさりしたの、何?」

梨香の声に気づいた真臭は、ナベさんの持ってきたそれをクルー達に預けると製香たちのテ

ープルに戻ってくる。 笹以外のなんに見えるってんだ?」

らうすぐ笹幡七夕祭りなんですよ」

ささはた……七夕祭り?」

干穂がそう言うと、制服のポケットから短骨状に切った色紙と油性ペンを取り出してみせる。

毎年、磐塚と幡が谷の商店街が合同で、地域の頭文字をとって「ささはた」祭りを夏の間開恵美が首を侘げるので、千穂が続けて解説する。

各様限定で、短冊にお願い事を書いて七夕飾りをしてくれたら、ドリンクSをサーヒス・てな」 くんです。実は少し乗り遅れてるんですけど、七夕と言ったら笹の葉じゃないですか」 「店長に頼んで独自サービスの許可を、管轄事業所に申請してもらったんだ。小学生以下のお 「来週末は七夕祭り本番で、いっぱいお客さんも来ますから、センタッキーを追い上げるため

に真奥さんが考えたんです」 千穂が誇らしそうに胸を張り、

「へぇ、あんたが?」

るような性質のショーアップじゃなかったって言うから」 「プラスチックの笹飾りだけは毎年出してたらしいんだけどな。クリスマスみたいに人を呼べ 梨香は少し感心したように言う。

飾りも真奥さんの指導ですごく綺麗なのが出来て」

んだ気合の入った飾りつけだ。梨香は千穂から手渡されたそれをためつすがめつする。 色とりどりの短冊はもちろん、吹流しや折鶴、巾着に投網など、手製にしてはやたら手の込

たりしないだろうし、あんたの持ち出し?」 一へぇ、綺麗じゃん。でも、生の笹って高いんじゃない? まさかパイトの提案が経費で落ち 製香の現実的な質問に、真奥は脳を張って答える。

人で、家の庭に笹がいっぱい生えてるんだ」 爺さん、渡辺さんっていうんだけど、地域の定期清掃ボランティアに参加した時に知り合った。 「ふふ、そう思うだろ? だが、これこそが店長代理たる俺の人望ってやつだな。さっきのお

一あなたが……地域清掃のポランティア?」 ボランティアとは、無料率仕活動のことだな。貞夫殿、そんなこともやっているのか」

へえ、きちんと地域の活動とか参加してるんだ」 思美と鈴乃の驚きは、梨香の驚きとは性質が違う。

に店に来てくれたりもするんだぜ」 本当なら俺が取りに行かなきゃいけなかったのに、申し訳なかったなー。時々お孫さんと「緒 「昨日の朝、丁度その清掃でな。頼んでみたら快く分けてくれるって言うからお願いしたんだ。

に済んだのは確かだが、魔王が模範的な市民生活を営んでいることをこんなところで見せつけ られてしまい、釈然としないものが心に残る。 恵美はようやく、昨日真奥が早起きして外に出ていた理由を理解した。おかげで大怪我せず

いな感じて、子どもにプレゼントできたらいいと思ってる」 「で、生の笹だから来年まで保管はできない。七夕当日に、小さく切ってミニ七夕ツリーみた

けだよ。七夕飾りにもクリスマスツリーのオーナメントみたいに一つ一つ意味があって、きち 「ええ? それはどうだろう。そんなんで今の子ども喜ぶかなあ?」 一短冊を書いてくれる子は喜ぶさ。今の子どもがゲームにしか興味ないと思ってるのは大人だ 疑問を呈する梨香だが、真奥はちっちと人差し指を振る。

たり枯れたりしたら、飾りは手作りの紙製だからそのまま燃えるゴミで捨てられる」 んと飾りつければ凄く綺麗になる。生の笹だからしばらく観賞用として飾ってもいいし、飽き

「客寄せになるか未知数なのは確かだけど、シーズンだからってだけで漫然と飾りつけるより 渋谷区では生木は、少量であれば三十センチ以下に細かく裁断して可燃ごみの日に収集して

は、わずかでもお客様や地域との交流のきっかけにはなるだろうと思ってさ」 「デキる奴じゃん」 「へえ、色々考えてんのね」 真奥の言葉を聞いた梨香は、感心したように真奥と笹を交互に見てから恵美を向いて一言。 **選飾の無いシンプルな褒め言葉。** 

「おおい聞いたか、恵美?」お前の友達が、店長代理の俺のことできる奴だってよ」 それを聞いた真奥、得意満面で傲然と恵美を見下ろす。

一だからそれやったら台なしですって」 そんな真典を心底疎ましげに見ながら、恵美は顔をしかめ、 真奥の分かりやすい態度を、苦笑しながら諫める千穂。

だが、そんな恵美の心中も知らずに梨香は満足げに頷いている。 恵美にしてみれば、真奥のことを本人の目の前でわずかでも肯定することすらしたくないの ようやくそれだけ言い放った。

るようになってて安定するから、これでコーンの胸搏さえれば、もっと安定しますよ」 一真臭さん! 欠けたカラーコーンありました。あとこれ、路上駐車禁止のボール、脚に水入 そこに、両脇に大きなプラスチック製のものを抱えたクルーの一人が走り寄ってきた。

「さーんきゅ! いいじゃんいいじゃん! それじゃ場所決めないとな!」 真奥はコーンとポールを受け取ると、店から飛び出していった。

その背を見送った恵美。やはりこうやって嬉々として七夕飾りを店頭に設えようと、クルー

達とともに悪峻苦闘する真臭から、深い思惑や策謀を読み取ることはどうしてもできなかった。 「遊佐さん、具合悪いんですか? 大丈夫ですか?」 そんな恵美の複雑な表情に気づいた干穂が声をかける。恵美は困ったように微笑んで、 どう見たって、スタッフに信頼される代理店長の図だ。

干穂がまだ口を開きそうな気配を見せたが、レジの方から別のスタッフが干穂を呼んだので、 と、それだけ言った。視線は真奥の背を迫ったままだ。 一ううん、違うの、ちょっと考えごとをね」

ターの中で何かの機械のメンテナンス作業を始める干穂達を見て思った。 「あんまり無理しないでくださいね? 真奥さんは後でちゃんと叱っておきますから」 と、最後まで恵美を気遣ってから仕事に戻っていった。恵美は真奥から視縁を外し、カウン

者として着任し、集客数が振るわない状況でもこの明るさを維持している、という事実を見過 この店の空気は、当然本来の店長である木崎という女性が作ったものだ。だが、真奥が責任

真奥に好意を寄せる千穂はもちろん、そのほかのクルー達も皆一様に明るく、仕事に打ち込

錯誤を繰り返している真奥の背を見て呟いた。 み、七夕の笹などという葉務に直接関係なさそうな真奥の提案を真摯に受け止めている。 魔王サタンは、倒すべき敵だ。だが、恵美はドアの外で飾り立てた笹を安定させようと試行

「だって、あいつ、ここじゃなんにも悪いことしてないじゃない……」 見れば鈴乃も、険しい表情で真奥の背を眺めている。 それを、認めたくない。認める自分がいてはいけない。 犯罪者が罪を悔いたり善行を積んだところで、犯した罪は永遠に消えることはないのだ。

と、真奥が試行錯誤の末笹飾りを安定させるのに成功したらしいその瞬 間だった。

彼女は、この店の空気を見ても尚、やはり真臭に何がしかの企みがあると思うのだろうか。

梨香? どうしたの?」 製香の頓狂な声で、恵美ははっと視線を製香に向ける。

「なんか、すっごい勢いでお客さんがこっちに流れてくるんだけど……」

イドチキンに向かう人の流れが瓦解し、大挙してマグロナルドに押し寄せてくるではないか。 丁度、笹をなんとか直立させた真典がその様子に気づき 梨香は呆然と外の様子を指差す。恵美も釣られてそちらを見ると、なんとセンタッキーフラ

一おいおいおい!!

ルドの自動ドアを開けっぱなしにする。 人口密度が一気に上昇し、店内に熱気に満ちはじめた。 真奥の指示が全員に行き渡るか行き渡らないかのうちに、あっという間に人の波がマグロナ 驚きの笑顔を浮かべて慌てて戻ってくる。 た! 来たぞ! 総員戦闘配置につけ! 戦だ戦!!」

238

ええ? マジ! 他立てただけでこんなにってどんな風水!! 思わず笑ってしまっている梨香。そして、

一体、どういうこと?」

真奥の活気に満ちた接客が、ざわめきの中でもよく店内に響いていた。 いらっしゃいませ! ご注文お決まりの方からレジに一列にお並びください!」 厳しい表情で、真鬼ではなく外に飾られた笹を嶽視する鈴乃。 笑うに笑えない恵美。



上に立つ者など気楽なもので、自分たちの同僚の起こした問題だろうに、全ての審判と解決 確かに彼女は外交・宣教部の要職にあって上司格であるオルバ・メイヤーとも懸意だった。 元異端審問会、現訂 教 審議会の筆頭職にある彼女に。

だが、上司が部下の監督責任を問われるならともかく、人々に正義の信仰を示す組織である

教会が、上司の失態の責任を部下に取らせて全てを包み隠そうなどともっての他だ。 卒倒から復活した大神官ロベルティオは彼女に、

『訂教審議会として教会の厳光が最も傷つかない手段を模索して審判を下せ』 彼らは自らを律せず、傷つくのを恐れ、恥をかくのを恐れ、手を汚さず、なんの努力もせず いつだってこうだ。 と命令してきた。

に得た平和を当然のものと甘受し、美味しいところだけをさらってゆく。 教会騎士団と諸王国連合騎士団はどちらがイニシアチブを取るかで対立していたのだ。 かつて西大陸を攻め滅ばさんとしたルシフェル軍相手に、西大陸は全く一枚岩になりされな 諸王国としてはこれを期に、西大陸の教会の影響力を削ぎたいと考え、教会はそれをさせま

常に大法神教会の十字架だった。 なく人間世界の危機を理解できない愚か者は湧出する泉のように現れた。 い日は無かったと言ってよい。 の士気を下げたり混乱させたりする者達を、容赦なく異端審問にかけた。 のまま社会的な死を意味していた。 と抵抗できないまま、版図の半分を明け渡すことになってしまった。 とも珍しくなかった。そしてその隊を余すことなく突かれて、西大陸はルシフェル軍にほとん であるオルバの命で、異端審問会の名の下に歳清を開始した。 人間でありながら、同じ人間を正義のために狩る。法に則らぬ暗殺すら辞さぬ彼らの武器は、 諸王国同士や教会司教領同士が内紛を起こすケースも頻発し、狩っても狩っても、聖俗の別 勇者エミリアが現れてルシフェルを討ち果たすまでの間は、彼女と彼女の部下達が血を見な 彼女は外交・宣教部で鍛えた神学知識と法律知識を如何なく発揮し、政争を繰り広げて前線 圧倒的劣勢であるにも関わらず、魔王軍討伐の功績を奪い合い、人間同士の争いが起こるこ 大法神 教 会が広く信仰されている西大陸に於いて、『異端者』の烙印を押されることはそことはます。 当時既に異端審問会筆頭執行官の地位にあった彼女は、そんな現状を打破するべく直属の上 人類存亡の危機に直面して尚、 西大陸は政争を繰り広げて人命を徒に消 耗させていたのだ。

実際に彼女は、十字架型のものさえあれば、聖法気を用いて武器化できる聖法術『武身鉄』

光」を操り、多くの暗一殺をこなした。 全ては彼女達、異端審問会執行官の勤めであり、世界に平和をもたらすための聖務だった。

状況が変化しはじめたのは、西大陸最大版図を誇る神聖セント・アイレ帝国が陥落し、主だ

った重鎮がルシフェル軍に捕らえられてからだった。 諸王国軍は、なし崩し的に教会を筆頭とした連合軍を編成することを了承する。 大組織は存在しなくなった。そのため、教会の、異端審問会の機嫌を損ねることを恐れた残る 西大陸の最強国家であったセント・アイレが陥ちたことで、教会くらいしか先頭に立てる巨

のように団結しはじめたことが大きかった。 全軍の意思統一が必要なくなったことと、勇者の族の下に今までいがみ合っていた諸勢力が嘘 さらに勇者エミリアが台頭したことで、彼女達の『聖務』は急激に減った。 エミリアとエミリアの仲間が破竹の勢いで魔王軍を撃破していったおかげで、前ほど強固な

の光の下にまとまっていたはずの世界は、あっという間にパラパラになってしまう。 魔王消滅後、異端審問会は戦時中の苛烈な審判が諸王国から弾劾された 人も、悪魔に抗し得る。その単純な希望を人々に見せつけたエミリアの力のおかげだった。 だが、そのエミリアが魔王と相討って命を散らした、という知らせが世界を駆け巡り、勇者

春議会の設置などという茶番劇を用意した。 ぎょう

が、行う必要の無かった審判がどれほどあったと思っているのだ。 彼女は納得がいかなかった。 英端審問会が無ければ、西大陸はエミリアが現れるよりもずっと前に滅んでいたのに。 四大陸の人間が、最初から一丸となって魔王軍に立ち向かっていれば、出さずに済んだ犠牲

女達は、誇りも信仰も何もかも奪われたような気がした。 「私達だって、好きで人を処刑していたわけじゃない!」 仮女の声は、誰にも届くことはなかった 人法神教会が諸王国に譲歩を見せたことで政治的均衡は保たれたが、異端審問会であった彼

そして今、『命と引き換えに世界に平和をもたらした勇者エミリア』という新たな神話の光 世界は、魔王が現れる以前の様相に戻りつつある。

な顔で、自分たちの過去から目を背けた。 **で世間の目を眩まし、教会は、そして諸王国は、自分たちになんの落ち度も無かったかのよう** エミリアが、自分が命を賭けて守ろうとしたのは、こんな世界だったのか。

そんなはずはない。

ならは、それを体現しよう。 制に隠された功績のおかげで、彼女は『教え』を『訂す』審議会の筆頭審問官に任じられた。 ごくの犠牲の上に摑み取った平和が、旧世界の澱んだ停滞の延長であっていいはずがない。

平和を見つけるために。 「教えを、前そう」 老人達の醜悪な欲が渦巻く平和ではなく、消えかけた命の灯火が希望で燃え上がるような クレスティア・ベル。 攸女はゲートを開き、異世界へと身を躍らせる。

ル。と恐れられた、平和に飢える聖職者の名であった。

それはかつて苛烈な粛清と無慈悲な婆判で多くの異端者を狩り、。死神デスサイズ・C・ペ

午後九時、着替え終わった千穂が、カウンターの中の真鬼に一礼する。「それじゃあ、お先に失礼しますね」

ま、真奥さん声が大きいです!」 おう、お疲れさん。弁当、ありがとな。弁当箱、明日洗って返すから」

様子はなかった。 **一てもまあ安心したよ。ディナータイムの集客数は安定したし、あとは最終的に昼の負けを取** 止めに入った千穂の声の方がずっと大きいが、幸いにして他のクルーが二人の会話に気づく

り返せてれば万々歳なんだけどな」 「グリーンランド行きにはなりたくないですもんね」 真夷と千穂は、木崎の極北ブリザードスマイルを思い出し、同時に身震いする。

一どうせこの後ヒマだろ。ずっと居座って席の回転数下げてたんだから、ちーちゃんを家まで 「いいっていいって。あ、おい恵美!」 真奥は千穂から視線を外すと、少し離れた場所に立っていた恵美と鈴乃の方を見る

「じゃあ、とにかく気をつけて帰れよ」

乾いた笑顔を見合わせる二人。

時々どこまで木崎さんが本気なのか分からなくなるよな」

はい。あの、今朝は自転車乗ってっちゃってすいませんでした」

「別に構わないけど、でもきちんとオーダーはしたでしょ。文句を言われる筋合いは無いわ」 送り届けるくらいしろよな」 と、勝手なことを言い出す。

ばならない。女二人でマグロナルドのオーダーに二千円も使ったのは上出来の郤類だろう。 梨香はディナーのピークが始まる前に、 芦屋の目こそ無かったものの、やはり悪魔に借りを作りっぱなし、という事態は避けなけれ

思美は仏頂面で返した。

他を下手に操作するはめに陥らずに済んで、ほっとしている恵美。他の一言を残して去った。事態を引っ揺き回す原因になってくれたが、最終的には彼女の記しの一言を残して去った。事態を引っ揺き回す原因になってくれたが、最終的には彼女の記 「真臭さんを見て色々安心した」 そのまま製香と一緒に店を去ってしまいたかったのだが、鈴乃が、

できれば、もう少し貞夫殿たちの仕事ぶりを見学したい」 鈴乃が何を考えてそんなことを言い出したか知らないが、彼女が不穏な行動に出ないよう見 と言い出し、店長代理業務に気を良くしている真奥がそれを快諾した。

張る意味でも、恵美だけ一人で帰ってしまうわけにもいかない。

**粘局こんな遅くまで居座るハメに陥り、千穂が動務を上がる段になって鈴乃を促すと、よう** 

やく彼女も納得して席を立ったのだった。

一……声屋に、借りは返したからってちゃんと伝えておきなさいよ」

"もう過ぎたことは仕方ねぇから、とにかくとっとと失せろ。いいか、ちーちゃんを、ちゃん 知るかそんなの。借りを作るような状況に陥ったお前が悪い」 真臭はすげなく応じて、恵美を追い払うような仕草をする

送り届けるんだぞ」 何故か殊更に『ちーちゃん』を強調した真臭。恵美はワケがわからない。

一言われなくたって、最初からそのつもりよ。行きましょ、千穂ちゃん」

以美が歩き出すのに続く。 具奥と恵美が角付き合わせて会話するのは最早干穂も慣れっこなので、特に不審も抱かずに **ごし離れた所でその様子を見守っていた鈴乃は、カウンターには近寄らず、** 

「あ、はい。それじゃ真臭さん、お疲れ様でした」

「ありがとうございましたー、またお越しくださいませー」 「……邪魔をした」 ぎりぎり聞こえるような小さな声で真奥に一礼してから恵美と千穂に続き、店を後にする。

「千穂ちゃんのおうち、どっち?」 恵美が尋ねると、千穂は笹塚方面を見ながら言う。 真臭は、その背に向かって営業スマイルで通常業務の挟撑を行ったのだった。

握らせるのもアレだし」 ってもらっちゃっていいんですか?」 程度だから。あいつに頼まれたからってわけじゃないけど、一応夜ですからね。女の子一人で 「いいわよ。どうせ笹塚から電車に乗ろうと思ってたから帰る方向一緒だし、ちょっと寄り道 「えっと、甲州 街道を挟んで、真奥さんのアパートの丁度反対側くらいですけど、本当に送

うには浅く、夕方というには深い中途半端な夜。 恵美と干穂と鈴乃は連れ立って甲州 街道を歩く。甲州街道の車通りは多く、だが深夜といれる。 いち 私は特別製だから。さ、とにかく行きましょ」

人通りは少なく、商店は明かりを落とし、町を照らす光は存外に少ない。

「そんな、遊佐さんだって女の子じゃないですか」

一そんなに朝からダメだったの?」 「あー、でもよかった、ちゃんとお客さん来てくれて」 千穂が独り言のようにそう言って伸びをする。 **幡ヶ谷陸橋のかかる笹塚交差点で、赤信号にかかって立ち止まった時、** 大を首都高が獲う甲州街道沿いの歩道は、まるで都市という名の山を貫くトンネルのようだ。

「ふうん。でもまあ、梨香も驚いてたけど、本当にいきなりだったわよね」 「多分、私がアルバイトするようになってから、一番暇な日だったかもです」

到し、あっという間に店内は大販わいになった。 まさしく堰を切ったようにという表現が相応しいほど、一気に客の流れがマグロナルドに殺

まち笹が短冊で一杯になったものだ。 「風水ってバカになんないのかもなあ。私あんまり占いとか信じないんですけど、あんなの見 真奥が考案した短冊順い事ドリンクサービスも早速効果が現れて、干穂が上がる頃にはたち

```
るとちょっと考えちゃうかも」
鈴乃の低い声だった。
                              ……本当に、単なる偶然だと思うのか?」
                                                             千穂が言ったその時、信号が青になる。当たり前のように足を出しかけた千穂を止めたのは、
```

エミリア、あなたは気づかなかったか」 鈴乃はそのいずれも無視して、恵美に呼びかけた。エミリア、と。

「あ、そういえば鈴乃さん、結局お仕事どんな感じになったんですか?」

気軽に話題を変えるような口調で千穂が尋ね、 その声に恵美が鈴乃を振り向き、

-エミリア……? 鈴乃の眼光は鋭く恵美を射抜く。 「薄々そんな気はしていたが、やはり千穂殿は、魔王サタンのことを知っているのだな」 千穂が驚いて口に手を当てると、鈴乃は千穂を睨むようにしながら、意識を恵美に向けた。 エミリアって……遊佐さんの本当の……鈴乃さん、まさか、本当に……」 青信号が点滅を始めて再び道交法で三人を歩道に押しとどめる。 36.....

伐を成し遂げるべきだという結論に至った」 という気持ちは分かる。だが、今日の『真奥貞夫』の仕事を見て、私はやはり、早急に魔王討 「エミリア、あなたにはあなたの思惑があって、あなたの思うように魔王討伐を成し遂げたい

「どういうこと? 私には何がなんだかサッパリだわ」 干穂は慌てて身を乗り出そうとするが、恵美がそれを抑える。

「えっ!! え、す、鈴乃さん!!」

「二人とも、何故彼が魔王らしからぬ善良な日本人の振る舞いをしているのか、考えたことは 鈴乃は噛んで含めるようにゆっくりと話す。まるで聖書を信者に語り聞かせる司祭のように。

こを、考えたことがあるか? 誰もが寄せる信頼と人望を得る人物に成長した魔王が」 一彼が本当にこの日本で出世を繰り返し、社会システムに影響力を及ぼすようになった時のこ |本性を現して世の中を裏切った瞬間、起こる事態を想像したことがあるか?| 給乃は大きく手を広げた。

一言っちゃなんだけど、マグロナルドで出世したからって、それが何? 確かに大きな会社だ 恵美はばっさり斬って捨てる。

けれど、よしんばあいつが乱心してマグロナルド本社を潰したからって、世の中はそう大きく

ど、世界がひっくり返るほどとは到底……」 世界を動かす政治家になった例すらある。魔王の立身出世がマグロナルドの中だけで終わると、 「この国では、かつてエレメンタリースクールと工業学校しか出ていない人物が、首相として は動かないわ。規模は大きいから世界の株価とか外食産業の価値は大きく変動するでしょうけ

というギャップそのものが、周囲を敷く手段であると考えた方がずっと自然だ。悪魔は長命で、 「エンテ・イスラで残」度非道を極めた魔王サタンがマグロナルドの真面目なアルバイト青年、 にはならなかった。 「あ、知ってる。田中角栄ですよね」を気で考えているのか」 はいはい! と元気よく挙手した千穂の若干ズレた受け答えも、場の空気を和らげること

どれほど緒密な計画を立てているか分からない。今のうちに討伐すべきだ。これは最早我々エ ンテ・イスラ人だけの問題ではない。日本や地球の安全のためでもある」

**一だ、ダメですよ! 真臭さん時間帯責任者頑張ってるのに!」** ここにきて、どうやらエンテ・イスラの人間であるらしい鈴乃が本気で真臭を討伐しようと

していることに気づいた干穂は、慌てて抗弁しようとするが、鈴乃はそんな干穂を恵美の肩越 一私に言わせれば、彼女の記憶を残しているのも問題だ。魔王が生きていると知れば、エミリ しに睨みつける。

252 アとは違い名誉欲にかられた人間が魔王討伐を大義名分に日本に訪れないとも限らない。その 全てが、日本の迷惑や人心を 嵐 る人間であると断言できるか。千穂殿や周囲の人間を使って、

我々の手で魔王を討伐するべきだ」 あなたや魔王を害するかもしれない。そうなる前に、魔王に関する全ての人の記憶を抹消し 「だ、ダメです! 絶対ダメです!」 ..... 千種殿、あなたは七夕飾りの意味を、知っているか」 鈴乃の長口上の間に何度も変わる信号は、再び赤色を帯びて鈴乃に血の色を投げかける。

は破邪の力があると言われている。もちろん現代で祝われている七夕行事の飾りにそんな力は 灬い。でも、魔王が笹飾りを飾った途端に、客足が一気に増えた。これが何を意味するか……」 短冊の五色は世界の気の流れを司る五行の色。笹の葉には祖霊が宿り、真っ直ぐ伸びる幹に 唐突に鈴乃が話題を変えた。千穂は呆気に取られ、恵美は眉根を寄せる。

悪い気を払うと言われる、大地との結びつきが強い笹の木に、人の念をこめて作った七夕鉾

一……あいつの笹飾りが、人を呼んだ?」

悪美の答えに、鈴乃は大きく領く。

りだ。それらを媒介に魔王は無意識に魔力を発動させた。そう考えるのが一番自然だ」 「薄型テレビに驚いていたくせに、随分と詳しいのね」

あなたをエンテ・イスラに連れ帰らなければならない。辛い決断かもしれないが、元々は全く う疑問を、図らずも今の鈴乃の言葉が解いてくれた。 の一切の痕跡を消し去ろう」 別の世界の、出会うはずのなかった者同士。千穂殿の記憶を抹消し、日本からエンテ・イスラ 機性を生み出す 「現に、あなたは正体不明の第三者から襲撃を受けている。私は世界の平和を守るだけでなく 一人は間合いを詰められたまま给乃と睨み合った。 「布教先の宗教儀式を調査するのも、宣教部の仕事だからな」 ・グロナルド、引いてはこの地に禍いをもたらすか分からない。早急にことを運ばねば無用の だが恵美の中の大きな迷い。なぜ自分が力を取り戻して尚、魔王討伐に踏み切れないかとい 磯かに鈴乃の言うことは筋が通っている。 一年前、日本に降り立ったばかりの勇者エミリア 恵美は蒸した夜気に汗ばみながら給乃を睨み返す。 鈴乃は鋭い視線を恵美に送る。 |納得してもらえたか? これはエンテ・イスラだけの問題ではない。急がねばいつ千穂殿や 恵美の皮肉をさらりと流した鈴乃は、一歩恵美と千穂に迫る。後ずさると車道に出てしまう 、躊躇わずに鈴乃の案に乗っていただろう。

だがそれを口にして反論するよりも早く、震えるような声を上げた者がいた。

さんだって……」 「私、忘れたくない。真臭さんのこと、遊佐さんのこと、声屋さん、鈴乃さん、一応、漆原 千穂ちゃん……」 いやだ……いやだよ……私、忘れたくない」 干糖はいやいやをするように首を横に振る。

254

「……いや」

「……それに関しては、お詫びのしようもない。だが、干糠酸の身の安全のためでもある」 鈴乃は心底申し訳なさそうに顔を伏せるが、それで干穂が納得するはずもない。噫に涙を浮

で忘れさせるなんて、あんまりじゃないですか!」

「せっかく友達になって、いっぱい楽しい時間過ごして、なのに、全部エンテ・イスラの都合

が彼に好意を寄せていることそのものが、我々の戦意を鈍らせ、魔王討伐を躊躇わせるための 一私、真奥さんのこと、何があろうと忘れたくないんです!」 | 千穂殿、魔王サタンはあなたのその気持ちすら利用する、いや、して当然の存在だ。あなた ~べながら、ほとんど叫ぶように鈴乃に言葉をぶつける。 だが鈴乃は、沈痛な面持ちに決意を滲ませて、さらに強い調子で言い募った。

巧妙な計画の一端であると……」

う。今はまるでそうとは思えない。 これも、かつての恵美ならなんの躊躇いもなく同意していただろう意見だ。だが、何故だろ 当然干穂が納得するはずはなかった。

悉魔の王なんだ!」 か! 真面目に働いてるのに、優しい人なのに、なんでそんなこと!」 普段大人しい千穂の感情が爆発する。 「……彼は魔王だ。エンテ・イスラで残 虞 非道な行いを魔族に許し、大勢の人間を苦しめた。

一そんなことない! 真典さんはそんな人じゃない! どうしてそんなヒドイこと言うんです

十穂の口から飛び出したのだ。 "じゃあ鈴乃さんは、真臭貞夫になる前の、魔王サタンに会ったことあるんですかっ!」 それどころか、成り行きを見守る恵美を含め、かつてどんな人間も考えもしなかった言葉が、 だが、干穂は引き下がらない。 そう、これだけはエンテ・イスラの人間が魔王を語る上で、絶対に覆らない大前提だ。 まるで意見を聞き入れようとしない千穂に、鈴乃の言葉にも険が篭りはじめる。

・・・・・それは、どういう」 思美も、そして鈴乃も、千穂が何を言っているのか一瞬では理解しかねた。

尋ね返す必要があるほど、二人にとって千穂の言う意図は不可解なものであった。 千穂は涙を溜めた目で鈴乃を睨むと、言葉を続ける。

やえば地域だって征服できたかもしれないのに、どうしてそれをしなかったんですか!」 りするんですか! そんな凄い力を取り戻したなら、総理大臣とかアメリカの大統領を操っち 考えてる魔王なら、どうして滅茶苦茶になった首都高を直したり、みんなの怖い記憶を消した

「みんなで真臭さんのこと、魔王だ魔王だって悪く言って、でも、本当にそんな凌い悪いこと

今度は、鈴乃が詰まる番だった。

あってそうしたのだろう。魔王として何か深い意味が……」 めんなさいって言うの、当たり前じゃないですか! 真奥さん、当たり前のことをしただけで 『真面目に生きる優しい人だっていうこと以外に理由がありますか? 迷惑かけたら相手にご 「……私はオルバ・メイヤーの引き起こした戦いをこの目で見たわけではないが、何か理由が

怒ってくれて、未熟な私をフォローしてくれて、いっぱい相談に乗ってもらった。魔王サタン 「私、真奥さんに仕事を教えてもらいました。色々と丁寧に教えてくれて間違ったらきちんと

になっても、私にソフトクリームの機械のこと教えてくれる約束守ってくれた。そんな人が本 当に魔族を率いて世界征服をしようと思ったのなら、それこそ絶対に再由があるはすてす!」

## では、全てを水に流して我々に彼を許せと?!」

了度は鈴乃も爆発した。

魔王が改心したからといって納得するとでも? 平和な国で一生、命の危機に瀕することのな どれだけのエンテ・イスラの人々の命が、魔王軍に奪われたと思っている!」その人々が、

いあなたに、我々の魔王討伐の意思をどうこう言われる筋合いは無い!」 魔王軍とばっかり戦ってて、魔王本人に会ったこともない人に何が分かるんですか!」 鈴乃は呆気に取られて千穂の顔を凝視した。 しかし干糖は怯まない。

きな教会が、勝手な理由で遊佐さんを殺そうとしたことも!」 「私は、真臭さんが魔王サタンになっても、いい人だって知ってます! エンテ・イスラの大

何をしてたか、知ってるんですか」 平が侵略した、悪魔達に残虐な行動を許した、そればっかりで、魔王サタンがそれまでどこで 遊佐さんだって、魔王城に乗り込むまでは魔王に会ったこともなかったんですよね? 魔王 それは異世界エンテ・イスラの人間が、千穂に見せてきた有様だ。

言葉尻を捉えるのがとてもうまい」 ……千穂殿は、 きっと優秀な法律家になれるな。異端審問会の執行官だった私が保証しよう。

「ちょっと二人とも落ち着いて。今ここでそんな議論したって何も始まらないわ」 からと、唐教を指示した指揮官は罪を免れ得ると思うのか!」 「鈴乃さん! 逃げないで答えてください!」 指揮官が部隊の全責任を負うのは当然のことだろう! 実際に手を下したのは現場の人間だ

「鈴乃……いえ、クレスティア・ベル。正直なところ、あなたの言うことが一番正しいと私も 同時に恵美を見て抗議の声を上げる二人。

「私が目指した平和は、みんなが笑顔でいられる平和よ。犠牲を必要悪と断じて、友達を泣か |遊佐、さん……| 思う。でもね、これだけは言わせてもらうわ」 悪美はそう言って、涙で顔をぐしゃぐしゃにしている千穂をそっと抱き寄せる。

さ込みたくないという考え自体、エンテ・イスラの傲慢よ。私達が魔王に思うところがあるよ 「皆が笑顔で終われるような魔王討伐の結末しか、迎えるつもりはないわ。そもそも日本を巻 その言葉に、给乃は弾かれたように顔を上げ、絶句した。

でた事実に目を明る、そんな平和のために、私は戦ってきたんじゃない。

うに、彼女達にも魔王に思うところがある。一方的に私達が、彼女達のことを決めていいは**ず** 

「……本気で言っているのか」

**鈴乃は護える声で恵美に尋ねた。** 

「本気よ」 夢物語だ。あなたはエンテ・イスラも、日本も、全て納得させた上で魔王を討伐するつもり 恵美の声の芯は微塵も揺るがない。

なのか。そんな方法があるはずがない。払わなければならない犠牲は、確かにあるんだ」 言いながら、しかし鈴乃の視線と言葉は、どんどん力を失っていった。

痛い。何故、こんなにも、自分の言葉が自分の胸に刺さる。

のてはなかったのか。 ったことや、その原因を見て見ぬふりする世界を変えたいから、自分はエミリアを探しにきた 『払わなければならない犠牲』などというものを無くしたいから、そして、犠牲を払ってしま

て自分を闇に葬ろうとした世界と、同じことを言っているのだ。 | それでも、私はそれをしなきゃいけないの。だって私は、人類の希望、勇者エミリアなのよ| エミリアなら、きっとそう言うということは分かっていた。分かっていながら、鈴乃はかつ

「それに現実的な問題として、今下手にちょっかいを出して魔王、アルシエル、ルシフェルと 恵美は、少しだけ気勢を緩め、鈴乃の胸に語りかけるように続ける。

三人同時に覚醒されたら、私とあなただけじゃ流石に分が悪いわ。謎の第三者さんの襲撃は、 し、魔王討伐もさせない。どうしてもって言うなら、その前に私と戦ってもらうことになるわ」 戦法や能力から言っても魔王一派の仕業じゃない。今魔王討伐を急いでも、戦力も情報も不足 云のために、私は暇うわ。彼女も私が守るべき大切な友達だから」 ゃんをどうこうしようっていうなら、干穂ちゃんの記憶と、干穂ちゃんの消しちゃいけない過 「あなただって、私が守るべきエンテ・イスラの住人よ。でも大義名分を振りかざして干穂ち な癖きを生み出した。 一型剣……本気なのか」 『今、この場に限っては、私は千穂ちゃんの笑顔を守りたい。千穂ちゃんの記憶は消させない した状態での二正面作戦になるだけで益が無い。だから」 恵美のわずかな力の放射が、人通りの少ない夜の交差点、街灯と信号の明滅の中に一際大き 恵美はそう言うと、胸の前に手をかざしてみせる。 恵美は、千穂の肩に手を置いた。 右手を光らせ、聖剣の素となる天銀と聖法気を共鳴させる。

「あなただって、都合の悪いことを関に葬るようなやり方が嫌だから、日本に来たんじゃない

感極まったような千穂の声

000 鈴乃は気丈に恵美を睨むが、しかしその気丈さはほんのわずかなショックで決壊してしまいま。

王も死んだことにしたまま知らんぶりを決め込んで、命に換えて魔王討伐を果たした教会験士 そうなほどに儚く脆く見えた。 教会の体面だけが大事なら、オルバの悪事に気づいても絶対に隠し通すはずだもの。私も魔

**勿の勇者を伝説に仕立てあげれば、教会は理想の戦後世界のシナリオを描けるわよね」** 

ことで、教会に、恥じることなく平和な世界で信仰の拠り所になってほしいから」 ことに拘っていたんでしょう? オルパの悪事と教会の暗部を公表して自 浄 作用を働かせる 「Tも、オルバの部下であったはずのあなたはそれを良しとしなかった。だから私を連れ帰る **老いた大神官達が望んでいるのは、まさにそのシナリオなのだから。** いて歯を食いしばる。

「だってあなたは、教会正義を広める宣教部の、訂 教 審議会筆頭審問官なんだから」恵美は干穂から離れ、最早視線を落とし情いてしまった鈴乃にゆってりと歩み寄る。 恵美は手を伸ばして鈴乃の肩に触れようとする。だが、鈴乃は身をよじってその手をかわす

と、よろめくように後ろに下がった。

「ちょっと! 危ないわよ!」

わず、大量の買い物袋とともに逃げるように夜の闇の中に飛び出していた。 だが給乃は、赤信号にも構わず交差点に飛び出すと、盛大に鳴らされるクラクションにも構

同じだと言われた気がした。

された。 守るべき人を守らず、犠牲を必要悪と断じて見て見ぬふりをして平和を標 榜する、醜悪な あの醜 悪な老人達を見下しているつもりで、実は自分も彼らとどこも変わらないと気づか

「ごめんなさい。ちょっと、言いすぎました」 大する叫びのように聞こえた。 危険な逃げ方をした鈴乃を恵美がハラハラしながら見送っていると、 急ブレーキで止まる車のスキール音が、今まで自分が粛清した『異嬌者』達が自分を嘲

その後ろで、干穂がまた涙をぼろぼろこぼしながら、恵美に謝った。

のことばっかりで……鈴乃さんに、ヒドイこと……」 「そうハッキリ背われると、それはそれで恥ずかしいです……けど」 「私、又聞きしただけでエンテ・イスラのことなんかほとんど知らないのに、自分と真実さん 恵美は複雑な思いで、泣きじゃくる千穂の頭を優しく撫でる。 いいのよ。人を好きになるっていうのは、理屈じゃないからね」

でも、彼女は彼女で、きっと辛いものを抱えてるの。それは、分かってあげてね」 .....遊佐さん...... 喉の奥で嗚咽を吞み込もうと必死の干穂を、恵美は優しく抱きしめる。

「はい……ぐすっ、後で、ちゃんと謝らなきゃ……」

今度、じっくり話し合いなさい。彼女も、話の分からない人じゃないから」

120 遊佐さん、お姉ちゃんみたいだ」 千穂は、甘えるように恵美を少し強く抱きしめ返す。

一でも……ちょっとこれからは、緊張していかないとね」 そんなに年は変わらないはずですけどね」 わざと口を尖らせて見せる恵美は、千穂の髪を優しく撫でる。

ない鈴乃がこれからどう出るかは不明だ。 そして鈴乃とは関係が無いのに恵美にちょっかいを出してきた、変態大線使いのこともある。 混乱したなりに納得してくれた手ごたえはあったものの、真奏への不安を払拭したわけでは 天は笑顔を引き締めて呟く。

あれは明らかに恵美を狙っていたから、鈴乃とは別口の、オルバの流れを汲む教会からの刺

名だろうか。

恵美はそこまで考えて、忌々しそうに溜息をついた。 いずれにしても、どう動くか分からない宙ぶらりんの要素が多いのは良いことではない。

264

分かれば、魔力をほとんど失っている真典達はますます大人しくなること請け合いで、そうい 近体と謎の変態大鱗使いのことは、真奥達に知らせる必要があるだろう。 不測の事態に備えるため、そして恵美自身の魔王討伐の本懐を成し遂げるためにも、鈴乃の 真典の身辺を気遣うようで気分が悪いが、隣人が力量未知数の大法神、教会の高位聖職者と

った意味では悪いことばかりでもない。 と言うか、そうでも思わないとやっていられない。

仕方ないなあ……なんか、あいつを助けるみたいで凄くイヤなんだけど……」

遊佐さんと真奥さんが仲良くしてくれたら、私も嬉しいです」

に着信とメール入れておけば、仕事終わってから折り返してもらえると思いますから」 「残念ながら、いくら友達の要望でもそれだけは応えることはできません」 でも、真奥さんに知らせるんですよね、だったら早い方がいいですよね! 真奥さんの携帯 流石にそれに乗るほど恵美も甘くない。 ®が和んだ反動か、千穂は調子に乗ってそんなことを言い出すが、

千穂が恵美から離れるとパッグから携帯電話を取り出すと

|それにしても、遊佐さんいつ知ったんですか? 鈴乃さんが……

```
悪美がそこまで言ったその時だった。
                      本当に今朝よ。朝ご飯終わってから笹塚駅で突然正休明かされてそれで……」
                                                        電話帳機能から真臭の電話番号を探しながら尋ねる。
```

千穂ちゃんごめん!!」

え?な、な、何に」 立ち尽くす千穂。千穂を横っ飛びにさらう恵美。そして、轟音。 鈴乃の鋭い呼び声。

犬が忌々しげに呟く。

ボールの汚れの痕はどこにも見られないので、わざわざ新調したのだろうか ……噂をすればカゲね。面倒なストーカーに好かれちゃったわ」 **朳沢が分からないまま恵美に横倒しにされた千穂だが、** rは鈴乃か漆 原程度。黒い目だし帽子にピニール製のポンチョ、迷彩柄のパンツ。カラー

「ゆ、ゆ、遊佐さんこの人っ……」 そうよ 種腕で振り回すのは今夜の三日月をそのまま持ち去ったかのような巨大な鱶

※美は千穂を背に庇うと、油断なく身構える。

永福町のコンビニで自動ドアに激突して転んだ挙句に、店員にカラーボールぶつけられて逃

げた、エンテ・イスラの刺客よ」

「それ、本当に刺客なんですか?」 あんなもの振り回しながら空から落ちてくる日本人に、生憎心当たり無いわ」

千穂は、思わず恵美と大鎌の刺客を交互に見た。

「そ、それもそうですね……」

**えて暇うのでは意味合いが異なる。** 「前もそうだったけど、こんな人目につく場所で襲ってくるなんて、何考えてるのかしらね!」 一見誰もいないように見えて、往来で戦闘行動を行うとものの数分で通報されてしまうとい 元ほどまで交差点で言い争いをしていた恵美たちだが、単純に口喧嘩するのと実際に刃を交

安全確保的な意味でも社会人生命維持的な意味でも超短期決戦で退けねばならない。 うのは、恵美自身が二ヶ月前に身を以って学んでいる。 前回の襲撃でも平気で周囲を巻き込むような敵であったことを考えれば、自分と干穂の身の

「時間をかけてはいられないわね。ちょっと荒っぽくなるわよ」 恵美は今度こそ、右手に意識を集中させて天服と聖法気を錬成する。一瞬で

**『進化聖剣・片翼』を出現させ、全力の聖法気を刃に注ぎ込み、「際強く輝かせた。これで一、** 

一回程度なら、あの紫色の光を打ち払うこともできるだろう。

ガードレールに当たるとそのまま繋消する。 果たして次の瞬間、目だし頓の隙間から、早速紫色の閃光が閃いた。 恵美も、千穂もそちらを一瞬見るが、ガードレールが損傷変形した様子は無かった。 軌道を見切って恵美が体を横に開く。紙一重で恵美の胸の前を通過したその光は、交差点の

やはり物理的破壊力を発揮するのではなく、聖法気のみに干渉する力なのだということを確

|天光 駿 靴!| 破邪の衣を足に集中させ、目にも領まらぬ速さで覆面マントの眼前に肉迫する。千穂を逃が。5。

している暇が無い以上、彼女に手出しをさせないようにしなければならない。 そして敵の得物が聖剣よりリーチの長い大鎌なので、接近戦でカタをつける必要がある。 定属と金属が打ち合う甲高い音と火花が夜の交差点に花咲き、千穂の目には、離れていた双

の刃と、勇者の電光の踏み込みを、この大鎌の柄は真正面から受けたのだ。 方が一瞬で鍔鎧り合いを繰り広げはじめたようにしか見えなかった。 |お……押され……」 それどころか刃を立てようが力をこめようが、傷一つつく気配が無い。むしろ…… 紫色の光対策にホーリーピタン8のおかげで充実した聖法気を、最大値まで込めた聖剣。そ だが、一方の恵美は接敵に成功したものの、銅鏡り合いになったという状況に驚いていた。

あの紫色の光が閃く。 声は唐突に聞こえた。 圧迫が支えきれず、恵美は徐々に徐々に押されてゆく。 「ダメだよ、女性が自分を傷つけるような技を」 「ぐっ……天光、飛刃!」 「っ!! あなたはっ!!」 「だから言っただろう? 男は、弱った女につけ込むと」 あなた、一体………」 き込まれかねない。 足に破邪の衣を展開しているにも関わらず、押し合いで力負けしつつあるのだ。大徹使いの。 はら **余裕すら漂わせる一言ともに放たれた紫色の光が、光る刀身に当たった。と、** だが、この状況を打開するには他に手が無い。自爆覚悟で術を放とうとしたその時、またも そもそもは這くの敵を飛ぶ斬撃で排除する技で、これほどの接近状態で放てば自分も衝撃に 恵美は万身を白く光らせる いつの間にか鍔斃り合いではなく、大鏃使いが上段から恵美を圧倒する形になった時、その しそうなほど接近した覆面の奥から聞こえてきた声に、恵美は思わず目を見開いた。

なっ!!

か、今の恵美の全力を込めた聖剣の聖法気が急速に弱くなってゆく。 「これが僕の力、。堕天の邪眼光。。全ての聖法気の使い手を圧倒する、僕だけの力さ」 急激に相手の力が増したような気がして、恵美は呻く。 恵美は今度こそ驚 愕の声を上げた。発動寸前の術が解除されてしまったのだ。それどころ

「堕天!! まさか、あなたは……っ!」 「その通り。僕は君を苦しい使命から解放しに来た。ゆっくり、お眠り」 猫撫で声とともに、目だし帽の中央で、紫色の光が凝縮してゆく。

聖剣は、返してもらうよ」 その瞬間、恵美の視界を、全く別の光が掠めた。

美を巨大な衝撃で吹き飛ばしたのだ。 がはつ!! 「遊佐さんっ!!」 千穂の警告の叫び声は一瞬遅かった。 抵抗のために精一杯張っていた体にいきなり別方向から巨大な衝撃を加えられ、恵美はえず **大の視界の外から襲ってきた金色の巨大質量が、敵の膂力で地面に縫い止められていた恵** 

きながら吹き飛ばされる。

けられ一瞬にして意識を暗転させた。 恐怖に固まる千穂のすぐ横まで砲丸のように吹き飛ばされた恵美は、ビルにしたたか叩きつ その拍子に恵美の手から聖剣が零れ落ちた。

変態大能使いはそれを目で追おうとしたが、

瞬だけ淡く光らせ、そして消えた。 元の粒子に変化した 金属質の外見を持つ聖剣はしかし、羽毛のように柔らかく地面に落下し、一瞬で形を失って

「遊佐さん! 遊佐さん!!」 その様子を見て軽く舌打ちする変態大嫌使い。 聖剣だった粒子はまるで無数の歯のように倒れて気絶する使い手に殺到し、恵美の全身を一 一方の千穂は、半狂乱で倒れた恵美を揺り動かしていた。

できず、恵美にすがりついたまま金色の光を携えた第三者を睨みつけた。 なんでですか!なんでこんな難いことするんですか!」

うつ伏せで気絶する恵美。だが干穂の細腕では完全に弛緩した彼女の体を引き起こすことが

「鈴乃さんっ! どうしてっ!!」

やっぱり鈴乃さんもそうなんですか! オルバさんみたいに、遊佐さんが邪魔なんですか!」 簪でまとめた髪を何故か解いて腰まで下ろし、巨大な金色の大槌を携えた簾月鈴乃に向かっ

鈴乃は苦しげな顔で、千穂を見下ろす。

こんなの、こんなのって無い! 真臭さんを悪魔だって言うなら、みんなのために戦った遊

黙れつ!」 真奥……さ……たす……け」 恐怖と驚きで破直した千穂に一瞬にして肉迫すると、その額に指を当てて 鈴乃は、千穂の責める言葉に耐え切れなくなったように目をぐっと瞑り叫んだ。 じんを裏切る鈴乃さん達は何なんですか!」

千穂の手からピンク色の携帯電話が地面に落ちて、乾いた音を立てた。 その意識を聞に落とす。

ていた真奥。夜も深くなりはじめ、試しに打ち出してみたレジレポートを点検すると、ディナ には至らないだろうという予測を立てる。 ータイムから客足が戻ったとはいえ、やはり午前や昼のダメージは大きく、負け分を取り返す 甲 州 街道を、サイレンを鳴らしてけたたましく通り過ぎる緊急車両の音をなんとなく聞い

外だったのが、子どもだけでなくカップルや若い女性も笹飾りに興味を示したことだ。 明日以降の動きで盛り返すしかない。 笹飾りサービスが功を奏したか、集客分類で言えば普段よりも家族連れが多く、さらに予想

グリーンランド左遷は流石に冗談にしても、木崎なら本当に真奥の時給を削りかねないので、

真奥にとっては嬉しい出来事だった。幼稚園の先生は教職課程で折り紙を学んでいるはずなの 近所の幼稚園に勤めているという先生から七夕飾りの作り方を教えてくれと目われたのも、 宗教的意図や魔力、気、精霊などの概念も広範に調査していたため、かなり念の入った作り 真奥がクルーに指示して作らせた七夕飾りは、地球の魔力文明を探索していた時に得た知識 おかげで笹は色とりどりの短冊で、早くも満員御礼状態だ。

で、プロからの依頼が来るとは誇らしい限りである。

明日にも早速新しいものを渡辺老人宅にもらいに行こうと心に決める真奥。明日の朝からの

やって、ふふふ くびにも出さない。 以上、かけてきた人を待たせてはならない、というマニュアルに忠実に従った結果である 予定をぼんやりと頭の中で組み立てながら、閉店に向けてクルーに暇を見て閉め作業の準備を |あらやだごめんなさい、まさかいきなり真臭さんが出られるなんで思わなかったから驚いち 一はい、私、この時間店を預かっております真果ですが……どちらさまでしょう」 『もしかして、時間帯責任者で店長代理の真臭貞夫さんでいらっしゃる?』かけてきたのは中年の女性のようだが、曼監器の向こうで何やら明るく声惑っている。 「あらもしもし、やだどうしましょ」 「お電話ありがとうございます。マグロナルド幡ヶ谷駅前店、真奥がお伺いいたします」 宗しようとした時だった。 いきなり人の職分を言い当てたあんたは誰だ、真臭は首を捻るが、そんなことは態度にはお 真臭は時計の時間を見て首を傾げたが、何かを考える前に紫早く受話器を取った。三コール 真奥の携帯電話ではなく、店の固定電話である。 電話が鳴った

『佐々木千穂の母でございます。いつも、千穂がお世話になっております』

笑ってないで早く名乗って用件を伝えてくれと思った真臭

「こ、これはどうも、ちー……あ、佐々\*\*さんの、お母さん! こ、こちらこと、いつもお世この一言で、『蝶の峠き声と同時に背筋がパネのように攢ね伸びた。

顔を微突させそうになる。 そして、本人もいないのに物濃い速さで体を折って礼。危うく目の前のドリンクサーバーに

話になっております!」

何も取り乱す必要は無い。従業員の保護者が電話をかけてきただけのことだ。

をしているわけではない。でも、考えてみれば干糖の真臭への手料理は両親公認だったはずで、別に自分は干糖と特別親密な関係なわけでもないし、いや、親しくはあるが男女の付き合い そう考えると一体自分は千穂の母親に対してどう接し、なんと呼べばいいのだろう。

『ここのところ、干穂が色々とご迷惑をおかけしているようで、本当にごめんなさいね。今朝 一瞬で全身が冷や汗にまみれる真奥の喉の震えが侵話器を通して伝わったのか、

ら全然知らない自転車で帰ってきたものだから、本当に驚いちゃって」

「そ、そんな迷惑だなんて。干穂さんは優秀なクルーですし、その、恥ずかしながらあまり余 まるでその様子を楽しむように笑う千穂の母。

『千穂もね、お手伝いしないってわけじゃないんですけど、それほど今まで料理をしてきたわ 裕のある暮らしをしておりませんで、今朝は食卓を豪華にしていただいて、感謝しております」

ね、あ、こめんなさいね、お仕事中に を悪い意味で解きほぐした。 のせいで全身の震えが止まらない。 まで頑張ってるのは初めて見たものですから、母親としてはちょっと嬉しくなっちゃいまして お父さん子だったから、今まで仲のいい男の子がいないわけじゃなかったんですけど、あそこ お付き合いをされてるわけではないっていうことは何ってるんですけどね。でもあの子ずっと していらないって言うもんだからつい好きなようにさせちゃって』 ってやってくださいね? 私も教えることは教えたんですけど、手伝おうとすると顔真っ赤に けでもないんで、ねぇ、もし火が通ってないとか味付けがおかしいとかあったら、きちんと言 「いえ、その、恐れ入ります」 『あらまあまあ。何か、プレッシャーになるようなこと言ってたらごめんなさいね? 特別な 「は、はあ、恐縮です。大変美味しく頂戴いたしました」 真臭としてはそうとしか答えようがない。特に悪いことをしているわけでもないのに、緊張 だが、ようやく、思春期の娘の母親モードを終了した千穂の母の一言は、そんな真真の緊張

ż?

思わず真奥は時計を見ると、夜十時を少し回っている。千穂が恵美と鈴乃とともに帰ってか

『千穂は、まだそちらでお仕事してます?』

ら、既に一時間以上が過ぎていることになる。

「まだ、帰っていないんですか?」

務を上がってもそちらでゆっくりしているのかと思いましてね』 **『帰りにコンビニで牛乳買ってきてって言ったんですけど、まだ帰らないものだから、また動** 

真異は、急速に頭が冷えるのを感じた。

てもしているのだろうか。 恵美が一緒にいれば生半可なことでは間違いは起こらないだろうと思ったが、見込みが甘か 鈴乃が引っ越してきた当初から真臭が常に頭の中に置いていた考えが警鐘を発する。 千穂の家に行ったことがあるわけではないが、そう遠い場所ではないはずだ。 恵美とは仲がいいようだし、鈴乃とも打ち解けていた様子だから、女二人でどこかで寄り道 と真異はそんな平和な考え方を否定する。

お玩さん 真奥は呼びかける。

まったく、使えない勇者だ。

「あらやだ、娘の友達の若い男の人にお母さんなんて呼ばれると、何か新鮮」 何を喜んでいるんだ、と一瞬。突っ込みそうになるが、真臭はゆっくり息を吸うと、その言

『お嬢さんが帰るまで、ゆっくり家で休んでいてください』 その言葉は単なる音だが、電気信号で変換されて千穂の母の耳に届く。

真奥は、催眠魔術の成功を確信する。 そして今までの調子が嘘のように静かになった千穂の母は、一言も断りなく遠話を切った。 こちらも通話を切ると、たまたま傍らにいたクルーが声をかけてくる。

「どうしたんすか?」ちゃちゃん、まだ帰ってないんですか?」

みたいだけど、多分寄り道してるんじゃないかな」

に入っていく。 「ああ、なんか友達と一緒みたいでしたもんね」 『面を見て舌打ちした。電話の着信が、一時間近く前に一件。 真拠はスタッフルームに飛び込むと、自分の私物の中から携帯電話を取り出し、慌ただしく コール時間は着信限界時間の九十九秒。真泉は余計な金のかかる留守番電話サービスには加 千穂からだった。 それだけ言うとクルーは納得して、アルコール除菌スプレーとダスターを持って厨房の奥

入していないし、携帯電話本体の伝言メモ機能にもメッセージは吹き込まれていない。

干穂はこちらが電話に出られない状態である場合には、メールなり連絡を後日にするなりと

278 いった礼儀をわきまえている。 そんな千穂が限界時間まで発信を続けたというのは明らかに異常事態と見るべきだろう。 一応折り返しの電話を入れてみるが、三十秒ほどで留守番電話応対の電子メッセージが流れ

てきた。二度、三度と繰り返すが結果は同じ。 不安にかられて今度は、一緒に帰ったはずの恵美の番号を呼び出し電話をかける。 数コールの後に、やはり留守番電話の応対が響き、真実は舌打ちしながら電話を切った。

くそっ! 千穂どころか恵美も出ないとなると、悪い子感が益々募る。

士機が握られている。 「真寒さん、あれ、真臭さん?」 と、先ほどのクルーがスタッフルームに真奥を探しにやってきた。その片手には店の電話の 恵美が意図的に真臭からの着信を無視しているのであればまだいいのだが。

ちーちゃんか! 思わず切迫した勢いで尋ね返してしまい、クルーが驚いたように首を振る。

「真臭さんに電話ですよ」

「あ、いえ、えっと、漆原さんと仰る方から」

はあけ

このタイミングであまりの子想外の相手に、真臭は思わず声を上げる。

| なんで店の電話にかけてくんだよ!| てかそれ以前にこの電話 | 体どこからかけてるんだ」 『あ、真典? 僕だよー』 果たして受話器から聞こえてきたのは、魔王城の寄生堕天使である漆原の声だった。

ものが存在しない。なのにどうやって漆原が電話をかけてくるのだろう。 なんだそりゃ?」 「家から?! いつの間に携帯買ったんだよ! そんな金持ってたのか?!」 『だって仕事中に携帯にかけたって出ないだろ。家からかけてるんだけど、それがどうしたの』 携帯なんか持ってないよ。そんな金もないし。スカイフォンだよスカイフォン、知らない?」 漆原には必要な時以外は出歩くなと厳命してあるし、そもそも魔王城近辺には公衆電話その

『はあ?』なにその態度。声屋に言われて折角センタッキーの裏情報取ってきたのに』『まぁ家計に影響がないなら何してもいいが、一体なんの用だ』 真爽に言わせれば、こっちこそなにその態度と言いたいところだ。

るんだよ。もう携帯電話みたいなコストパフォーマンスが高いものなんか時代遅れ』

日本に住んで二ヶ月のニートが知った風に何を言う、と思う真臭だったが、

「ネット回線使った電話だって思えばいいよ。料金激安だし、最近じゃ固定電話にもかけられ

気が焦る真臭は楽成の電話は緊急性が低いと断じる。一年からの着信が一時間前ということは、トラブルはそれ以前に発生している可能性が高い。

「ああ、そうか悪いな。でも、ちょっとこっちも取り込んでて、帰ってから聞く」

『待ってよ。そんなこと言っていいの? あのセンタッキー、悪いけど普通じゃないよ』 そう言って切ろうとするのを、漆原は大声で進った。

『店長の名前は猿江三月。店舗の名前は幡ヶ谷駅前店、でいいんだよね?』 受話器の向こうで何やらカチカチとマウスを動かす音が聞こえる。存外に音質がクリアだ。

歌舞伎町でヘタクソなナンパでもやってたほうが似合うような奴だったぞ」 ……まんだって?」 ってたらしいんだけど、そんな感じの人?」 **『その猿江さんなんだけどさ、社員名簿によると、身長百八十センチで学生時代はラグビーや** 何かの間違いじゃねぇのか。どう見ても身長はお前くらいのちびっこ店長で、ラグビーより 真臭は思わず尋ね返す。 ああ、そういうことらしいが」

にアクセスすると、管轄事業所内で復江なんて珍しい苗 字、その人しかいないんだよ! 『それは僕がチビだって言いたいの? ……とにかくセンタッキーの淡谷事業所の人事管理表

として登録されているのは田中っていう人で、しかも女性だ』 13.... |おま……|体どんなとこにアクセスしてんだおい」 『まだあるよ。そもそも件の猿江氏は広告宣伝部に所属してるみたいで、幡ヶ谷駅前店の店長

していただろう。 真奥の身の回りに何も起こっていなければ、そんなことは向こうの会社の人事管理不備と流

だが、このタイミングで急に存在の根拠があやふやになったセンタッキーフライドチキン幡

ヶ谷駅前店店長・猿江三月という存在を見過ごしていいのだろうか。

「ちょっと聞くがお前、携帯電話の番号で人の居場所が分かるような都合のいいワザ持ってた

そして、未だ帰宅しない千穂と、電話に出ない恵美。その二人と一緒に帰った……。

あるのかよ!

りしない?」

「いきなり何? 探せばあると思うけど」

ポロPCでまともに戦くかどうか……」 『でも、今持ってるわけじゃないし、そういうのって解析に凄く時間かかるし、そもそもこの 適当に言ってみた真臭は、思わず突っ込みを入れてしまう。

「悪かったなポロPCでよ!」

282 真要は、一瞬息が止まった。 有体に言えばそういうことだが……」 でも、何? 誰かの居場所知りたいわけ?」 人の金で買ってもらったものをなんという言い草だ。

『分かるよ。あいつのショルダーバッグに軌跡ログ記録型GPS発信機を忍ばせておいたから』 「きせき……じーびーえす……何?」 ああり

確かに真臭達にとって、恵美は下手な野生動物よりよほど恐ろしい存在であることは確かだ。れくらいの時間をかけてどう動いたかってのが分かるんだ」 動物や渡り鳥の行動や移動経路を調べる時なんかに使うんだけど、発信機を仕込んだ相手がど

『あー……まあその、映画に出てくるような超小型発信機を想像してもらえればいいよ。野生

突然飛び出した早口言葉に真奏は目を白黒させる。

簡潔な答えだが、真臭は恵美がアパートの階段から転落したときぶちまけた荷物を、漆 原『昨日の朝、ちょっとね。すぐパレないように、靴の底の中敷の下に仕込んでおいたんだ』

が片付けていたのを思い出した。

お前、そんなもんいつの間に

『真奥も分かってたんじゃないの? 鈴乃ちゃんが、普通の日本人じゃないことくらい』 漆原はなんでもないように言った。 ※主の真奏が何も言わないから僕も言わないでおいたけどさ、このアパートに特にお金に困

ってるわけでもない女の子が引っ越してくる理由なんか、どこにも無いもん』

「……意外とお前、寮しいいのな」 『エミリアが知ってて彼女と接してたかどうかまでは知らないけどね。でも、大体にして例の

大家さんも、普通の人間じゃないんだろう? そういう人と契約して、魔王城の隣に来る人間

が、普通の入居者だって思う方がどうかしてると思うけどね」

近所付き合いのことなどではない。

**ろ真臭は大丈夫なの?** ということただ一点に尽きたのだ。 『僕半分天使だから。聖法気も特別体に害になるわけじゃないし、おいしく頂きました。むし 一じゃあお前、鈴乃の作った飯やうどんは……」 "あの" 大家と契約してやってくる入居者が、異世界エンテ・イスラの人間なのではないか、 鈴乃が入居してきた時、真奥が心配していたのは、芦屋の言うような居住モラルや人間性や 芦屋の夏パテの原因。それは鈴乃が魔王城に持ち込んだ、一連の食材だった。

地球にもエンテ・イスラにも、"服別"という特別な宗教儀式が施された食材がある。

確かに下級悪魔相手なら、純 粋培養の聖別食材を体内に摂取させて体を害することもでき 別口の魔王討伐の刺客なのだ。 法気を宿す特別な食物であることが多い。 ったろう。 たか。 「食い物って、体に悪いものほど美味いじゃん」 そんなものを親切を装って真臭達に食べさせる理由は容易に想像がつく。彼女は、恵美とは 鈴乃が持ち込んだ食材は全て、そのエンテ・イスラの聖別食材だった。 聖別食物の地球代表はぶどう酒やパンであり、儀式の際に特別な聖具として用いられる。 一方エンテ・イスラの聖別食物は、教会の敷地内で育てられ、聖水と祝福の土で育まれた聖

「そういう問題?」 高等悪魔が型別食物を食べることは、聖法気を直接体内に摂取するに等しいので長期的には 真奥はあっけらかんとそう言い放ち、漆原を呆れさせた。

体に害悪なのだが、言うなれば人間にとってのトランス脂肪酸や悪玉コレステロールのような

ものでしかなく、それで急激に力を失ったり体の機能が低下したりということはあり得ない。

「オルバみたいに直接殴りかかってきたわけじゃねぇしな。出された飯に文句言うのは俺の主 った」程度の原因でしかない。 芦屋の場合は二ヶ月前の戦いで魔力がほぼ底を突いていたのと、あとは単純に「腹に合わな

芦屋がその映画の話を気に入ってるらしくて、前はよく嫌味を言われた」 |でもそれ、毎日パーガー食べ続けたらどうなるかって映画みたいなことになるんじゃない?| 義に反するし、家計も助かるだろうから利用するだけ利用しようと思ってたんだが」

一その芦屋は今どうしてんだ」 隣人が自分たちの敵だと発覚したら、芦屋なら黙っていそうにない気がするが。

一帰ってきてうどん食べて、今トイレで唸ってる」

……あっそ

ミリアは全然不審な動きしないし、途中で追跡切っちゃったんだ』 何より家計が助かるからって言って黙ってたみたい』 『じゃないの? まあともかくそういう理由で発信機仕込むのに成功したはいいけど、結局エ 「……信頼と忠誠心は嬉しいが、健康を害してまで節約したいのかあいつは」 『鈴乃ちゃんが怪しいってことは芦屋も分かってたみたいだよ。ただ、真奥が何も言わないし、 真典は、配下の知将の情けない有様を想像して、涙が出そうになる。

|多分ね。パッテリーが時間ぎりぎりだと思うけど……| 一なるほどな。理由は分かった。それ使えば今のあいつの場所が分かるんだな?」 なにやらキーボードとマウスを排作する音が聞こえた後

何これ? 漆原が何か意外そうな声を上げた。

「……そうか。それだけ分かれば十分だ。珍しく役に立ったな。褒めてやる」『都庁だね。GPSの信号は都庁の第一庁舎でずっと止まってる』 「どこに向かってる?」 漆原はその問いに簡潔に答えた。

飛んだような軌跡になってるよ!

**『うちとマグロナルドの中間あたりの交差点から、建物プチ抜いて一直線に動いてる。何か空** 

一珍しくは余計だよ

「奇跡じゃなくて軌跡ね……今、声屋が出てきたから言いたくないんだけど……」 した。芦屋が便所から出てきたのだ。 「ところでお前、その沓跡のGPSなんちゃらってやつ、いくらで買ったんだ」 その瞬間、電話の向こうで派手に水が流れる音と、立てつけの悪い便所のドアが開く音が 真臭は領くと、ふと気になったことがあって尋ねてみる。

いいから、後で俺がとりなしてやるから、言ってみ」

わずかに逡巡する気配があった。

『アキバの通販サイトで……よ、四万……真奥のカードで』 その瞬間、電話の向こうで大きな何かが転倒した音がする。

したかは知らんが、今回役に立ったから、俺は許してやる」 是非それを今すぐ帰ってきて芦屋に言ってもらえると、僕スゴク嬉しい。悋い』

「あー、正直でよろしい。芦屋はどう言うか分からんし、お前がなんのつもりでそんな買い物

真奥は電話を通して、漆原の家計の使い込みに卒倒する芦屋の姿が見えたような気がした。

「これで本当に寄り道して遊んでるだけだったら、恵美の奴タダじゃおかねぇからな」 から、顔を叩いて気を引き締める。 ンディションを把握するのも、上に立つ者の務めた」 「それに、下手についてこられて魔力スッカラカンのお前らが怪我しても困るしな。部下のコ 「あ、ちょ、まお……」 「まだ仕事終わってないから無理。だが助かった。そんじゃな」 そう呟くと、真奥は一回大きく深呼吸し、スタッフルームの雑多な臭いでむせそうになって 心底情けない声を上げる漆原を無視して、真臭は電話を切った。

「あれ? 真奥さん、もう床掃除するんすか?」 スタッフルームから出てきた真臭が、モップを持っていることに驚いたクルーが声をかける。

そして迅速に周囲を見回して掃除用具入れに目を留めた。

```
288
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           「ああ、まあその、ちょっと出てくるわ」
                                                                                                                                                             真寒さん!」
                                                                                                                                                                                                                                            邪魔者を掃除しに行ってくる」
                                                                                                                                                                                                                                                                    真異は一瞬。返答に詰まるが、すぐに真面目鳴って答えた。
                       魔界の王ナタンは古の騎馬兵のようにモップを構え、警察に見咎められないよう甲 州 街道
                                                                                                                                                                                         真奥はクルーの追及を無視して、駆け出した。
                                                                                                                                                                                                                 ちょっと何言ってるかわかんないんですけど……あ、ちょっと真臭さん!」
                                                   /ユラハン号はそんな主の燃える闘志に応え、チリンチリンと勇ましい雄叫びを上げた。
                                                                              ンルーの絶叫を出陣のラッパ代わりに、真奥は愛崎デュラハン号に飛び乗る。
                                                                                                      29らなくていいから出かけないでください!」
                                                                                                                                     茶ずるな! 俺は必ず帰ってくる!」
を初台新宿 方面目指して疾走しはじめたのだった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                               モップ持ってどこに?」
```

恵美は強風に髪を靡かせたまま、ぐったりとしつつも二人を睨み下ろした。

頭上には、地球ではあり得ない巨大な三日月が恵美を、いや、東京都庁第一庁舎全体を照ら

その光の中は、どうやら魔王の空間結界と同じように、現実と切り雕されているらしい。 ? 街で最も月と空に近い第一庁舎の屋上ヘリポートには、都会の夜のざわめきはまるで届か

し出していた

ず、静かな世界。びょうと吹き荒ぶ風だけが、異世界の存在達を見守っている。 いい加減……諦めなさいよ」

して聖剣を生み出す。天銀。だけは、どれだけ光を浴びても恵美の体内に留まったままだった。 美の体からはほぼ聖法気が失われていた。 「私も特に抵抗してるわけじゃないのにできないんなら、出直したら?」 そしてこいつの目的はどうやら恵美の持つ"進化聖剣・片翼"らしいのだが、聖法気と呼応 やはり変態強盗大鎌使いの紫色の光には、聖法気を打ち消す力があるらしい。 裁きを待つ聖人のように磔にされたまま、何度も何度も紫色の光をその身に浴びせられ、恵

を宿したものの、天観が自分の体内でどのような形で保存されているのか、今まで考えたこと 恵美は魔王討伐の勇者としての力量が認められ、教会が伝える聖法術で漫然とその身に天銀

めて、得体の知れない力だということが分かってくる。 光を纏うだけで実体を伴わない。 「……マグロナルドの前で働いてたのは、可愛い子にツバつけるため? 彼江さん」 「いい加減諦めて、私と千穂ちゃんを解放しなさい」 「女はね、パカな男の自己顕示欲には敏感なの」 一ほう、よく気づいたね」 「そういうワケにはいかない。この可愛らしいお嬢さんには、色々と役立ってもらう子定だ」 恵美は精一杯の皮肉をこめてそう言ってやると、変態強盗大嫌使いの肩の揺れがピタリと止 変態強盗大鎌使いは、そう言って肩を揺らした。笑っているのだ。 干穂は気を失ったまま、変態大錬使いと鈴乃の背後に、後ろ手に縛られて転がされていた。 恩美は力なく呻く。 今まで悪魔を討伐するために当たり前のように使ってきた能力だが、こんな状況に陥って初 だとすると、破邪の衣は天銀由来のものではないのではないか、という疑念が誘いてくる。 そもそも『進化型剣・片翼』は鍛造された武器のように金属質の実体を伴うが、破邪の衣は

囚われて力を失って尚、口の減らない恵美。大鎌使いはもう一度笑うと、

えるのに一苦労だった。 けに目の思りのオレンジが余計におかしい。 あなたはそれ以外のとこに、色々問題抱えすぎよ」 この紫色の瞳を隠すために常々サングラスをかけていたから、なんの問題も無かったよ 簡単に落とせたら防犯グッズの意味ないでしょ」 自分をいたぶる謎の敵が正体を明かした、というシリアスな場面のはずが、恵美は笑いを堪 目だし帽を脱いでもビニールポンチョと迷彩パンツはそのままで、なまじ燐整な顔立ちなだ やれやれ困ったものだといった風情で苦笑しながら肩を竦めるサリエルと名乗った天使。 ふっ……これがなかなか落ちなくてね」 目の周りを蛍光色のオレンジ色で染めて名乗りを挙げる、天使の顔が出てきた。 オレンジ色の限取が、天界じゃ流行なのかしら?」 その下から少年のような端整な顔に、紫色の瞳、そして、 本当の名は、サリエル。大天使サリエルさ」 おもむろに、目だし帽に手をかけ脱ぎ去った。 いいだろう、確かに僕は猿江と名乗っていた。だが……」

女性に対しやたらとアプローチが強いのは、地の性格であると思われた。

照すぎる香水も、恐らくはカラーボールの臭いを誤魔化すためのだったのだろう。

292 いくつもの部署で、象徴天使として崇められていたはずだ。 階位は天使の中でも高く、本人の言う通り大天使の称号を持っている。 サリエルの名は、恵美もよく知っている。 伝神 教 会の聖典を読み込んでいれば幾度も現れる名だし、異端審問会を含めた教会内の

いう。堕天の邪眼光。だろう。

紫色の光の正体は、聖典にも語られている、高位の天使も一瞬で堕天させることができると

になった挙句に悪臭を放ってるなんて、一時は自ら命を絶とうとすら思った」 だがそれがこんな馬鹿とは思わなかった恵美、死ねばよかったのにと心から思う。

| 本当に焦ったよ。異世界にあんな強力な武器があるとはね。美しい僕の顔がオレンジパンダ

一説ではルシフェルを頭天使に堕としたのもサリエルであるらしい。

サリエル・ザ・オレンジパンダは微笑むと、鈴乃を振り返る。 君を仕留め損ねる、魔王とは合流される、翌日の仕事にも差し支える、散々さ。だが」

佐々木千穂。彼女は貴重なサンプルだ。異世界人で、魔王を魔王と知りながら、魔王を続い 彼女のおかげで、君をこんなに簡単に捕縛することができた。オマケまでつけてね」 でも釣られてサリエルの視線を追うが、鈴乃は歯噛みしたまま、憭いている。

そばにいる人間。魔王の力が人間の生体にどのような影響を及ぼすのか、研究のし甲斐がある」 恵美は目をむいた。

```
に、我々の手に取り戻さねばならない。これは、天の総意だ」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        その途端、サリエルは恵美目がけて"堕天の邪眼光』を発射する。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    「スパイと言ってほしいな」
                                      一ふむ、やはりダメか……お?」
                                                                                                                  |ああああああるっ!|
                                                                                                                                                                                    「聖剣は、本来人の手にあってはならないものだ。再び聖剣がエンテ・イスラの人間に還る前
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           「まさかあなた、交差点で私達の話を盗み聞きしてたの?」
照射を中断して考える仕草をするサリエルは、何かに気づいたようにヘリポートの縁へと歩
                                                                            サリエルの一際強い光を浴びて、恵美は危うく失神しかけた。
                                                                                                                                                                                                                                                                恵美は呻いた。物理的なダメージがあるわけではないが、照射されると不快感で胃が逆流し
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              そしてさらりとストーカー行為を認めるサリエル。恵美は鼻に皺を寄せて顔をしかめるが、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          あの時、恵美は全く不審な気配に気づかなかった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 サリエルの非道な物言いもそうだが、それ以上に、その内容が信じられなかった。
```

地上二百四十三メートルの屋上から下を見下ろし、何かを見つけて苦笑した。

その言葉に、鈴乃は弾かれたように顔を上げ、恵美も微かに首を持ち上げる。「おやおや、羽虫が一匹紛れ込んだようだ」

£ ...... 1 何故閉じられた空間に入れたかは知らないが、折角来たなら歓迎しようじゃないか。ベル」 気絶したままの干糠が、図らずもうなされたようにその名を呼ぶ。

邪魔な子分を連れている様子は無い。今の魔王なら、君の力でも十分倒せる」 突然呼びかけられて、鈴乃は身を震わせる。

「来ずるな。この建物は僕の月光の中。魔王に利するような負の力は発生しない。行け」 顔を青ざめさせながらも、鈴乃は何かを諦めたように、言葉に従い屋上の縁へと歩み寄る。 鈴乃はうろたえて恵美を見るが、俯いて髪に隠れた彼女の顔を見ることはできなかった。

エルは、異端審問会でも訂数審議会でも、象徴天使として崇められているのだ。 後ろ向きの決意を抱くその背に、かかった声があった。 教会の人間である以上、信仰の対象ですらある天使の命に逆らえるはずもない。ましてサリ

「!」

鈴乃は息を吞んで立ち竦む。!」

何事もなかったかのように平和になる。それで、いいのね?」 「聖剣の勇者と魔王が異世界で滅び、エンテ・イスラはあなたがこっちに来る以前と変わらず、 足が護えるのは、強風のせいだ。鈴乃はそう自分に言い聞かせる。言い聞かせなければ、認

めることになってしまう。 自分が、所詮は教会の暗部を蠢く闇の手先であることを。

「何を悩むことがある? - 訂教審議会の象徴天使である僕が、君の行いの正当性を保証しよう。

行きたまえ。僕が口ぞえすれば教会で君を糾弾する者はいなくなる。安心しろ」 サリエルは鈴乃の背に、そう傲然と言い放つ。

観衆に楽屋裏のゴタゴタを見せる必要はどこにもないさ」 ンテ・イスラは平和を享受する。言うなれば私もベルも、その後始末に来たようなものだ。 ともなく消えた聖剣の勇者の神話は人間達の間で永久に語り継がれ、魔王の脅・威が去ったエ 「大体最初からそうなっていたのだろう? 少しスケジュールの変更があっただけだ。どこへ

エミリアのことだって、サリエルは別に彼女を殺そうとしているわけではない。世界の平和 そうだ。やはり自分の考えは正しい。今、魔王を倒すことになんの問題がある サリエルはなんでもないことのように言う。 自分の目的も、なんの問題も無く達成されるじゃないか。

一鈴乃さん……」

「……千穂、殿」 その声が、鈴乃が心に築こうとしていたハリボテの磬を、一撃で打ち砕いた。

一どうして……どう、して……」 縛られて横たわる千穂が、涙を流しながら鈴乃を見ていた。

榀。を模した"死神デスサイズ・C・ベル』の象徴だ。 声とともに現れたのは、光る金色の大槌。異燐素間会の背烈な審判に用いられた。裁きの 大組を構えた鈴乃は金色の流星となって大地に迫る。 解かれた髪が風を受けて漆黒の裏のように広がり、簪が輝きはじめる。 吹き上げる風圧で浴衣が荒々しくはためく。右手を髪にかけ、十字架形の簪を引き抜いた。 それを直視できなくて、鈴乃は空中に身を躍らせた。

|……頼む……助けてくれ……もう] 誰も犠牲にしたくないんだっ!!」 その瞳から、銀色の雫が風に乗って空に散った。

おわああああああっ?」

丁度自転車を止めだところだったらしいその人物目がけて、思い切り鈴乃は大槌を振り下ろ **産地点にいた人物が、迫る鈴乃に気づいて絶叫する。** 

「危ねぇよバカ! 死んだらどうすんだよ!!」 した。轟音とともに道路が砕け、その場にいた人物を爆砕したかに見えた。だが、 大槌の縁からほんの数センチの場所で尻鮃を突きながら鈴乃に向けてがなる真臭貞夫は、

ā 大槌の下敷きになってスルメのように伸されているものを見て、顔を強張らせた。

デュラハンこううううううううううう!!!! 具奏貞夫の悲痛な絶叫が、西新宿の高層ビル街に木鳖した。

ために相大ゴミに出す時の有料チケット弁慎しろ!」 があるんだよ! こいつと過ごした二ヶ月を返せ! あと新しい自転車と防犯登録料と弔いの 「鈴乃のパカパカパーカー」お前何してくれちゃってんの? お前デュラハン号になんの恨み 真奥は、デュラハン号であった金属廃棄物にすがりつき涙しながら鈴乃を睨んだ

「おわっ!!」 「うるさいっ!」

お、おい、待てタンマっ!」 鈴乃は構わず真奥の脳天目がけて大槌を振り下ろす。 真奥は慌てて回避するが、またも鼻先数センチのところを掠められて冷や汗を流す。

黙れ黙れ黙れっ!!」 ちょ、ちょっと話をき……」

ひええええて! 谷赦なく全力で振るわれる大槌から、真寒は背中を向けて逃げ出す。

「待て、魔王サタン!」 一分、一分でいいから!」 待たない! てか、頼むからお前が待て!」 全力で逃走することでなんとか鈴乃から距離を取る真典

その半端な時間に胡乱気な顔を見せる鈴乃だが、

真奥は鈴乃に向けて人差し指を立てる。

透巡を了承と取ったらしい真臭の行動を見て、鈴乃は顔を引きつらせて声無き叫びを上げた。

ングシャツ。ベルトを外してズボンを脱ぐと、ユニシロ謹製防巣冷涼トランクスがこんにちは、 相子も脱いで完全下着姿になった真奥は、脱いだ制服とズボンを丁寧に畳んで道の脇によけ 真奥はモップを地面に置くと、やおら服を脱ぎはじめたのだ。 マグロナルド特有の赤いシャツを脱ぐと、その下には洗濯しすぎて生地が薄くなったランニ

一ななななんのつもりだっ!」 お待たせ、いいぜ」 ると、薄汚いモップを拾って鈴乃に言った。

鈴乃としてはそう言わざるを得ない。

どこの世界に、戦闘前に下着姿になる魔王がいるのか。

下着姿に合成ピニール革靴で薄汚いモップを構えた変態は、给乃を小馬鹿にしたように鼻を

「はン、働いてないテメエにゃ分からないだろうな。いいか」

自分が脱いで畳んだ制服に、ちらりと目をやる真奥。

僕しなきゃいけねぇんだよっ! 魔王城にそんな余 剰 資金は無ぇっ!」

ーマグロナルドの制服は貸与側なんだ! 通常業務に関係ない理由で破損させると、買取り弁

堂々と言い放つ真奥。鈴乃はこんな場合なのに、思わず赤面してしまう。

真奥はモップの先で鈴乃をびしりと差す。込みやがった!」 「それに、なんのつもりだはこっちのセリフだ! テメエどういう了見でうちのクルーを巻き 「堂々と隣に居座る根性と美味い飯に免じて大抵のことは見逃してやろうと思ってたが、俺の

仕事の邪魔してクルーを傷つけるようなマネするなら、店長代理として許しちゃおけねぇ!」 何つ! 振るわれたモップの柄を身を屈めて避けようとするが、今度は毛だらけのよく分からない黒 真奥は一瞬にして鈴乃の懐に飛び込んでいた。 その迫力に動揺した瞬間、

で受け止めたヘッドを弾き、全力で振りかぶったスタンプをお見舞いしようとするが、 いゴミが大量にこびりついたヘッド部分を顔目がけて繰り出され、慌てて身を引く。 まるで棒術のように柄とヘッドを素早く繰り出してくる真臭に驚く給乃。ようやく大槌の腹

それが単なる跳躍ではなく、通りの街灯に一足跳びで飛び移るほど高く早い跳躍で、鈴乃は やはり紙一重で届かず、真奥は大きく後ろに跳躍した。

よっと

思わず驚 愕に目を見開き、目の前に展開されてしまった光景にまた赤面する。



## 「ばばば、場をわきまえろ変態!!」

鈴乃の大槌が纒う光が掠めたか、真臭のランニングシャツが腹のところから要けて風に乗ってお前のせいだろがっ!」

て飛んでいってしまったのだ。 「やはり、魔力を残していたのか、この妄態魔王が」 にパンツ一丁になった変態魔王を見上げながら、鈴乃は言った。

いつお前みたいなのがこっち来るか分からないからな。切り札ってのは最後まで見せないか

ら切り札って言うんだよ」 の所帯の世話焼くなんて、現代日本じゃあり得ないんだよ! 喜ぶ前に何か裹があるんじゃね 「……いつから気づいていた、私が日本人でないと」 「最初っからだよ決まってんだろ。お前みたいな和装美人が知り合って間もない貧乏暮らしの 鈴乃は尋ねると、真奥は呆れたように溜息をついた。

へかって 疑心暗鬼になるわい」 粘局のところ、鈴乃以外の全員が、鈴乃の行動を疑っていたのだ。

係だと思ったらとんだ了「簡違いだぜ!」 |仕事をイチから手取り足取り全部教えて、今や俺の右腕のちーちゃんだぞ! 薄っぺらな関 ち、千穂殿はどうなる!」

奴だと思ってたのに、結局テメエもオルバの同類になんのか」 「しっかし、残念だ。一人で俺たちに挑みかかってきて、恵美とも仲良くやるような見所ある真爽はそう言うと、鈴乃から十分距離を取って地面に飛び降りる。 綺麗事言って権力を握れれば、あとは何を犠牲にしたって構わないってか。そんな奴らに討 鈴乃は、ぐっと奥歯を噛み締める。

伐されたんだとしたら、俺は情けなくて涙が出るぜ。お前ら、後達悪魔と一体どこが違うんだ」 | だ、黙れ……っ!| 言ってやるさ、俺は人が嫌がることが大好きな悪魔だからな」

具奥は真っ直ぐに鈴乃の目を見て言い放った。

なぎゃっ! 然れえええっ!」

2前は恵美を騙して、ちーちゃん巻き込んで恥ずかしくねぇのかって言ってるんだ!」

回避されるだろうと思いながら放った一撃は、しかし見事にクリーンヒットした。 

に違いつくばっている。 見るとパンツ一丁の見苦しい姿が少し離れた場所まで飛ばされて、地面で潰された虫のよう

一……って、効いた、……っかはっ

自分が吹き飛ばしたのに、鈴乃は慌てて真果に駆け寄った。「何をしている! 何故避けない!」 「や、避けようと、思ったんだが、その、魔力尽きて、思ったより力が入んなくて……」血を吐いた痕は、大雅の衝撃が内臓さて速した証拠だ。 はとんど肌をむき出しにしているので、全身擦り傷がらけになってしまっている。

ああ、やべ、計算追い。もうちょい保つはずだったのに」 「ここに、来る前に、一回、電話越しの催眠魔術を……あと、この空間に入ってくる時も…… ようやく体を起こすが、すぐに力が抜けて仰向けに倒れてしまう真実

「正々堂々と俺を倒して、大手を振って恵美を連れて帰りたいから、ちーちゃんの携帯使って 「恥ずかしかったんだろ」 乃を劣勢に追い込める切り札などあるはずがない。なのに、できない。

「……どうしたよ、やんねぇのか。英雄になれる……ゲホッ……チャンスだざ」

呻きながらも不敵な笑みを浮かべる真臭を前に、鈴乃はただ項垂れていた。今の魔王に、鈴 今、鈴乃があと一回全力で大槌を振るえば、魔王サタンに彼の愛睛の後を追わせることがで

きる。だが、

俺を呼んだんだろ。お前が逆らえない相手を、俺に倒させるために」 真臭は痙攣する腕を上げて、遥か空を、いや、都庁の上を指差した。

|そこまで……気づいて……|

鈴乃の手から、金色の大槌が消え、倒れる真奥の脇にがっくりと膝を落とした。

「そりゃ、簡単な推理だ。搦め手で慎重にことを運んでたお前が、いきなり恵美やちーちゃん 大槌が消えた鈴乃の手から、ガラスの十字架をあしらった簪がぽろりと落ちて地面に転がる。

を誘拐するなんざ下策に出るわけがねぇ。そんなことするくらいなら、お前は最初から俺に一番が高 服毒を盛って殺して、恵美なんかに関わらずにとっとと帰ればよかったんだからな」

鈴乃の浴衣の袖口から、真臭も見覚えのあるピンク色の二つ折り携帯覚話が落ちる。マグロ

減なして殴りやがって。骨イツてたら、治療費出せよな」 ナルドのメニューを模したストラップが付属していた。千穂の、携帯電話だ。 とは思えないがらな。だとすれば、それができる奴がかけてきたってことさ。あー、本当手加 「勇者を手も無く誘拐できるような奴が、ちーちゃんが九十九秒も電話鳴らすの悠長に見てる 一……天使が、来た」 立ち上がろうとする真奥の手を、鈴乃が摑んだ。 けちくさいことを言いながら全身の様子を確かめる真典。そろそろと立ち上がろうとすると

一なるほど、そりでエンテ・イスラ人だったら遊らえねぇや」

「……エミリアから、聖剣を回収すると言っていた」 なんのためにだ 鈴乃の話を即座に信じる真奥。

ん? 俺も倒さずにか?」

「理由は分からない……。人間が持っていてはいけないものだと……」 「まあそこら辺の事情はそっちで処理してもらうとして、ちーちゃんはどうしたちーちゃんは」 鈴乃を始めエンテ・イスラの人間にとっては世界の行く末すら左右しかねない聖剣の話題を

真典は少し首を傾げた。魔王は億在なのに、天使が勇者から翌剣を回収とはどういうことだ。

真臭は至極軽い調子で流した。悪魔にとって、聖剣なんか身近に無い方がいいのだ。 ……あんだと 心を調べるとか……」 『貴重なサンプルと言っていた。研究材料にすると……。魔王を魔王と知って慕う人間の体と その瞬間、鈴乃は思わず顔を上げた。 鈴乃は、少し躊躇った後に言う。

真奥の声が、かつてない程暗く冷たい怒気を纏っていたからだ。

「な、なんだ……」

## 「どこのどいつだそのド腐れ変態サイコ犯罪者野郎は」

え……ド胸れ……え?」

「うちの大切なクルーを怖がらせて誘拐しようとしてるそのクソ天使の名前を教えろっつって 戸惑う鈴乃の両肩をわし摑みにして、真奥は大声でがなりたてた。

んだコラ!

「さ、サリエル様だ」

あまりの迫力に、素直に答える鈴乃。

「し、知ってるのか」

一昔ちょっとな。ったく、よりにもよってあの女たらしか。納得したぜ猿江三月!」 鈴乃は真奏が大天使の持つ能力を一発で言い当てたことに驚く。真奥は

当たり前だろ! 可愛い後輩が怯えながら待ってんだ!」 今にも都庁の中に突撃しそうな勢いで鼻息を荒くする真奥を、鈴乃は止めようとする。 ま、待て、その体で行く気か!」 真奥の中で、ようやくあの不敵なちびっこ店長がこの事態と繋がった。

の屋上でサリエル様に敵うはずが……」 無茶だ! サリエル様の力は、月に近ければ近いほど強くなる! 魔力も尽きているのにあ

「だからって、逃げるワケにやいかねぇだろう」 言い募る鈴乃の言葉を止めたのは、真奥のそんな静かな一言だった。

任を部下におっかぶせてケツまくって逃げるほど、俺は恥知らずじゃねぇ!」 な部下だ。恵美を追ってサリエルが来たのだって、根本的には俺に責任があるんだ。自分の責 「俺が受け持った時間帯のクルーの危機管理責任は俺にある。ちーちゃんは俺が守るべき大切

最悪サリエルを倒せなくたって、ちーちゃんだけ連れて逃げるくらいはなんとかなるかもしれ 「ここで自分のやるべきこともできずに、世界征服なんざできるわけがねぇ。俺は行くぜ! 思いもかけない言葉に意表を突かれて、鈴乃は固まってしまう。

屋上にたどり着くまでに益々体力を消耗するだろう。 そうでなくても全身傷ついた排一賞の突撃だ。腫機があるとはとても思えない。 サリエルが空間を閉じているので人に見咎められることこそないが、昇降機が動いていない。

り直して屋上を振り仰いだ

「うおおおお! 待ってろよちーちゃん!」

止める間もなく都庁に飛び込んでいく真奏。鈴乃はしばし呆気に取られたが、すぐに気を取

その際に

真典は怒号を上げると、痛む体を庇いながらも猛然と走り出した。

何故……何故、悪魔のくせに、そんなこと言うんだ」 **踏乃は、天を仰いで呻いた。** 

「そんなことを言うあなたが……なんで魔王なんだ」

「真奥さん」 の絵文字とともに

そして、千穂の携帯電話を拾ってゆっくりと立ち上がる。そこには、控えめなハートマーク

の文字。 魔王にそんなこと言われたら、私だって恥知らずのままじゃいられないじゃないか」 守るべき者を、過つな。通すべき正義を、見失うな。 知乃は、溜まった涙を拭うと、息を大きく吸って心を落ち着かせる。

そしてサリエルのある言葉を思い出した。 そのために、自分は遥か異世界、日本に降り立ったんじゃないか。 **野乃は、頭をフル回転させて、已の正義を貫くための針の穴を広げる方法を模索する。** 頭執行官として、一人の聖職者として、ずっと心に戒めていたことだ。

鈴乃は顔を上げると、地面に取り落とした簪を握り締め、都庁を背にして夜の空へと一瞬で 魔王を利する、負の力。

飛び上がった。

仕事だと思って許して欲しい。邪眼光を照射したら、君からぼろっと天銀が分離するのを期待 「ふむ……気が進まないが、仕方ないね。レディに対する仕打ちとしては甚だ無礼にすぎるが、

していたのだがね、どうやら、直接取り出すしかないようだ」 サリエルは苦々しい表情を浮かべて、ぐったりする恵美にそう言った。

直接って・・・・・」 何度も"堕天の邪風光』を浴びて気力が尽きかけていたが、サリエルが突然プラウスのボタ

ンに手を伸ばしてきたので、一瞬で全身に緊急信号が巡り、目をむいて喚きたてはじめる。 「君の肉体から直接天銀を採集するんだよ。ああ、スプラッタな展開にはならないから、安心 「ち、ちょっと何するのよ!」

フィスカジュアルで決めている恵美のプラウスのボタンを、襟元から丁寧に外してゆく。 してほしい。あくまで聖法術式での無痛外科手術だと思ってもらえれば……」 「そういう問題じゃないわよっ! ちょ、やめなさい! 殺すわよ!」 唯一自由になっている頭を揺さぶって絶叫する恵美だが、サリエルは全く意に介さずに、オ

「ゆ、遊佐さんに何するんですかこの変態!」 と、サリエルの背に、非難の声が浴びせられる。サリエルは一瞬手を止め振り返った。

し黙っててくれ」 が、自分の評判と天銀回収の任務を天秤にかけるなら、任務を優先せざるを得ないのだよ」 一ちょっと、聞き捨てならないわ! 千穂ちゃんをどうするつもりよ!」 「漆 原さんはデリカシーの無いサイテーのニートだけど、ギリギリ変態じゃないもん!」 すりエルに向けて思いつく限りの罵詈雑言を浴びせているのだ。 サリエルを睨んでくる。 「最低! 本当最低! 天使って、なんでみんなサイテーな人ばっかりなんですか!」 「僕も女性を辱めるような真似はしたくない。これでも天界では紳士で通っているのでね。だ 「魔王に近い君が知っている天使と言えば、ルシフェルか?」 あんな奴と一緒にしないでもら 分かった分かった。君の言い分は、エンテ・イスラに帰ってからゆっくり聞くよ。だから少 千穂はベルが邪魔者を排除しにいく直前に目を覚まし、ベルが消えてからというものずっと クレスティア・ベルが連れてきた少女、佐々木干穂が大きな瞳に精一杯の憎しみをこめて、 これは全く擁護に聞こえない。 今度は恵美から抗議が上がる。

一当然だろう。研究するには連れ畑らなければどうしようもあるまい」 「まさか干穂ちゃんをエンテ・イスラに連れて行く気!?」

312 「僕は紳士だ。極力見ないようにするから少し静かにしてくれ。大体君のようなささやかなす 「何を当たり前のような顔して……だから触るな!」

イズは、僕の好みじゃないんでね」

男が絶対に言ってはならない一言を堂々と口にしたサリエル。

一殺す! 絶対殺す! 一瞬恵美の感情ゲージが明後日の方向に振り切れるが、すぐに意識を取り戻してサリエルに

「千趣ちゃんも、連れていかせるもんですか!」今この瞬間の全てを、すぐに後悔させてあ嚥を浴びせかけた。 「まったく騒がしいな。僕がこの少女を実験動物のように切り刻むとでも思ってるのかい?」 サリエルは心外そうに顔をしかめる。

「彼女の美しさを、僕は高く評価している。研究が終わったら天使に昇格させて、僕の妻に迎

果てしなくいががわしいものへと変えている。 その表情だけ見れば確かに天使の笑顔なのだが、言っていることとその対象が、その笑顔を

死んでもお断りです!」 歯をむき出しにして全力で拒絶する千穂。

条いた人間の精神や肉体がどのような変成を起こすかを調べたいのでね」 救いようのない腐れ外道ね! さ、触るな気色悪いわよっ! このゲスっ!」 ただもちろん、体は全身くまなく間べさせてもらうことになる。魔王サタンと近しい関係を 選!

根性曲がり!」 死んじゃぇ!」 後題つ!」

のき野郎!

そこまでやってない!! 思美と千穂のパッシングサンドイッチに、さすがにサリエルが切れた。 ・い加減にしろ貴様ら! これでも優しくしてやっているのが分からないか!」

リエルは怒りに任せて鎌の穂先を途中まで開いた恵美のプラウスの胸元に突きつける するとどこからともなくあの大線が出現した。この大線も天銀由来のものなのだろうか。サ すりエルは怒気をはらんだ顔で恵美の胸元から手を難して、手を空中にかざす。

「本当なら、エミリアの命より天銀の回収を優先することすら許されているんだ! 哀れに思

サリエルの本気の怒りを見て干糖は息を存むが、恵美は悩まない。 ってやればつけ上がって、気にしい! このまま全て斬り飛ばしてやってもいいんだぞ!」

ら。私を殺して天銀ごと消滅した時のあなたの打ちひしがれた顔を見られないのが残念だわ」 「なんなら、こちらの娘から先に処置してもいいのだぞ」 あくまで挑戦的な恵美。サリエルは忌々しげに舌打ちする。

「やってごらんなさい。私だって、天銀がどうやって私の体に融合してるのか知らないんだか

てきるはずはない。 され、自分はなんの特別な力も持たない女子高生。未知の世界に一人で放り出されたら、何も 《間違が救われるかもしれんからな』 - 悪魔に近い人間の娘。エンテ・イスラに転送して、その体を調べれば、悪魔の影響で苦しむ サリエルは恵美に轍をつきつけたまま、紫色の職を転がる干穂に向ける。 その言葉に、干穂の顔が蒼白になる。目だけは気丈にサリエルを睨むが、頼りの恵美が拘束

サリエルは嘲笑とともに恵美を振り返った。 後悔するわよ」

先ほどから威勢がいいのは結構だか、今の君に何がてきる?」

※美は暗い確で、忌々しげにサリエルを見た

私じゃないわ

その子に手を出したら、魔王が黙っちゃいないって言ったの」 忠美はサリエル以上の負の感情をこめて、舌打ちする。

魔王だと?」

「何を言い出すかと思えば、魔王だと? 勇者エミリアが、魔王の助けを当てにするのか! サリエルは驚きよりも可笑しさが勝ったらしく、嘲るように大きく笑った。

やはり君は、魔王サタンと共闘関係にあったのか?」 「そんなんじゃないわよ。あなた、マグロナルドの前に店を構えてて気づかないの?」

員が危機に陥ったら、それを保護するのは上司の役目よ」 頁様とて知らぬわけではあるまい。生きるためのわずかな魔力だけを残して人間と化した貧弱 一気がふれたかエミリア。魔王がそんな人間の世界の理に縛られると、本気で考えているのか。 一その子はマグロナルドのクルーで、魔王はマグロナルドの店長代理、時間帯責任者よ。従業 忠美は胸の中に黒いもやがかかるのを感じながらも、毅然と言い切った。

4魔王サタンの姿を。そんな魔王が本当にここに現れたとして、大天使たる僕相手に何ができる」 確かに真臭は、いまや魔界の下級悪魔かそれ以下の魔力しか持たない、人間と変わらぬ青年

だ。だが、多少ベクトルと性質が変わったものの、無駄に高い魔王としてのプライドだけは一

向に変わってなどいないのだ。

「縛られてるんじゃない、あいつは自分でその理を守ってるのよ。それが、マグロナルド幡か 遊佐さん……」 駅前店A級クルー、時間帯責任者の真奥貞夫って男よ」 恵美は千穂に、目だけで同意を求める。

「これは傑作だ! 勇者に信頼される魔王とは、くくく、では是非そのいるはずのない人間思 千穂は、潤んだ瞳で力強く無いた。

今頃ベルの武身鉄光の大槌で粉みじんになっているだろうがな」 いの魔王にご登場願おうじゃないか。もっとも、あの魔王では空を飛ぶこともできないだろう。 「干穂ちゃんがどうしてここに連れてこられたのか、あなた考えたことある?」 一それについては私は一つだけ疑問があるんだけどね」 必美は、<br />
改めて千穂を見た。

| ベルが僕に従い、君を服従させるための人質にする以外に何がある。警察に通報されるよう

4面倒がないように、痕跡を残さず全ての荷物を持ってきたのもそのためだ」 恵美のショルダーバッグや千穂の鞄などは、まとめてヘリポートの隅に捨て置かれている。 サリエルの言葉に、恵美は憐れみにも似た苦笑を浮かべた。

"と人質としては有効よ。何せ千穂ちゃんの安全が不安にならなければ、人質の意味が薄れる | ならべルは、干穂ちゃんを私の目の届かない場所に連れていくべきじゃない?| その方がず

でしょう。あの子は無意味な行動を取る人間じゃないし、それに……」 こも思えたのだ。 恵美にも確信があるわけではない。だが、交差点で彼女が見せた動揺こそが、彼女の答えだ

つかれないように、せいぜい注意することね」 「そのときは、躾のためお仕置きすればいいだけの話だ。もっとも心配には及ばない。僕が天 「彼女は、誤った教えを訂す、 訂教 審議会筆頭審問官よ。飼い犬だと思ってた相手に、噛み

EIく風が強くなる。 東京都庁第一庁舎の高さは二百四十三メートル。その高さになるとビル街の乱気流の影響で 使である以上、大法神教 会の聖職者が僕に逆らうはずもないがね」

『ゼーッ、ハーッ、ゼーッ、お、お取り込み中、邪魔すんぜ、ひぃ、ハーッ……」 一際強く風が吹き、恵美の長い髪が大きくなびいたその瞬間だった。

屋上の強風に紛れて消え入りそうなほど小さい男の声。

|なんで……エレベーター、動いて、ねぇんだよ、はあ……はあ……」 だがそれは間違いなく、その場の三人の耳に届いた。

つかわしくない男が立っていた。 あ…あ! そこはヘリポートへと出るためのペントハウス部分であり、そこにまったくヘリポートに似

千穂は、驚きと喜びで涙目のまま摘面の笑顔を浮かべた。

恋する乙女の職には、まるで自分のピンチに規奏と駆けつけた白馬の王子のように見えた。 石手に古びた薄汚いモップを携え、上半身裸のパンツ一丁、おまけに全身傷だらけだったが、

まりな格好に目をむいてしまう。 「第一声がそれかよっ!」 「こっち見るなっ!」 息を切らせた真臭は、今にも失神しそうなほどにフラフラしながら突っ込んだ。 一方の恵美は、自分のピンチにどたばたと転がり込んできた自転車の魔王の、あまりにあん

あと見せるな! な、なんて格好してるのよ! 私の視界から消え失せなさい!」 恵美はと言えばサリエルに拘束されて胸元を開かれてどうしようもない有様なので、とにか

「……これは、驚いたな」 サリエルは思わず開いていた口を閉じると、恵美の胸元から鍼を外して真臭に向き直った。

くそう叫ぶしかない。

「見たところ人間の姿のまま魔力が回復した様子もないが、まさかべルを倒したのか?」 ·····・そう見えるか? ポコポコにされた挙句に体よく利用されそうになってンだよ

しなかったぜ。まだ女天使どもの尻を迫いかけるクセは直らねぇのか」 「……なんだと」 「俺としても、向かいの似合わねえ香水つけたちぴっこ店長が、"堕天の邪鹿光"。とは思いもいよ。君は本当に我々の知る魔王ではなくなったのだな、魔王サタン」 「よく分からないが……しかし、無傷でもないようだな。こうして目の前にしても信じられな サリエルの口調が険の篭ったものになる。

結構大勢の奴が、お前には迷惑してたらしいぜ。ま、誰とは言わんがな」 2味深な一言を軽く流して、改めて真臭は干穂と恵美を見ると

とだ。よくもてめぇ、ちーちゃんに怖い思いさせやがったな」 「だからこっち見るなって言ってるでしょ!」 「ま、お前ら天界の事情は正直どうでもいい。俺が許せねぇのは、俺の店の仲間を傷つけたこ 真美さん!」 恵美の空気を読まない抗議を無視し、真奥はサリエルを真正面から睨み据えた。 感極まって叫ぶ干穂だが、

……真奥さん?」

いいか、仕事ってのはな、家に帰るまでが仕事なんだぞ!」

期待していた言葉と全く違うセリフが飛び出し、千穂は固まる。

切なクルーをエンテ・イスラのくだらねぇ事情で巻き込みやがって、許さねぇぞ」 「管理者ってのはな、従業員の通勤中の安全にも責任を負わなきゃいけねぇんだ! うちの大 「……真奥さん……」

俺の大切な部下だ! 俺は魔王として、時間帯責任者として、決して部下を見捨てねぇ!!! ] 「店長代理として、クルーの就業中の安全の責任は俺にあるんだ! 言うなればちーちゃんは

今度の真奥を呼ぶ声は、落胆の色が濃く浮き出ていた。

「僕は、君が何を言っているのか理解しかねるよ。ただ一つ分かるとすれば……」 サリエルの紫色の瞳が、鋭く閃いた。 自覚なく千穂に追い討ちをかける真奥。千穂は涙をこらえつつ、がっくりと項垂れた。

サリエルの体から、金色の陽炎が湧き起こる。そばに磔にされている恵美が思わず目を閉じ「そんな旅調が委で僕の任務を邪魔しようとする君の愚かさ加減だけさ」

ってくれるなら、どうぞやってくれってなもんでな。俺はちーちゃんさえ取り返せればそれで 「あー、聖剣とか天観とか、俺はどうでもいいし、むしろその凶 暴な女が少しは大人しくならはどの烈風を伴う就法気の放出だ。

いんたカ…… 並の悪魔ならその波動だけで浄化されてしまいそうな聖法気の噴出に、真臭は冷や汗を流す。

に、真泉貞夫の両の謎が血の色を帯びはじめるではないか。 中外エルの陽炎に張り合うよう平然としばいるのは真臭一人。いや、平然とするどころか、サリエルの陽炎に張り合うよう すように立ち込めはじめるではないか。 気が、まるで湿気を帯びたように重くなる。 触れることもできまい。 一なんか……気持ち悪い」 「な、なんだこれは……」 「そういうワケにもいかなそうだな……クソッ。どうしたもんかな」 当の真臭も、一瞬は戸惑ったものの、すぐに起こった現象の意味を悟る。 そしてまるで静電気が弾けるような不快な緊張感と目を曇らせる脳の雲が、聖法気を押し返 千穂が苦しそうに呻き声を上げ、恵美も何事かと周囲を見回した。 サリエルも、突然周囲に湧いた禍々しい気配に動揺している。 サリエルの聖法気の波動で地球上のどんな場所よりも浄化されているはずのヘリポートの空 その瞬間、変わった空気をどのように形容すればいいだろうか。 モップを構えたままどうやって千穂を抱えて逃げようか、それだけを考えていた真臭だが、 サリエルの体が光と歯を帯びはじめる。魔力を失った真臭など、サリエルの体に指一本すら

「あー、仕方ねぇなこうなったら。恵美の奴なんか助ける気なかったんだけどな」 つまらなそうに一人ごちてから、

「こ、これは、魔力……っ! 貴様、何故!」 「なあサリエルよ。ちーちゃんを怖がらせて、俺のキャリアを傷つけようとした罪は重いせ?」 サリエルは驚愕の表情を顔に貼りつかせて叫んだ。 それだけで、空気を満たすプレッシャーが格段に重くなる 一気に強気になった真臭は、一歩、サリエルに向かって踏み出した。

「ちょ、魔王! やめなさい、今そんなことしたら……」 心配すんな」 たった今まではなんの変哲もない青年、真奥貞夫であったはずだ。 忠美は真奥の変化に気づき警告を発するが、真県は不敵な笑みを浮かべて首を振った。 その威圧感。血の色の瞳。空気が纏う鬼気。 だがほんの一瞬の間に、真臭を取り着く空気が微変した。

「誰があなたのパンツの心配なんかするもんですかパカーーー!!」 一このパンツは柔軟な伸縮性がウリの新品だ。破れやしねぇよ」 まるでそれが変身用の呪文であったかのように、変化は急激に訪れる。 そう言って腰を叩く。

の役割を果たしきっているのだった。 パフォーゼする。そしてユニシロの優秀な夏用下着は、その急激な鬱張にも関わらず見事に己真臭の半裸の肉体を、禍々しい赤光が包む。肉体が隆起し、下半身が魔獣のそれへとメタモ

恵美の絶叫は、ヘリポートを一瞬で常巻した禍々しい暴風にかき消された

一つようううウウウゥゥ……」 変身を終えたパンツ一丁の魔王サタンは、体をほぐすように首をねじりはじめる。

血の色の瞳に魔獣の脚を持つ、片角の魔王が東京の空に降臨した。

一あー、いい具合だ。あんにゃろどんな手使いやがった」 サタンは体中の関節をほぐしながら言うと、その答えは、

つと、自分と千穂を包む型法気の障壁を作り出した。 ベルっ!」 サリエルの憎々しげな顔を横目に、鈴乃、いや、クレスティア・ベルは千穂のそばに降り立 千穂殿をそのままにして変身するやつがあるかっ! 愚か者!」 い髪をなびかせて金色の大鎚を携え、新宿駅方面の空から流星のように飛来した。

その瞬間、千穂は詰めていた呼吸を吐き出すように、大きく息を吐いた。

「あー……苦しかった」

324

「大丈夫か?」

された携帯電話を見て目を丸くする。 は、はい……あ、す、鈴乃さん!」 ベルが恵美を吹き飛ばす瞬間を目撃している千穂は、一瞬身を煉ませるが、目の前に差し出

「すまなかった。後で事情は説明する。だから今は」 と、ベルの確が、禍々しい血の色の瞳を持つ悪魔を見た。

「ベル! 貴様、血迷ったか!」 「千穂殿の大切な人を、利用させてもらう」

血迷ったのはあなただ、サリエル」 鈴乃は千穂を背に庇いながら毅然として言う。

うな偽りに満ちた正義は断じて看過できん!」 人々を裏切ることが、本当に神が示す正義か! 私は訳 教 影響会策頭歌問官として、そのよ「人々に偽りの平和を押しつけ、異世界に混乱を巻き起こし、守るべき人を、信仰に殉ずる

はない!」 黙れっ! 少なくとも魔王の真臭貞夫としての日本での生き方は、決して正義に悖るもので にはお似合いの、穢れた正義だ!」

「そのために、魔王すらも利用するか! 打教などと偉そうに! 異端審問会の血に飢えた悪

った。それを馬鹿にしたように眺めたサタンはベルに尋ねる。 てるっつーのに」 **一ても本当にな、最近は勇者や天使の方が、よっぽど悪者らしいな。俺は毎日清く正しく生き** 「おおお、なんか俺人気者? やっぱ俺って店長代理の器?」 サタンの踏み出した一歩が、ヘリポートに小さな陥穽を穿つ。 サタンは深刻な言い争いを横で聞きながら、随分とせせこましい器に満足して一人悦に入る。 それだけでサタンを警戒したサリエルは、言い争いを中断して大きく飛びずさって距離を取

「ベルよ、お前、何をどうやってこんだけ魔力を……」 サダンとしても、サリエルが閉じている空間内にこれだけの魔力が殺到するとは予想だにし

ていなかった 「今日、新 宿 駅を利用している人々には、すまないと思っている」 翌千穂を抱えて逃げられればいいと思っていただけに疑問だったのだが.

その一言を聞いて、思わず彼女が飛んできた空を振り返ってしまった。

千穂と恵美は、一斉にベルを見る。 \*\*

怒りの気が大地を満たすと思って……」 『変電所というのか? 線路脇にある重要施設に繋がる線を切断してきた。電車が止まれば、

一お前それはテロだぞっ!」 世界を侵略したサタンの口から突っ込みが入る。

円の鉄道に影響が出るぞっ」 「なるほどな。私の見込みは正しかったわけだ。宣教部の面目耀如だな。エンテ・イスラでも 「お、お、お前新宿ってどれだけの電車が通ってるか分かってるのか!! JRだけでも関東

怒りのオーラが魔力を招くと……」 米合馬車が時間通りに来ないとイライラするだろう? きっとあの沢山の電車を遅延させれば 調査分析能力を褒めてるわけじゃないし、俺は乗り合い馬車なんか乗ったことねぇ!」 サタンの全力の突っ込みは、それだけで魔力の奔流を発生させる。

それに千穂の入っている障壁が吹き飛ばされ、ヘリポートから転がり落ちそうになった。 わあっ

「ま、真臭さん! 気をつけてください!」

「あ、でも、今は魔王さん、あれ? 魔王さん? サタンさん? や、やだ、下の名前呼ぶの 「あ、わりいわりい……」

って、やっぱりちょっと恥ずかしいですね」

**ル尾巻いて逃げ帰るか、落とし前つけて俺にポコられるか、さあ、どうする」** ザタンは傲然と、高みからサリエルを見下ろした。 | 人場違いな羞 恥心に顔を赤らめている千穂を無視し、 まあとにかくそれは後回しだ。おいちびっこサリエル、魔王の慈悲で選ばせてやるよ」

魔王サタン! 君を倒して、僕の目的を完遂する! **| 次鎌を携えた大天使は、純白の翼を大きく広げてサタンを睨み据えた。** 

「人間の負の力をドーピングしなければ魔力を得られない魔王など、恐るるに足らず!」 サリエルは一瞬で飛翔すると、月を背に聖法気を凝縮させる。

うっせぇよ、変態天使か」 サリエルの異が、まるで二枚の三日月のように夜空に輝いた。

しても目的を忘れないことと、女性に手を出さないフェミニストぶりだけは買うが、 一魔王の力、あんまりナメんなよ」 月光のレーザービームを、恵美も千穂もベルも避けて、サタンだけに正確に狙い撃つ。散昂

一切んっ!」

サタンは、両手を掲げると月光の雷を、

わずかな気合を吐いただけで受け止めたではないか。

「何っ、じゃねぇよ内弁慶が」 **意外そうな声を上げたサリエルを、サタンは鼻で笑う。** 

な、何つ……!!

「お前はどうも自分の力を過大評価してるみてぇだな。お前の力の正体、教えてやろうか」

くり回しているのだ。 るのはサリエルなのに、まるでサタンが自分の力であるかのようにその手元で聖なる雷をこね 『。堕天の邪眼光』 なんてので強くなった気でいるようだが、お前今まで整法気の使い手以外 サタンは両手で受け止めていた雷を、なんと自分の手元で一つにまとめてしまう。撃ってい

サリエルは慌てて術を解くが、サタンに投げ返された雷光が迫り、紫光を瞳から放ち、己の

うに、純粋な膂力だけで光のベクトルをサリエルに投げ返した。

サリエルが放出するエネルギーを「塊にしたサタン、まるで鎮のついた砲丸を投げ返すよ

と戦ったことねぇだろう」

「お前の能力は、聖法気相手なら無敵の強さを誇るだろうな。だが」 サタンは、手の中に黒い炎の塊を出現させる。野球ポール程度でしかないそれを、野球選手

下してきた。 よっと をあちこち焦がしたサリエルの体が現れた瞬間 「それ以外の力が敵に回ったときは、井の中の蛙ってやつだ。ケンカの相手は選ぶべきだったそのもののフォームで上空のサリエルに向けて投げつけた。 |おやり! かはっ…… 「ぐおおおおお・・・・・」 サリエルが意識を失ったことで、恵美を拘束していた柴光の十字架が消滅し、恵美はヘリポ それだけでモップが真ん中からヘシ折れ、サリエルは白目をむいて意識を失い、そのまま落 その首筋に向かって、サタンは持っていたモップを優しく振り下ろした。 サタンが指を一回鳴らすと、地獄の火炎は一瞬で姿を消し、聖法気で守られているはずの体 サリエルの絶叫が、黒い火炎球の中からこだまする。 それがサリエルに到達した瞬間、その体を丸ごと包むような巨大な炎へと成長したのだ。 『の手羽先売ったって、センタッキーの評判が落ちるだけだな』

ートに投げ出される。

330 ٤٠٠٤ サリエルは地面にペチャっと叩きつけられ、

.....何かよ......」 「おい、どうだ、恵美」 気力も体力も失って受身すら取れない状況だった恵美を、サタンは真下でしっかりと受け止

|これで少しは、下で受けて止めてやる俺のありがたみが分かったか?| 何を言われているのか即座に思い当たった恵美は、苦虫をダース単位で噛み潰したように顔 息も絶え絶えの恵美が、抱えられたまま養鬱そうな顔でサタンを振り返る。

サタンは苦笑すると、恵美を静かに地面に下ろして言う。 どこまでも口の減らない勇者だ。 「………仕方ないから、分かってあげるわ」中をしかめて唸った後、

おい恵美、前

何かに耐えるように肩に力が入ったまま唸る恵美に、真臭は自分の胸元を叩いてみせる。

タンの顔目がけて投げつけた。 一 瞬 間を置いて何を言われているのか気づいた恵美は、思わず腹いていたパンプスを、サップを

「前、閉じろ前、ぷっ」

「ってぇな! お前、悪魔になっても痛ぇものは痛ぇんだぞべぶっ!」

「見るなって言ったでしょ!」 サタンはゆらりと怒りの気配を立ち上げる。 恵美は顔を真っ赤にしながら胸元を隠すと、サタンに背を向けて急いでプラウスのボタンを 有無を言わさずもう片方のパンプスも、正確にサタンの顔を直撃した。

ところで減るようなモンもないくせにがががげつ」 「ポケっとしてるテメエが悪いんだろが! 俺は紳士的に警告してやったのに! 大体見せた **サタンの究極暴言に鉄槌を下したのは、両足の靴を投げきった恵美ではなく、大槌を携えた** 

ベルだった。 「お・ま・え・ら・なあ~~~!」 |聞き捨てならなかったもので、つい|

ベルはしれっと言って、大緒を肩に担ぎなおす。

「あ、あ、あの、折角変態さんやっつけたんだから、皆さんケンカしないで……」



聖法気の障壁の中からおろおろと声をかける干糖だが、

何つし

恵美とベルが、何故だか妙に冷たい目で千穂を見る。千穂はどうして二人が目を合わせてく

れないんだろうとかなんで視線が私の胸あたりを見てるんだろうとか色々考えつつも、

「あの、なんか、すいません」 と、素直に引き下がった。 思美は恵美で、ペルが自分と同じことを気にしていたと分かり、今さらになって奇妙な親近

一あー、もう、お前らのことなんか助けなきゃよかったなー! 二人の女に睨みつけられたサタンは、 ちーちゃんだけかっさらって

だけりゃよかった! あー揖した!」

自分の失言を棚に上げて盛大に不貞腐れる。

アート、開け!」 そして、やけっぱちのような勢いで、

突然人一人がくぐれるほどのゲートを、唐突に自分の目の前に開いたのだ。

334 ああ帰りたいよ! でも、そういうワケにも行かねぇだろうが!」 自分の目の前であっさりゲートを開いたサタンに驚いた恵美は、思わず止めようとするが、 サタンはそう言うと、なんと落ちていたサリエルを摘み上げ、まるでマグロナルドの食後の

王! 何をして……」

ゴミをゴミ箱に捨てるように、ゲートの中にポイ捨てしたのだ。

真奥さん!!」

大天使のあまりにあんまりな扱い方に被害者であるはずの面々まで悲鳴を上げるが、

「別に殺すわけじゃねぇし、力はほとんど残ってるんだ。運が良けりゃ、どこか人が住める世

乔に流れ着くさ。そこからエンテ・イスラに帰れるかは知らないけどな」

閉じろゲートー 閉じよゴマー なんてな」 術者が消えたことで閉ざされていた空間の瞭壁も消えたのか、徐々に新宿の夜のざわめきが サタンはそう言うと肩を竦め、 何変わらず呪文とも思えぬ呪文を放って、開いたゲートをあっさり閉じた

戻ってきた。都市の雑音をBGMに、呆気に取られている恵美達に向き直ると、 『仕方ないだろ。取っておいたって邪魔にしかならねぇし、かといって処分するのも色々面側

だ。こうすんのが一番いいんだよ」

て帰ろうにも帰れないって体裁が成り立つから、あいつの仕事上の評価以外は丸く収まるだろ」 「そんな、粗大ゴミじゃないんだから……」 俺もまだ、大天使を殺して天界と全面戦争する気はねぇんだ。これならサリエルがしくじっ

ルも、口を開けたまま二の句が告げないが、 さて問題はだ」 反論のしようもないが、かと言ってそんな軽挙で済ませていい問題なのだろうか。恵美もべ

|【後始来だって?」じゃねぇよ! 関東一円の鉄道止めといて、ハイさようならってワケに 後始末だって?」 。この件の後始末だ。 ベル、行くぞ」 サタンは最早サリエルのことなど忘れ去ったかのように拍手を打つと、顔をしかめてペル

|な、何よ……] そうだ、恵美」 |の王の姿で真奥貞夫と全く変わらぬことを言い出すサタンに、ベルは戸感いを隠せない。 てんだから、誰かここに来るかもしれねぇだろ。ほら、行くぞ! さっさと帰りてぇんだよ。

いかねぇだろうが! 架線やら変電所やらの修理もしなきゃいけないし、サリエルの術が解け

店を留守にしてんだからよ!」

んだからな 「今度こそ、ちーちゃんをきちんとウチまで送れよ。ちーちゃんのおふくろさん、心配してた その言葉に驚いたのは、千穂でも恵美でもなくベルだった。 サタンは、型法気の障壁の中でずっと自分を見ている、後輩女子高生をちらりと見た。

「やっぱり真臭さん、いい人だ」 ただ一人、干種だけが、ほんの少しだけ得意げな笑顔を浮かべて言った。 真実異世界の生き物を見るような目で、自分の背丈の倍もあるサタンの顔を見上げる。

うっせうっせ

サタンはパタパタと手を掘る。

そういうことにしておきますね」 千穂の素早い笑顔の切り返し。サタンは決まり悪そうに顔をしかめると、

俺は王様なの。部下は大切にするし、支配する予定の場所はきちんと整備しておきたいの」

あああもう! おら、行くぞベル!」

「あ、ちょ、ま、どこを擽んでいやああああああああ.....」 、ルの浴衣の襟首を摑んで吊り上げ、逃げるようにして飛び去ってしまう。

「ね? 遊佐さん」 ヘリポートの縁からその姿が消えると、干穂はようやく障壁の中から脱出する。

一今日だけは、そういうことにしてあげるわ」 怖しそうに呟く。それを聞いて苦笑した千穂。 悪美はしばらく胸に手を当てたまま、サタンとベルが去った方を見やったが、眉根を寄せて

「なら、遊佐さん、一つ、お願いしてもいいですか?」

「真奥さんお店を留守にしたって言ってたんで、ちょっと危ないと思うんです」 一…なんなの?」 少し心配そうな顔で、真典達が消えたのとは反対側の、初台幡ヶ谷方面の空を見る。

聞いたから、できるだけ魔力を浪費させるためにあえて広範に影響を及ぼそうと……」 「はは……はははは、まぁ、その、あれだ、千穂殿から、魔王がかつて首都高を復活させたと 「本当に……てめぇどんだけ……」 真奥貞夫はグッタリしながら京王新線幡ヶ谷駅前でタクシーを降りた。

「嘘こけ、絶対後先考えてなかっただろ!」

戻っていた魔力はあっという間に底を突き、魔王サタンはパンツ一丁のフリーター真奥貞夫に タクシーを捕まえてくれたのもベルだった。 戻ってしまった。 による電力インフラの整備まで全てを回復させた結果、天使を放り込めるゲートを開くまでに 変電設備が丸ごと一つ消滅しているのを見て絶句した。 と命がけの危険な行為だったが、何故か彼女は、サタンが魔力で全ての状況を修復する様をず 「いや、その、切断技を持っていなくて、大槌だと打撃技しか……」 ごにょごにょと言い訳がましいベルを、サタンはデコピンして黙らせる。 修繕に関しては全く役に立たなかったペル。 変電設備の完全復旧に、新宿駅に繋がる関東一円全ての鉄道の混乱。さらには変電設備壊滅 ベルの言い方から、新宿駅の損害はせいぜい架線切断くらいとタカをくくっていたサタンは、 鎌月鈴乃は、冷や汗を浮かべて乾いた笑いを浮かべる。 力尽きてフラフラの真奏に代わり、都庁前に置き忘れてきた制服を回収してきてくれたり、 特段派手に聖法気を消費したわけでもない彼女の前で魔力を失うというのは、冷静に考える サタンとベルが空から到達した新宿は、まさしく未曾有の大混雑状態であった。

一体どういう心境の変化か知らないが、真臭貞夫としては、それらの理由を闘うよりももっ

ている暇はない。一分でも、一秒でも早く店に戻らなければ。 電話を受けた。ちーちゃんに何かがあったらしいということと」 カるほどに厳しいものだった。 「……これは一体どういうことだ? まーくん」 を優先して考えなければならないことがあったのだ。 一体、どうして……」 店内からの逆光に照らされて進み出てくる人影に、真臭は思わず硬直してしまう。 だが、責任を負った時間帯に二時間近くも店を管守にしたツケは確実に回ってきた。 既に、時間はマグロナルド幡ヶ谷駅前店の閉店時間である夜の十二時に迫ろうとしているの 木崎の、勇者もかくやという鋭い視線が、光芒の尾を引いて真臭に向けられた。 スーツ姿のまま仁王立ちで高みから真奥を見下ろす木崎の表情は、逆光の影の中でもよく分 タクシーが去ると慌ててよたよたと走り出す真奥に驚いた鈴乃が尋ねるが、それに取り合っ

「あ……いや、その……」

| 君がモップを持って飛び出していったきり戻ってこなくて、他の者が困っていたこともな|

隣で固まったまま動かない。 真奥は顔を引きつらせて、半身を引く。鈴乃も何がしかの威圧感を受けているのか、真奥の\*\*\*\*

二時間も、仕事をさぼってデートか? あぁ?」 その、あの……」 「いい度胸だな、ああ? 午前中の負けも取り返せぬまま、時間帯責任者が行き先も告げずに

真奥は完全にしどろもどろになって、思考が空転してしまっていた。

|木崎の帰還は子想外だったが、冷静に考えればクルーが慌てるのも当然のことで、真臭は漆む。

原の電話の後ほとんど何も言わずに店を飛び出してしまっていたのだ。

のはそれほど突拍子もない想像ではないだろう。 れる言い訳も用意できず、下手な嘘はますます木崎の不興を買うだけで……。 しまった制服を鈴乃に取りに戻ってもらうハメに陥り更に余計な時間を食ったのが大きかった。 真奥さんは、私を助けてくれたんです」 鉄道復旧に時間を食った上、魔力消費量が予想を超えたために、都庁前の道端に置いてきて さりとて本当の理由を話したところで木崎が理解してくれるはずもなく、木崎を納得させら そして確かに浴衣姿の女性と二人で連れ立って揺れば、真奥が仕事をサポって逢引、という

突然の第三者の声に顔を上げた木崎は、そこに見慣れぬ女性が立っていることに気づく。

```
----あなたは?
遊佐といいます。佐々木干穂ちゃんと……それから」
                                                                                        一体いつからそこにいたのか、真臭もまさか、その声がかかるとは思いもせず、勢いよく振
```

真奥さんの、友人です」 はっきりと言い切った。

固まったまま、冷や汗を流している男の情けない横顔を見ながら、

恵美は素早く目を逸らし、木崎だけを視界に入れる。 **高抜け面の真奥は、さらなる間抜けな表情で恵美を見た。** 

「まーくんの、友人?」

ているところを真臭さんが助けてくれたんです」 「変質者? そう言えば、笹塚の方の交差点で何かあったと聞くけど」 「はい。千穂ちゃんと、そこの鎌月さんと一緒に帰宅する途中、変質者に襲われて、身を隠し

「女の子ばかり三人で抵抗しようもなくて、身を隠してるのが精一杯で……」 そ そうなんだ、いや、そうなんです」 木崎は恵美の言うことを半信半疑で聞いていたが、

すると今度は鈴乃が、恵美の案に一瞬で乗ると、

に帰ろうとするものだから、付き添わんわけに、あ、付き添わなければいけないと思って……」 「ま、真臭さんに追い払ってもらって、だが、お店を放り出してき、き、きちゃったって無理 「すず、あ、か、鎌月さん……」 ……そういうことなら、仕方がないな」 「あ、ああそうか、分かった」 そのやり取りを黙って聞いていた木崎は、 千穂ちゃんは、無事におうちに帰ったわ。お母様が待っていらして」 ……なんだよ 何そのキャラ、と真奥は喉まで出かかった言葉を必死に吞み込む。 うっすら涙など浮かべて、泣き笑いの表情を作りながら慣れない言葉で真臭を擁護する鈴乃。 すんでのところで呼び捨てを止めた真奥だが、それほど意外な変わり身の仕方だった。 と、何かを諦めたように雇用に皺を寄せながら溜息をつく。 恵美が、人前で自分の下の名を呼んだのは、初めてのことだった。 そしてそれ以上に、意外すぎる一言を発したのが、恵美だった。

『やはり今後は若い女性をアルパイトには取れんな。何があるか分かったもんじゃない』

ろうとした君の勇気は買う。だが君が怪我をしたら、私や彼女達も心を痛める」 「私や他のクルーにとって、君は大切な存在だ。だからこそ無楽はするな。ちーちゃん達を守 そんなばやきをオマケにつけると、幾分気魄を和らげた木崎は、真臭の肩に手を置く。

今日のことも、そして彼女達の気持ちも、君がいい経験として蓄積してくれることを願う」 木崎さん……」

まーくんを……真奥を送り届けてくれてありがとう。とりあえず、中に入って休んでほしい。 それだけ言うと、木崎はここに至ってようやく鈴乃に目をやった。

コーヒーを用意させるから。さあ、あなたも」 真奥の肩を優しく叩いてから、鈴乃と恵美にも声をかける木崎

どうする?

その、私達は…… ぶっきらぼうに言う真臭の声に、音楽を止めた。 飲んでけよ 鈴乃と恵美は顔を見合わせて遠慮しようとするが、

一パカを言え、マッグのコーヒーは、誰が入れても均等に美味しくできるものだ」 どこか気恥ずかしそうに言う真実。鈴乃と恵美は改めて顔を見合わせた。 木崎さんが入れると、何故かマッグのコーヒーでも美味いんだ」

「き、き、木崎さん!」 じゃあ 中から一人のクルーが、真っ青な顔をして飛び出してくるのに出くわして目を丸くする。 「お言葉に甘えて……」 木崎が真奥を小突くと、 あまり強く遠慮しても木崎に悪いので、素直に店内に案内される二人だが、

を軍人のそれに変える。 「あ、真奥さん帰ったんだ!」あ、いや、でもそれどころじゃなくて」 落ち着け! 私の店のクルーは何があっても動揺するな! 何があったか簡潔に報告しろ!」 相当に混乱しているらしく、手足を盛大にパタつかせるクルーだが、木崎の一喝がその姿勢

**燃戦の軍曹のような勇ましい号令に、クルーは直立不動で答えた。** 

うすりやいいのか」 「冷蔵庫から体中焦げた人がいきなり飛び出してきて、気絶してるみたいなんですけど一体ど 「はいっ! 冷蔵庫から人が飛び出してきました!」 木崎と真奥、さらには鈴乃と恵美の声が唱和する。

ま、まさかつ!

一あ、おいまーくん!」 木崎の制止を振り切って厨房に飛び込んだ真奏は、

材保存用の業務用高湿冷蔵庫から半身を出してうつ伏せに倒れているではないか。 本来の冷蔵庫の住人であるポテトやチキンの袋がサリエルの分だけ表に飛び出しており、確 なんと、先ほどゲートに放り込んでどことも知れぬ異世界に飛ばしたはずのサリエルが、食 思わず絶叫してしまう。

「魔王! まさか、あの笹飾りが……」 な、なんだこれはい 息を吞んだのは当然鈴乃と恵美だ。 いからやってきた木崎たちも、その有様を見て叫び声を上げる。

~に冷蔵庫の中から人間が飛び出してきたように見える。

魔王の開いたゲートが、なんの脈絡もなくこんな所に繋がるはずがない。考えられるのは、 鈴乃は、思わず店の入り口を振り返る。

真奥が知らずに設置して魔力発現装置となった七夕筌飾りが、ゲート開閉に使われた魔王の魔

?と呼応したとしか考えられなかった。 大勢のお客を招いた笹が、招かれざる客まで招いてしまったわけだが、今さら引っこ抜いた

ところでサリエルは帰ってはくれない。

しかけているではないか。 こんなところでサリエルに暴れられたら絶滅しかない。 だが混乱が冷め造らぬうちにサリエルがもぞもぞと蠢きながら呻き声を上げ、意識を取り戻

どうやってサリエルの暴挙から木崎を守るか、魔王と勇者と酊 教 審別官の思いが一つになっ 質上サリエルに抗うこ≥はできないし、唯一抵抗できる真実は既に力を使い果たしている。 先ほどの戦闘で、サリエルは気絶しただけで無力化したわけではない。歌寒と鈴汚は力の性 |……どこの、どちら様かな」 **窓男を奮ったのは、サリエルの正体を知らない木崎である。不審者対応のつもりだろうが、** 今からまた鉄道網を潰しに行くわけにもいかず万事体すの有様で、やがてサリエルがむくり

「……美しい……」

木崎は一瞬、サリエルが何を言ったのか分からず、不審者を刺激しないための曖昧な笑顔で 朦朧とした間抜け面と同じくらい呆けた一言が、サリエルの口から漏れた。 べる大・鐘楼のように高鳴っております!」 一ああ、その遥か高みから私を見下げ果てた目で見るあなたの尊顔に、僕の胸は天界の時を統 あ神よ! 僕は、僕は今禁断の恋に身を焼かれ、堕天使に落ちようとしております!」 首を傾げたが、 「ああ、なんという運命! なんという奇跡! 僕は日本で、美の女神とめぐり会った! あ ッリエルの絶叫は、その予感を即座に肯定するものだった。 「サリエル、まさかお前……」 「……ちょっと何を言っているのか分からないんだが」 サリエルは突然。腕くと、ボロボロの体を木崎の足下に擦り寄らせて声高に叫びはじめる。 真臭は、脂藪によぎった恐るべき子感とともに呻き声を上げる。そして、一瞬後に放たれた 美の女神は、異世界にいたのか……」 不綺一人が、先ほどまでの営業用の態度を一転させ、軽蔑の眼差しでサリエルを見下ろした。 なんだこのバカは」 典奥も恵美も鈴乃も、どう反応してよいか分からず凍りつく。 ァリエルの反応に、木崎も困惑を隠せない。

「おい、誰か状況を説明しろ。なんだコイツは」

「……えっと、実はその、向かいのセンタッキーの、店長です、はい」 真奥の紹介に、サリエルは全力で首肯すると店の外を指差す。

「あなたの唇から漏れる言葉は、どのような罵詈雑言であろうとも、私には天界のオーケスト ・・・・・変態さんか」 アーストフード界のロミオとジュリエット!」

す猿江と申す者。マッグとセンタ、決して相容れぬ組織に身を置く私とあなたは、まさしくフ

「おお我が愛しの君よ、僕はセンタッキーフライドチキン幡ケ谷駅前店の店長を勤めておりま

投じましょう! 僕は、僕はあなたのために、一体どのようなバラを送ることができるのか!」 ラのように響きます! 僕はあなたを振り向かせるためなら、喜んでこの身を地獄の業火へと

「……ならば、おい、もっと近う寄れ」 「えっと、木崎さんの言うことならなんでも聞きますって言ってるんです、多分」 「……誰かこいつの言葉を日本語に訳せ」 真奥の棒読みに全力で肯定の意を示すサリエル。木崎は目を閉じて溜息をつくと、 と言い出す始末

「ああああ! 無上の喜び! 神よー お許しください! 私はあなたの下を離れ、情熱の業 足下へと擦り寄ってゆく その瞬間、サリエルはオレンジ色に腰取りされた瞳の中に月光の如き熄きを灯し、木崎の

具奥のみならず恵美も鈴乃も生職を飲み込んだ。 れがセンタッキーの店長たる者のすることかっ!!」 踏み潰され、恍惚の表情を浮かべていた。 れ伏すサリエル。 火に身を投じぶげぇっっ!!」 あ……いや、その、あの」 これは……從業員一同、アンティグア・パープーダあたりに左遷されても文句は言えない」 まーくん……我々はこんなパカが率いる店に集客人数で敗北を喫したのか」 **罵りながら三白眼で真奏を睨む木崎。堕天の邪眼すら三舎を避けそうなその眼光の鋭さに、** 黙れこの変態がつ!」 ああ、これが堕天の誘惑! なんという抗い難い甘美なものか!」 店舗経営ナメんなっ! なんだその間抜けたパンダ面はなんだこのフザケた香水はっ! そ ほいほいと擦り寄るサリエルの顔面に、木崎のヒールが直撃した。奇妙な叫び声を上げて倒 木崎はぐりぐりとサリエルの顔を踏み潰すが、サリエルは一向に堪えない。 だがそんな仕打ちを受けても、堕天の邪眼光を持つ大天使は、マグロナルド店長のヒールに

一とにかく、責任者の職にある私と君は、自主的な給与の返納をせざるを得ない。まったく、

もうどこにある国だか分かりませんよ!」

勝手に合点して勝手に反省し、勝手に真臭まで巻き込もうとする木崎。その驚 愕の内容に私もまだまだ修行が足りないということか。研修のことをバカにはできんな」 「ちょ、ちょっと冗談ですよね木崎さん!」 真奥は顔面を着白にした。

「ええい、君も男なら聞き分けろ! 武士は食わねど高楊枝だ!」 「笑えなくていいから言ってください!」 サリエルと一緒になって木崎にすがりつく真奥

「私は笑えない冗談は言わない主義だと言っただろう!」

不毛な言い争いを続ける店長と好がは顔を見合わせた。 長を遠巻きにしながら、恵美と鈴乃は顔を見合わせた。 「今は二十一世紀で、俺は平民です!」 そう自己申告してなんとか木崎に翻意を迫る悪魔の王。

|笑えない冗談だな| エンテ・イスラの勇者と、大法神教 会の訂 教 審議官は、それでも何故かふっきれたよう

『真奥さんの友人……か。まったく、心底笑えない冗談だわ。なんで私が、魔王のことを下の な笑顔で、その有様を眺めていた。

## 名前で呼んであげなきゃいけないのよ」

こんなところで何をしてるんですかっ!」 魔王城のドアを開いた千穂は、そこに既に鈴乃の姿があることに気づき絶叫する。「す、す、鈴乃さんっ!」

「あ、お邪魔します产量さん! 喜んでいただきます! ……じゃなくって!」 てみたのですが、よろしければいかがですか」 「いらっしゃいませ佐々木さん、丁度よかった、炊飯器を使って紅茶のパウンドケーキを作っ

と、双方の心はあまり通い合っていなかったようだ。 "あーん』に見えなくもないが、その煮物が真臭の頬にぐりぐり突きつけられているのを見る 矢に向かって煮物を摘んだ箸を突きつけていた。 千穂は真典と給乃の間に割り込むと、真典を背にかばって給乃を睨みつける。 干種はばたばたと騒がしく魔王城に飛び込む。そこでは鈴乃がカジュアルコタツを挟んで真

「そっちこそ何してるんですかっ! 真奥さんもなんでされるがままになってるんですかっ!」 一何をするんだ。邪魔をしないでもらいたい」

352 「あー、その!……」 給乃さんは真臭さんの敵でしょ! 何を堂々と真臭さんちに上がり込んでそ、そ、そんな真 真臭はげんなりしたような表情で項垂れる。

奥さんにあーんしようだなんて羨ましいこと……」

佐々木千穂ー、本音が出てる本音が」 漆 原さんは黙っててください!」

漆原の茶々を一喝して黙らせた干穂は、鈴乃を真っ直ぐ睨みつける。

「言う通り、基本的には私は魔王の船だ」

鈴乃はしかし、涼しい顔で居住まいを正し、

ッをしてこっそり魔王達の体に有害物質を蓄積してやろうと……」 こうやって聖別された食糧を美味しく食べられるように調理して、お礼に食べさせてあげるフ 「だが、先だっては魔王はそのつもりはなかっただろうが、世話になったのも事実だ。だから

しても、断腸の思いでして……」 「ルシフェルが無計画な買い物をしたおかげで、来月の家計に赤字が見込まれるのです。私と 「言ってる意味が分かりません! 芦屋さん! こんなこと言ってるけど、いいんですかっ!」 佐々木さんのお気持ち、この芦屋、痛いほど分かります。ですが……」 と、芦屋は横目で漆原を睨みながら大学ノートを差し出して見せた。

一命削ってまで節約しないでくださいよ!」 には『カード引き落とし:40000円(使用者・ウルシバカ』と書かれていた。 ^^ 受け入れざるを得なくなりまして……」 「……おかげで月間子算が不足しておりまして……クレスティアの食糧援助という名の暗殺を 「しかもこれ、エミリアの鞄にこっそり仕掛けた発信機の値段なのです」 ……でも真爽さんのお金ですよね」 「ウルシバカって言うな! - 芦屋は散々怒ったけど、それが無かったらお前サリエルにエン 芦屋の手書きで『魔王城家計簿』と書かれた大学ノートの一番新しいページを見ると、そこ 真奥が時間帯責任者を務めた一週間の総集客数は、なんと僅差でサリエル率いるセンタッキ 帰還が不可能な今、私にとっては家計の黒字化こそが最優先なのです!」 干穂はばんばんと家計簿で食卓を叩いた。 芦屋の耳打ちに、千穂は露骨に顔をしかめた。 ……サイテー ・イスラに連れていかれてたかもしれないんだぞ! もっと感謝しろよ!」 四万円て……ウルシバカさん一体何買ったんですか」 保原は反省の色もなく、憤然と出費の正当性を主張する。 納得いかない!

サリエルは何をどうしたのか、木崎によって何かを目覚めさせた翌日、正式にセンタッキーーフライドチキン幡が谷駅前店に敗北を喫した。

フライドチキンの社員として、幡ヶ谷駅前店長に就任してしまったのだ。

真摯に営業に取り組み、あまつさえ木崎への花束のメッセージカードに、 エルこと鑑江三月は、毎日木崎にパラの花束を贈ってくる以外はそれまでの行いが嘘のようにその後どんな卑怯が手を使ってくるかと瞥戒した寡寒だが、犬真画目に営業を開始したサリー 「いずれあなたを超えた時、お迎えに上がります」

などと身の毛もよだつメッセージを添えて寄越したものだ。

「安く見られたものだ」

店のお客様がご自由にお持ち帰りいただける状況にある。 と憤慨していたものの、花に罪はない、とのことで、今のところパラは店内に飾られ、ご来

ないか、とは漆原の子想だ。 サリエルがこちらに残留しているのは木崎の件を別にしても、帰りたくても帰れないのでは

がその罪で堕天の審判を下されてしまうかもしれないかららしい。 サリエルの本来の任務は失敗し、その上魔王サタンにも敗北を喫したまま帰還すれば彼自身 サリエルがセンタッキーに潜入していたのも、何か戦略があってのことではなく、鈴乃のよ

うに換金できるものを持ってこられず、生活のために働いていたというのだ。 大体鈴乃さんも鈴乃さんです! なんでこんなに堂々と、敵地でゆっくりしてるんですか!」 そして鈴乃はと言えば、千穂の目の前の有様が全てを語っている。

きにいつでも魔王を倒せるよう、徹底的に弱らせておこうと思ったまで」 ミリアは、魔王を倒さなければ帰ってくれないだろう? だからエミリアがその気になったと 改革したい。教会が真実、人々の信仰の拠り所として聖なる場所であり続けるために。だがエ 「私は魔王を討伐することももちろんだが、何よりエミリアを連れ帰って、篤った教会組織を 「それはもちろん、私の正義を全うするためだ」 いっそ清々しいまでに堂々としすぎている鈴乃。干穂は呆気に取られてしまう。 鈴乃は今まで見せたこともない含みのある笑顔で、千穂を見た

を絞られ、真異は完全にノックダウンされてしまったのだ。 録シールが、またも魔王城に警察を踏み込ませ、粗大ゴミを都庁前に放置したカドで散々に油 責任者の激務と営業の敗北による心労が真臭を苛んだ。 「もう! 真臭さんが何もできないと思ってそんなこと言って!」 さらには鈴乃がペシャンコにしてしまったデュラハン号の残骸に貼りつけられていた防犯登 ただてさえ魔力が失われているところに持ってきて体力すら底を突き、そこにかかる時間帯 千穂はじたばた暴れるが、当の真臭がされるがままになっているのでどうにもならない。

勘違いしてたくせに、とってつけたようなこと言って!」 クも聖杯の象徴であるハートのスートで魔王を害そうとしたのではなく、私の魔王へのラブだ なんじゃないですか?」 のチャンス! に、仕事見つけて働きに行ってください」 説教を喰らい、そこに来て鈴乃の聖なる食材攻めである。具合が悪くならない方がおかしい。 「おやおや、ではいずれ、佐々木さんのお母さんにもお礼をしなければいけませんね」 お母さんに教えてもらって、いっぱいゴハン作ってきましたから!」 「しらばっくれないでください! さぁ真奏さん! 敵の塩なんか受ける必要ありません! 一なんのことかな」 「だだだだだ誰が納得しますか何がラブですかっ! おせち料理を日本の代表的なお弁当とか と言うなら納得してくれるのだな?」 「ほう? それなら納得するのか? 私が魔王に実は好意を寄せていて、お弁当のハートマー 「本気で言ってます?」 そんな屁理屈言って、本当は真臭さんにゴハン食べてもらいたいだけ 「承服できないな。それにこれは私が為すべき仕事だ。魔王が力を失っている今こそが、絶好 『真奥さんのゴハンは私が作ります! 鈴乃さんはどうぞご心配なく、ニートにならないうち 挙句、一人で危険を犯した上に魔力団復の大きなチャンスをふいにして声屋にはさんざんに

よく考えろ魔王。今私の料理を断れば、食糧援助を打ち切るぞ」 芦屋がキッチンの床を掃除しながらそんな所帯じみた独り言を呟く。

「どんな脅 迫外交ですか! 真臭さん、気にする必要ありません! 私がちゃあんと面倒見

ても、どう見たってヒモだよなこれ」 「……こうして見ると、真奥がモテてるように見えるから不思議だ」 そうしている間にも、ピントが微妙にズレた女の戦いはどんどんヒートアップしてゆく。 漆原はパソコンデスクに肘をついたまま、呆れてそう呟いた。

2001 どっちのゴハン食べるんですか!」 鈴乃と干穂に迫られて、真奥は心底げんなりした様子で力なく呟く。 私と干穂殿と」

「頼むから……朝飯くらいゆっくり食わせてくれ……」 そこにいたのは、 轟音とともに物法い勢いで魔王城の扉が蹴破られ、誰もが驚いてそちらに目をやる。 たがそんな真奥の願いは、次の瞬間完膚なきまでに打ち砕かれる。

ルーシーフェールー………」 怒りで今しも半天使の姿に変身しかねない、遊佐恵美だった。

なものが摘まれていた。 「一体、どおいうつもりで私の鞄にこんなもの入れたのかしらぁ?」 それを見て、漆原が顔を引きつらせて逃げるように壁に張りついた。 朝の光を浴びながら床を踏み抜く勢いで魔王城に入ってきた恵美の手には、小さな箱のよう

「あ、いや、それは、その」 それは先ほども話題になっていた、恵美達の居場所を特定した発信機だった。

あなたの変態行為、断じて許し難し、成敗してくれる!」 「女の私に発信機なんかつけて居場所講べて一体何するつもりだったのこのニート唯天使! 恵美の剣幕に恐れを為した漆原だが、それ以外の面々は早くも恵美が現れる直前の様子に戻

一私には関わりのないことだ」 「お、おい芦屋、エミリアを止めろよ」

「いや関わるでしょ相当!」 ちょっとおいベルっ!」

「何を物騒なこと言ってくれてるの!」ちょっと佐々木干穂!「エミリアを止めろよ!」「ここでエミリアが全員片付けてくれれば、これにて一件落着、だな」 「遊佐さん! 懲らしめちゃってください!」

「恩知らず! 地獄に落ちろ! おいエミリア落ち着け! それには深い理由があってね!」

**無りつける夏の日差しは本格的な夏の到来が、もう間近だと告げていた。** 

真奥の悲痛な呟きは、それから始まった死闘の騒音にかき消されていった。 #たな争いの火種を大量に抱え込んで尚、危うくも馬廠 むから……静かに飯食わせろってば……」

魔しい平和が支配する六量一間の

言い訳無用! 死にたくなければ潔く腹を斬りなさい!」

作者、あとがく — AND YOU —

『印税』とは、皆様もご存知の通り作家の収入源です。広辞苑によるとこのように定義されて

いん-ぜい【印税】

る金銭。定価・発行部数に基づく一定歩合による」-広辞苑第六版(C)岩波書店 2008 より

「『「印紙税」の略称に由来する語という)著作権者が著作権使用料として出版社などから受け

ることで、課税文書に必要な額を納税した、ということになるのです。これが『印紙税』です。 『課税文書』という、その文書を運用するのに税金がかかる書類があります。 その際、わざわざ現金を払うのではなく、定められた額面の『収入印紙』を購入して添付す

ました。著者へのロイヤリティはその検印紙の枚数に応じて支払われていたのです。 かつて日本では、全ての書籍の奥付には著者の印を押した『検印紙』という紙が貼られてい そんなのが何故作家の収入である『印税』と似ていると言われるのでしょう? で私の著作を手に取り、レジへと持っていってくださる方と遭遇したのです。 収入が未だ『印税』という名で呼ばれ続けているのでしょうか。 が似ているので『印紙税』から『印税』という言葉が生まれた、ということらしいのです。 るものや、図書館に文献として保管されていたりする書籍などの奥付をご覧になると、検印紙 や検印欄を見ることができると思います。 自分の著した本が店頭に並んでいるのを見たくて書店に向かったところ、なんと私の目の前 その答えを、私は処女作『はたらく魔王さま!』の発売日に知ることができました。 しかし、検印システムそのものが過去のものとなってしまった今、何故作家の著作物からの 文書に対して特定の証紙を添付し、法律上の権利義務やお金の動きを発生させるという様式 現代ではほとんど検印に関わるシステムは消滅してしまいましたが、古書として流通してい

の著作を買ってくださっている読者の皆様にお支払いいただいたお金なのです。 私が『はたらく魔王さま!』を著したことで得られる『印税』の大元は、当たり前ですが私

私は、読者の方が私の著作から得られる娯楽に期待して支払っていただいた『税金』で生か

そのことを本当の意味で実感したのは、まさしくこの時でした。

税金から得られる給与を受け取る公務員が『全体への奉仕者』ならば、作家は『創作への奉 **では読者の皆様に支払っていただいた『税金』を、私はどのように使えばいいのでしょう。** 

仕者」であるべきでしょう。 読者の方からいただいた『印税』という『税金』を給与として受け取る私には、その『税

金』を薪たな創作のために『有効に運用』し、『作品』に還元して読者にお返しする義務があ

する不遜な作者です。 ていきたいと思います。 品』に運元し、多くの方の娯楽となる作品をお届けすることであろうという結論に達しました。 ある私ができることはなんなのだろうと悩んだ末、やはり『印税』を『有効運用』して『作 駆け出しのくせに、読者から人生を奪うわ税金を取るわ、本当に分不相応で大それたことを そして届いたそれが、読んでいただいた方の笑顔を呼び起こすものとなるよう、常に心がけ 本作執筆中に起こった、日本と世界を揺るがした出来事の中で、娯楽作品の作家の端くれで

必死に面白おかしく生きている奴らの物語です。 今回のお話は、そんな作者の堅苦しい決意とは全く関係なく、やっぱり毎日を生きるために

言を深くお詫びして、後書きを締めくくらせていただきたいと思います。 そして、今回は魔王に代わりまして、グリーンランドにお住まいの読者の皆様に、魔王の失







東京都派公区監報 X-X-X 上4-15-519年19日 | 15-54 松7-12-4"202号室 | 15-54

漢字検定学一級・一寸寸さい・! か于続

1878年 国表、和服の著(5寸、料理、人間観察

春公で一人前の職人になり、何里の公母に(近りをすれめ) あぶるをつけるてようながった。 ── エキがいまけまればかまれないい いたま

among (主火込み 会望 ) 対象3800 人職 智見寿 (元を) 鎌根野夫 鎌崎野 うさんくぎ - (まか うましほう もうちょっと じまれよ かまなよりだからな、 (必称) かりま



89 B 50h いっちゃ そうまつうと じかん エエンカル

> 重京都流公区等塚×-×-× が5・ローザ 学课 201号室 BIWIS TEN

ZEV X Y 在大幅、サンクト・イグルッド、ペルの歌演の第二ろとして生まれる サンクト・イグルッド・第一次を没すを事業(際会法院連び 平成火水车 **亚科 1水**等 大法神教会官教部列及 草成2/床 

| *** 漢字核定準-級、神学博士号、融合法                            | 位士安敦師資格。胡樂資格  |
|--|---------------|
| *************************************            | <b>耐観察</b>    |
| ***** 世界年和                                       |               |
| *パラリス マンス では 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 |               |
| 大一般につ一時間にからなった 岩田市の (でした)                        | 5年 オルゴーハポリングル |

## Character File

R \*

とうもうとしませくなるか。 X・X・X
なう・ローザともがり20についる
ままりどうまなうかた。
1 050-00000-0000

88 す<sub>る し</sub>やすず漢字をからなりになん。 やはマニトあらしおいてはせかるし タメ乗 85% 55しか 85% なっとくうちゅうさんほうしたい くっぐるよっす ずひにとびるー 2388 ないりき 8.4888

ルえからですた はたられるして と ←クには本年をを伝え」 by 戸屋 MERIT でんこうデリストットにより、日本大阪 (MERIT まんりょうごうごう) は、いきない (MERIT SA) (MERIT SA) (MERIT SA) ごうごうごうごう 「はたらく魔王さま!」(モ#×※)

●和ケ原聡司著作リスト



**あて先** 〒102-8584 東京都千代田区富士見1-8-19 アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部 「和ヶ原聡司先生」係 「029先生」係

## はたらく魔王さま! 2

和ケ原職司

© 2011 SATOSHI WAGAHARA Printed in Japan ISBN 978-4-04-870547-9 C0193